

奇譚クラブ

新しい風俗文献誌



6月号

奇譚クラブ 昭和四十四年六月号

定価三五〇円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatsukasyupan

Osaka Japan



58 59 60

花と蛇 特集号

好評の傑作集大成第四弾刊行!!

定価 五〇〇円 略号 「花」

団鬼六作長篇サディズム小説「花と蛇」は、昭和37年8月号の奇譚クラブ誌上より現在まで引続いて連載し圧倒的人気を満天下のSFファンを沸かした傑作であり、過去三回に亘って発行した特集号も悉く売切れとなる人気でありましたので、ここに新しく昭和42年1月号以降の分を一括登載、堂々三百数十頁の特集に加えて四馬孝画伯筆の秀麗きわまりない口絵を添えて御覧にいたします。

四馬孝画 口絵

美女羞恥責 花と蛇 画集

- 一、恐ろしい洗腸の末排泄を強要される美女
- 二、中腰で縛られた美女の品定めする調教師
- 三、清純な美女に初めて縄掛けしていたぶる
- 四、刺毛の羞恥責めに悶える地獄部屋の美女
- 五、全裸の開股縛りで深窓の美少女を責める
- 六、俵のように縛られて宙吊りにされた美女
- 七、股間縛りの全裸責めにされる絶世の美女
- 八、足吊りで強制洗腸を施される全裸の美女

本文内容見出し

- 第一章 清純な令嬢の屈辱
- 第二章 人身御供の令夫人
- 第三章 深窓の美少女とズベ公

- 第四章 小夜子への執拗な調教
- 第五章 変性色事師の登場
- 第六章 生れかわるスター京子
- 第七章 激しいスターへの訓練
- 第八章 低脳男と令夫人の結婚
- 第九章 愛弟子を調教する静子夫人
- 第十章 羞恥と屈辱の日本舞踊
- 第十一章 悪魔たちの哄笑
- 第十二章 地下室の羞恥と汚辱地獄

- 第十三章 珍芸を開陳する令夫人
- 第十四章 淫靡な時代劇ショー
- 第十五章 華々しきショーの展開
- 第十六章 野卑な妾二人のいたぶり
- 第十七章 ズベ公達の邪悪な責め
- 第十八章 屈辱の中に泳ぐ奴隷たち
- 第十九章 悪党の執拗ないたぶり
- 第二十章 文夫と小夜子の屈辱的対面
- 第二十一章 勝ち誇る悪党一味
- 第二十二章 中国伝来の秘法
- 第二十三章 緊縛された美女の涕泣
- 第二十四章 新しい餌食への触手
- 第二十五章 苦痛と屈辱の生地獄
- 第二十六章 恐怖の責め続け
- 第二十七章 結末なき責めの結末

「最新版」美貌女体緊縛写真コレクト集

X組百態 大手札型印画紙 (9×13cm) 極鮮明焼付

各組	一組一枚 (送料共)
四組四枚	五〇〇円
十組十枚	一〇〇〇円
二十組二十枚	一八〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

郵便番号 545-91

最近撮影の新しいモデルの緊縛写真の中で一粒選りの美しいものばかりを集めました。各組一枚です。お好きなものをお求め下さい。御注文の際の御指定はX組の何番とお書き願います。

- 1 正面強烈亀甲縛 (大島 照代)
- 2 美顔は鞭に泣く (関谷富佐子)
- 3 緊う影に慄く (佐々木真弓)
- 4 弾む裸身に縄目 (佐々木真弓)
- 5 柱縛りで鞭打ち (関谷富佐子)
- 6 縛られて困るわ (金原奈加子)
- 7 私を襲わないで (左近麻里子)
- 8 縛られて嬉しい (中河 恵子)
- 9 麗わしの縛女体 (中河 恵子)
- 10 蒲団の上に狂う (関谷富佐子)
- 11 豊満女体の縄目 (大島 照代)

- 12 二つ折りの裸身 (川越美佐子)
- 13 痛打に哭く美貌 (関谷富佐子)
- 14 長身の脚を伸す (佐々木真弓)
- 15 若肌は縄に美し (長井葉津子)
- 16 恥らいの女体美 (中河 恵子)
- 17 何故私を縛るの (金原奈加子)
- 18 感泣する胴縛 (ローズ秋山)
- 19 猿ぐつわの悦慮 (関谷富佐子)
- 20 荷造り縛りの女 (中河 恵子)
- 21 足指はく字に (佐々木真弓)
- 22 麻縄の柔肌責め (金原奈加子)
- 23 美しき亀甲縛 (左近麻里子)
- 24 柱縛りの隙間見 (長井葉津子)
- 25 緊縛全裸の極美 (左近麻里子)
- 26 海老責めの苦悶 (佐々木真弓)
- 27 全裸の縄は細く (佐々木真弓)
- 28 猿轡と縄に泣く (川越美佐子)
- 29 縄に噛んだ童顔 (長井葉津子)
- 30 出踏を晒す縛り (佐々木真弓)
- 31 後手吊りの全裸 (長井葉津子)
- 32 首膝縄にあえぐ (長井葉津子)
- 33 大の字で晒す裸 (関谷富佐子)
- 34 全裸緊縛の哀愁 (佐々木真弓)
- 35 高小手の全裸 (佐々木真弓)
- 36 真迫の縛ブレイ (ローズ秋山)
- 37 豊満な裸身縛り (左近麻里子)

- 38 竹棒責めに悩む (大島 照代)
- 39 亀甲縛りで寝る (左近麻里子)
- 40 縄目に噛む表情 (中河 恵子)
- 41 開股縛りの正面 (中河 恵子)
- 42 猿轡に噛む緊縛 (左近麻里子)
- 43 縛りの肌を見て (金原奈加子)
- 44 私には縛りが好き (金原奈加子)
- 45 強烈縛りを味わ (左近麻里子)
- 46 麗身を横たえて (左近麻里子)
- 47 二つ折に弾む胸 (佐々木真弓)
- 48 柔肌に縄は厳し (長井葉津子)
- 49 柔肌に痛む麻縄 (左近麻里子)
- 50 全裸の女体引通 (中河 恵子)
- 51 開股縛りを諦観 (左近麻里子)
- 52 突き出した尻 (中河 恵子)
- 53 あどけなき緊縛 (金原奈加子)
- 54 首細股間縛の女 (長井葉津子)
- 55 強烈後手で括る (佐々木真弓)
- 56 恥しい縛り初め (金原奈加子)
- 57 海老縛りで悶ゆ (関谷富佐子)
- 58 懸られる緊縛女 (長井葉津子)
- 59 豆絞りの猿轡で (金原奈加子)
- 60 もう虐めないで (金原奈加子)
- 61 畳に転す股間縛 (金原奈加子)
- 62 女体は縄に映ゆ (左近麻里子)
- 63 全裸の縛を見て (長井葉津子)
- 64 答は柔肌を乱打 (関谷富佐子)
- 65 腎部に答は炸裂 (関谷富佐子)
- 66 この裸身を捧ぐ (佐々木真弓)
- 67 諦観の縛り表情 (長井葉津子)
- 68 足吊りで晒す肌 (長井葉津子)

〔最新緊縛資料写真一覽〕

梁からの両手吊り責め

大手札二枚一組 三〇〇円
木村 洋子 略号(ろふ)

床柱に宙吊り縛り

大手札二枚一組 三〇〇円
木村 洋子 略号(ろへ)

開股股間縛り正面

大手札二枚一組 三〇〇円
山原 清子 略号(ろほ)

二女連縛責模様組写真

大手札十枚一組 一五〇〇円
大塚・山原 略号(ろそ)

二女連縛煩悶場面組写真

大手札十枚一組 一五〇〇円
山原・大塚 略号(ろひ)

股間縛り刺青競艶

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号(ろさ)

股間縛り正面妖美表情

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号(ろす)

喰込む股間縛りの縄目

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号(ろせ)

手足宙吊り

大手札三枚一組 四〇〇円
梨花悠紀子 略号(つた)

オムツの股間縛り

大手札四枚一組 五〇〇円
東浦ひかる 略号(むく)

強烈責、被虐の果

大手札五枚一組 八〇〇円
梨花悠紀子 略号(りお)

乳房いじめ

大手札二枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(とお)

激痛ノ逆エビ責め

大手札四枚一組 六〇〇円
大塚 啓子 略号(きえ)

美貌の裸身に縄目

大手札三枚一組 四〇〇円
絹川 文代 略号(きん)

腰元吊り責め

大手札二枚一組 三〇〇円
村井知可子 略号(こり)

腰元間諜の拷問

大手札四枚一組 六〇〇円
村井知可子 略号(こく)

椅子エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(おき)

六尺縄縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(ろは)

弓吊り責め

大手札二枚一組 三〇〇円
梨花悠紀子 略号(つき)

狙われた和装の娘

大手札十二枚一組 二〇〇円
愛川 悦子 略号(ねい)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円
水本 茂美 略号(えひ)

ゴム衣緊縛

大手札三枚一組 四〇〇円
水本 茂美 略号(みす)

抓ねりと操ぐり責め

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚、東浦、木村 略号(きし)

バンド責め

大手札五枚一組 八〇〇円
東浦ひかる 略号(はん)

夫人の表情

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号(せや)

後手吊り足挙げ縛り

大手札五枚一組 七〇〇円
東浦ひかる 略号(うら)

二つ折りエビ責め

大手札五枚一組 七〇〇円
東浦ひかる 略号(うり)

足挙げ椅子責め

大手札五枚一組 七〇〇円
東浦ひかる 略号(うる)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(えり)

鼻の穴責め

大手札三枚一組 四〇〇円
大手 啓子 略号(なく)

鼻なぶり

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ない)

鼻責めの陶醉

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(なは)

完全逆さ吊りフオート

大判判三枚一組 一五〇〇円
木村 洋子 略号(さつり)

両足首括り逆さ吊り

大判判五枚一組 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号(さか)

逆さ吊り女体折檻

大判判五枚一組 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号(させ)

手足逆滑車宙吊り

大判判五枚一組 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号(さと)

啓子をいじめる清子

大手札八枚一組 一五〇〇円
山原、大塚 略号(うの)

啓子を縛しめる清子

大手札八枚一組 一五〇〇円
山原・大塚 略号(うな)

山原を責める大塚

大手札八枚一組 一五〇〇円
大塚・山原 略号(うね)

逆さ吊り正面と背面

大手札二枚一組 四〇〇円
増田みゆき 略号(つる)

煙草責めの裸身

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(たく)

乳房責め五態

大手札五枚一組 七〇〇円
山原 清子 略号(てら)

全裸麻縄強烈縛

大手札十枚一組 一五〇〇円
山原 清子 略号(いね)

奇譚クラブ

△第三卷 第七号・通刊第二五四号

(昭和四十四年) 六月号 目次

本文

SMカメラ・ハント△左近麻里子の巻	辻村	(1)
「女の肌の燃えるとき」	藤田	(2)
讃賢記△我デシリ水そ美い船つな	藤田	(3)
体験告白 わが異常なる性癖	麻曾比須人	(4)
レンジの中の女「十人十色」 第二話	泉野	(5)
四月号の夜尿症女性に提言	岩手	(6)
連載M小説クビエロ床屋ク 4	鬼山	(7)
可腹史談三村家の人々(下)	中康	(8)
連載小説「大噴火」 第九回	千葉	(9)
濡れにそ濡れレク若布酒ク	芳野	(10)
体験告白 我がSMブレイの実態	幸崎	(11)
告白「私のゴムブレイ」	板川	(12)
連載時代奇小説「緋縮緬地獄」(13)	白鳥	(13)
続々・妊婦嗜好あれこれ	羽鳥	(14)
皇六義談 II 或る女優の話	鬼六	(15)



奇クサロン 編集部構成 (233)

奇クサロンの妖しい魅力	山崎美恵
サロン楽我記(サロンの)	辻村
イメージ画「妖夢・雲古の塔」	山崎
史談ブレイの最初 私達の記録	山崎
漫画「マゾミちゃん」	泉野
SMの効用	意西
書店にて	山崎佐武郎
御忠告に感謝しつつ	山崎
編集部だより	山崎
ナミオのイメージ「ブランコ」	山崎
短歌「ベッド」	山崎
ブレイ・フォトの楽しみ	山崎
私の好みの姿態	山崎
SCレタシヨ「めす犬」	山崎
退院の井	山崎
イメージ画「華々しきショー開幕」	山崎
映画「ハレンチ」評	山崎
四月号を手にして	山崎
つれづれの記 一筆啓上	山崎
イメージ画「荒馬を卸する女」	山崎
マニアの一刻 雪責めブレイの幻想	山崎
イメージ画「ついに就寝」	山崎
「花と蛇」への要望と提案	山崎

人間の行為はどこまで許されるか 井上 俊彦 (16)

「半処女繁盛記」(後編) 尾藤 保 (17)

地獄図絵シヨ一見聞記 三谷 豊 (18)

読者ニア 未完の告白(下) 村山百合子 (19)

告白小説「女装の家」 井風呂秋於 (20)

史実異聞 春日山城秘話 城 剣太郎 (21)

S・C・Rよりのお問いあわせ 司削 達人 (22)

連載小説「花と蛇」(続編第五十四回) 園 鬼六 (23)

体験告白 被虐の陶酔者 小山 純 (24)

新・枕草紙「処女啼泣」 筑紫 太郎 (25)

ある針灸医のカルテ「獲物」 山本 一男 (26)

S夫妻の一面 藤間 精 (27)

幻界に遊ぶ「膨満の誘惑」 橋本 一美 (28)

告白 我が家の僚友「フンドシ」 細持 圭雄 (29)

女性要典「ロウタ物語」 佐野 寿 (30)

告白 続・洋子の思い出 島崎 慎一 (31)

フニキ小説 この胸のときめき 日本 武士 (32)

桂説「小町無慙」 葵 一平 (33)

読者通信 編集部選 (34)

(目次カット「火星人&女」五屋和十)
(扉 カット「交通事故?」日本武士)

〔秘蔵版特選SM資料〕

〔光沢印画紙極鮮明焼付〕

入墨女賊仰向け木馬責め
大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よひV
全裸入墨女賊拷問折檻
大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よせV
女賊答打ち白洲糾問
大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よゆV
入墨女賊ハリツケ拷問
大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よめV
入墨女賊海老責め拷問
大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よすV
入墨女賊全裸四這い木馬責め
大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よもV
入墨女賊逆さ吊り仕置
大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よきV
女賊全裸大の字磔処刑
大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よさV
女囚拷問木馬責め
大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もとV
女囚石抱き算盤責め
大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もへV
美人女囚海老責め拷問
大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もにV

白洲女囚竹棒羞恥責め
大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もちV
美人女囚答打ち折檻
大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もほV
女囚開股羞恥責め
大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もぬV
美貌女囚土壇で胴斬り
大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もりV
艶美女囚白洲に悶える
大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もはV
全裸強烈羞恥縛り
大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号△なのV
猿ぐつわにあえぐ裸女
大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号△なむV
女奴隷を弄ぶ二人の女
大手札八枚一組 一二〇〇円
大塚・東浦・木村 略号△きあV
くすぐり責め地獄
大手札三枚一組 四〇〇円
大塚・東浦 略号△きすV
灼熱の蠟涙責め
大手札四枚一組 五〇〇円
大塚・東浦 略号△きせV
豊満な乳房を責める女
大手札五枚一組 七〇〇円
大塚・東浦 略号△きそV
女奴隷を飼育する美女
大手札五枚一組 七〇〇円
大塚・東浦 略号△きてV

凌辱されるマソ女
大手札五枚一組 七〇〇円
大塚・東浦 略号△きとV
鼻責め悦楽
大手札二枚一組 三〇〇円
大塚・東浦 略号△きなV
可憐な牝犬の調教
大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めあV
足舐めをたのしむマソ女
大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めくV
足舐めを強要されたマソ女
大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めゆV
足舐め訓練を受ける牝犬
大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めやV
愛玩用牝犬の生態
大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めえV
足首縛りの表情美
大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△あひV
美しき足首の縛り
大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△あはV
素足を縛られる快感
大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△あふV
生ゴムの猿ぐつわに喘ぐ
大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△むこV
股間縛り恍惚境場面
大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△るねV

鼻責めいたふられ集
大手札四枚一組 五〇〇円
一宮百合子 略号△るえV
首縄股間膝頭縛り
大手札五枚一組 六〇〇円
一宮百合子 略号△るそV
鼻いじめ三態
大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△はねV
鼻責め万華鏡
大手札八枚一組 一二〇〇円
山原清子外一名 略号△はたV
乳房責め五態
大手札五枚一組 六〇〇円
山原 清子 略号△てらV
全裸女麻縄強烈縛り
大手札十枚一組 一五〇〇円
山原 清子 略号△いねV
刺青裸女を踏みにする
大手札八枚一組 一〇〇〇円
山原 清子 略号△いつV
洋髪全裸刺青強烈縛り
大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△いこV
可憐島田髻全裸縛り
大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△いみV
黒フンドシ高手小手縛り
大手札八枚一組 一二〇〇円
山原 清子 略号△ひろV
刺青女体エビ責め地獄
大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△ほかV
文身女体股間縛り
大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△ほきV

奇 譚 ク ラ ブ

昭和 44 年 6 月 号

(1969年・6月号<第23巻第7号・通刊第254号>)



本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で
穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象
として編集しておりますが、青少年の保護
育成に関する条例には抵触しないよう、十
分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ
ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵
の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順
次整えて参りましたが、更に挿入写真の減
少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な
どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺戟の強いもの
は極力掲載しないようにするのは勿論、掲
載した文章は十二分に検討を加え、いやし
くも青少年の健全なる育成に支障を与えな
いよう努力いたします。尚、本誌の発行部
数は最低限度にとどめ、その増大を企るた
めの努力はいたしません。

S M カメラ・ハント

△左近麻里子の巻▽



女の肌の

燃えるとき

辻村

隆

度々会う約束をしておきながら、その都度いろいろの事情が出来て、やっと今度こそは三度目の正直であった。京都に住んでいる左近麻里子なのだから、会おうという気があれば、いつだって手軽にデート出来るのに、彼女とは、例の熱海での鬼六対談で、新幹線で落合って、一緒に出掛けて以来の、一年数カ月振りの邂逅であった。近くだから、いつでもプレイ出来るという安易な気持が、却って私達を疎遠にしていたのかも知れない。

彼女の、何か思いつめたような電話の口調

が、やっと私の重い腰を上げさせた。

三月のおひな祭りの翌日は、暦の上ではもう早春だというのに、朝から全国的な大雪に見舞われて、数センチ積った。この調子だと明日も雪ではなからうかという危惧が先に立った。チェーンは車に積んであるものの、未だ一度も使っていない。降雪が続いた場合、電車でゆくより仕方ないと思っていたら、幸い午後から溶け始める。

翌日もチラチラと折りふし、みぞれが降ったが、比較的温い好天でホッとする。

車の駐車を考えて、市内の繁華な場所を避け、平安神宮の大鳥居のそばの喫茶レストラン「アリーナ」にきめてある。ここなら、すぐ横に駐車出来るからだ。

途中の停滞を考えて、少し早いめに出発したら、約束の正午に十分前、到着。アリーナの扉を押して入ったが、未だ彼女の姿は見当らない。認め易い位置に席をとってコーヒーを注文し、待つことしばし。時計をチラリと眺め正午を確認した時、まるで符牒を合わせたかのように正面扉が開くと、左近麻里子の

あの個性の強い顔が覗く。私は手を挙げて合図を送った。

「おそくなって御免なさい」

「いや、時間ジャストですよ。待っていたのは私の勝手だから」

「早く着きすぎて、平安神宮辺りをブラブラしていましたの。先に来ていらっしゃるの分っていたら、すぐ来ましたのに」

約束の時間通り会えると、幸先がいいようにいつも気持にゆとりが出来る。来るか来ないか、そんなことを考えて、いらいらと待つ時間が、私にはやり切れないのであった。

彼女が約束時間前に既に到着していて、こうして時間を測っていたのが、私にはとても嬉しかった。

会った瞬間、私はフト左近麻里子の容貌に異和感を感じた。そうだ、この人の髪は確かに長々と垂れ下っていた筈である。それがスパッと断髪にしてボーイッシュなスタイルに変わっていた。

「おや、髪を切ったんだね」

「ええ、煩わしくなっちゃって、今年の正月前にバッサリやっちゃったわ」

「若く見えるよ」

「ホント？ どうせ、お世辞でしょう」



彼女はリラックスな態度で、あの熱海の夜にくらべて、まるで人が違ったように気楽に私のペースに乗っていた。

ビーフステーキを注文して、待つ時間のしばし、私達の話は弾む。

「化粧品の方、相変わらずやってるの？」

「もう、半年前にやめましたわ。遅蒔きながら、洋裁とおハナ習ってるの。おかしい？」

「おかしくないさ。私のカンだけど、結婚近しって感じだが、当たったでしょ」

「ズバリだわ。あと二カ月」

「というと、五月？」

「予定ではね。でも結納すませたから、間違いないと思いますわ」

「相手は？」

「宇治のお茶問屋の三男坊。お見合いだけで十人並みで、高倉健に似た人だから、きめちゃった」

「オヤオヤ、どうなってるの。それでプレイする気になるなんて」

「これで私の気持に踏ん切りをつけたかったの。度々お電話したでしょ。この話あったからよ。東映にずっといらっしゃってた時、いくらでも会える機会あるのに、ちっとも連絡して下さないんだもの。薄情なヒトだと思いましたわ」

「知らなかったんだ、そんなこと」

「そのことで一度相談にのって戴こうと思ってましたの。でも、当てにならないから、遂々きめてしまいましたわ」

「どんなことを相談したかったの？」

「今更いっても始まりませんけど、私のように、こんなSMの世界を知った者が、ノーマルな結婚して、果して旨くゆくかどうか、そんなこといろいろと聞きたかったのよ」

「それは、あんたの心次第だよ。その気になれば、うまくゆくさ」

「でも私、判っきりいって処女性を失っていますし……」

「いくつのとし？」

「はたちの時、相手はD大生。好きになって私の方からむしろ体を投げ出した恰好」

「いいじゃないか。肉体の喪失より、むしろ処女性とは心の問題だよ。その見合いの相手に好感持ってるんだろ」

「ええ、近頃やっと、そんな気持ちになって来ましたわ」

「じゃあ、むしろ今日のプレイの方が罪悪かも知れない。思い切ってよそうか」

「よさないで——」

彼女は間髪を入れず、キッパリと言い切った。大きい黒い瞳が刹那、訴えるようにうるんで光った。

「でも……」

「いいの。これが最後よ。それで判っきりと心の整理をするつもりなの」

「彼、SMの気は全然ないんだろ」

「と思うわ。よくは分らないけど」

「若し、万一、奇クでも読んでいたとしたら大変だぞ」

「その時はその時だわ。思い切って白状しちやおかしら」

「いや、言わない方がいい。あなたの全裸の緊縛を、奇クで知るのは未来の夫にとって少し残酷だ。山本一章さんの『この人と』のフोटが、殆ど全部、奇クの方譲フोटになっているでしょ。一部のものを除いてね。彼が奇クを読む人種なら、又別の道もその時、開けるよ。唯、貴女から告白するのは、まずいと思うけどね」

折から運んで来た、脂のしたたるビーフステーキとビールに、私達はフォークを握り、しばらくは無言で、机上の肉を口に運び、コップのビールを汲み交していた。

所詮、女心は不可解であり、魔性のものがあった。婚約をすませ、やがて訪れる春の華燭を控えて、左近麻里子はプレイの目的で、私とこうして向い合って坐っている。

「辻村さん、私、今何考えているか判る？」
フォークを置いて、彼女は思いつめた口調で私を凝視した。

「不可解だね。一年半以上も会っていないものの」

「その期間、辻村さんのこと考えていたとしたら、変なオナナだと思う？」

「どうして、唐突にそんなこというの。私には判らない」

「判らないでしょうね、そんな女心……」
自嘲めいた、かすかなげりある笑いが、彼女の頬をかすめた。

「毎月、カメラ・ハントは、かかさず読んでいましたわ。11PMも見ました。東映の映画もみにゆきました。そして、自分の心の中でどうしても一度、私と会って下らないのかしらと、自問自答ばかりしていたんです。

熱海でのひとときが、私の辻村さんに対する認識を変えてしまったのです。果敢ない独り角力みたいだけど……。思いつめて、何度もお電話したのに、会うといっておきながら、いつも間際になってキャンセルして、私をガツカリさせつづけて来ましたわ」

「私のどんところが、あなたの心をそうさせたのだろう？」

「冷めたい、そのさりげないところが……。しゃくだけど、マイっちゃった」

左近麻里子は、ビールを煽るようにのみ乾した。

「知らなかったんだよ、全然……。だって、熱海の時は、むしろ私を敬遠してるように思ってたけど——」

「あの時の『オニ六大いにシバル』で書いてあった、私に対する気持ちを、正直に受取っ



ていたのね。でもあの文に、全然フィクションはなかったし、全部本当の出来事だったんですもの。だから、てっきり辻村さんは、私に対して好意を持っていると信じたもの。なのに、それ以来、待てど暮せど、ウンともスンともいってこないでしょう。だから尚更独りでヤキモキして、今か今かと、連絡のある日を待っていたのよ。あれから一年半以上経っているのよ。ズイブンだと思わない？」

紅唇から洩れる、彼女の言わんとすることは、私には痛い程、分ってきた。さりとして、どうなるというのだろう。新奇を求めて、次々とハントに憂身をやつす私にとって、謂わば左近麻里子は、過去の人の一人であったの

だった。山本一章は二度に亘って彼女のレポを書き、私も団氏と熱海で会った際に彼女のプレイに触れて、既に書き尽したように思っていたが、その実、よく考えて見ると、左近麻里子と、一対一で出会ったのは今日が初めてであった。ということとは、彼女にとっても、この私と一対一で出会うの

が、今日始めてであるということであった。心のほむらを燃え立たせて、今、彼女は積極的に、私のプレイの懷ろに飛び込もうとしていた。

それは、結婚を間近に控えての、追いつめられた、ギリギリの気持を、この際一挙に吐かそうとする、内潜する業（ごう）の吐け口を、今日の日に満を持していたかに思えたのである。

「何か、危ないね」

「そう、私自分でも危ない気がするわ。でも思いきり、もみくちゃにされたら、反ってスツとするんじゃないかしら。辻村さんの醜くい面をうんと見せつけられたら、フンギリが

つくような気持。むしろ、いつもの辻村さんじゃなく、狼になって、裸の人間を剥き出しにして、私っていう女をしゃぶりつくして欲しいのよ」

激しい言葉であった。じっと喰い入るように私をみつめる彼女の、ギラギラ光る瞳の底に、断崖の淵に立った女の切羽つまった思いがこもっていた。今日のプレイはただでは済まないぞ——。そんな予感が私の胸をよぎった。彼女の期待に応えて、思いっきり虐めつくし、なまなましい醜い私をうんとさらけ出して、私という人間に愛想をつかすことが、左近麻里子にとっては願望であったかも知れないが、それが逆効果を生んだ場合、彼女は私のその行為によって、益々苦しくなるのではないかと慮んばかられるのであった。

「逆効果を生んでも知らないよ」

「その時は、その時のことよ」

「ハプニングな気持だね」

「ええ、うんとハレンチにやって頂戴。それが結果において、どうあらうとも、私、辻村さんを恨まないから——」

「山本一章さん、その後、連絡ある？」

「全然だわ。あの人、衝動的にパツと燃え上って、スツと消える人だわ。近頃ハントの熱



がさめたのか、それともタネ切れか、奇クにも全然書いていないじゃない。その点、辻村さんは飽きもせず、根よくやっているといた感じ。よく続くわね」

「やめたい気持で一杯さ。でも締切り間際になると編集部から矢の催促で、結局、又書いてしまう、いや書かされてるって感じだね。文にしないで、好きな時に独りコツコツ愉しんでいる方が、どれほどラクかしないよ。或いは、今日こうして貴女と会っていることだって、又プレイのことだって、どうせ書くことになるかも知れない。しんどいのだよ本

当は——。何も書かないで、こっそり愉しんでいる人間が随分多いことを、私は知ってるんだ。この京都の徳永氏にしても、東京の賀山氏にしても、ひよっとすると、私以上に次々と、新しい女性相手にSMのプレイをしているかも知れない。それでいて、ちっとも書かない。書く手がない

んじゃないくて、書く気にならないんだろう。むしろ、書く暇があったら、それだけ、ハントに憂身をやつしているのが本音かも知れないんだよ。撮ったフォトにしろ、掲載されるのは、ホンの氷山の一角。本当に凄い、面白いフォトは全部オフ・リミットだからね。早く私もそうなりたと思うよ」

これは私の本音であった。確かに私は、もうかなり草臥れている。最近「カメラ・ハント」がマンネリ化してきたといわれても真実を書く場合、そうそう変わったこともない。フィクションは少なく、なるべく真実にそっ

て、リアルに描こうとすると、自然似たりよったりになってしまうのである。

「奇譚三十九夜物語」のラストにダブって、昭和三十九年十一月号に、始めてカメラ・ハントを発表して以来、延々四年数カ月。その間、体の不調で二回許り休載したのみで、あとは毎月書きつづけて、今日に至っているのである。折々の女性との折衝を単発的に書き綴るつもりが、こんな結果の累積になってしまったのだった。

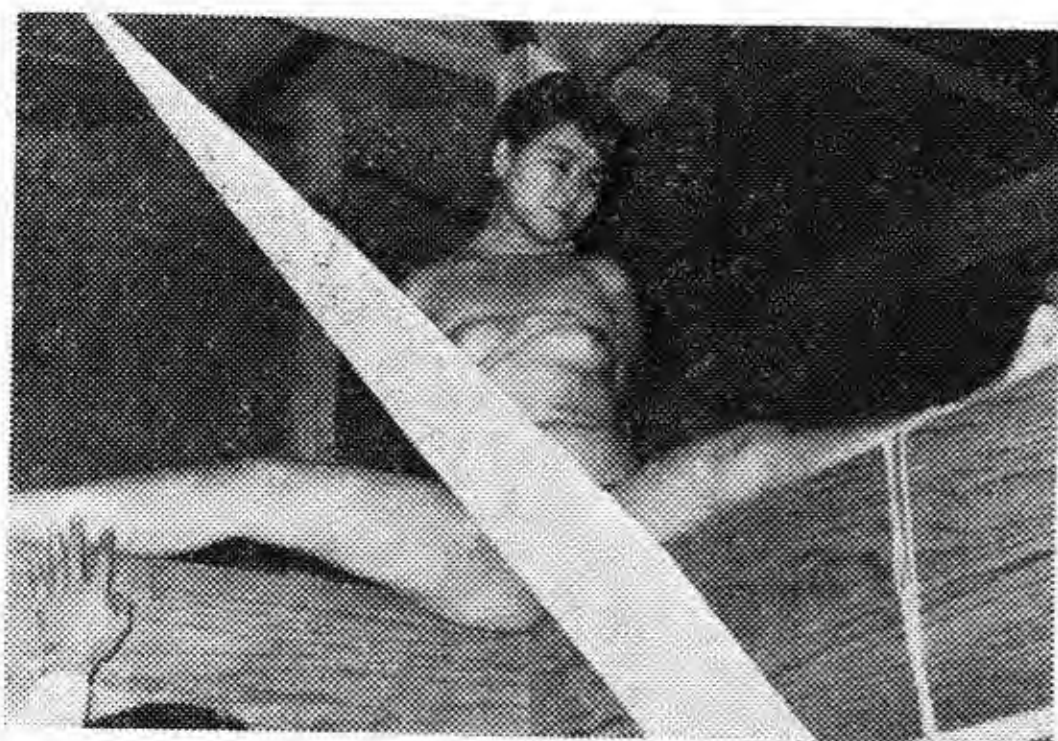
昭和二十二年に初めて投稿して以来、二十年以上、奇クと縁のきれないのは、あとにも先にも私一人きりであろう。当時、堺市にあった編集部へ、よちよち歩きの長女を連れて御邪魔したのが、まるで昨日のように思われるのに、もうその長女が、今秋、結婚しようとしている。思えば、うたた感慨無量であった。

浮かんでは消え、又現われてくる、星の数にも似た投稿家の中で、唯一人、必死に意地になってしがみついて頑張っている恰好である。私について古いのは、芳野眉美氏それに最近、再び登場した鬼山紬策氏あたりだけで、団鬼六氏にしても、十年も経ってはいないではなからうか。その鬼六氏が熱海で

讃嘆した左近麻里子が、この一年半というものの、そっと私にSM的愛情を抱いていることを知ったのは、驚異に近い思いであった。

そんな感懐が胸をよぎる時、私はビールの微かな酔いと共に、言葉とはうらはらに、彼女に対して淫らな、どぎついプレイを妄想して、急速に心を疼かせ始めていた。プレイの果ての、熟れ切った肉体は、恐らく触れなば落ちん態度を示してくるに違いないであったろう。麻里子の頬が薄桃色に染まり、訴えるような、黒い眸をみつめているうちに、私のこれからの構想は、急激にかたまりつつあった。この人との、最後になるかも知れない今日のプレイを、最高のものに盛り上げて、有終の美を飾りたかった。車には二個の黒い皮袋が積み込まれてある。一コには二台のカメラ、二基のストロボ、軽便雲台、長尺レリーズ、パイプレーター、フィルムなどが。そしてもう一コの皮袋には、長短、太細とりまぜて十数本に近い縄束が、袋をはちきらせて、ぎっしりと押し込んである。車の場合の便利よさであった。

表に出ると、昨日とは打って変わって、午後の淡いこぼれ陽が、巨大な平安神宮の大鳥居の背から暖かい日射しを投げかけていた。



ここから程近い、神宮道を少しわきに外れたホテル・Hが、私達の目指すプレイの場所であった。このホテルでごく最近、梨花悠紀子と、華々しいひとときを過ごした憶い出がフト蘇がえってくる。

左近麻里子のオーバーは既に春の色であった。さしてスピードを出さず、神宮道を走っ

てゆくと、ホテルに曲がる数メートル手前で彼女は、遠慮勝ちにいった。

「一寸、あそこの『平安殿』という銘菓の店の前で降ろしてくれませんか。父の好物なんです。折角、通ったついでですから」

あわててブレーキを踏んで、菓子店の前でストップする。彼女は、そそくさと店内に入ると、かなり大きい菓子箱を包んでもらっているのが車中から見えた。フト思い立って、皮袋からカメラをとり出すと、折りから出てきた彼女のスナップを一枚、素早くうつす。

それと察して彼女は立ち止まる。ついだから、車を降りて大鳥居をバックに一枚。出てきた店員が京見物と感違いしたのか、サービスのつもりか、一緒に撮ってあげましょうといってくる。苦笑して、二枚許り、わざと離れたり、正対したりして撮ってもらうと店員は妙な願をした。おおよそアベックらしくなかったからであろう。私達が車で、ホテルの角を曲るまで、店員は立ち止まって、じつと私達の車を見送っているのが、バックミラーにうつった。

× × ×
部屋を入った処にジュタン敷きのフロントがあり、襖を開くと小じんまりした四帖半

に、カラーテレビ、冷蔵庫等、これはどこともよく似た感じである。フロントを数段下るとバス、トイレ、そしてフロントを上った二階が寝室といった変わった構造で、一つの部屋が細かく三階に仕切られた感じである。

梨花悠紀子とこの部屋を訪れて以来、ここは私の気に入りの間であった。バスの中にはスチームバスさえ準備してあるデラックスさであった。四帖半からバスが硝子ごしに透けてみえる。

ホームゴタツを挟んで坐ったものの、彼女から激しい告白をきいているだけに、何となく私の心は重苦しかった。

もう少しリラックスなムードでプレイしたかったが、思いつめたような左近麻里子の、その態度がヘンに心にひっかかっていた。たとえ彼女がバージンでないにしろ、二カ月後に結婚を控えた今、プレイのあとの、崩れゆく二人の姿が想像されて、チクリと良心がいたむ。

「お湯が入ったようですね。おはいりになりませんか？」

「ああ、麻里ちゃん、先にどうぞ」

「よかったら一緒にはいりません」

心もち顔を赤らめて、彼女は湯加減を見に

いって、濡れた手をタオルで拭きながら、さりげなく言った。積極的な彼女の言葉であった。うなずいて、私はさっと服を脱ぎ捨てる。バスに走り込んだ。

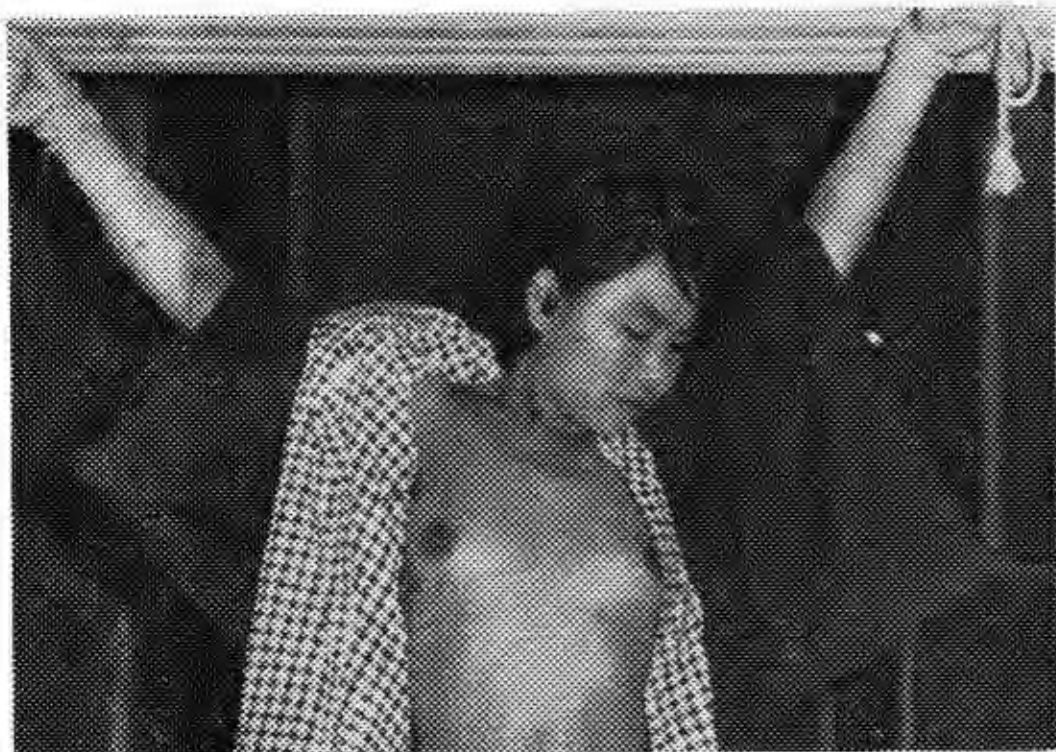
ザブザブと体に湯をかけて、沈んでいると前かがみの彼女の、豊かな肉づきの肌が狭い浴槽の中の私を押しつぶすようにして、はいり込んできた。否応なく肌と肌が密着する。背を向けた彼女を、羽交いじめのようにさっとうしろから抱きしめると、体がそれを待ちのぞんでいたかのように、私の胸に傾斜して

きた。狭い浴槽内で、蔽いかぶさるように私は麻里子の唇を吸っていた。危ない危ないと思いつながら、そのくせ、女心をゆすぶる行為は私の方から行動を起こしていた。しかし、それを彼女は待ちうけていたのではなかったか——。抱きしめた肌を愛撫しながらの、長いくちづけが湯気に包まれて続いていた。

私のカメラ・ハントの意志は、ガラガラと音を立てて崩れてしまいうのであった。出来ることならこの際、彼女を抱いて階段をのぼり、濡れそぼった裸体をぶつけ合って、慾情の谷間に転落してゆきたい衝動にかられていた。

恐らく彼女自身もそれを拒まなかったであろう。しかしその行為は、単なる男と女の情事の点描に過ぎない。それでは私は或いは最後になるかも知れない、このたまゆらのひとときを、余りにも空しく費やしてしまうことになりはしないだろうか。心の片隅に残るハント意識が、辛うじて私





を抑制させていた。そっと唇を離すと、近々と女の眸が妖しくきらめいて、人魚の游泳するように、彼女の湯に浮いた体が反転して、両手が私の首に巻きついてきた。尚も愛撫を求めていることは瞭らかであった。黒いなまめく瞳が、何よりもそれを雄弁に物語っていた。

「背中、流してあげよう」

瞳をかわして、ザッと飛沫をあげて立ち上ると、私はタイルに出て腰を降ろす。

すべすべとぬめつく背に泡を一杯に立てて双丘の辺りまで丹念にこすって行く。私に身を委せた筈、彼女は背の私に声をかけた。

「こうして、皆に親切なんでしょう、辻村さん——」

「かも知れないね。女性はみんな可愛いもの。サジスト振ってるくせに、案外フェミニストなんだね、私って」

「女は、そうした親切に弱いわ。粗々しい嗜虐の中のいたわり、それが辻村さんの本性なのね」

「親切に優しくしといて、そのあとでウンと虐めるかも知れない。ここは逆吊りに最適のアベックホテルなのさ。私一人で出来るかどうか分らないけど、やってみたいよ」

「ああ、あのお部屋の天井の、張出しの飾りね。でも私、重いわよ。辻村さんひとりじゃ無理だわ」

「だから、考えるのさ」

クククッと彼女は愉しそうに含み笑いをした。プレイを想像し、私の非力を知っていてその空転する嗜虐の想念に可笑し〜思ったの

かも知れない。

湯上りに暖房は熱く、私はしばらくの時間裸でいた。裸でカメラをとる準備を始めた。

バスタオルを体に巻きつけた筈、彼女は冷蔵庫からコーラをとり出すと、二つのコップに注いだ。

均整のとれた麻里子の裸は、服を着た時、少し野暮たくみえるのが不思議なくらい、裸のよく似合う娘であった。洋装のよく似合う娘が、裸になると案外ガリガリであったり、線がくずれていたりする時もあるし、服装の野暮な女性が、裸になると眼を瞞るような素晴らしい女体であったりすることがよくあるが、左近麻里子の場合は後者であった。着衣と裸が、かくも違うものであることを私は彼女の場合、殊更に感じた。かつて数年前、滋賀のある女性とプレイしたことがあるが、和装のとってもよく似合う、端麗な夫人であったので、ワクワクして、さてという段になって裸になってもらうと、背と腰に、大きい灸跡があつて、しかも出腹ときていたので一ぺんに興ざめたことがあるが、包装と中味の違ひのはなはだしいのは、男性より女性の方が遥かに多いようである。

今、そんなことをフト思い出したのも、左

近麻里子の裸身が抜群だったからであった。その裸身の魅力にひかれて、私はフロントの壁際近くでポーズを構えてもらって、彼女のヌードを数枚、撮らせてもらった。

キリッとした太めの眉、ショートカットの髪、かげらいのある黒く大きな瞳、みずみずしい肌。そこには、かつての左近麻里子のイメージは朝霧の如く消えて、さながら別人の新しい左近麻里子が現われたようであった。

一年半という歳月の経過が、彼女をかなり大人っぽくし、女体のすみずみにまで、すっかり脂の乗り切った、ハチ切れんばかりの爛熟さを、その肌が如実に物語っていた。熱海では露出を嫌うようにした彼女が、今、殊更にこれみよがしに、ヌードのポーズのひとつひとつを、むしろ誇示するかのように見せびらかしていた。それは私に挑発するかのようになら思われた。

「辻村さん、こんなきまりきった平凡なポーズ、面白くないんじゃない。仰有る通り、どんなことでもしますから、遠慮なさらずいて下さいな」

猥らな光をたたえて、左近麻里子は私に挑みかかるように、そんな事を口走った。

「ああ、勿論変わったポーズを撮りたいね。」

そうだ、梁や長押にのぼって、あちこち駆け巡ってくれないかな。寝室の方からなら、案外たやすく上れるよ」

「やってみるわ」

左近麻里子は、惜しげもなく裸体をさらして、颯爽と閨房に通ずる階段を昇っていったかと思うと、部屋の瀟洒な板障子を開いて、いきなり四帖半の、太い長押に脚をかけて跨ぎ出した。下から眺める私にとって、その光景は強烈な印象を植付けた。仰向いてカメラを構えると、移りゆく刹那刹那の変化するポーズを、カメラは休む間もなく追ってゆく。

天井を両手で支えるようにしながら、彼女は長押の上をそろりそろり渡ってゆき、四帖半の部屋をぐるりと一周した。不安定の赤裸々なポーズの中にドキリとするような妖しいエロチズムが横溢していた。在りの尽の姿で在りの尽に振舞うのは、つくられたヌードのポーズなど、較べものにならぬ程千変万化であった。ましてや、その女体が私の頭上で動き廻り、梁に隠れチラチラと隠見する肢体が、私の眼につきささり、時として、それは隠花植物の精のようにそっと現われ、そして瞬間に柱の間に隠れるのを見て、私のファインダーを覗く眼は、幻の花を追う蝶のように疼い

た。一周すると、彼女は襖の上の長押の、隅の柱につかまって、チラリといたずらっぽい笑みを泛かべた。そろそろと、直角の片隅のほんの数センチばかりの空白に腰を下ろすと媚笑をたたえて、これみよがしに、両脚を長押の上に思い切って大きく開ききった。ハッと思わず息をのむポーズである。この大胆さこの奔放さ——。それは決して私より頼んだポーズではなかった。彼女自身の意図によって、私の頭上にたかだかと、しかも至近距離で観測出来る位置で、敢えてこの超露出的ポーズを、みずからとったのであった。

それは私の抑制された感情を、一挙に粉碎しようとするかのような、煽情きわまりないポーズであった。熱い男の慾望がぐっと突き上げてくる。長押に近々と寄って私は麻里子のそれをまざまざと直視する。その直視に耐えて、彼女は私の眼を突きさすようにみつめていた。

私の脳裡に、さっと走る緊縛の想念——。「そうだ、このポーズのまま、少し動かないで待って……」

叫ぶように言うや否や、あわただしく二条の縄を捌いて掴むと、階段をさっと駆け上り板障子から長押に足を掛けて、そろそろとへ

っぱり腰で彼女の背後に近づく。胸へ縄を回して柱と体を固定させると、両手を柱のうしろで強く縛る。ついでもう一条の縄で、首と柱をぐるぐる巻きにして固定させた。不安定極まる場所の危険な縛り方であった。

こうして、いきなり前触れもなく、緊縛のプレイは始まったのである。

彼女の臀部は、ほんの僅か、長押の上にのっかかっているに過ぎなかった。この不安定きわまるポーズで、若し万一、体のバランスがくずれた場合、臀部は落下して、まるで首吊りのように、首縄がしまるのは火をみるよりもあきらかであった。流石に麻里子の表情に、不安な緊張が走っていた。

「動いちゃいけない。じっとしているんだ。お尻に力を入れてね」

言うなり、飛ぶようにかけ下りると、開股しきって、長押の上に長々と伸ばした左足を下から縄を放り上げて縛る。私は三脚のカメラを自動にした。既に臀部の右半分が、ずり落ちそうになって、長押からのめり出していた。セルフタイマーがジジとなり始める。背伸びして右足を押えるようにした途端、閃光がきらめいて、この危険な、そのくせ、最も強烈なハレンチの開股ポーズをとり終った。

開股のポーズを下から見上げて撮るといったことは、かつてないことであった。私は、ずり落ちそうな右臀部をぐいと押上げ、

「大丈夫？」ときく。

「怖いわ、早くして。」

もしも落ちたら、どうなるの」

無言でその恐怖を黙殺して、私は三脚を外して、この無惨図を凡ゆる角度からカメラに納めた。麻里子の表情から、すっかり微笑は消えていた。縛られた両手に力をこめて、臀部と両手で、柱を挟みこむようにして、この

恐怖の構成に懸命に耐えていた。アングルの谷間に近々と近づいて、真上に向けて構えたカメラにおののく太腿がレンズを通してのぞけた。その太腿が鳥肌立っているのを見て、私はそれを最後の一枚にすべく、最早泣きべ



そを掻いた彼女の表情を丹念にとらえていた。

× × ×

「ああ、怖かった。こんな怖いこと、始めてよ。だって、おしり滑りそうなの。でも滑っちゃったら首吊りでしょう。冷汗かいたわ」

「でも、凄かったよ。こんなの始めてだ」

「考えただけでもゾーッとするわ。我ながらよくやったものね」

長押を見上げて、麻里子は改めて溜息をついていた。

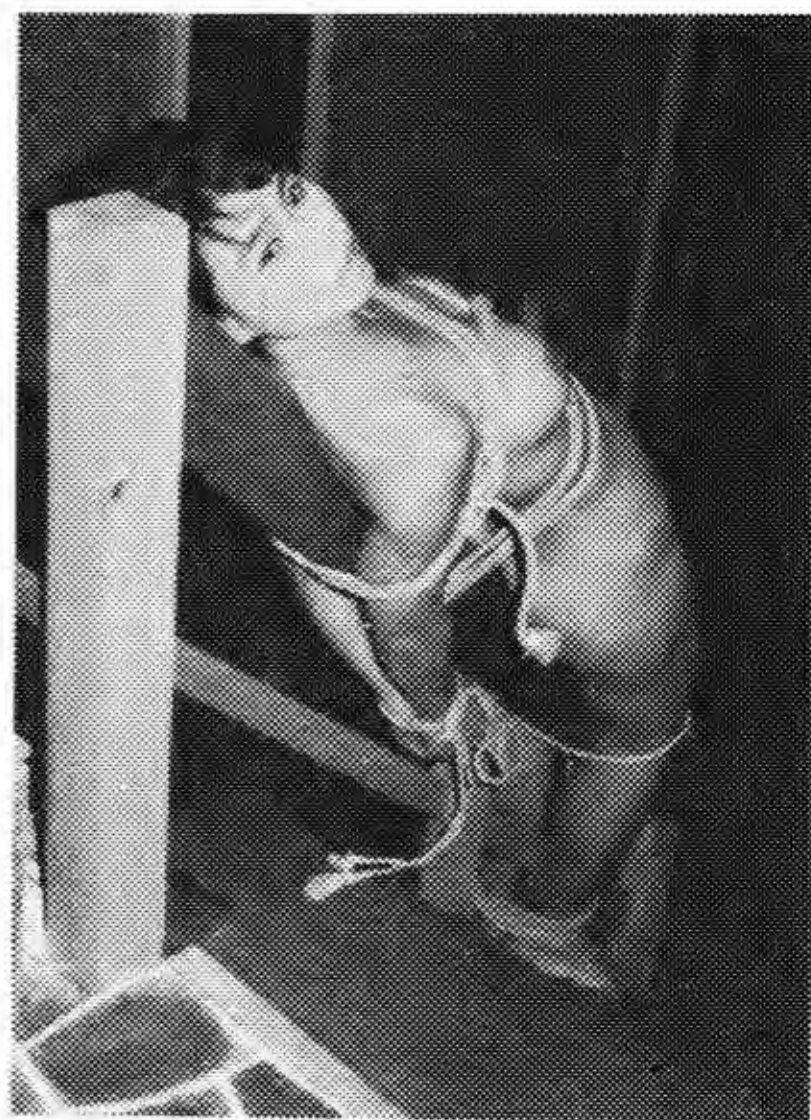
「熱海の時にくらべて、ちっとも恥ずかしがらないね」

「でもあの時は、箕田さんの外は皆始めてでしょう。オニ六先生も辻村さんも……、いくら私

だって。今日は——、別段隠す必要もないわ」

「あの時にくらべて、まるで別人みたいだよ今日は——」

「そうかしら。でもこれが私の正体なのよ。」



一旦こうと信じた人になら、どうされてもいいような気持。私って案外、情熱的なものよ」
「見直したよ。何かそうした気持をきくと、麻里ちゃんはMではなく、案外S的な感じがするんだが、そんなS気、持っていない？」
「あるような気もするわ。私が燃えているのに、いつまでもイジイジして意気地がないとパチリとお尻をぶってやりたくなる。そのくせ好きな人になら、トコトンまで虐めて欲しい気持いっぱいだし、何が何だか自分でも分からなくなってくることもあるの」

寒いから着てコタツにでも当ろうよ。ビールのむ？」

「ええ、いただくわ」

冷蔵庫からとり出してくると、コップに注いでやり乍ら、私は麻里子の告白をきいた。

「私、中学一年まで長崎で育ったの。だから言葉、少し強いでしょう。どうしても京都弁になじめなくて……。プレイの一人は、ダンスで知り合った三十年配の人。六、七回ぐらいプレイしたわ。その人に始めて奇クをみせて貰ったの。世の中にこんな凄い本あるの

「プレイは私と一章さんと、箕田さんだけなんだろう？」

「そうよ、フォト撮ったのはね。でも、プレイだけなら、過去に二人ばかりあるわ」

「セックスのプレイ？」

「最後はそうなるけど最初からそうじゃないの。きかせたげましようか、何もかも」

「ウン、ききたいね。」

かと、胸ドキドキさせて読み耽って、その人の云う通りになって、奇クのグラビヤをお手本にして、いろいろ縛られた。縛られて、その人から操ぐられ、触られてコーフンさせられちゃうの。自分で写真出来ないものだからカメラ撮らなかつたけど、その人も大の辻村ファンでしたわ。私、結婚してくれて頼んだら、足が遠のいちゃった。プレイを通じて好きになった人でしたが、妻子があっちゃ無理だったのね。所詮プレイで割切らないといけないのに、つつい心許してしまったのよ」

左近麻里子の秘密のベールが一枚剥がれていった。なればこそ、山本一章との新幹線での始めての出会いも、奇クを通じて、むしろ彼女は、そうした人を求めていたのではなかったろうか——。山本一章自身、彼の方から誘ったように思っているが、案外ままと、彼女の思うツボに嵌っていったのかも知れない。

私はうなずきながら、黙々とビールを注いで次を促す。

「もう一人の男は一回ぼっきり。でも火花のようなあの夜のひとときにはシビレちゃったわ。私その夜、友達三人と木屋町のトリスバ

ーで、ハイボールなんかのんでいて、かなりいい御機嫌もあったのだけど、隣り合わせに坐った男の、ニヒルな物憂い態度にフト心魅かれて、どちらから誘うともなく、友達と別れて二人でフラフラっと出掛けちゃった。革のバンドが私の肌を、撫でさする様に走って私をもみ苦茶にして夢中にさせた頃、私の背や腰やお尻で、ピシピシ音を立ててバンドが弾けとんでいたわ。ジーンと頭の芯までこたえる苦痛が、そのくせ快い刺激になって、これが鞭打ちの快楽かと、心の中で分った時には、私の心はしびれて夢心地だった——。数度それからトリス・バーに行っただけ、彼とはもう二度と会えなかったの。名前もところも分らない人。わたしってそんな女よ」

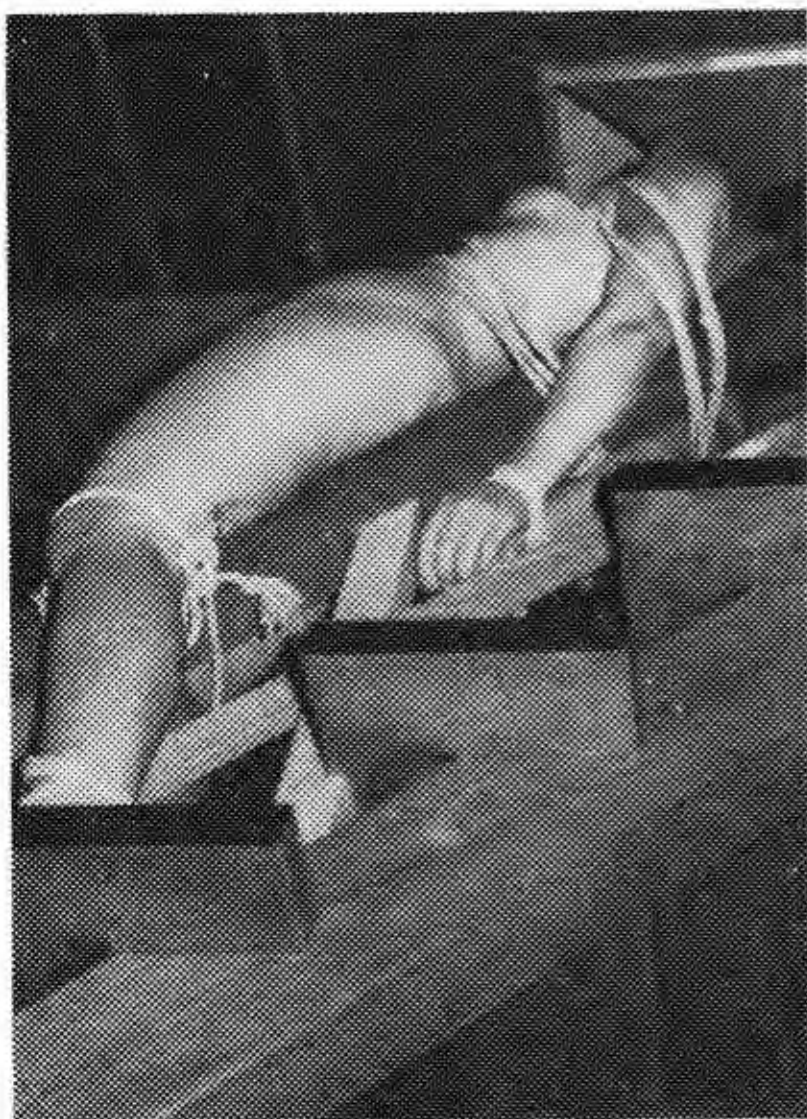
左近麻里子は謎めいた笑いをチラリと泛かべて、ビールをぐっとのみほした。

私は何故ともなく、フト直感的に、彼女のこの話に創作を感じた。どうも告白にしては出来過ぎているからである。その根拠はなかったが、或いはわざと自分を悪女に仕立てて私を気軽にさせておいて、そうしたプレイに誘導しようとする才覚ではなかったかと思えたからである。しかし告白を信じ込んで、その手に乗って、私自身プレイの激しい行為に

没入することが、この場合、むしろいいらしい女心に酬ゆる、手段であるかも知れなかった。誰しもが努めて自分を、つましい女にみせかけようとする女性の本能を、あえて破って、みずからのハレンチを告白した処に、結婚間近の最後の自由を求めての、あがきに似た追いつめられた女の焦燥があった。若し彼女の話がすべて事実なら、これはほんの氷山の一角で、未だ未だ隠されたハレンチな行為があるに違いなかった。とすれば、これは正しく、すごい悪女である。

山本一章との始めての出会いの、あの偶発性を考えてみると、あながち告白を否定も出来なかったが、私の心はそれをフィクションとして受取りたがっていた。でない、今までもずっと抱いていた、左近麻里子へのイメージが、余りにも無惨に瓦解してしまいうさだったからである。

彼女がそうした告白



を自から切出してヌケヌケという言葉で裏返すと、うんと虐めてほしいということになりはしなかったか——。告白によって私を刺激し、うんとハッスルさせて、SMのプレイに耽溺したいものの、虐めてほしい、夢中にさせてほしいというようなハシタない言葉は女の口からは切出せないだけに、告白にかこつけて、それを訴えていたに違いない。そこに彼女の理知性が覗かれ、果無い女心がうかがえて、私の嗜虐の血をそこはかとなく擦っていった。



素肌に浴衣の上から丹前羽織を纏った彼女を引寄せると、女体は脆くも傾いて、私の胸に凭れかかってきた。ぐっと抱きしめて、愛情のしるしをみせて、私は彼女の手をとって立ち上る。両手を開いて高々と長押に縛りつけると、浴衣の前を押し拡げる。何の抵抗もみせず彼女は私のなすが俚になっていた。

押し拡げた肌の前に腰を落とし、私は持参した携帯バイブレーターを、敏感な個所に押しつけてゆく。あっと呻いてピクリと肌がいれんし、左近麻里子の表情はべそを掻いて歪んでいった。必死に洩れる吐息をこらえて吊られた両手の指が空におどって、その悦楽

を押し殺そうとしていた。這うようにバイブが微かな電動音を響かせて、徐々に臍窩から胸元の隆起へと伝播を撒いてゆく。全身をのけぞらせて女は呻き、熱い溜息を洩らしていた。プレイの準備運動で、既に左近麻里子の女体はしめり、喘ぎと共に体を濡らしていった。不必要な会話はこの際プレイの感興を切断するのみだった。私自身のどを渴かせて、全身をけいれんさせる彼女の、刻々の変化を直視していた。

「どう？」

「ううん、うれしいわ……」

「もっと虐めてやるよ」

宙に浮いた焦点の定まらない眸が、大きくうなずいた。

吊り上げた両手の縄を素早く解くと、抱くようにして四帖半の部屋の片隅へ移動する。部屋の二面は風流に木枠で囲ってあって、縛りつけるには恰好の材料であった。

体を寝かせつけて羽織をぬがせると、両脚をぐっと屈曲させる。体ごと木枠の直角になったところに押しつけるように、左右の手足を揃えて、木枠にしっかりと縛りつける。双丘が高々と天井をにらんでいる。太腿から股にかけてしっかりと縄をかけて、身動きの出来ないようにすると、私はローソクをとり出して点火した。小さな炎が、徐々に長く伸び始めた頃を見計らって私は近づく。

女体の中心で、真紅のローソクが、めらめらと炎をゆらめかせて燃え続けている。やがて溜り始めた涙が、傾斜したあたりから、赤い尾を曳いて流れ始める。スーッと走った一すじが、彼女の肌を瞬間、赤く染めて凝りかたまっていた。

「あッ、熱っ……あッ、あッ」

熱痛の悲鳴が麻里子の紅唇を破って部屋をつんざく。尚も紅涙は徐々に溜っては流れて行く。悲鳴をさえぎろうとして、私は手許の縄をとると、唇をぐっと押し開いて縄を喰い込ませる。もがきようもない屈辱のポーズで女は必死に眉をしかめ、この熱痛にこらえていた。いつしかその瞳の奥には、深い悦虐の歓びがヒタヒタとただよっているのだった。



ローソクを手にとると、私は女体に立ちはだかり、かなり高い位置から傾斜させた。ポタポタと紅斑が、サイケ調に、はちきれん許りの双丘を染めてゆく。徐々にローソクは肌に近づき、熱度は距離に比例して上昇してゆく。きれぎれに悶え、喘ぎつづける悦虐の呻きが、ひとときわ高く昂まってきた。麻里子の眼尻から、一筋の涙がツールと耳朶に伝って流れ、それだけが自由の首が、イヤイヤをするように、左右に激しく揺れ動き始めた。

気がつけば、嗜虐の血をたぎらせる私の手に握りしめられたローソクと、鮮烈な紅の模様を染め上げた双丘の柔肌との距離は三十センチもなかった。直撃の熱蠟の熱さを忘れていつしか夢中になってローソクを近づけ、この蠟責めの嗜虐の溺で酔い痴れていたのだった。吹き消すと、蠟芯の燃える特有の匂いが狭い部屋に充満していた。斑々ところ嫌わず、紅痕がさまざまな模様を描いて、双丘を猥らに染め上げていた。

数条の桃色の線。麻里子の頬はポツと桜色に染まり、涙と共に、その瞳の奥に悦虐の様相が、まぎれもなく浮かび上っていた。呻きも悲鳴もとぎれ、私の振りおろす革バンドの下で麻里子はエクスタシーの失神寸前の境地を、さ迷っているかに見えた。バンドを捨てて、ガバと女の首を抱き、解く手もどかしく猿轡の縄をときほぐすと、私の舌端は、彼女の唇の中にとけ込んでいった。悦虐の果ての抱擁の味は、甘く切なかった。そっと片手に握ったパイプが、まさぐりつつ、女体の被虐を摘出してゆき、微かな電動音が夢うつつのように響いていた。激しい

けいれんと共に、私の舌がきつく噛まれ、舌の根も引き千切られん許りに吸い込まれた時麻里子の体の力がガクンと抜けていったのである。

× × ×

尚も一鞭、又一鞭、私はこの叩き心地満点の、最適の位置にある双丘から谷間へと、激しく、むちをくれた。

とびちる蠟骸のあとに、ありありと色づく

強く抱き合って、狭い湯舟の中で、かなりの時間じっとしていた。鞭の痕が湯にしみるのか、麻里子は微かに眉をしかめ、そのくせその痛みを反芻するように、私の手をその個所へもってゆかせて撫でさせていた。

いとおしいものを冒瀆したような気持で、私は俄か三助になって、彼女の紅斑の残りを

せつせと、洗い場で、こそげとってやった。うつむいて両肘をタイルにつき、四ツ這いのポーズで心持ち臀部を持ち上げて、彼女は猥らな姿を、ありありと私の眼前に曝していた。

熱滴の蟬涙の跡が薄赤く肌を染めていた。「すごく熱かったわ。飛び上る程あついの。でも忘れられないわ、あのひととき。フフ、私にとって『涙の季節』ね。分る、この意味？」

「分るよ。でも熱かったろうね。つい夢中になって……御免御免——」

「いいのよ、あやまらなくても。その代り、体の前の部分に流れたカタマリは、辻村さんの口でとって——。ひざまずいてよ」

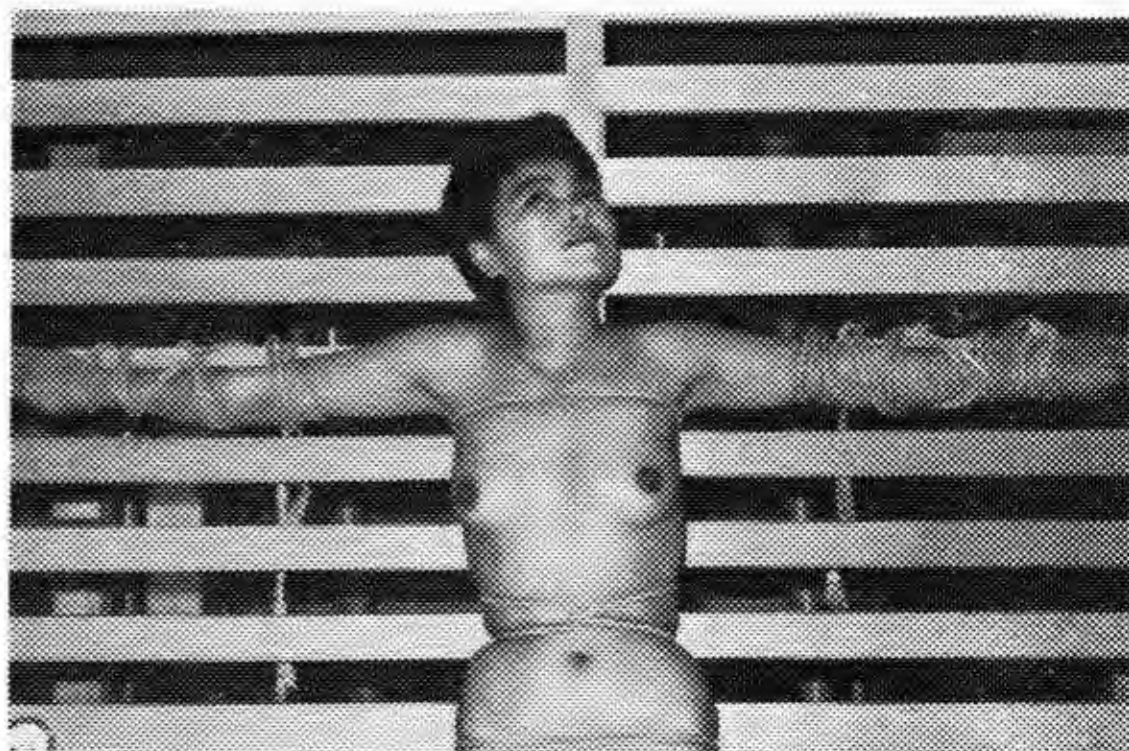
パツと姿勢を起こすと、彼女は湯舟のカマチに腰をすえ、いきなりザブザブ湯をかけると、両股を開いて、やや腰を突き出すようにした。女の隠されたサジスチックな半面であった。痴人は苦笑して、いわれる通り四つ這いになって近づくと、顔を埋めてゆく。私の口中に、ペラペラした蟬骸が、微かな女臭をただよわせて溜っていった。サジストを自認する私にして尚かつ、こうしたマゾに喜悅する一面のある事を私は自覚した。しかし、そ

の行為は快い悦楽を伴って、私の神経を擦ぐるのであった。大量のSの中に、少量のMが混っているのが私であるとすれば、大量のMの中に、少量のSの混っているのが左近麻里子であった。その比重が適当に融和されて、そこに、えもいわれぬSMのプレイの雰囲気が出されているのであった。

この尽でいると、バスの中で激しい愛慾の渦に巻き込まれてしまいそうであった。未だ私の構想の中には、種々の緊縛のプレイのアイデアが残っていた。最後になるかも知れぬ彼女とのひとときを考える時、私はどうしても貪婪にならざるを得なかった。切なげに体を寄せてくる麻里子を、そっと離して、私は急いで濡れた体の尽で部屋へ遁れて行った。

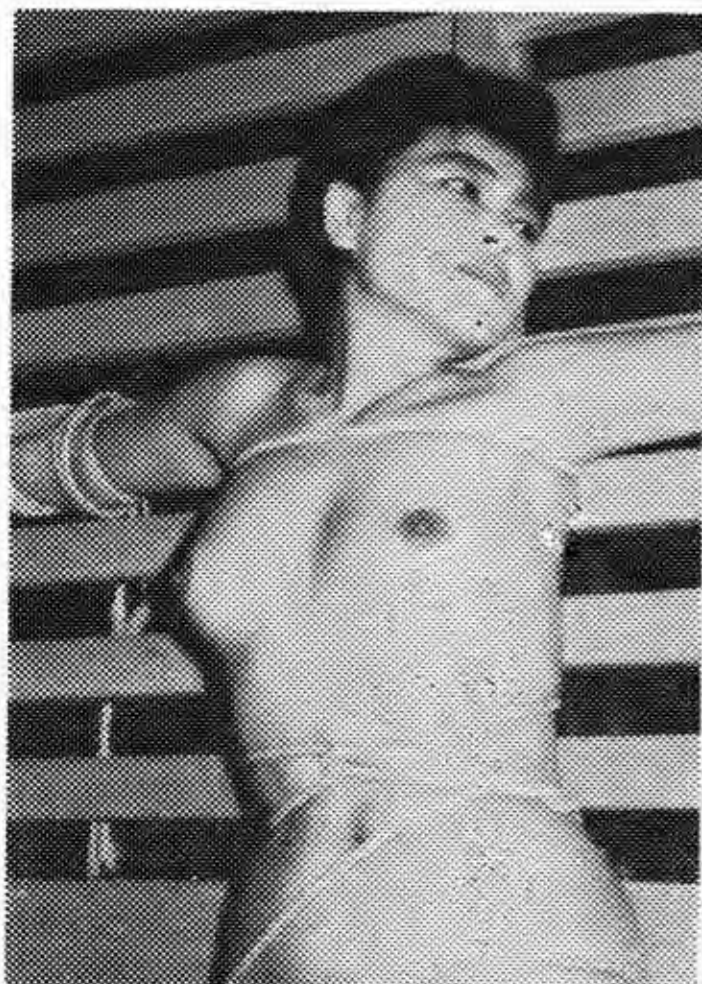
バスタオルで体を拭っている彼女を待ち受けるように、四帖半の入口で私は縄を掴んで立ちはだかつている。閨房へ通ずる階段の手摺を利用するつもりでいたのだった。

最初の試みは、手摺に体ごと縛りつけることとであった。私の命ずる尽に、彼女は二、三段のぼって、手摺をまたいで体をそっと倒していった。先ず体が傾むかないように腹部のあたりに縄をかけて手摺ごとしっかりと固定させると、胸から二の腕へと縛ってゆく。つ



いで両手を手摺のうらで合わせて縛り、両足首を揃えてしっかりと緊縛して、余った縄で膝と手摺を繋いでおく。

カメラは真正面から、上部から、或いは階段うらの下部からと、アングルを変えて、さまざまな視野からこのポーズに閃光を走らせ



た。カメラを握っているその時の私は、ハントに徹した、冷静なカメラマンになり切っていた、そこにはプレイは介在しなかった。この緊縛は、パイプを使うにふさわしい、むき出しのポーズではあったが、そのことによって、次への緊縛に支障をきたすことを懼れて私は一顧だにしなかった。とるだけとって、私は淡々と縄をといてゆく。もっともっと変わったポーズを、この奇妙な構造の部屋で撮りたかったからである。

ときほぐした彼女を、フロアに立たせて、引続き私は事務的に次の縛りに掛かった。縄を二本にして、首から掛けて、みぞおち

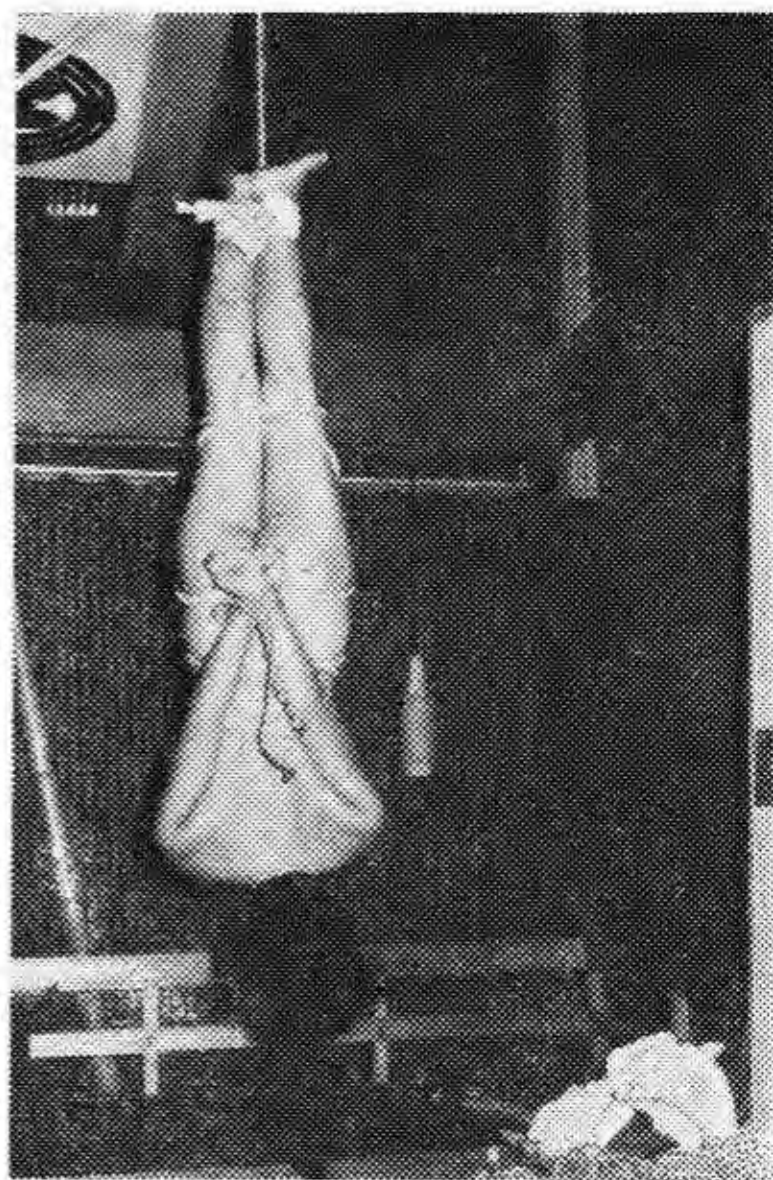
で一結びし、腹から回して胸もとで巻いて背後で止める。別の縄で両手を縛ると、そろそろと階段をのぼらせてゆく。この時期では、彼女は緊縛のモデルであり、私はカメラ・ハントのカメラマンになり切っていた。次々と変化のある緊縛の構図だけが頭を支配していた。麻里子の体を支えるようにして、階段をのぼりきった所で手摺を跨がせる。縛られた両手の指先で、彼女は手摺を押えて、体の中心をとっていた。両足首を手摺の枠に結びつけ、作業を終って階段を下ると、これを仰角の視点でカメラに入れる。微かにゆれるシンブルな緊縛の女体が、こよなく美しいものにくつった。

麻里子の表情は冷静であった。力むでもなく、さりとて感情を表わすでもなく、どちらかといえば無表情に近かった。それはプレイを伴わない単なる緊縛のポーズというに過ぎない行為が、彼女の被虐の血を、さして沸き立たせなかったからかも知れない。数ポーズでこれは終わった。もうこれ以上撮るほどのポ

ーズでもない。何故なれば動きがないからである。動きたくても動けなかった。危なっかしい構図であったからだ。

この階段に逆さに吊ってみたらどうだろうか。やって出来なくはない。階段の板で、背後にかなり苦痛を与えることは確かだが、私は、やってみようと思った。幸い両足を引く張る柱や力になるものは、いくらでもある。

首に縄を一巻きして、胸で一ねじりにして腰で結ぶ。縛り方は簡単であったが、背後の両手は、かなり深々と組ませてしっかりと縛った。階段を昇り切った石だたみの上で、階段を背にして立たせると、私は左右の足首にそれぞれ強く縄を巻きつけて縛り、一方は手摺のかど柱に、一方は閨房の入口の横さんの戸障子に結んで繋いだ。体ごと、うしろから抱きかかえるようにして、一步一步、階段を下る。もたれかかっている女体の重みを必死に支えながら、もう一步、段を下ると、両足の踵が空を蹴って浮き上り、ぐんと重味の全身が私の腕にかかってきた。じわじわと倒すようにして、階段にねかしつけてゆき、手を離すと、腰が、肩が、そして何よりも縛られた背後の両手が、鋭角の階段の板に深々と喰い込んでいった。



「ああ、いたいわ。両手を、板から外して」
眉をしかめて、麻里子は叫んだ。あわてて肩をかかえて体を宙にうかすと、彼女は身をねじらせて両手首を、階段の空隙に差し込んだ。

「大丈夫と思いますわ」

「離すよ」

そっと肩の重味を階段におくと、チラリと刹那、眉をひそめた彼女は、やがて諦めたようにスッと眼を閉じた。両足首の縄が痛々しく引きつれている。開股逆転梯子縛りに似たこのポーズに、血走った思いで、私のカメラ

にもだえて、絶叫がよぎり、背や腰で、ゴリゴリと骨がきしんで、麻里子は十指で虚空を掴んでいた。

縄をおいて、階段に片足をかけて、逆さの麻里子の顔をまじまじとみつめるうち、ふと鼻をつまみたくなって、二本の指で鼻梁をつまんで息をふさぐ。ハアハアと口から洩れる息の下で、彼女はパツと両眼を開くと、やるせない眼付きで私をみつめた。

「もっと虐めてほしいか？」

「余り痛いのは苦しさだけだわ。虐めて可愛がって……」

「可愛がるということは虐めることだ。最後に四帖半のあの飾りの梁から逆吊りしてやるからな、覚悟しとくんだよ。いいね」

「いいわ、吊れるものなら吊って……」

「そろそろ解いてほしいかね」

「頭に血が下ってきたのか、顔がカッとしてきたけど、お気に召したのなら、もう少し辛抱出来ますわ」

「よし、それじゃ解いて上げよう。私は天の邪鬼なところがあってね。早くといて欲しいという、もっとももっと放っておきたくなるんだよ。辛抱するというと、却っていじらしくなって、すぐ解いてしまふんだな」

逆さに倒し込んだのに較べて、体を起こすのには倍以上の力を要した。私は満身の力をこめて麻里子の体を起こすと、一步一步、階段の上のたたきにやっと立たせた時、私のひたいに大粒の汗が、べっとりとにじんで浮かんでいた。素早く解き終ると、もう私は欲も得もなく、闇房の横梓木だけの板襖を開いてダブルのマットレスの上に転がった。かなり心臓の鼓動が激しい。

そっと寄添うように入ってくると、

「苦しいの？」

麻里子は私の裸の胸を撫でさするようにし

乍ら、遠慮勝ちに、そっと添い寝してきた。

裸身を抱いた俤、私はしばらく眼を閉じて仰向いていた。鼻に女の髪の毛の匂いが忍び寄ってきた。私の胸に女は顔を埋めて体を絡ませてきたのであった。この俤セックスに移行することは、生け花を手折るよりた易い行為であった。しかも麻里子自身、それを喜んでいるように、しまった裸身を私の体に投げかけているのであった。

陶酔に耽溺する機会で、あったかも知れない。しかし、眼を開いてフト彼方を見た私の視線に、この風変わりな枠だけの板襖が眼についたのである。既に動悸は納まり、かなり体は平常に戻っていた。

いきなりムックリ起き上がると、麻里子の手をとってそこへ立たせて両手を広げさせる。

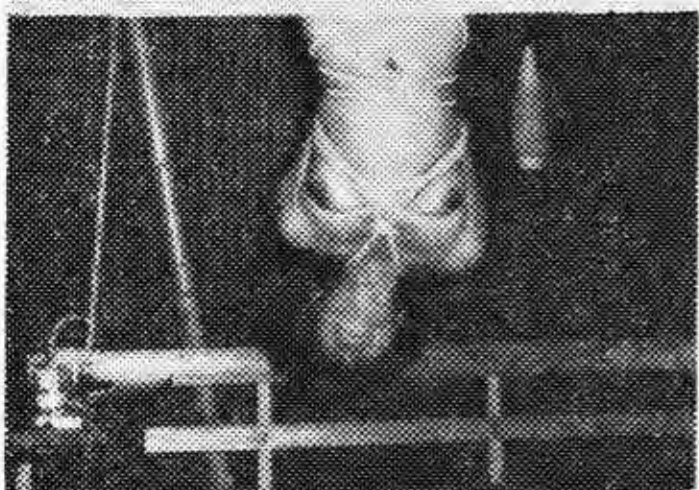
「未だ縛るの？」

不満げな彼女の言葉は、正にみたされようとした華麗なひとときをはぐらかされた、燃え上る女の欲求不満を言外に言い現わしていた。それに応えず、階段にちらばった縄を集めて持ち込んでくると、私の手は自動的に働いて、広げた左右の手を横枠にぐるぐる巻きに縛ってゆく。別の縄で、胸から胴を交叉して、うんとくびつてしめ、腰から下へ両脚を

そろえさせて、ぐいぐいしめつけていった。

完成した緊縛のポーズを撮ろうとして、ハタと困った。板襖が開かれないから、階段を下って四帖半へとりに行けない。横手の板襖を開いて長押に足をかけ、軽業のように長押の上を伝って、やっと階段に辿りつくともカメラを持って、再び同じコースを逆戻りする。

私の緊縛に対する執念に、左近麻里子はややあきれ顔で、この私のバタバタする様子をじっと縛られた俤みつめていた。数枚撮り終って私はマットレスに腰をおろすと、この美景を観賞するようにしばし、みとれていた。そしてノロノロと解きにかかったのである。



彼女は少し不機嫌になっていた。いきなり不貞腐れたように、マットレスのシートに倒れ込むと、さっと洋布団を引っかぶった。彼女の御機嫌斜めの原因は判っていた。もうそろそろ緊縛だけに終始するフォト用の縛りはやめて、プレイに没入したかったに違いなかった。いつも感じる、カメラ・ハントとカメラ抜ききのプレイのギャップである。撮るだけ撮っておかないと、カメラ・ハントのネタにならない——。そんな怒張った気持ちが、いつも折角、盛りりかけたSMプレイの想念に水をさしているのである。それを分っていないが、ハントに徹し、緊縛モデルとして扱

おうとする私自身の心の葛藤も苦しいものであった。一層そのどちらかに徹底すればよいのだが、女体を燃え上らせておき乍ら、一方ではフォトを続けようとする。その中途半端さが、燃える女体にとって、は、やり切れない焦燥となつてつい

不貞腐れてみたくなるのではなからうか。分っちゃいるけど、やめられない——。そんなジレンマの中で、私は洋布団を引っかぶった麻里子の、布団の中の裸身の疼きを想像していた。

わざと声をかけず、私はそつと板襖を開くと四帖半に降りてゆき、ロングピースに火をつけて、大きく煙を吐いた。私自身、かなり疲れていることは確かであった。その癖、今ふり仰ぐ天井に、ニョキと突出た飾り梁に、麻里子を如何にして逆吊りしようかと、それのみを必死に考えていたのである。不可能を可能にしたい、一対一の逆吊り。扱、どんな才覚があるというのか——。

じつと天を見上げて、私は沈黙考する。まるで推理小説の謎解きを考えるように、真剣そのものであった。人は、そうしたことに頭を使って思い悩む私を笑うかもしれない。しかし私のその時、その刹那の、逆吊りに対する執念は、何故か、逆吊りをしないことには、今日のプレイに意義すら感じなくなっているのだから、コケの一念は怖ろしい。

思案の挙句ハタと或る一手を思いついた。冒険きわまりないが、やってみよう。滑車があればもっとラクだが、その準備もなし、も

のは試し、やってみるより仕方がない。

「麻里ちゃん——降りておいでよ」

私は大声で呼んだ。

× × ×

「体重どれくらいあるの？」

「五三キロ」

「うん、ひょっとすると、可能かも知れないな。いいことを思いついたんだ。麻里ちゃん例の『徳川女刑罰史』見たでしょう。あの第三話の外人の女を責めるシーンで、二人の女を井戸用の木車で、吊り上げ、吊り下げするアップダウン式の責めをやったんだけど、体重が似たりよったりだから、下働きが体を引っ張って上げ下げしたんだ。この原理を一度応用してみよう。試しに、あの梁に縄をかけて、二人でぶら下ってみようよ。もし梁がドサリと落ちたら大変だからね。ね、協力してくれるだろう。これが最後だからさ。あとは麻里ちゃんとゆっくり……」

彼女は仕方ないという表情でうなずいた。私の執念に根負けしたようである。

縄を二本にして梁に放り投げ、両端を握って、徐々に力を籠めてゆく。ミシリと音がしたが梁はビクともしない。かなり本式に、丈夫に出来上っていた。力を一杯にこめたところ

ろで、足をそつと浮かせてぶら下ってみる。彼女も私と同じ動作をして裸身の脚をかがめて挙げた。しばらくそうして二人は両脚をあげて縄を掴んでぶら下っていたが、梁はビクともしなかった。

安全を確かめて、次に私はアップダウンの可能性を確かめることにした。私は現在七十五キロ。その差二十二キロであるから、私の全体重をかければ彼女が吊り上る筈である。唯、四角い角材の突出した組合せの梁だけにその摩擦は大きいに違いなかった。

両手をうんと伸ばして、麻里子は縄の先端をぐるぐる巻きに手首に巻きつける。縄をピンと張り、机上にのって私は縄を体に巻きつけて、体重のすべてを縄にかける。縄にしがみついて、足を浮かして机上からすべり落ちたが、角材のせい、その尽とまって麻里子の体は浮き上らない。

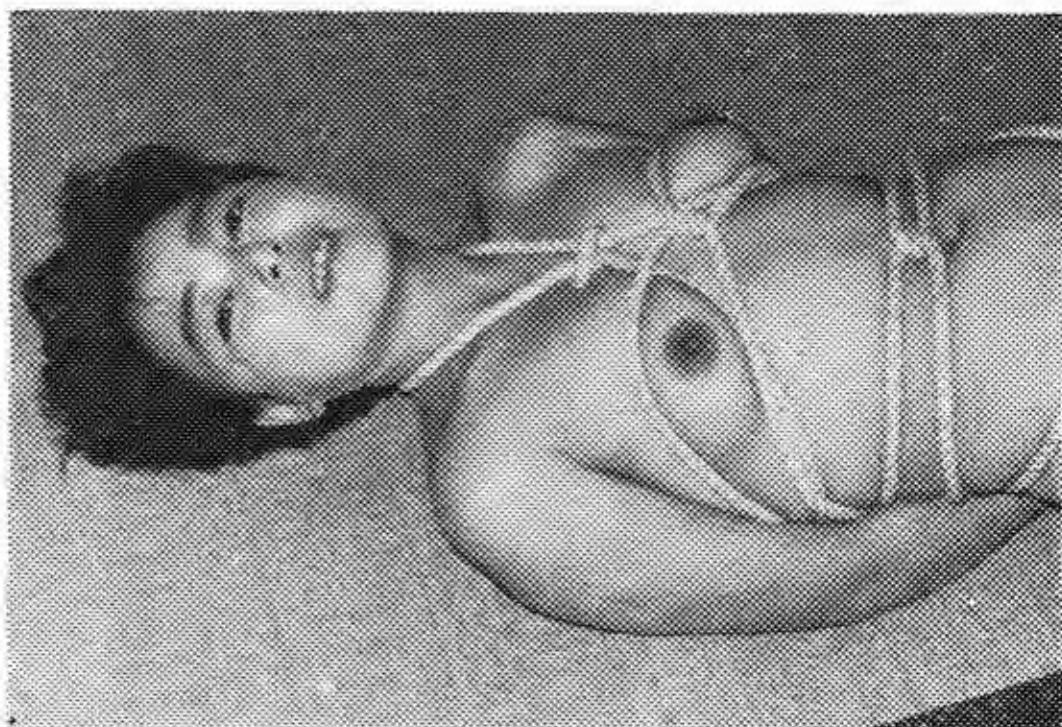
もう一度やり直し。一杯に引きしぼった縄を体に巻いて、両手で対面の彼女の体を引き上げるようにしたら、ズルッと上って、私はたたみに腰が落ち、麻里子の両脚が十センチ許り宙にういて、たたみから離れた。

縄がかなり要るから、縛り方は長い縄一本を使って一筋縄で、首縄から乳房掛けして、

胴から腰、そして太腿へ交叉させて膝のあたりで結んだ。別のんだら紐で両手を後にし、吊り下げに痛くないよう、足首に厚いさらし布を巻きつけ、それに吊り縄を通した。縄を二本にして三条の縄をつなぐと、かなり長くなる。その縄を握って、私は長押に登っていった。長押を伝って梁に這い上る。

天井との幅は、体一杯はいる程度でギリギリである。やっと目的の梁まで達して、狭いところで私は縄を腰から股へ、そして体へとしまらないよう巻きつけ、下の麻里子に両脚を上上げるよう合図する。自分の体に巻きつけた縄を伝って落下するのであった。しかも途中、麻里子の体を押し上げるよう介添しなくてはならない。逆吊りになった彼女の位置を計算して、縄をつなぎ止める柱に、別の縄をしっかりと結んでおき、私の吊り下る縄に三カ所ばかり結び目をつくっておいた。ずるずる落下して、この結び目に柱の縄をつなぐ算段であった。

成功を信じて私は両手を梁にかけた後、足から降りしてゆく。そして両手を離れた。ずるずると彼女の肩の辺りまでは雑作なく上った。彼女の体重は肩胛骨にすべてがかかっていた。両手を伸ばして、彼女の両脚を握ると



ぐっと引上げるようにする。私の体は少し落ち、足の踵は、たたみに二十センチ近くまで下降した。肩が上り、首がやっと逆さに垂直になる。ウーンと苦悶の呻きが彼女の口から洩れ、髪がタタミを放れた瞬間、彼女はぐっと首を外らした。腰のあたりを持ち上げるようにして引揚げた時、私の足はタタミをふん

でいた。ねじれた縄のよりが戻って、彼女の体は宙で旋回する。体をずらせ乍ら、やっと柱の縄を掴むと、結び目の玉の上につないで手早く縛った。じりっと数センチ女体は下がったが、見事な逆吊りがここに成功したのであった。汗を拭くいとまもない。あわただしく体の縄を解き、更にもう一本、結び目に縄を通して固定すると私はカメラに走った。ピントを合わす手ももどかしく、この一人で完成した逆さ吊りの女体を取りまくる。休む間もなく、麻里子の体は、ゆるやかに旋回する。正面、側面、背面と、入り変わり、立ち変わり、逆さ吊りは変化してカメラに納まっていた。心のゆとりすら、いつしか出来ていた。

「苦しいかい？」

「ウウン、大丈夫——」

「たとえば、すぐ降りしてくれると思ったのだろう。ところがもう一分我慢するんだよ。いいね」

私は大きく体をゆすぶった。ギシ、ギシッと縄がきしんで、彼女の体は宙に揺れつづける。揺れる女体に私の革バンドが飛んだ。ピシりと小気味よい音が、したたかにして、あっと彼女は呻いた。続いて更に一閃。

今、私は嗜虐の悦楽の極致にいた。一対一で、なしとげた逆吊りの、この燃えたぎる女体にサジスチックな鞭の洗礼を送って、その時、私の男性はようやくいきり立つのを覚えたのであった。

体に縄を巻いて、滑り止めをしてから、柱につないだ縄をといた。ぐぐっと引きずられて、女体は地についた。ジリジリ縄をゆるめてゆくと、無事、彼女の体は部屋に横たわった。流石にぐったりして、疲労の色が赤く彼女の顔を鬱血させて苦しげであった。足の縄を外し、さらし布をといてから、私は仰向きに転がる麻里子の顔に私の唇を近づけていった。ぐっと熱い塊のこみ上げてくる果たし得た喜びが、そんなかたちになって現われたのであった。

彼女の口腔は熱くかわいていた。それを私の唾液が、しっとりとしめらせていった。

「よく我慢して頑張ってくれたね。有難う」唇を離していうと、麻里子は、ずっと微笑んで、その笑みは消え、つと顔をそむけた。「上へ昇ろうか？」

「いいの、疲れていらっしやるなら無理しなくても……」

そむけた顔が、弱々しく応えた。

抱いて立ち上げると、股縛りに縛り直して両手首に縄の端をつなぎ私は手首の縄を握って、押すようにして階上へと昇る。

「フォトもういいの？」

「ああ、堪能したよ、あれで——」

あとはプレイだけさと言おうとして、口には出さず、暗黙のうちに、私達はマットレスに横たわる。

×

×

×

ホテルを出ると、暮れなずむ東山連峰が既に暮色を帯びて薄墨色に染まり淡い夕暮れのネオンが物淋しく街々を照らし始めていた。夕食に誘ってみたが、左近麻里子は、たべたくないといった。余りにも強烈すぎた四時間の経緯が、重く心にのしかかっているからであらうか。

私の車は、この佳人の住む京の街外れへ向かって、逢魔が刻をゆるやかに走っていた。

「式までに、もう一度会えないかしら……」

「うんと印象を悪くしたつもりなのに、こんな私に又どうして？」

「こんな夢うつつのようなひととき、そこそ生まれて始めてですもの。夢ももう一度って考えたら慾張りでしょうか」

「バーでの彼との一時、どうなったの？」

意地の悪いことをヒョイといったら、じつと私の横顔をみて、黙ってしまった。

あの陶酔の絶頂で、うわごとの様に口走った麻里子の言葉を、私は今ゆくりなくも憶い出して、もう一度、胸にかみしめてみた。

「信じて……信じて。こんな気持は始めてなの。ああ、もっと虐められてみたい。もっときつく縛られてみたい、本当よ信じて……」

その言葉を裏返せば、麻里子にとって、過去の交渉が仮りに真実であったとしても、それは到底SMの境地を彷徨する性質のものではない事を私は信じたかった。

或いは、それは私のひとりよがりかも知れない。しかし、ひとりよがりしろ、麻里子のSM性を真に開眼させたのは私であると思いついた。もう一度会ってみたい——カメラを忘れて、徹頭徹尾プレイに没入してみたい。そんなハイド氏の心が今大きく私の心を支配していた。

西空の残照の、沈みゆくのを見つめながら熱い思いをのせて、私は走りつづけていた。

左近麻里子が果たして幸せな結婚生活を送れるかどうか——。しかし、それはもう私の関知せぬ未来への課題に過ぎない。

(おわり)

我デン引水を笑い給うな



讃 腎 記

麒 田 欧 二

A 美腎(びでん)の間(ま)

名匠ウィリアム・ワイラーの「ザ・コレクション」という風変わりな作品が数年前、封切られたが、私にもかねがね、この映画に似た一つの夢がある。四囲の壁に鏡を嵌め込んだ「鏡の間」と同じ趣向で、部屋の壁面を余すところなく東西古今の「美腎」で飾りたいというのが、それだ。

謂うなれば「美腎の間」である。四つの壁をぎっしりと埋め尽した数百の美腎は、それぞれの豊かな肉づきを誇示し蠱惑的に輝く。私は部屋の中央に坐って心ゆくまで観賞し、あるいは一つ一つを丹念に撫で、くちづけして歩きたい。

むろん、これらは実物でも複製でもない。いたって簡単な方法で造られた生ゴムの複製だ。たとえば、私が蒐集に加えたいと思う美腎——キャロル・ベイカーでもジーナ・ロロブリジータでもブリジッド・バルドーでも、いやもっと若々しいカトリーヌ・ドヌーヴでも、「007」の新星クロード・イーヌ・オージェでもいい——を見つけたら、一メートル立方ほどの軟かい石膏をそれぞれ用意し、その上に一人一人、裸で腰を下ろしてもらえば

いい。この肉体のスタンプで、たちまち美しい半球型の母型ができあがる。その型へ生ゴムを流し込めば、実物と寸分ちがわらないサイズと、肌理と、しかも生ゴム独特の弾力を持った美腎が完成。それを狩猟家が獲物の頭部を飾るように壁に固定すればいいのだ。もちろん、それぞれの持主の名を記さなければならぬ。

この複製の最大の利点は、「美腎」を全体の一部として見る実物のわずらわしさがなくことだ。実物では、他の部位、ことに見なくてもよいもの、見たくないものまでが観賞者の目を惑わせ、不安定にする。とりわけ陰部は私を幻滅させる。だが、いま数百の美腎はそれそのものの美しさと静けさで、心ゆくまで観賞の時間を与えてくれる。

さらにライトの明暗、強弱、色彩、アングルの変化によって、それらはまさに無限の表情と媚態を示し、観賞者を居ながらに夢幻の世界に引き込むだろう。

B ヴィナスとオダリスク

有名な「ミロのヴィナス」を、私は好まない。あまりにも均整がとれすぎていることと腎部が、そっくり隠されてしまっているから

だ。正直のところ、私にとって「腎の見えない」女体など観賞の対象にならない。「腎なく何の己れが女体かな」だ。同じヴィナスなら「メデイチのヴィナス」や「キレネのヴィナス」の方が、全裸というだけで私にとっては数段、美しい。だが、本当に好きなのは「うずくまるヴィナス」だ。これは同名のものが幾つも残っているが、ルーブル所蔵の背中に小さなエロスの手がある、あれだ。あの特に誇張された豊かな肉づきと、殆んど球体に近い丸みを持った曲線の緊張した量感、私の胸をしめつける。この像は極端に言えば腎部の肉感だけで存在している。頭も乳房も必要としない。それはむしろ余計な付加物だ。ヘレニスティック時代に「美しい尻のヴィナス」というのがあるけれども、これにしても「うずくまるヴィナス」の圧倒的な充実感には遥かに及ばない。

絵画では、ヴェラスケスの「ヴィナスとキューピッド」リューベンスの「化粧するヴィナス」ワトーの「パリスの審判」ブーシェの「オダリスク」ドラクロワの「サルダパールの虐殺」——これらを私が愛するもの、その画面の真正面から美腎が語りかけて来るからだ。

殊にブーシェの「オダリスク」——下半身をあられもなくむき出し、うっとりベッドに腹這いになった貴婦人の、V字にやわらかく投げ出した両脚をさかのぼると、羽二重を張りつめたような豊かな、しかもしなやかな弾力を感じさせる白い双丘——これは女性の凡ての美しさを腎部に集約した、というより腎部そのものを描くために制作された作品としか思われぬ。たとえ、それが複製であろうが写真であろうが、一瞥たちまち、その美腎のすべてを接吻で覆いたい狂的な衝動に馳られずにはいられない。眼を閉じれば、生々としたオダリスクの美腎はいつも私の前にある。しかし、その顔や他の部分にいたってはいくら努力しても思い出せないのだ。

腎だけの女体は存在するが、腎のない女体は存在しない。

C 美貌は短く美腎は永し

『腎』——デン——この豊かな響きと舌ざわり、それはあの白くふくよかな肉づきと弾力を備えた美しい球体を表現するのに、まさにふさわしい語感を有している。それに反して『尻』——コウ——この即物的な冷たい響きと平面的な字づら、そこには柔らかな味も丸み

も感じられない。元来この字は、単に部位を示す言葉で、大字典によれば「脊骨の尽くる処、肛門の上也」とある。同じ大字典にも、「腎」は「シリコブタ也、キシキのこと」とあり、はっきり双つの肉づきを指している。『腎』には温い血が流れているのだ。

モウパッサンは、いみじくも『脂肪の塊』という語を用いた。この言葉を援用して「女は脂肪の塊である。さらにその脂肪の集約されたのが腎部である。したがって女とは腎部である」という論法は、あまりにも我デン引水であろうか。

美しい容色も数年を経ずして色褪せ、見事な乳房も遠からず変貌する。その肉体的寿命において腎部ほど永く原型をとどめ得るものが他にあらうか。脂肪そのものである腎部には、他の部位のような急速な衰えは来ない。花が散ってしまえば、残るのは腎部だけだ。腎部こそ女性の本質であり、女性そのものである。しかも、腎部は例外なく美しい。むしろ程度の差はある。だが、顔の美しくない女性があっても、腎部の美しくない女性はいない。腎部の美しさは、他の美醜とは関係なくそれそのものとして独自に存在する。

腎の貧しい美女より、腎の美しい醜女をこ

そ私は選ぶ。美貌は短く、美臀は永いから。

D わが導師サド

ミス・ユニバースの審査員が持つ基準図六項目の三番目に、『ヒップの大きすぎるものは不可』というのがあるが、私だったら、その三番目の規準にはずれた女性だけを集めて讚腎カーニバルを開きたいところだ。臀部が女性の美しさの集約である以上、臀部の大きさを規準にはずれたということは、とりもなおさず女性の美しさを規準以上に備えているということではないか。鑄型のような規準から機械的にはじき出された八頭身などという規格品より、どれほど私にとって素晴らしいことであろう。多かれ少なかれ芸術とは誇張である。その美しさを誇張し、あるいは抽象しあるいは象徴化して、最大限に表現するところに芸術が生まれる。

私の知る限りで、女性の臀部の美しさを取り上げ、力説した最大の人物はマルキ・ド・サドである。

彼は作品に登場する女性像の描写に、何を措いても「臀部のありさま」を述べなければならなかった。それは一種の宿命のようにさえ感じられる。女性を表現するのに、その

美貌を讃え、肢体の美しさを描くのは小説の常道だが、そのつど執拗なまでに臀部の委曲を尽くすというのはサドのほかにはいない。

彼がいかに女性の臀部に憑かれていたか容易に想像ができると同時に、女性の美しさの中に占める臀部の地位を、彼ほど深く体得していた人物も、そうざらにはいないことを知るのである。

私にとって、サドは教祖であり、導師である。

E 崇腎狂、登仙の図

崇腎狂——だから人は、私をマゾヒストと考えるらしい。だが私は、巨大な白い肉塊に押しひしがれること自体に喜びを感じるということはない。むしろ、そういうM的姿勢も時に応じてあり得る。が、多くの場合、その逆である。無理な姿勢、困難な恰好、時にアクロバットのようなポーズで呻き、悲鳴をあげるのは、私の心からの愛撫を受ける側である。なぜなら、この場合、私は女性を全体として感じてはいない。女性は臀部そのものとしてしか存在しない。愛撫の過程にある私には、臀部以外は無である。

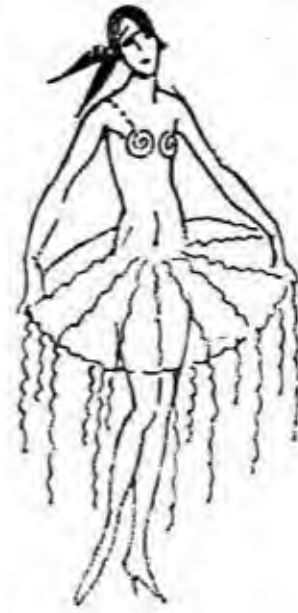
だから、私の愛の対象である臀部以外の部

分で、相手がどんなポーズをとっているか、私は殆ど考えたことがない。私の両手は一個の球体を自由自在に扱い、掌と唇と舌を駆使して、思うままにするだけである。相手が頸の筋を違えたり、肩を脱臼したりというのはこの時点では全く私の意識の外にあるのだ。とにかく私にとっては臀部以外の肉体は余計ものであり、本当は無いに越したことはないのだ。だから時には、余計な部分を縛ることもある。手足をまとめて荷物みたいに雁字搦目にしたりするが、これはあくまで臀部強調の手段で、緊縛趣味とは別のものだ。

においが、私のリビドーを側面から援助する。それは唾液と、臀部から噴き出す汗と、わずかに直腸の分泌物のにおいとが混淆したものだ。だが、やはりリビドー全体を支配するのは視覚と触覚である。相手が臀部だけの存在であるように、私自身も、目と掌と唇と舌だけの生き物になる。時には歯を用いることもあるが、歯列矯正で前歯を全部プラスチックにした私にとって、これはさほどの感激をあたえない。今更ながら自分の歯がほしいと思う。

(未完)

体験告白



わが異常なる性癖

麻曾比須人

いつごろから、世にいう Scatology という性癖が、私の心の中に芽生えたのかさだかでない。けれども、それを実行にうつした時のことは、はっきりおぼえている。それはいまから二十数年も前のことである。そのころ私は東京S区にあった知人宅に下宿し、大学予備校へ通っていた。戦争も末期で、食糧事情も悪く、毎日、いもや、大豆を食べて飢えをしのぐといった有様で、勉強などほとんど手につかなかった。

その下宿の娘さんの友達にA子さんというすばらしい美人がおり、時々下宿の家へ遊びに来た。やや小柄なからだだが、目のぱっち

りした、どこかつめたい感じのするAさんには私は強くひきつけられた。といっても、むこうは、私より三つも年上。しかも、こちらは、予備校へ通っている浪人であつては、所詮、高嶺の花でしかなかった。

そのAさんが、近く海軍中尉と結婚することになったとかで、下宿先の娘さんのところへ訪れた時のことだった。しばらく話をしていたAさんがトイレに立ったのを、隣の部屋に居た私は障子の陰から見送って、心臓が激しく高鳴った。(ああ、あんな美しい人でもやはりトイレへゆくんだ...)と思うと、急にブルブルとからだの震えるのを覚えた。

(どうか、長い方でありますように...)私の祈りが通じたのか、七、八分たって、ようやく彼女は帰って来た。(さあ、いまだ。早くはいるんだ...)という声と、(すぐはいって怪しまれる...)という声がかかるがわる聞こえてくる。(いや、どう思われたってかまわない、こんなチャンスがそう度々あるものじゃない)遂に意を決して、私は立ち上がり、ふるえる足を踏みしめてトイレの戸を開いた。そぞろな想いで、のぞき込む眼に、お目当のものがとびこんできた。前後の見境もなく私は、チリ紙を一枚手にすると、思い切り手をのばした。すくい上げたそれに鼻を寄せたが不思議に、あの特有のにおいは全然ない——今にして思えば、便所の中にいたことと、極度に緊張していたためだと思ふのだが——

(ああ、これが彼女の体内を通ったものだ)と思うと不潔感どころではない。私は感激にふるえた。

ちよつと苦いような、なんとも形容のできない味をグツと嚥下したとたんに、失神するような戦慄が背筋を走った。

それから、私の Scatology への傾斜は、日に増して急速に強くなつていったが、どこにもころがっているものでありながら、仲々チャンスに恵まれることはなかった。固体の方は、まだ何とか手に入ることもあったが、液体の方は、ほとんど入手は不可能であった。

考え抜いた末に、姉の友達のB子さんの液体を、直後に走り込んで辛うじて脱脂綿に吸い込ませ、そのわずかなしずくを得て、自分を慰めたこともあった。

しかし、この傾向を持つ人ならわかってもらえと思うが、誰のものでもよいというものではない。夫々に好みがあるわけで、私の場合も、相手は先ず、絶対美人でなくては困る。それもあいきょうがあるより、ツンとすまして気位が高く冷淡な態度が必要なのだ。だから、その機会は、非常に少ないわけである。

その淋しさをまぎらすためか、いつしか私は自分で自分に対する愛撫と虐待を行なうようになった。その方法も普通のやり方ではなく自身のそれに口紅を塗ったり、絵の具で彩色したりして、鏡に写して満足するといったものであった。さらに、その様子をセルフタイマーで撮影したりして楽しんだ。

また虐待では、こんな方法を考案した。昔の雑誌によく広告の出ていた真空治療器という名前を知っておられる方は多いと思う。私は牛乳びんを応用して、自らを責めた。くわしい方法は、ちょっと書けないが、牛乳びんの中の空気を、細いビニールパイプで抜くだけのことだった。しかし真空の作用は馬鹿に足らない効果をもたらし、私はその考案に満足しながら、しめつけられるような痛さに耐

えることに悦びを見出だしていた。

このほか、ビニールパイプで、自製のカタールを作って、尿道を刺激したり、排尿を試みたりもした。しかし、排尿の方は異物感が強くて痛みが激しく、遂に一度も成功しなかった。また、独身であったそのころ、一番好んだ方法としては、次のようなことを実行した。

グラフ雑誌の表紙などを飾る実物大の女性の顔写真を幾枚か見つけ出し、これに厚紙をはりつけて目玉だけをくりぬき耳のところに輪ゴムをとりつける。用意はこれだけ。それを仮面のように自分の顔につけ、鏡の前で我が身を写すのである。全裸になり、あるいはスカートのストッキングをつけ、さまざまな姿勢をとるだけのタワイのないことなのだが私自身の心中では、その女性を犯しているような、また逆に、その女性から犯されているような錯覚に没入できて、昂奮は異常に高まるのである。勿論オナニーの援けは必要だがこのような方法をとってこそ、その雰囲気味わえたのであった。

おそらく、こんな奇妙な性癖を持った人間は、そう多くはいないだろうと私なりに考えている。

結婚後しばらくは、妻と正常な生活を持ち私の異常な性癖は直ったかに見えたが、妻はあまりにも正常すぎて、日を経るに従いだん

だんと味気なくなり、興味がうすれてゆくばかりであった。やはり、おさないころから芽生えていた私のM的傾向はそう簡単にどうにかなるものではないらしく、時々噴火山のように、平静な心の表面を食い破って噴き出してくるのである。

現在の私の望みとしては、やはり『読者通信』に寄せられている『東区の女王』のような、S傾向の強い女性に奉仕し、虐待され、いじめられることができれば、ということである。

こんな願望が、日増しに強くなってゆくのを、どうしようもないのだ。それと同時に、宇能氏の小説で読んだ、ナイロンの妻へのあこがれである。女体と同じ形をしたナイロン製の妻を抱いて狂喜する男性の異常さが、私の心の中に宿っているようだ。そして、その人形に、首をはさまれ、顔面に騎乗された姿を鏡に写し出し、無理に自慰を強要される姿を想像するのが、現在、最も刺激的な空想なのである。

人生五十年、いつかこの空想を実現したいという思いは強いのであるが、家庭もあり、子供もある身とあって、この願望は終生、遂げられることなく一生を終ってしまうのではないかとも思う。

—おわり—

レンズの中の女

十

人

十

色

第二話 ひさ子の巻

泉 野 薫

「Y君を御紹介します。小生の旧友で、その道の好き者です。いやらしい事を要求するかもしれませんが、眼をつぶってきいてやってください」

名刺の裏に、ボールペンで達筆に書いてある。

この名刺を書いた紹介者は、かねがねいろんなこととお世話になっている、風俗研究家のT先生である。

この紹介状を持った訪問客というのは、年

の頃は、もう六十を出ていよう。中肉中背、一見紳士風だが、ポツテリとした赤い唇が、いかにも好色そうで、金のありそうな身だしなみの良さを裏切っている。

が、私の興味はこんな好色紳士の方にはなく、その傍につつましく和服の膝に手を置いて固くなっている、連れの方の方であった。年令は二十五、六というところか、水商売でないことは確実だが、かといって妾とは思えない上品さがある。

この紳士の妻——？ まさか。

他人の妻——？ なら、面白い組み合わせ

だ。

こんなことを思いながら、もっともらしい顔付きで紳士と向かい合っている私は、チラリチラリと、その女の方に視線を走らせざるを得ない。

書きおくれたが、女は勿論、美貌である。それも私ごのみの純和風の美人だ。地味なつくりの中から、上品な色気がふくいくとただよっている感じである。古風な茶室にでも坐らせたら、そのままで素晴らしい絵になるだろうと思う。

女は、部屋に入ってきてから眼を伏せたき



りで、これ見よがしにベタベタと壁に張りつけてある公開不可能のヌード写真に眼もくれない。そろった長い睫毛が、やや緊張した頬に影を落としているのが、私の情感を甘くくすぐる。

こんな観察を、鼻の下を伸ばして長々とやっていたわけではなく、そこは写真家の鋭い眼で（フン、ショットテルゾ）一瞥のうちに見て取ったのである。

さてと職業人たる調子で、私は眼の前にいるY氏に顔を向けた。

「どのようなことを、お望みでしょうか。まずそれを聞いておかねばなりません」

「これの（と言って、あごを女の方にしゃくった）写真を撮ってもらいたいんじゃない。T君の話によると、あんたはこの種の（と言って今度はズラリと並んでいるヌード写真を指さした）写真では、本邦で一、二を争う腕だそうだな」

本邦とはチトオーバーだと思ったが、悪い気はしない。それに、その腕を揮う必要上、このシトヤカ美人を裸にできると思うと、ゾクゾクしてくる。

「それだけの事でしたら、よろこんでお引き受け致します」

それだけのこと——とわざわざ言っただけのは、このY紳士、それだけのことで済む筈はないとニラんだからである。T先生だって、それだけのことで、わざわざ私を紹介する筈がない。

案の定、「実は……」と、柄にもなく照れてY氏が口を開いた。

「T君の話だと、あんたは、その、縛り写真の方もやっておられるとか……いや、T君からの話を聞くまでもなく、雑誌で写真を見たことがあって、お名前は以前から承知しておったのじゃ」

「ははあ……」

あいまいな返事をしながら、私は傍らの女にチラと眼をやった。こころなしか、さっきからみると、頬がかすかに上気しているようである。

「御承知いただけるかな？」

「あまりそのような事はやってはいないんですが、T先生の御紹介もある事ですから、御引き受け致しますよう」

私は、はやる心をかくして、もったいをつけた。

「ただし、ひとつだけ条件があります」

「なんだな」

Y氏は、ちょっと警戒の眼つきになった。

「出来た写真を発表することを許していただきたいのです。勿論、奥様のお顔が出るようなことはしません」

奥様と言われたとき、女はかすかに身じろぎした様子だった。

「ふむ……」

Y氏は考え込んだ。

「それはどうかな……もともと、芸術家として、ひさ子を見込んで……ということなのだろうが……ひさ子、どうだ」

私は息をつめて返事を待った。ここで「イヤヨ」と言われれば、私のとっさに湧き上ってきた夢のひとつはハカなく消えることになる。まだ裸にもしない前から、私はそれほどこのひさ子という女に惚れ込んでしまっていたのだ。

その気持を知るや知らずや、ひさ子は、膝の上で白くしなやかな指を組んだりほぐしたりして、モジモジしている。

「どうするね、わしは別にかまわんが……お前の姿が芸術写真になって、展覧会場を飾るところを見たくもあるしな……」

女を縛っていやらしい事をするのが好きなクセに、言葉使いのいやに優しいのが妙にそ

ぐわない。

「あなたさえおよろしければ……」

ようやくという感じで、彼女は真っ赤になって蚊の鳴くように言った。

「ありがたいッ」

私は思わず大声をあげた。

「傑作を撮ってごらんに入れますよ」

「はっはは。これはこれは……。T君から聞いてはいたが、あんたも女を縛ることに眼がないようじゃな」

神聖なる芸術的興奮を、こんなふうを受け取られて、私はガックリとなってしまった。もっとも、そんな気持が全然ない、と神に誓うことはできないが――

趣味が一致したということで、Y氏は気が楽になったらしい。壁の写真を眺めまわしながら言った。

「芸術写真もいいが、あんなふうに、からだのどこを写したのかわからんようなのはどうかな。どんな肌の美しい女でも、ああクロージアップされたんでは、毛孔まで見えて、月の表面みたいになってしまふじゃろう」

「いや、こんなのばかり撮っているわけじゃない。奥さんの美しさを最大限に生かすようにしましょう」

「うん、うん」

私が「奥さん」と言うたびに、女の方は居心地悪そうにするのだが、男の方はいっこうに平気である。そこらへんのところがどうも気に入らなかった。

二

アトリエに入ると、Y氏はまっさきにベッドに眼を止めて、物問いたげな瞳を私の方に向けた。

「眼ざわりなら、たたみますよ」

「いや、いい。用意周到だな」

おやじの頬に探るような笑みの皺がよる。言いわけするのはシャクだが、客となれば言わざるを得ない。

「ヌードにベッドは付き物なんで、ぼくが寝るのをそのままにしてあるんです」

「女は縛られると気分を出しよるから、そんな時にも都合がよからう」

失敬なことをヌケヌケと言う。腹が立つほど、こちらもカタブツではないから、負けずに言い返してやった。

「経験がおありのようですね」

「察しの通りじゃ。この経験は一度味を覚えたと忘れられんどのう。たぶん女も同じこと

と思うが」

「そうですね。だとすれば、ぼくなんか、家じゅう女どもが殺到して来て、身動きならん事になっている筈ですがね」

「フフ、面白いことを言う」

女は手洗に立って居なかった。Y氏は私がライトやカメラの用意をととのえている間、そこらあたりをうろついて、しきりに鼻を鳴らしている。

「ロープか紐は用意なさっていますか」

好事家には、これではなければという愛用のものがあるものである。

「いや、適当なのでやってくれ」

「何がお好みです」

「普通でいい。綿ロープか何かだな。家ではしごきなんかを使っているが、しごきでは写真のうつりがどうかな」

このじいさん、案外良く知っている。その方面の写真など集めて、研究しているのかもしれない。

女が入って来た。

「あそこのスクリーンの後ろで脱いでください。まずヌードだけでいきましょう」

まずコスチュームで縛ってくれ――と言うかと思ったら、じいさんは黙っていた。もう

あぶな絵的なものを愛好する段階は通り越えたものとみた。とすれば、その後に来るものは——じいさんの好きそうな顔つきからしておよその想像はつく。何だか気が重くなってきた。

「きみ、ちょっと座をはずしてくれんか」

だしぬけに言われて、驚いた。

「スクリーンの陰に入れば、何も見えませんよ……」

それに、どうせ見せるもんじゃありませんか——と言おうとして止めた。

「これとちよっと話があるんでな」

「わかりました」

プライベートな話とあれば致し方ない。それにしても、今頃から口説きにかかろうというんだらうか。だとすると、折角の夢が消えさることもあり得る……。居間に来ても、アトリエのことが気にかかってしようがなかった。

ボソボソとじいさんが何かしゃべっているのが聞こえる。それがフツと止んで沈黙があとずれると、かえって妙な妄想が起こってイライラしてくる。

パタリ——と重いものが、床に落ちる音がかすかにした。よかった。いよいよ脱ぎ始め

たらしい。

あのタイプの美しい女が着物を脱いでゆくところは、さぞなまめかしいもんだらうな——と、何となく悩ましい気分ひたっているさい中に、ふと気がついた。

（そうか。あのじいさん、女の脱ぐところをひとりでゆっくりと楽しみたかったのかもしれないぞ……）

女房の脱ぐところなんか、家で腹一杯見ている筈なのだが、やはり場所が変わると気分も変わるのだろう。古女房もホテルへ連れ込んで見ると、なんとなく艶めかしく眼に映るということだから、そうだとすれば私なんか何十人も美女のヌードを見たけれど、いつだって同じ道具立ての中で見ているわけだから、つまらない……。いや、道具は変わらないが、モデルが変わるから、いいわけか……

つまらないことを考えているうちに、大分時間がたった。今頃はもう襦袢も脱いだ頃だから、腰のもの一枚で羞じらっているやつを抱きすくめているかもしれん——などと思ったりする。いやがるのをおどしつけて、腰巻の紐を解いているのかもしれない……

「やあ、お待たせした。かかってください」
ドアからのぞいたじいさんの唇に紅のあと

でもついていないかと、気を回してよく見たが、それらしい形跡はなかった。ただ、心なしか、しわんだ顔に赤味がさしているような気もする。

アトリエに入ると、女はスクリーンの前に胸を抱いてしゃがみ込んでいた。勿論、身には一糸もまとってはいない。そのまわりに帯紐や衣類が乱れ落ちていたのが、なまめかしい。

「ああやっているところで、一枚撮っておいてくれんかな」

じいさんも私同様、そんな女の羞じらった姿に心を動かされたらしい。

女の斜め前にカメラをセットした。抱いた胸のふくらみの裾が腕の陰からのぞいているのと、しゃがんだために誇張されて見える腰からヒップの線を入れるためである。

女の肌は想像していた通り、抜けるように白く、なめらかな光沢がある。結いあげた豊かな黒髪に、斜めに珊瑚のかんざしがさしてあるのが、いいコントラストを示している。勿論、カラーで撮った。

「じゃ、スクリーンの前に立ってください。二、三枚撮ります」

女はおずおずと顔をあげて、救いを求める

ように、Y氏の顔を見た。

「言われた通りにしなさい」

それでも、モジモジしている。

「御主人がいらっしやらない方が、かえって気楽なんじゃないでしょうか」

私もそれが望む所なので言ってみた。が、

「いや、わしはここに居させてもらう。さあひさ子、手こずらせないで」

やっと決心したらしい女は、胸と前をおさえて、なよなよとスクリーンの前に立つ。顔をやや斜めに向けて、うなだれる。

「そう、そのまま……」

羞じらいの見本のような写真ができることだろう。私は、やや胸長ながらだであるために、ますます日本調のムードを盛り上げてゆくその姿態に、これまでのモデルに感じたことのない意欲をそそられ始めていた。

いわば、ひさ子というこの女は、男のおもちゃになるために作られたような女だったのである。

三

縛り美人、と私がひそかに呼んでいる種類の女がいる。これは容貌の美醜とは無関係に（といっても美人であるに越したことはない

が）縛られることによって、一段と魅力が加わるたぐいの女である、

まず、骨細そでなよなよとしていなければならぬ。次に肌が白く、いわゆる餅肌が最高。なで肩、やや垂れ尻、等が条件として満たされていなくてはならぬ。

いくらフェイスが美しくても、骨張った大柄な女は、縛ってみても、アツケラカンとして少しも興味がわいてこないものである。その意味で、西洋の女などというのは縛るに適さない。彼女らには、やはり鉄と鎖の手枷、足枷が似合いであろう。それぞれの民族は、その体質に合った文明を作り出す、というのは、この面においても証明される。

体つきに加えて、縛り美人に大切なのは、多少のマゾ気である。縛られても「イタイ、イタイ」ばかり並べていたり、「ナントモナイワヨ」といった顔をしておられたんでは、なんとも興ざめで、撮る方も熱がこもってこない。レンズが曇るほど、こちらがカッカとなる縛り美人は、やはり縛られることによって、じわじわと情感を全身から匂いたたせるのでなくてはならない。甘いうらみと羞恥とやるせない心の高ぶり——これらがミックスしたものを全身からにじみ出させる女でなく

てはならないのである。

そういう点で、ひさ子は——と他人の女を呼びすてにするのはなんだが、名前を呼ばないと気分が出ないので、今後そう呼ぶことにする——完璧といってよかった。

私は、この得がたいひさ子という女を前にして、おもちゃにされる女としての哀しさをトコトンまで追求してみたいという欲求を、勃然と感じたのである。そしてその強烈な欲求は、ひさ子が私に命じられるままに、おずおずとさしうつむいたまま私の方に寄って来る姿を見た時、ほとんど眼まいを感じるまでに高まっていた。

ひさ子は無駄毛ひとすじ残さず脱毛されていたのである。

Y氏が剃刀を取るのか、ひさ子自身が命じられるままに、みずからその作業を行なうのかは知らないが、いずれにしろ、これこそ所有されている女の完璧なあかしではないか。

ひさ子がこれまであれ程羞しがっていた理由が、はじめてわかったような気がした。

「いいですね、奥さん」

私は、つとめてさりげなく覚悟を促した。

「はい……」

「じゃ、手をうしろにまわしてください。き

「つかっただらおっしゃってくださいよ」

と言ったのは儀礼で、いくら痛いと言って拒んでも、思う通りに縛るつもりだった。

ほっそりした手首が後ろにまわされ、腰のえくぼの辺りに、つましく交叉された。

私は手なれたロープで手首を縛りあげた。

その縄尻をグイと上に引きしぼって手首を吊り上げておいて、胸にまわす。縄をあやつる手がどうしても、ふっくらと息づいている乳房に触れる。ひさ子のハッと息をのむのがわかったが、かまわず、掴み上げるようにしてその下にロープをまわす。

いったん胸にまわしたロープをうしろで留め、それを今度は肩を越して前にまわし、胸のロープに通して、腰にひと巻きする。それで最初の縛りは我慢することにした。よっぽど縦にまわして、縄で縦断された彼女を撮りたかったのだが……。

ひさ子は頬からうなじにかけてを、ポツと上気させてうなだれ、喘ぎ始めている。そんな様子でベッドの上に横ずわりになった所を前後左右から撮りまくった。

「どうも御主人が見ておられると、気がひけますね」

ファインダーをのぞきながら、私は思って

いることを冗談めかして言って見た。

「なにも遠慮せんでいい」

しわがれ声でY氏は答える。

「そうおっしゃられても、どうもダメなんですよ。腫れ物にさわるような気持ちになってしまふんです」

「好きなようにやりたまえ。わしのことはアカの他人の見物人と思ってくれてかまわん」キッパリと言った。言いながらも、光を増しはじめた眼は、ベッドの上でもじもじしている、ひさ子から片時も離さない。

「じゃ、やりますよ。菱縄の股間縛りというやつがやりたいんですが……」

「うん、いいだろう。あれも好きな縛り方だしな」

「あなた、こんな所で、それだけは……」

不意に、ひさ子が顔をあげて訴えた。

「こんな所でとは、泉野くんに失礼だぞ」

「でも……」

「股間縛りにされた時のお前が一番、美しいことは、わしがよく知っておる。初対面でそのことを見抜いた泉野くんは、やはりその道のベテランじゃ。あんた、遠慮はいらん、ビシビシやりなさい。それがすんだら、あぐら縛りも悪くないぞ」

「あなた、おゆるしになって……おねがい」

真っ赤になった顔をあげ、後ろ手に縛られた上体を、すねているように左右にゆすっている風情は、ひとり者の私には、とてもドクな眺めである。腹いせにそんな所を、す早くスナップしてやった。

どれだけ哀訴しても聞き入れられないと知ると、ひさ子はうなだれて、そこに突っ伏してしまった。全身から匂いはじめた消え入りたげな羞恥の色——これこそ私がとらえようとしていたものではないか！

四

いったんいましめを解いてから、私は丁寧に菱縄をかけていった。

もう何も遠慮することためらうこともいかなかった。たとえY氏の許可がなくても、私はY氏の眼のあることを忘れて、つかみかかっていったかもしれないような興奮状態にとりつかれていたのである。

「いや……いやです……」

ほとんど聞こえないくらいの声をあげながらも、ひさ子はグッタリと身を任せている。肌全体がしっとり汗ばんで絨のような輝きを帯びはじめている。ロープのすべりがすごく

いい。

キッチリ菱形に組んだロープの間でゆがんでいる乳房の形をととのえる。薄紅をばかした小豆粒ほどの頂点が上向きになるように乳房の姿を加減する。

ひさ子は歯を食いしばって思わずもれそうになる溜息をこらえている。ほつれかかった髪の毛が、色づいたうなじや頬にもつれかかって、眼くらめくばかりの艶めかしさだ。

いくらY氏の眼を意識しなくなったとはいえ、そのうなじにキスすることだけは、やはり思いとどまらざるを得なかった。

「さあ、膝を少し楽にして……」

私は二筋のロープをより合わせながら命じ

る。

「それだけは……お願いですから……」
ふるいつきたい程のまなざしが、私を見上げる。

「御主人のお望みですよ」

(ウソツケ)

「でも……でも……はずかしい……」

「さあ……」

もう意馬心猿である。たかだかとくくし上げた後ろ手のあたりを掴んで仰向けに押し倒した。

「あっ……いやっ。あなたっ、おねがい……」

膝を縮こめて転がり逃げようとするのを、無理やりに縄がけして、グイと引き締める。

「ヒイーツ……」

弓なりにのけぞった。

ああ、このシーンを撮れないとは……じじいめ、私に汗をかかせておいて、ひとりこの素晴らしいシーンを楽しんでいやがる。

縛ることは楽しい。しかし、女が縛られ悶えているのを第三者の立場から眺めているのは更に楽しいことではないだろうか？ 少なくとも、縛るといふ重労働に気を奪われることもなく、感覚を「見る」と「聞く」の二点に集中して快楽に沈潜することができるのだから……。

縄を留め終って立ち上った私は、汗を拭うヒマもなくカメラの傍に走った。

テキが激情の喘ぎから醒めきらないところを撮らねばならない。

ファインダーをのぞくと、やはりそこはプロ。職業意識が働いて、興奮は急速に退潮して行く。照明を案配し、角度を考えて撮ってゆく。シーンとした集中の中に我が身をひたすことは、やはり楽しい。快楽とは違った、いわば生きていることを実感できる楽しさ――

――といえばオーバーになるだろうか。

「顔を上げて……そのまま、うつむいちゃいけませんよ。膝をもっと締めてください。そう、不法者に責められて、もじもじとそれに耐えている感じ。膝をよじるようにして……あ、顔を伏せちゃダメッ。そう、はい……」

「ふむ、なかなかやるのう」

Y氏まで私の集中に魅きつけられたのか、しきりに感心している。私がY氏の存在を本当に気にしないようになったのは、おそらくこの頃からだったろう。

ひさ子は汗びっしょりになり、桜色に色づいた肌が強いライトにテラテラ輝いている。あまりこれが強過ぎると、私の求めている効果が出ないので、タオルで拭いてやった。

「すみません……」

蚊の鳴くように、ひさ子は言った。今更、これは、あなたのためではないですよ、とも言えず、

「いやあ、お疲れでしょう。もうすぐ、すませますから」

と言葉をにごしておく。ついでに

「あぐら、いいですか？」

「そんなこと……」

口ごもって顔をそむける。

「そんなこと、あたしの口から言わせるおつもり？」——と言いたかったのだろうと、都合のいいように解釈した。

私は、ほとんど悪魔のような残忍な好奇心をもって、別のロープで、ほっそりとした足首を交叉するように縛って行った。

「ああ……」

吐息とも呻きともつかない声をあげて、ひさは頭を振っている。時折、私の手の動きに走らせる視線の凄艶さときたら、魂も浮きたつかと思わせるばかりだ。

足首をくくったロープを引き絞った。

「いや、いやです……」

悲鳴をあげて仰向けに倒れる。その体の上に足首を押しつけてゆくと、膝がどうしようもなく左右に割れる。

「ゆるしてっ。く、くるしいの……」

ねっとりからみつくような視線を、間近かに迫る私に向けて、唇をふるわせる。なんだかオツな気分になってしまいそうだ。

絞ったロープを肩から背中にまわし、後ろ手の所で留める。ゆるいあぐら縛りである。

ひさは、さして苦しくはない筈だ。

「仰向けになったままのを是非たのむよ」
せっぱつまった声が背後でした。Y氏もい

よいよ、黙って見てはおれない気分になったらしい。

「あなた。そんなの、そんなのいや。ね、泉野さん、おねがいよ……」

そんなおねがいは願い下げにして、私はカメラに走る。

ロープに喰いしめられている清らかな柔肌のクローズアップ。次いで、のけぞった表情とを入れて数枚。ロープをしめらせているしとどな汗の玉がうまく写ってくれるように、そればかりを念じてシャッターを押し続けた。

ひさはもう羞恥の極にグッタリとなっている。そのくせ、重たげに伏せた睫の陰には燃えさかった瞳をかくしているのだ。

ひさを引き越こし、髪を整え、少し汗を拭いてから、また何枚か撮った。しかし、どうも表情が気に入らない。苦痛と羞恥と恍惚が入り混った表情がどうもうまくあらわれてこない。羞恥が強過ぎて、恍惚が押しかくされ勝ちになってしまうのだ。

かといって、Y氏に愛撫されているところなどは、どうしてもシャシンにならないだろう。とつおいつ考えている間に、ふと良い考えが浮かんだ。

いたずらな友人が貸してくれたテープがあるのを思い出したのだ。あれを聞かせれば……音は写真にはうつらないから……これは名案だ。

「テープをかけますが、聞きたくなかったら耳にセンをしていてください」

「ムードミュージックかい。そりゃあいい」
耳にセンをするどころか、Y氏は耳カキがほしそうな顔になった。

周囲を暗くし、照明は、ひさ子の肌の起伏を強調するように、ひとつにしばった。テープがまわりはじめる。例の声音が暗いアトリエを、ひそやかに満たしはじめる。

「あ」

ひさが小さく叫んで体を緊張させた。

「いや、こんなもの聞かせないで……ああ、いや、いや、いやッ……」

狂ったように頭を振る。いやがすることはとりもおさず、それがどんな効果を我が身に与えるか、よく知っているということだ。

私はファインダーの狭い視野の中で、身悶え続ける、ひさ子のからだを凝視し続けた。あぐらを組まれた膝がガクガクふるえている。平べったく押しつぶされた尻が悩ましげにくねっている。くびれた胴がよじれ、し

ぼり上げられた乳房が菱縄の梓組の中で激しく喘いでいる。

「ああっ……」

不意にひさ子は燃え立つような頬を上向きにして、うつろな、それでいて何かを求めている瞳をあげた。

「今だっ」

私は夢中でシャッターを押す。

それがはじまりであった。後は幾枚とも知れぬ連続撮影になった。八ミリがあればどんなによかったろう——と思う。

ひさ子は、もう何もみていない。悩ましげなテープのさざめきに包まれて、我が身を果てしなく燃えあがらせているのだ。

「ねえ、あなた……いらして……」

ほとんど無意識のうちに出了言葉だったのだろう。それだけに、そのまなざしの妖艶さ姿勢のなまめかしさは、今度の仕事の棹尾を飾るのに、ふさわしいものであった。

テープは、まだ続いている。しかし、もうそんな安っぽい擬音などクソクラエだ。そろそろレンズの曇りが気になりかけたところ、Y氏が私の肩をたたいた。

「きみ、ちょっと席をはずしてくれんか」

五

一時間後、さすがのY氏もいささか面映ゆげに、ひさ子にいたっては、ほとんど挨拶もそこそこにY氏の陰にかくれるようにして帰って行っただけ、私の興奮は容易におさまらなかった。やり場のないいらだちをおさえかねて、ウイスキーを、やたらとおおった。

考えて見てください。一時間近くも、隣室からもれてくる、まがましい物音や声音を聞いていなくては、ならなかったのですよ。

しかも、その直前まで、女の尋常ならざる変化の態をこの眼で見ていたのです。脳裡に焼きついていくその姿と、今耳に聞こえてくる物音とを結びつけて、妄想に責めさいなまれることを、あなたは「あさましい」と言って非難なさいますか？

もともと安普請のアパートのことだから、壁越しにちょっと大きな物音は聞き取れる。私がスゴスゴとアトリエを後にしてから、そこに行なわれたであろうことは、たとえ音が聞こえなくても想像されるのに、それを裏付け証明するような気配が、隣室に気がねするなんてことを忘れたように、聞こえて来たのである。

なんだか、指をくわえて引っ込んでいなくてはならない私ひとりが、バカを見たような気持ちにさえなった。

（どうせ金にあかして誘惑した人妻か妾だろう。それなら、おれが手を出したって文句はないはずだ）

と不逞なことまで考えた。実際、あんなじいさんに、あれ程の美女を思うままにさせておくことが、とても不当なことのように思えたのである。

（おれだったら……）

女をよろこばせるのには自信がある。おまけに女にM気があるとすれば、誘惑することはイトたやすいようにも思える。

はじめのうち、誰かなじみの女の子を呼び寄せて、このムシクシを思い切りブチカマしてやろうかと思いついたのだが、いやいや、そんな事をして今脳裡にコビリついていく、ひさ子の印象をゆがめてしまうのは愚だと思い返し、ひさ子を誘惑することを真剣に考えはじめた。

おそらく半分は酔いのなせるわざだったろう。大胆にも、Y氏を紹介してくれたT先生に電話で、ひさ子とY氏との関係を問いただしたものである。

「レッキとした夫婦だよ」

Y先生の返事は、まことに簡単明瞭であった。

「もっとも、Y君にとっては後妻だし、ひさ子さんは再婚だがね。何か気になることでもあったのか？」

「いいえ、そんなこともないんですが……」
まだ十分納得がゆかず、疑問はあったが、返事をにこした。

「年令が違い過ぎるもんだから、妙なことをカングったんじゃないの？」

先生の言葉はおだやかだったが、すでに私の本心を見抜いた気配がある。

「ええ……まあ……」

「そして、あわよくば奥さんを誘惑しようと考えたんだろう。いけない見だよ」

「……」

「君の熱をあげる気持ちはよくわかるよ。誰が見たって妻にしたいと思うような女性だからね。しかし、ひさ子さんにとってはY君が理想の男性なんだ。ふたりの間に水をさす余地は全くないよ。これは多くの眼で見て断言できる。君の眼にも仲の良い夫婦と、うつらなかつたかい？」

「ええ、それはそう見えました」

たしかに冷静に考えて見れば、Y氏は、ひさ子に、とても優しくかった。ひさ子も恥ずかしがりこそすれ、ああされるのを、いっている様子は毛頭なかつた。

「そうだろう？　じやいっただうして君はそんなことを考えたのかな。あまりにも年の違った夫婦は何とかという、月並みな考えに惑わされたのかねえ。それとも今の世間一般の風潮に、やはり君も巻き込まれているのかなあ」

そう言われれば一言もない。が、

「いえ、そうじゃないんですが、はじめてY氏の顔を見たとき、なんだかうサンクサげな好色じじいに見えたもんで」

「はっはっは、彼の行為は好色でないとはいえんね、たしかに。しかしだよ、人はその相手によって表情を作ると言うから、多分その時は、君も相当以上にスケベな顔をしてたんじゃないの」

「おそれいました」

サンザンである。

「君はやっぱり、ファインダーのうしろからのぞいた眼の方が確かなようだね。好漢自重を望むよ」

どうも、先生のおっしゃる通りのようだ。

Y氏夫妻にとって、私はただの触媒に過ぎなかつたのだ。

「あなた、いらして……」と、せっぱつまつた声をあげた時、彼女の眼中には私は存在しなかつた。

そして私もまた、その一瞬をねらって、ファインダーに眼をこらしていたのではなかつたか？　それでよかったのだ。

ただ、あまりにも淋しかったので、ついムラ気が起ったただけなのだ――

写真の出来は、期待にたがわず素晴らしかった。私はひそかな期待に胸をこがしながら暗室でひさ子のさまざまな姿態と格闘した。ところか――

写真を受け取りに来たのは、Y氏ひとりであつた。これで期待の半分は夢と消えた。

それから、二度目の撮影申し込みを長い間待ち続けた。しかしそれは今日に到るまで、遂に來ない。これで私の期待は跡かたもなく消え去つた。

私は今でも、ひさ子の写真を、淋しい夜には抱いて寝る。

S・C・R 質問者への提言



四月号の

夜尿症女性に

岩手 信夫

私は、あなたの問題をゆだねられたという想定のもとに、語りかけようと思います。

さて、あなたが質問なさったのは、治療のことではなくて生き方の問題でした。回答は治療法の紹介のような形になっていますが、医者としての立場で書かれたためそうなったに過ぎず、真意は、あなたの提示された生き方を止むを得ないものとして承認していました。読む前に私は、回答の要旨を次のように予想していました。

『治そうという強い意志と、治るという固い信念を持って、少々の失敗などに失望せ

ず、各種の療法を根気よく続けなさい』

このような回答は、夜尿症の子どもを持つ母親の質問に対する模範回答として通用しています。もし仮に、このような回答が、二十七歳の女性に対して示されたとしたら、私はSCRに失望したでしょう。しかし幸いに私の予想は外れました。あの回答を私は次のように読みました。

『治療は困難であり、今まであなたは治っていないのだから、正直言って不可能と思う。どうしてもと仰せなら、良い先生を紹介してあげます。………』

私の提言は、あなたが「治療を断念することと決心した」という想定の下に構想されています。

主な問題は、事実として存在する就寝中の遺尿に『市民権』を与えることです。それは具体的に言うとな次のような条件を満足する対策の採用です。

第一は、飲食を制限しない。第二は、排尿のための睡眠中断が無い。第三は、夜具や衣類を汚さない。第四に入眠時の不安が無い。そして勿論、安上りで快適で副作用なし、という条件を加えると結局「おむつ」以外に方法は無いと思います。

あなたは早くからこれに気付いていた筈です。にも拘らず自分からは言い出せないし、さりとて親が言い出してくれるのでもない。あなたにも限らず多くの夜尿者にとって、おむつ使用が実現しない原因は羞恥心です。おむつを使いたいと意志表示することにより、幼児退行願望が露見するのを恐れるのです。誰かがおむつを強制してくれるのを、切ない気持ちで期待しているのが夜尿者の本心であると私は推測します。残念ながらそのような楽しい話はありません。次にその理由を

説明します。

夜は赤ちゃんに還るのが自然なのではないか、私はこう考えます。眠っている間も紳士淑女の気取りを捨てきれない人々、つまり、我々の大部分は、昼の気取りを眠りの中にまで持ちこんでしまう悲しむべき習性があります。夜尿者は眠りが深過ぎると言いますが、正しい見方では、昼の気取りの姿勢から全く解放されて、赤ちゃんの心を取り戻せるからこそ深く眠れるのです。尿意ぐらいの弱い刺激で目覚めてしまうような浅い臆病な睡眠しか出来ない普通人には、無意識の排尿など出来るわけがありません。その意味で、夜尿者こそ健康人であり、万人の理想とする安定した眠りを許された特権者です。

多くの人々は眠りに関する限り、欲求不満傾向にあります。夜尿者に対する普通人の態度は、病人に対する態度とは全く違います。夜尿者をからかう心情のなかには、彼が、尿のめれにも気付かないほど良質の眠りを与えられていることに対する、羨望の情がこめられています。夜尿者の睡眠を妨害することが『対策』の一種として、家庭医学書に公然と記されているのは、はからずも非夜尿者の好みを露骨に示しています。

おむつ。夜尿の子どもたちが何よりも欲しがる筈のおむつ。あなたもお気づきでしょうが、この極めて常識的なものが世間では一言も論じられないのは何故でしょうか。習慣になるから、というのが答えだと思います。治療が確立しない今日では、自分でおむつをする習慣をつけるべきなのです。そしておねじよ、自体は不問とし、夜具の汚損防止を訓練すべきです。ところが現実には、治療のために、気持の悪さと恥しさを自覚させた方がよいとかで、もらすとわかってる子にもおむつをしないのが普通です。非夜尿者は、自分たちの不安定な眠りから来る欲求不満を、夜尿者をからかうことで紛らせているのです。もしおむつが普及して、すべての夜尿者が愛用するようになる、惨めな思いをするのは明らかに非夜尿者の方です。

ところであなたは、夜間に尿意のために目がさめて、便所に往復するということの気分的惨めさを御存じないと思います。私は正直なところ、あなたのようになりたいのです。不可能なことはわかり切っていますが、おむつだけは用意してあります。

あなたのおむつはどんなのが良いか、考えてみましょう。まず第一に安全なこと。第二

に美しいこと。第三に赤ちゃん気分が出ていくこと。第四に異性の心を刺激するような着け方ができることなどがまず思いつきます。カバーは、あなたのように毎日の場合は、総ゴム製が便利です。気分を出すには、派手な柄の布地で仕立て、内張りをゴム膜にしたのが適します。ビニールは飽きが来るので健康者用としては不向きです。ゴムは肌ざわりが楽しいほか、特有の臭気も捨てがたいもので尿臭と混合した臭いともなると、入り浸っていたいような気がするほどです。ビニールはゴムと違って、心に訴えるような臭いや感触が無いので、代用品に過ぎません。

おむつは我々の故郷です。郷愁の対象として最高のものです。夜尿を目の敵にしないで思い切りそれに甘えてみて下さい。倒錯とかアブノーマルという語の、表面的語義をおそれずに、感想を述べて下さい。あなたが、おむつによって生まれ変わることに成功した暁には、あなたは孤独でないことに気付くでしょう。

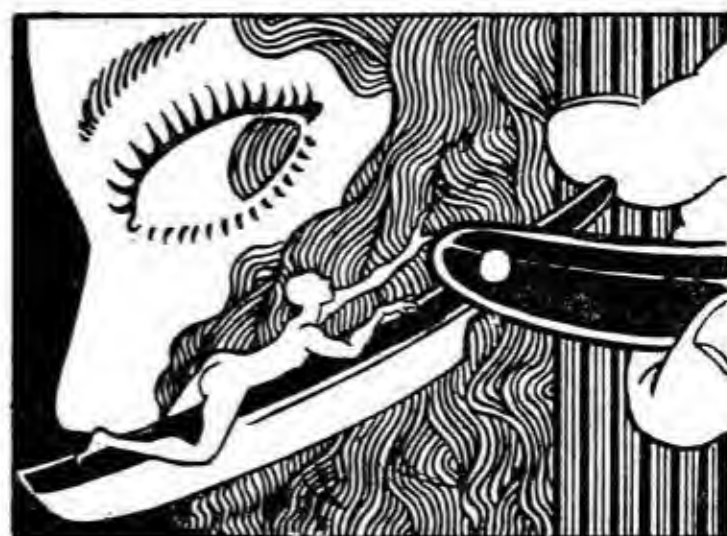
以上、独断的見解を押しつけた形になっていますが、御意見などきかせて頂ければうれしいと思います。

連載 M 小説

ピエロ床屋

(4)

鬼^き 山^{やま} 絢^{けん} 策^{さく}



まじめ人間

政吉の店は朝が早い。

規定は8時からでなければ店は開けられないのだが、工場へ行く前にやってくる工員が五時半頃からくる。大田原市はN電機、H電機、N光学と一流会社の工場が続々と進出して、いまや工業都市となりつつあるのだ。

店を閉めたままで刈ってやるのである。

政吉がいつものように、6時に眼をさまし店へ出てみると、驚いたことに綺麗に掃除が

済んでいた。

「お早うございます」

善夫がもう白衣に着替えて一生懸命、剃刀を研いでいた。

政吉は、やることがなくなった。

だが店には、それぞれ特有のしきたりがある。善夫は政吉の指示を仰いで、タオルやシャンプーの置き場など、店のやり方をのみこんで行った。

一人、客が来た。すぐ善夫が自分の持ち場の椅子に坐らせる。政吉は手持ちぶさたで、いこいをプカプカすっていた。

8時になると栄子起きてきて、飯の支度をはじめ。

「善夫さん、御飯よ」

「アレ、ちき生、俺を呼ばずに善夫を呼びやる」

政吉は苦笑した。

昼すぎから客が混んでくると、栄子も白衣を着て店に出る。

栄子はタオルを取りに行ったりする時に、善夫にズシンと身体をぶっつけてみる。自慢のおっぱいのあたりを善夫の胸にこすりつけ

るようにする。

「あ、失礼しました」

小声で善夫は挨拶して隙を見せない。

友市にやったときは、自分も身体をこすりつけてニヤリと好色な笑いを返してきた。苦もなく結び合えたのだから……。

「なるほど堅ぶつたわ、この男は……」

だが、栄子には自信があった。

「堅造を陥す方が、はり合いがあるわ」

と、ファイトをもやした。だが性急にもちかけるのは、よくない。まだ三カ月あるのだからその間にモノにして、帰るのを喰い止め

——前号までのあらすじ——

斧田政吉(53)大田原市で小さな理髪店を営む。48で結婚し、子供はない。栄子を溺愛し、家業に精出している。

斧田栄子(38)やっと30ぐらいにしか見えない美貌で57キロもあるグラマー。店の職人友市と関係したが喧嘩して友市が出て行ったため、替りの職人を政吉の兄貴分の清太郎に身を委せて頼み、富岡善夫を廻してもらう。

富岡善夫(33)清太郎の店の子飼いの職人。好男子で腕がよく、しかも身持ちが堅いという評判の男。清太郎の店の若い職人が一人前になるまで三カ月の約束で政吉の店に働きに来ている。

なければならぬと考えた。

愛の香り

一カ月、経った。

春になっても朝晩など、いつまでも寒さの残る大田原の町も、六月の声をきくと、にわかに暖かさが増してきた。

栄子は酒場にいた頃の、あの手この手を使って善夫に誘いをかけたが、柳に風と受け流されて、のってこなかった。

休みの日をねらって、ゆっくり口説いてやろうとしたが、東京に用があると言って、朝早くから店を出てしまった。

栄子は焦ってきた。

店が終ると、いつも政吉と善夫の二人で、一緒に風呂に行く。とにかく朝から晩まで二人が離ればなれになることがなかった。

或る夜、最後のお客を善夫が刈っていると、店を閉めた栄子は、無理に政吉を風呂に行かせた。

間もなく仕事を終えた善夫に、

「善夫さん」

いきなり後から抱きついて頬に接吻した。

「あ、いけません、奥さん」

「ねえ、善夫さん。妾もう我慢できない。妾の気持ち分ってるでしょ。ねえ、今夜……」

「いけません。東京を出るとき、うちの旦那と約束されたのを忘れたんですか」

「あんだ、妾きらいなの！」

「そんなことは別問題です。道にはずれたことはできません」

「なにさ！ 妾にお説教する気？ 妾に恥をかかせるの」

「お許し下さい」

逃げるように風呂へ行ってしまった。

栄子は唇を噛んだ。

「ちき生っ」

善夫は政吉を主人と崇めて、政吉の言うことをハイハイときいているのも癪にさわることのひとつだった。

それからの栄子は、ムシャクシャした気持ちで、政吉に当り散らすようになった。

善夫がいる手前、派手な喧嘩は控えていたし、政吉の方が折れて出るので、一応は平穏を保っていたが、それが些細なことから、遂に爆発してしまった。

善夫が来てからは、洗濯は栄子がやるようになった。二人きりの時でも気嫌がよければ政吉のものまで洗っていたが、一旦むくれる

と何もしない。そういうときは政吉が栄子のパンティまで洗った。

善夫が来てから、善夫の下着などをひったくるようにして洗ってやり、序でに政吉のものも洗うようになった。

政吉も善夫が旦那々と立ててくれるので「洗たくものだけは、お前がやってくれ」と頼んで「いいわよ」と栄子は承知したのだったが、この頃になって気嫌の悪い日が続き、洗濯物がたまりはじめた。それでも善夫のだけは洗っていた。

たまりかねた政吉が「約束だけは果たしてくれ」と、おっかなびっくり言ったのが、導火線に火をつける結果となった。

「誰も洗わないと言ってやっしないじゃないか。妾だって忙しいんだからね」

「もう二度も三度も言ってるのに、洗わないじゃないか」

「あんたに洗えと言われると洗えなくなるんだよ。気持ちが悪いたら自分で洗いなよ」

これはいくら言ってもだめだと思った政吉は、夜になって善夫が二階に上ってから、自分で洗濯機に入れて洗いだした。

栄子は蒲団に寝そべって煙草をすいながらテレビを見ていた。

今夜も晩飯に酒をつけたが、善夫も政吉もあまり飲まなかったの、栄子が一人で飲んで酔っぱらっていた。洗濯機の音を気にして「うるさいねえ。ガアガア言ってテレビが聞こえやしない」

栄子が男のようなガラガラ声でどなる。政吉は自分が洗濯しているのを善夫に知られるのが辛かった。栄子は、わざと大きな声で二階に聞こえるように言ったのだ。

それでも途中でやめるわけにいかず、ついでに栄子の下着も洗ってやった。

「お前の洗うもの、もうないかい」

「そんなに洗いたいのか。じゃ、これも洗っときな」

栄子は寝たまま、ナイロンのパンティをクルッと、ひん剝いた。白い脚の根元に黒い花が咲いた、と見えた瞬間、政吉の顔にあったかい布きれがとんできた。

「匂いをかいでから洗いなよ。フフフ」

「おい！ 聞こえるじゃないか」

政吉は小声でたしなめた。栄子は横眼でチラと見て笑うと、サッと片脚を天井へ向かってあげた。

「美容体操、フフフフ」

放胆なポーズで、政吉の困惑する顔を楽し

気に見た。政吉はバタツと手荒く勝手と座敷の境の戸を閉めた。

一人になると手に持った暖かい体温のこもった布を鼻へあてがった。

この尊い、身体が透き通って見える布は、あまい女体の臭いが、しみこんでいる。すぐ洗ってしまうには惜しい気がする。ガラガラと洗濯機の音がしている間中、顔に当てて嗅いでいた。

愛におぼれて

二時間近くかかって洗い終えたが、干すわけにはいかない。二階の物干しに行くには、善夫の部屋を通らなければならないからである。洗っておけば、いくら何でも明日、栄子が干すだろうと思って、手を拭きながら座敷の戸を開けると、栄子が大の字に脚をひろげて眠っていた。寝まきの裾は大きく捲かれて政吉に挑戦するように逞しいももが露呈されていた。

「ああ、だいが生えたな。また剃ってやらなくては……」

テレビは大きなポリウムで11時のニュースを放映していた。

栄子は口をあけ、あどけない顔をして眠っている。少女のように可愛い寝顔だった。

政吉は、一点を見つめながら寝まきに替え、栄子の脚の間に腹這いになった。

あまい香りが政吉の官能をかきたてた。

すべすべした内股に頬ずりし、狂わしくくちづけした。栄子が眼をさました。

「何すんだよう、イヤだよ」

「栄子、栄子！」

政吉は栄子の太腿を両手で抱え、くちづけをくり返した。

「イヤだってば。犬のようにペロペロなめやがって！」

栄子は、あいている脚をえびのように曲げて政吉の頭を、思いきり蹴とばした。

「おい、聞こえるじゃないか！」

「聞こえたって構やしないよ。ほんとのこと言ってるんだもん」

「栄子、そんなに邪けんにしないでくれ。お願いだ」

「フン、そんなに舐めたいのかい。じゃあ舐めさしてやらあ！」

酔っぱらったときの栄子の荒れようは、いままでに何度も経験している政吉だった。二人きりの時は、それでもよいのだが、いまは

当惑した。羞恥で顔がほてった。

栄子は寝たまま裸の脚をあげて、足のうらを政吉の顔の前へ突き出した。

「サ、お舐め。舐めさしてやるよ」

「栄子。お願いだから静かにしておくれよ」

「いいから、お舐め。ホラ！」

政吉は突きつけられた足を抱えて、その足のうらに唇をつけて舐めた。

「アハ……くすぐったい。バカ」

栄子の脚は蛇のように政吉の首へ巻きついた。こうなれば、もう見栄も外聞もなく、栄子の言いなりになるより仕方なかった。

栄子は酒くさい息を吐きながら、思いのままに政吉を翻弄した。何をされても政吉は黙々と従い、荒い息使いを押し殺すようにして一生懸命、奉仕している。

政吉は、それでもホッとしていた。栄子が声を出さなくなったからである。あざけりの言葉も、過酷な命令も、ひめやかな小声になった。どんな苦しい屈辱的な行為を命ぜられても政吉は喜々として従った。

苦痛はあってもその反面に快感があり、屈辱も二人だけの世界では羞恥はなかった。

栄子は重圧に堪える政吉の顔を上から見下ろして、やるだけやると眠くなったのか、政

吉を放免してまた仰向けにひっくり返ると、嵐が去ったように、まぶたを閉じた。

政吉は恐る恐る栄子の夫として近寄った。政吉は必死にはげんだ。

最初のうちは反能を示さなかった栄子だったが、次第に様子が変わった。政吉は、もはや二階に気兼ねすることなく、一心にうちこんだ。

手がかり

翌朝、政吉は7時に眼を覚ました。

善夫が来てからは、6時に起きていたのを30分遅らせて6時半に起きていたのだが、今朝はちょっと寝坊した。店に出てみると、善夫が掃除している最中だった。いつもなら、とっくに掃除は終わっている時間である。

「すみません、今朝は寝坊してしまっ」と善夫は謝った。

善夫が何故、今朝に限って寝坊したのか？政吉はチラと奇妙な想像が浮かんだが、まさかと直ぐ打ち消してそのまま仕事にかかったが、もし栄子がこれを知ったら、善夫の寝坊の原因をもっと深く考えたであろう。

だが遅く起きてきた栄子には、別のことが

ら善夫の変調を悟った。

その日一日、善夫は何かと仕事がスムーズに行かず、小さなミスが続いた。

「どうしたの、善っちゃん。今日は、どうかしているわね」

このとき善夫が珍しくも顔を赤くしたのを見てとった栄子は、「おかしい——」と直感した。昼前に、ちょっと手のすく時がある。

善夫は椅子に腰かけて新聞を見ていたが、いつの間にか居眠りをしていた。これも今までにないことだった。

「この男は昨夜の妾達のことを二階で聞いていたに相違ない。夫の政吉が閨房では下僕のように従い、あらゆる屈辱を甘んじて受ける奴隷と化したことを知って驚いているのだ。」

それとも夫婦のいとなみを臉にえがいて、若い男としての昂奮をおさえきれなかったのだろうか。どっちにしてもこの男は、妾達が眠ってしまったあとでも、いつまでも眠れなかったんだわ」

栄子は、ひとりで微笑がわいてきた。

ようやく「石部金吉」攻略の手がかりをつかんだと思ったからである。

それからの善夫の挙措に注意して見ていると、夫婦の営みのあった翌朝は、決まって寝

不足が眼についた。

善夫が自分達のプレイに関心があることを知ると、栄子は殊更、声を大きくして夫を嘲罵し、酷な命令を与えたあとでなくては、夫の望みを叶えてやらぬようにした。

大きな声で口汚く罵るたびに、政吉が脅えるように二階に聞こえるのを気にするのが、却ってたのしかった。

果たして翌日は反応があった。善夫は赤い眼をこすりながら、時にジッと一点を見つめて考えていることがあった。

更に大きな変化を栄子はみつけた。

仕事をしながら栄子が、ふと善夫を見るとハッとしたように善夫が視線をそらすのである。今までこんなに自分が見つめられていたという覚えはなかった。話をしている時でも善夫の眼が熱っぽい、ひかりをおびてくることがある。酒場時代に多くの男を知っている栄子には直ぐわかる眼の色だった。

「だいぶ風向きが変わってきたわ」

そろそろもちかけて見ようかと思ったが、前に一度振られていたので慎重だった。

慎重というよりも「妾ほどの女がくだいたのを振りやがって！」という、誇りを傷つけられた憤りが残っていた。

「うんと思せつけて、向こうから仕向けてくるようにさせてやる。その時は思いきりじらせて、なぶってやる！」

と肚をきめた。

すでに善夫が来てから二カ月を経た。

大田原は急速に夏がやってきて、日に日に暑さが加わってきていた。

政吉はこの二、三カ月の間に、自分の性癖が大きく変貌していることに気づいて、時々反省していた。つい十年ぐらい前までは「女たらし」と自負するくらい、女にかけては自信をもっていった自分が、どうしてこんなに変わったしまったのだろう。

それは栄子という、女のせいだろうか。

善夫の来る直前あたりから、栄子は政吉に對して、夜になると「兇暴」になってきた。

もともと以前から、そうした傾向の愛戯を好む女であり、栄子を喜ばすための手段として用いてきたのであったが、最近では同じことをやっても全然ムードが違ってきた。

その相違の基盤となるものは、主体性の転換であった。

「女房を喜ばすために……」

新婚の時代は政吉の方から積極的に奉仕し

た。女房が十分満足したと見ればやめるし、また、くたびれれば自分の方からやめた。

それが、この頃はどうかだろう。

栄子の方で命令してくるのである。途中でいやになっても、栄子が許してくれなければ続行しなければならない。

その行為の間における栄子の発言も前とは違ってきた。

以前は歓喜の表現であったのが、いまは罵詈雑言に代えられている。

夫を羞しめる言葉を吐いて、快感を感じるようになった栄子に対して、最初は大きな抵抗を感じていた。それが二人きりの世界ではいまは全然、抵抗を感じなくなっている。

「馴れ」だろうか。

否、そうではない。いまでは女房の悪罵に快感を覚えるようになってきている。

これが世にいうマゾヒズムというのであるか。

「俺も落ちたもんだ。これも年のせいなのだろうか。だが俺は、まだ男として立派に勤まるんだ。それなのに若い男とみると色眼を使う栄子の不貞を責めるべきか。」

だが、それはもう遅すぎる。惚れた女房に甘すぎた俺が、やりそこなったのだ。それに

栄子の気持ちはあくまでも浮気の域を出ていない。真底は、二人で築いたこの店と、俺を頼りにしているのだ。だから俺は友市の時も有してやっていたじゃないか。図にのった近頃の栄子は困ったものだが、俺の心の中で、それを迎える気持ちがでてきたのは、いけないことだろうか。しかし、それで家庭の平和が保てるなら、構わないじゃないか——

ええい、面倒くさい。どうでもいいや。五十三にもなって、いまさら女のことよくよくするなんて、みっともないことだ。政吉はそんな風に半ば諦め、自分の性癖を是認するようになった。

戯れの中で

一方、栄子は、善夫がもうすっかり参って、いつもちかけても尻尾を振ってついてくることに確信をもっていた。だが、

「あくまで善夫の方から頭を下げて言わしてやるんだ！」

そう思っているところへ、政吉が例の「遊び」をもちかけてきた。

「だいぶ生えてきたな。腕なんか男のようでみっともないぜ。今晚、剃ってやろうか」

「フン、すけべい！ フッフ」

その夜、いつも真先に風呂に行く栄子が、男達が風呂から上って晩飯を終えてから風呂に行った。ゆっくりと長く入って帰ってくる、政吉は店で剃刀をといで待っていた。

「ああ、暑い暑い」

座敷へ帰るなり栄子は、浴衣もパンティも脱ぎ捨てて全裸になって店へおけると、椅子へ、デンと腰かけた。政吉はワクワクするほど興奮していた。それでも店と座敷の間の戸をビシヤリと閉めることを忘れなかった。

「あら、そこ閉めたら暑いじゃないか。開けときなよ」

「だって、お前……」

「善夫は、もう寝たんだろ」

「ウン、寝たとは思わが……」

「そんなら大丈夫だよ。閉めきっちゃ暑くてやりきれやしない」

栄子は椅子からおりて自分でガラリと開けてしまった。座敷と店との境は、戸を開けても紗のカーテンがさがっている。

栄子は或る期待に胸をはずませていた。政吉は、まず両腕のうぶ毛から剃って行った。それが済むと足の胫毛である。

「ホラー！」

栄子は椅子の前にかがんだ政吉の肩ヘドスンと足を乗せた。足を肩でかつぐようにして政吉は、栄子の男のように毛深い脛毛をゾリゾリと剃りおとした。そこで、また剃刀をベルトにかけた。

「善夫は、ほんとにいい職人だねえ。三カ月で行かれちゃったら、たいへんだよ」

次は、いよいよお臍のあたりである。栄子のは放っとくと、お臍のところまでつながってしまふのである。

政吉は慎重に剃刀を使った。湯上りのムンムンする甘い匂いに眼がくらみそうだった。「フフフ、気をつけて剃るんだよ。傷でもつけたら承知しないから」

さっきから栄子はそれとなく紗のカーテンの蔭に気を配っていた。

こちらの部屋が明るく、座敷の方は暗いので、カーテンの蔭に人が居たとしても、こちらからは見えない。

だが栄子はそこに人の気配を感じていた。「やっぱり来ている！」

政吉は白くすべすべした軟かい皮膚を傷けまいと、その方に神経を集中していたから、最初は気にしていた戸口のこと今は、すっかり念頭になかった。眼を大きく剥き出し、

眼の前のよく熟れた肉体を眺めながら、チリチリと剃って行く。

上から見下ろしている栄子には、その緊張した五十男の顔が滑稽に見え、ピースに火をつける、上からフーッと煙を吐きかけた。

「おい、見にくいよ。危いじゃないか」

「フン、何さ、このくらい」

栄子は大きく身体を動かした。

「ア、危ない。動かないでくれよ」

「そんなことで、どうするのさ。子供なんかもって動くんだよ」

政吉は少し宛、剃っては手の甲に毛を並べている。

「あんた、ほんとに妾が好きかい」

「エッ？」

政吉は手をとめて栄子を見上げた。

「ほんとに妾に惚れてるのかよ」

「今更、何を言い出すんだ」

「惚れてるんなら、それを食べてごらん」

「ええ？」

政吉は手の甲に渦を巻いている毛に眼をおとした。

「妾の身体に生えてた毛だよ。捨てるのは、もったいないよ」

「でも……」

「お食べ。たべるんだよ」

「こんなもの食べたって、しょうがないじゃないか」

「こんなものとは何さ、こんなものとは！」

「イヤ悪かった。でも、お前の言うことは、きちがいじみてるよ」

「きちがいだって！ よし、食べないんだね」

「食べないんなら食べないでいいよ！」

栄子は指をのばして手の甲の毛をつまむと政吉の見ている前で体内におしこんでしまった。

「もういいよ。剃らせてやらないから。あとは妾が自分でやるよ」

「もう少しだから剃っちゃおうよ」

「いいよ。妾の言うことがきけないんなら。」

「フン！ 惚れてるなんて口先ばかりなんだから」

「そ、そんなに言うんなら食べるよ」

「ばか！」

栄子は椅子から立ちあがると、政吉の頭を椅子におさえつけ、膝で肩をおさえつけた。

そうしながらも栄子は、戸口に気を配っていた。心なしに、風もないのに紗のカーテンが揺れていた。

(続く)

切腹史談

三村家の人々

(下)

中 康 弘 通

四、女軍玉碎

三村一族にとって最後の拠点である常山城が囲まれたのは、天正三年六月四日のことである。夏陽が、きびしく照りつける石垣を、ひしひしと取り囲んだ毛利勢は、つい先ごろ六月一日、松山城主三村元親に腹切らせて、意気あがる小早川隆景の手の者であった。

城主三村上野介高德は、三村の先代家親の娘婿でもあったが、この様子を見て、主立った家人どもが

「ひとまず阿波讃岐へでも御渡海あっては如何かと存じまする」

すすめる言葉に耳もかさず、

「このたび元親が毛利に叛いたことの張本はそれがしである。ところが元親がムザムザ腹切って果てた上は、何の面目あって生きておれよう。阿波讃岐も、今となって何の頼みにもなるまい。わが子を人質に送って加勢を乞うても甲斐なかったほど、もはや弓矢の頼みも尽き果てたわ」

騒ぐ気色もなく決心を述べたので、郎党どもも、今は頼むに詮なし、とばかり、あるいは秘かに城を落ち、あるいは攻囲の毛利勢に降るといふ有様。中には、抜け落ちた者を憎んで追い討つ者もあるという同士討ちまで加

わって、籠城わずか二日で櫓の齒の欠けたような散り散りぶりである。

なか一日をおいて六日には、小早川の先手を承わる浦兵部丞宗勝が、数千の兵をひきいて旗さし物もものものしく、防ぎ手のないままに二の丸まで攻め入った。近々と大矢倉を望み見て、鞆(ゆぶくろ)を鳴らし、大刀の鐔(つば)を叩き、どつとばかりに関の声をあげたのである。

高德は覚悟もさわやかに

「命を助かろうと思えばこそ関をあげるも効めあるうが、明朝は辰の刻に大矢倉で、一門ごとごとく腹切って果つべしと定めた身に何ほどのことがあろう」

と、しずかに刻の来るのを待っている。

そのうち、いよいよ本丸に取りつこうとして毛利勢の叫喚かぎりなく猛るとき、

「ええ、うるさい奴原。高德が最期の働き、さほど見たくば見せてもやろう」

広縁に出て手練の鉄砲を続けざまに射放した。嫡子源五郎高秀は平生は弓の巧者であったが、是も鉄砲を取り寄せ父に続く。思わぬ銃撃に浮き足立つと見えた寄手へ、高德の弟小七郎が切り込んで、たちまち十数名の死傷を算し、毛利勢は鳴りをひそめた。

いずれ一両日うちに落ちるべき小城とばかりに、毛利勢では見抜いていたのである。

七日は早曉から本丸で、高德一族が最期の酒宴であった。召使いの女どもに至るまで、残る人々が思い思いに別れの盃を差しかわすうちにも、夏の短か夜は明けやすくて、はや辰の刻となる。酒は呑んでも乱れぬ一座を見やりつつ高德が、毛利勢へ向けて、只今より一族こぞって自害の旨を云い送らせると、まづ五十七才になる高德の継母が座を立った。「なまじ永らえて今日の憂き目を見るのも、前世の因縁でありましょう。高德どのが芸州に遺恨を含んで入道なされただけでも辛いと思うだに、ただいま腹切り給うとあれば悲しさに眼くらみ、心もだえて見届けもなりませぬ。しばしも後に残ろうより、今は先立ち申すが願いじゃ」

云いつつ縁の柱に守り刀の柄を巻きつけると、そのまま柱に身を投げかけた。白刃に胸もと深く貫かれ、のけぞるところを高德が、「親を手につけて五逆の罪おそれ多いが、お苦しみ申すも本意ない。ご免あれ」

跳ぶように走り寄りざま、大刀を揮って介錯したのである。

そのさまを見つめていた高秀が

「父上、父上のご介錯をつかまつりとう存じますれど、年少のそれがし、おあとに残っては未練のふるまいもあるうと、お心にかかれましょう。逆縁ながらお先に切腹つかまつりまする」

十五才の少年が、父を振り仰いで、いさぎよく所存を述べる。

「神妙ぞ、紅顔たちまちに失うは後世の障りともなるうが、是非もない。介錯いたしてくれようぞ」

覚悟の高徳も思わず涙を払って、高秀の背後に回った。

高秀は何の躊躇もなく両肌くつろげると脇差を逆手にとり、雪のように白い脇腹めがけて発止と突き立てる。キリキリと臍の真上、横一文字に引廻した刃を取り直すよと見るまに、鳩尾に刺し込み、両腕に力を込めて引き絞るように刃を押しさげ、十文字の切腹をとげたのである。さすがに耐えきれず体を前に倒すとき、介錯の刃が降った。

そのとき高徳の妹で十六才になるのが、懐剣を引き抜き、わずかに掻きくつろげた左の乳下に切先を当てがうと、一気に突き貫いて世を短こうする。この姫は、安芸の国鼻高山の大將が高徳には弟に当るので、そこを頼っ

ては、とすめられたのも、思いも寄らぬことよ、と聞き入れずに自害してしまったのである。

こうして一族の者が次々と刃に伏すうち、高德の夫人ばかりは、

「武士の妻や子が最期というに、敵の一騎も討たず、ムザムザ刃に伏すなど口惜しい限り女人の身なりとも、一と戦せぬは心残りよ」
叫ぶように云うと、鎧をつけ上帯を締め、大刀を帯び黒髪ときなびけ、白柄の長刀小脇に挟んで広庭におどり出たから、驚いた女房どもが、

「何と遊ばされます。たださえ女人は嫉妬妄執の罪ふかく、成仏するを得ずと申されまするに、ましてや修羅道の罪業まぬがれがとう存じます。今は思い留まりなされて、お心しずかにご自害遊ばされませ」

鎧の袖を押えたが、夫人はホホと笑った。「お前方、女の身ゆえ、無闇に害されもすもい。何処へなりと落ち延びるがよい。もし自害するにしても、念仏よく申して後世を助かりなされ。妾は邪正一如と観じ、戦場をば西方浄土とし修羅の苦患も極楽と思えば、何の悔いがあるうぞ」

云いざま袖ふり払い、さっと木戸を出たの

である。黒髪の末が消えたと見る間に、残された女房どもも

「お見捨てなさるとは情けなや。とてもこのに散るべき花なら同じ嵐よ。死出三途のお供申しましようぞ」

額に白布を巻き、長柄の槍を提げて、三十余人同じ道にと走り出た。自害の刻限を待っていた郎党どもも、この有様を見るなり、

「女人ばかりに先を急がすまいぞ」

八十三騎が続いて駆け出す。

毛利勢では、さては城中の者ども女子供を先立てて降人に出たものか、と見るうちに、早や三村の兵は、寄手の先陣浦兵部丞宗勝七百余騎の真正面から、叫喚とともに攻めかかる。

宗勝は

「女装して攻め来たるは不審なり。はじめ処女の如くして、終り脱兎の功を謀るものか、欺かれな」

と陣を固めて迎え撃つ。

高德夫人は満足げに莞爾と笑み、腰から銀の采配抜き出し、先陣切って突き進めば、女兵どもも是に続いて、多勢に無勢の城兵どもが寄手と槍を合わす傍らから突きかかるなどたちまち毛利勢は百余騎の死傷を算えた。

しかし次第に毛利勢は勢いを盛り返し周囲から馳せ集まるので、高德夫人は宗勝の馬前に進み、

「宗勝どのにもの申す。ご辺は西国にて勇士の名を得たまうと聞く。われ女人の身なりとも、一と勝負つかまつらん。構えてそこ引き給うな」

声ふり絞り、長刀を水車のように廻して駆け寄れば、宗勝は、

「おん身は鬼神の働きし給うとも、所詮は女性の身。武士の相手はなり申さぬ」

サツと引き退いた。あとには宗勝の手勢五十騎が、高德夫人を取り籠めようとする。夫人も長刀を揮って、七騎ばかりに手を負けさせたが、みずからも薄手を負うと一と息入れ、腰の三尺七寸の大刀を抜きとった。

「是はわが家に重代の太刀、国平が作。一とたびは先老家親に参らせ、家親格別秘蔵の太刀なるが、重代の品と聞いて返されたもの、わが身放さず持ち来しが、わが亡きあとは宗勝どのに参らせん。後世を弔らいたまえ」

云いつつ太刀を手近にさしおき、そのまま城中へ駆け戻って行く夫人の姿を、宗勝は傷ましげに見送っていた。

城では、高德はじめ残る人々が夫人の帰城

を待つなかへ、悪びれず端座した夫人は、しとやかに西方に向かつて念仏ねんごろに称え太刀を口に含んで俯伏した。刃先がうなじに抜けるとともに、一代の勇婦は息絶えたのである。

夫人の最期の言葉に曰く

「妾に西方十万億土の弥陀を頼む心さらになし。己身の弥陀、唯心の浄土、いまここに現ぜり」

と。夫人の自刃を見届けると高德も、同じく念仏称えて腹かき切れば、小七郎がその頸を打ち、刃を返して己が腹十文字にかき切り高德の亡骸に倚って果てた。

ここに常山城も毛利の手に帰し、かえりみればわずか半歳余の日数を経るうちに、三村の一族ごとく、あるいは斬り死に、あるいは、みずから刃に伏して畢ったのである。

三村一族が頼みとした織田信長の兵は、実に三年の歳月を閲してのち羽柴秀吉にひきいられて、天正六年西征の途に就いた。同年信長が本能寺で明智勢に討たれるや、秀吉は毛利氏と和して明智追討に兵を返し、全国制覇の第一歩を印したのである。

(終)

ドラム 罐

原子力潜水艦ネプチューン号の司令室は漸く愁眉を開いた。いうまでもなく、星・エミ―司令逆転勝ちの第一報が、届いたからである。

もはや探知される危険を犯してペルシャ湾に潜入する必要はなくなった。あらかじめ計画した通り、指定海域で網を張っていればよいことになる。

事実、艦はアラビア海を北上してオマン湾内に入っていた。ホルムズ海峡はペルシャ湾



第九回

を大きな胃にたとえれば、オマン湾という腸管とを接続する細い幽門に似ていた。僅か五十キロしかない海峡は、幾つかの島嶼で更に小さく区切られていた。従ってソーナ網を完備しておけばたとえ潜水艦でも、発見されないでペルシャ湾に入ることとは不可能といってもよかった。

「ニッポン丸は、予定通り明日出港するのでしょうか」

燃えるような赤毛のミセス・ウィリーが高橋副長にたずねた。海図の上で、しきりにコンパスと定規を動かしていた高橋淑恵が、図上を見つめたまま答えた。

前号までⅡ有明を首領とするシンジゲートは、原子力潜水艦ネプチューン号を駆使して世界中から美女を誘拐しつつある。司令星恵美子は単身テヘランに赴き、人身販売秘密組織に潜入様々な困難に遭いながら見事それを征服してしまった。殿下と呼ばれるボスト、星を苦しめた兩名の男以外は全部よりすぐった美人ばかりを一人ずつ三十六個のドラム缶に密閉してトラックに積む。その上で、残りは殺し、根城は爆破してしまった。星に疑いを持ち、その行動をマークしている日本の国際捜査官新津謙介の消息は依然として不明である。

「アバダンからのレポでは、明早朝、原油の塔載を完了する筈ですから、午後の出港は間違いないと思われます」

「そうすると、この辺を通過するのは明後日の深夜ということになりますか」

「ええ、今それを計算しているところですが、毎回午後一時に出港していますから、今度も午後一時として会合点到着は深夜〇時三十分頃になる筈です」

二人の麗人が揃って美しい裸身を惜し気もなくあらわにして、艶めかしい雰囲気を作っているのに、話していることは如何にも固苦しい内容だ。

二人の話題にのぼっているニッポン丸は日本の石油会社のチャーター船で、総トン数三十一万二千トン誇る新造船なのである。同船は処女航海でイランの原油を積み込むためブシールにある巨大船専用のシーバース（自動パイプ積込装置のついた海中ブイ）に接岸して、目下その船腹に膨大な原油を呑み込みつつあった。

ブシールは、最近アングロイラン協会がイラン東部に開発した油田から、巨大船に直接原油を積みこむためのパイプラインを完

成して以来、急速に活況を呈するようになった港である。

ニッポン丸の停泊しているバースは、このブシール港外西方三キロの島蔭にあり、パイプの突出部は海岸から約二キロにも及んでいるので、吃水三十二メートルの同船でも安心出来る海の深さになっていた。それにしても動く島、とでもたとえたいほどの大きさはブシールからもハッキリ望見出来たし、新造船だけに市民の話題をさらっていた。

さて、そのブシールの市街にドラム缶を満載して入ってきたトラックがある。いうまでもなく、星と三十六人の捕虜を乗せている。しかし、この市内では、第一にアングロ・イラン協会社のマークをつけたトラックは沢山あったし、第二にドラム缶そのものも到るところで見られたから、この一台のトラックが人目を惹くような理由は全く見当らなかったのである。

トラックはゴミゴミした商店街をすり抜けるように走って、はしけやポンポン船が一ぱい繋留している波止場についた。ここは物資の小運送で近隣の小村を結ぶための主要な集散地だったから、人も品物も黒山のように集り活気のある区画である。

従って、その一隅にヒソリともやってあったダルマ船に、ドラム缶を積みかえて行く作業を奇異に思う者は誰一人なかったといつてよいであろう。こうして、ドラム缶は無事ダルマ船の船艙に納り、直ちに出航したのであった。

ニッポン丸には勿論レーダーウオッチがあったし、監視員も見張っていたけれども、本船の外舷を反航して行く一隻のダルマ船には何の変哲も感じられなかった。

しかし、彼等に海中を見通す目があったらおそらく驚倒したかも知れない。すなわち、ダルマ船は丁度ニッポン丸の横を通ったときに巨大な鉄の箱を海底に落として行ったのである。いうまでもなく、その中には三十六個のドラム缶が納められていた。鉄箱の部分だけ船底がクリ抜かれて、ボタン一つで、この積み荷を何処へでも秘かに捨てる事が出来るような仕組になっていた。ダルマ船の甲板は、チャンとハッチが閉ってシートで覆われていたから外見では大きな積荷を落としたこととは判らないのである。

四十メートル程の海底に横たわっている鉄箱の蔭から、アクアラングをつけた人影がゆ



らゆらとあらわれてきて、箱の中から一コのドラム缶を引っぱり出した。缶の中には人間が閉じこめられているだけで、あとは空気だから、それだけなら水面に浮いてしまうので予めバラストがチェーンで巻きつけてあり、比重が具合よく調整されていたのであろうが人影は軽々とドラム缶を押し上げ、斜め上方にあるニッポン丸の船底に向かって浮き上って行った。水線下三十メートルまで水を圧し

下げている力は大変なものでドラム缶はその船底に吸いつけられてしまった。そこには何時の間に取りつけたものか、ドラム缶を懸垂できるように治具が吸盤のようなもので船底に固定されていた。航行時、水の抵抗を減殺する目的であろうか、前後に盛り上った流線型のカバーが出来ていた。

人影は、その治具の一つ一つにドラム缶を縛りつけはじめた。それは丁度、爆撃機に爆弾を吊り下げる作業に似ていた。第一のドラム缶をとりつけ終った人影は再び反転して海底にもぐって行く。

水面からくるボンヤリした光線によって、人影が全裸の女性であることがわかる。素肌の上

にマスクと鰭とアクアラングだけを身につけている。

全長三百メートル余、全巾六十メートルに及ぶニッポン丸の船底は際限のないような広さだった。その大きさを例えてみよう。普通のサッカーグラウンドはタテ六十メートル、ヨコ約百メートルだから、これを横長に三面つなげた大きさにほぼ等しいということになる。そのまん中に、恰かも昆虫がその卵を葉裏に産みつけたように、三十六個のドラム缶を固定したからといって、それ程目立つ筈もなかったし、邪魔にもならない筈であった。

ドラム缶は四列、巾二メートル半、長さは九本分で約八メートルが一本一本、治具でシッカリと留められるようになっていた。とはいっても、可弱い女手一つで全部をやり遂げるのは大変な作業だった。人影は蟻のような勤勉さで、蟻が自らの幼虫を運搬するようにつまり自分の身体よりも大きく見えるドラム缶を動かして行った。二時間余りもかかって漸く三十六個全部を吊り終った時には、さすがに疲れ切ったような様子だった。それでも使い終った何本ものボンベを鉄箱に入れ、蓋を閉めると一直線に再びニッポン丸の船底に戻って行った。ドラム缶の前部に、流線型の

盛り上りがついていることは前に触れた通りだが、その横に小さなハッチがついていた。人影はそのハッチから潜り込んだ。

内部は小型の潜水艇のようなものだった。沢山あるレバーの一つを押すと、圧縮空気が働いて、小さな室内の水は忽ち排出された。人一人が辛うじて寝ころべる位しかない狭さだったが、漸く呼吸が自然に出来るようになったので、その女性はかなぐり捨てるようにマスクをとった。すでに想像された通り、それはエミー司令、すなわち星恵美子その人だったのである。激しい作業と困難な呼吸のために彼女は疲れ切っていた。美しい胸が大きく波打ち、その中で心臓が高鳴っていた。そして、歯を喰いしばってその苦痛に耐え、ジッと横になったまま平静に戻るのを待つばかりなのである。

ある程度秘密も打ちあけられたジャンはもういない。星はひとりぼっちで仕事をしなければならなくなってしまった。勿論、トラックの運転手とかダルマ船の乗員のようには、部分的な協力者には事欠かなかったけれども、彼等には必要最少限度しか秘密を洩らしてはならない。そんなわけで、星はダルマ船が鉄箱を落とすとすぐ、それを追って単身海中に

もぐったのである。

鉄箱の中には三十六個のドラム缶のほかに潜水用のアクアラングを幾組か用意しておいたので長時間の水中作業が出来る筈だった。しかし、彼女の身にピッタリしたスキューバは手に入らなかったから止むを得ず裸で作業しなければならなかった。いかなる困難に遭ってもへこたれずに次から次へと打開して行く彼女の類い稀れな意力智力は、今回も見事に発揮されたといってもよいであろう。

それから数時間、五百万キロリットルという想像も出来ないような原油を船腹いっぱい詰めたニッポン丸はドツシリと船脚を沈めたままシーバースを離れ、日本に向かって約二週間の旅に出航した。

そして、小判いただきが大鮫の下腹に吸いついて運ばれて行くように、三十六個のドラム缶プラス星の乗込んだ小型潜水艇は、ニッポン丸の船底中央部にシッカリと固定されたまま、ペルシャ湾を一路東航して行ったのであった。

ニッポン丸の船長はじめ士官たちにしても、処女航海だけに船底の異変が操船に及ぼす微妙な影響を読むことが出来なかつたのも無理からぬことであろう。

ニッポン丸はミセス・ウィリーや高橋副長が予想していた通りの時間に、海峡を抜けてアラビア海に入り、目的地に達した。

そのことはネプチューン号から水中無線で星のところへ伝えられた。直ちに懸垂装置が治具ごと外される。潜水艇に装置してあったジェット噴流によって全部が一旦水中深く引き込まれる。ニッポン丸の巨大なスクリーニに巻き込まれるのを防ぐためだった。

ニッポン丸にも原因不明の衝撃が感じられて、一時はかなりの騒ぎとなったけれども、その後何の異状もないので航海を続行することになった。そしてニッポン丸がレーダー可視範囲の外へ去ってしまったあとで、同じ海面にポツカリ浮かび上ったのは言わずと知れたネプチューン号であった。もうその頃にはチェーンで連続された三十六個のドラム缶も点々と泛かんでいたし、ニッポン丸の船底から離脱する時にエネルギーを使い果たしてしまった小さな潜水艇も、波の上下につれて、ゆったりと揺れていたのである。

ネプチューン号が静かに近づいて、潜水艇に横づけになると、水面下のハッチから星恵美子、つまりエミー司令が泳ぎ出してきて甲

板上に助けあげられた。待ちかねたようにミセス・ウィリーと高橋副長がかけ寄って、左右からビシヨ濡れのままのエミー司令を抱きしめ、再会を喜ぶのだった。星自身にしてみても、今度という今度は九死に一生を得た思いの帰艦である。自然に目がしらが熱くなつて行くのをどうすることも出来なかった。

そうこうするうちにも、アマゾン女兵たちはキビキビと動いて、三十六個のドラム缶を回収し始めた。「中味」だけ出して、缶は海中へ沈めるのである。不要になった潜水艇もハッチから水が入って行くにつれて、ゆらゆらと沈んで行った。

麻 薬

国際捜査官新津謙介は、どうにもやり切れない思いでテヘランを離れた。

彼の眼に見えない敵は、既に二回も彼に打撃を加えた。一回は横浜の埠頭で、もう一回はテヘランのバザールで、いとも簡単にノサれてしまったのである。警察官中のエリートと自負する彼にとって、自尊心を傷つけられることおびただしかった。

気がついた時、彼は何事もなかったように

ホテルの自室で眠っていた。奇妙なことに、誰も彼がかつぎ込まれたのを見たものがいなかった。早速、星のことを調べてみると、少し前に使いが来て、チェック・アウトしてしまつたという。これで頼みの糸はプツリとたち切れてしまつたのである。星のパスポートは日本人としてのそれではなくて、ガボン政府が外交特権を有する公人として発給したものだったから、日本大使館としても動き様がなかったし、第一、横浜の時と同じで、誰も新津の話を信じようとはしなかったのである。やっきとなつて探し廻つても、結局何の手掛りも掴めないでいるうちに、彼はどうしても出発しなければならなくなつてしまつた。もともとテヘランなどに立寄るスケジュールはなかったのだから、公用旅行中の新津に対しては、も早、やり繰りのつかない日程が迫っていた。

深夜、東行するパナム便に投じて早朝のニューデリーに着く。最近、日本で摘発された大量の麻薬密輸に関する背後関係を調査するのが彼に与えられた任務だった。

インドと日本の血が混り合った美女、イーラ・G・ラジャンにとって、ここ数日間の激

しい変動は気の狂わないのが自分でも不思議なくらいだった。

ボンベイで漁撈器具を商って成功した彼女の父はニューデリーと東京にも住居を持っていた。母は日本人で、父の仕事が日本製の漁網やロープを輸入することから結ばれた縁だったのである。彼女の一家は一年中を東京とニューデリーとボンベイのいずれかを経廻つて過ごした。王侯貴族や特権階級のように極立ったものではないとしても、この三人家族は国際的に通用する上流家庭には間違いなかった。東京の学校に文字通り遊学した彼女は母方の言語をも流暢に話すようになった。

母も美しい人だったが、娘のイーラはその絹のような肌を受継ぐと同時に、父方の特徴であるギリシア芸術のような彫りの深さとを併せ持っていたのである。従ってイーラのエキゾチックな美貌は銀座を歩いていても、デリーのチャンドニ・チョーク通りを歩いていても、その男達の目を惹きつける何ものかに溢れていた。事実モデルや女優への誘惑も多く、彼女自身でさえ、ふとステージで群衆の拍手に迎えられている自分を夢みることがあるくらいだった。そんなわけで、彼女の日常は楽しく、夢と希望が満ち満ちていたとい

ってよい。

ところが、突然降って湧いたような災難が襲ってきた。東京にいたイーラの父が麻薬の密輸容疑で逮捕されてしまったのである。母からの急報で、とるものもとりのあえずイーラは東京へ出発しようとした。たまたま夏休みでニューデリーに帰省していたからである。

しかしそれが余計悪かったのかも知れない。

日印共同捜査陣は、この事件に関して、イーラを所謂「運び屋」の一人と見做していたので、常に彼女をマークしていた。だから、イーラの突然の出発は、単に父親の力になるために駆けつけるのだという同情を受けなかった。むしろ、麻薬の「仕事」に関係のある出発とニラまれてしまったくらいであった。

彼女はパラム空港で捕縛され、直ちに麻薬専門の特別捜査班事務所に護送されてしまった。それは、新津が同じ空港に到着する一時間ほど前の出来事であった。

イーラには全く身に覚えのない事だった。

他人からこのように乱暴に扱われたのははじめてだった。飛行場でポリスの車に押し込まれると、手錠がかけられ、猿轡までかまされてしまったのである。これは容疑者が「ブ

ツ」を捨てたり又は自殺したりするのを防ぐため、警察では止むを得ず行なっている予防措置だったのである。だが、そんなこととは知らないイーラは苦痛よりも屈辱に慄えた。

麻薬取締官事務所へ着くと警官の手から私服の捜査官に移管された。五、六人で抱えこむようにして、とある一室に運び込むと一脚の椅子に縛りつけた上で、ドヤドヤと出て行ってしまふ。入れ替って入って来たのは二人の婦人捜査官であった。二人共逞しく太った中年女で、深く窪んだ金壺眼を光らせながらこうした職業独得の陰気な冷酷さで、イーラを頭の先から足のつま先まで睨めまわすのであった。不気味な恐怖がイーラをおそって、今の今まで憤り狂っていた猿轡の下ウメキ声をピタリと止めてしまふ程の効果があった。

いや、声ばかりではない。全身が金縛りにあったように硬直して、たとえ手足が拘束されていなかったとしても身動き一つ出来ないようになてしまった。二人の大女は、その効果を見透したかのように、イーラの身体を椅子から解き放してしまった。猿轡もはずしてくれた。

相手が官憲でなければ、イーラはここで逃げ出そうと試みたかも知れぬ。しかし相手は

国家権力を後光のように背負っているのだ。たとえ、この二人から逃がれることは出来ても、外には大勢の私服捜査官がいるではないか。その上必要とあらば、彼等は市中の警察力を駆使することさえできる。これらの事実が無言の圧力となってイーラの反抗心を見る見る萎えさせて行つた。

「心配しないで。あたし達は何も、しやしないよ。ただ、役目だからアンタの身体検査をさせて貰うだけよ」

一人が思ひの外やさしい声でいった。

「サア、早く着物を脱ぎなさい。ぐずぐずしているとひどい目にあうよ。いくら主任さんがやさしくおっしゃっても、このあたしが承知しないからね」

もう一人がトゲのある調子で声高にキメつける。やさしい方の女が「主任」らしい。

その主任が、目を細めて

「シャヒさん。そんな乱暴なことをいっちゃあこのお嬢さんが可愛そうよ。ホラ、生まれながら、こんな手荒な目にあったのは始めてだという顔をしているじゃないの」

「でも……」

シャヒと呼ばれた女が頬をふくらせて、

「一寸甘い言葉をかけるとつけ上りますよ。
第一、お嬢さんお嬢さんしているけど、案外
カマトトかも……」

「お待ち」

主任がシャヒをさえぎって、

「さあ、いわれた通り着物を脱いで頂戴」

とイーラにもう一遍いったとき、その目が
キラリと光った。それがイーラをふるえ上ら
せた。唇をわななかせてサリィを解いた。美
しいインド更紗がハラリと床に落ちて、生命
を喪ったように動かなくなった。

「ブラウスもとって」

間髪を入れずにシャヒが叫んだ。

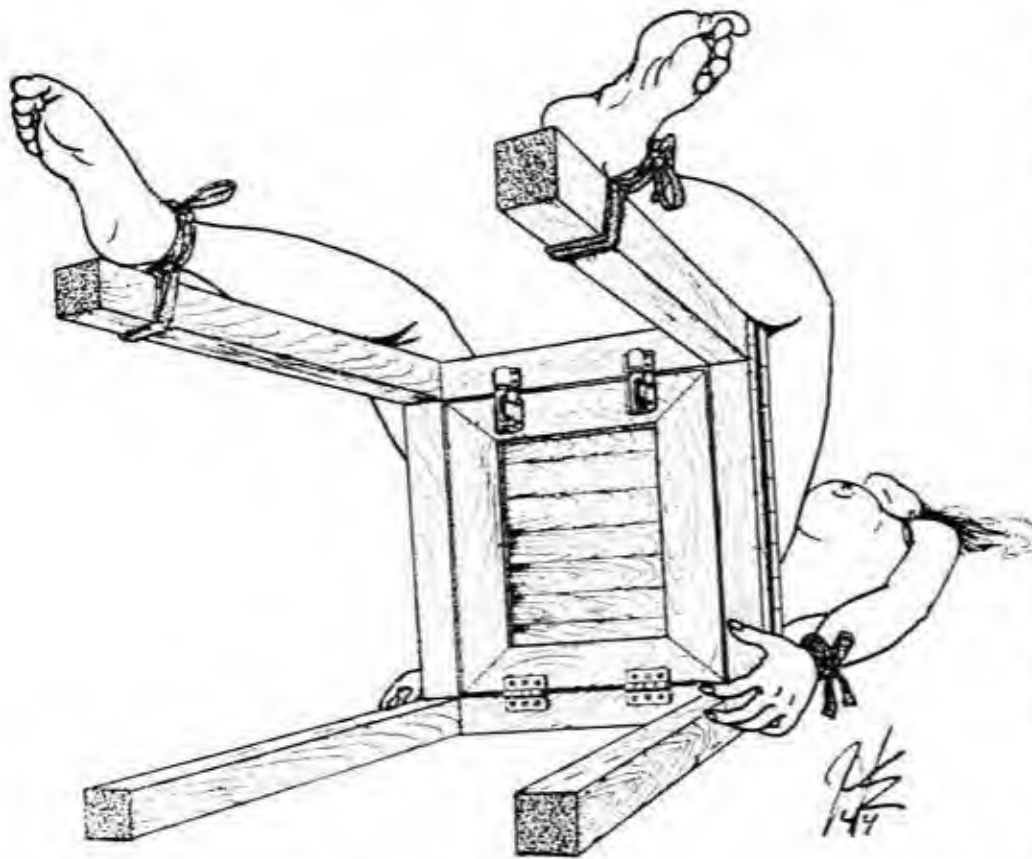
「いやです。もう——なにもかくしていませ
んから。お願いです。これ以上ぬがさないで
下さい」

イーラは美しい指を揃えて合掌した。

「お嬢さん。まえにもいったでしょう。あた
したちは役目なんですから、あんたの着てい
る着物を全部、隣の部屋にいる捜査官達に差
出して、検査をして貰わなくっちゃならない
のよ」

と主任が言うのに、

「つべこべいってると力づくでも引きむしっ
てしまおうよ」



とシャヒがつけ加えた。

目の前がクラクラするようだった。たしか
に此所は政府の機関である。相手は官憲であ
る。そして女だ。恥辱は恥辱であるけれど、
どうにも仕様がないうという諦めがイーラの心
中に生じた。

彼女は全身をまっかに染めて、最後の布切
れをとった。そして、はずかしさに思わず胸

をかかえて蹲み込んでしまう。

「どうか、何か着るものを下さい」

悲痛な声をふりしぼって哀願するイーラを
見下ろしながら、

「すぐすむから安心しなさい。その前に、ち
よっとこの椅子にかけて……」

と主任がいった。シャヒは、イーラがま
とっていたものを全部、ダンボール箱におし込
んで部屋の外へ出たけれども、すぐ又
とってかえして、今度は入念にドアの
鍵をかけた。そして、まだ部屋の隅で
二人に背をむけ、うずくまって慄えて
いるイーラを見ると、

「何をしているの、主任さんの声が聞
こえないのかいッ」

びっくりするようなシャヒの大声に
イーラはギクッとなった。ガクガクす
る足で、ようやく立上ると倒れるよう
に椅子に坐った。固く冷たい木製の座板
が剥き出しの肌に触れた。おぞましい
感触に、なめらかな肌がブツブツと鳥
肌立ってくるのだった。

「おや、忘れていたよ」

シャヒがイーラのネックレスに目を
つけてそれをはずした。小粒のダイア

をあしらったイヤリングもむしりとられた。

そして、可愛らしい小鼻に、インド風のアクセントとなっていたダイアさえ、あらあらしく鼻の穴に指を突込んで外そうとするではないか。思わず

「イヤッ」

とさけんで、シャヒの手を払いのけようとする。途端に、ピシッと頬が張られた。これも生まれてはじめての経験だった。鼻先がキナクさくなってポーツとなってしまう。それを呼びさまそうとするかのようにシャヒの怒号がとんだ。

「バカッ。公務執行妨害になるのがわからないの。それだけで事件にしてやってもいいから、覚悟をおし」

主任が横合いから

「さあ、このシャヒさんをオコらせると、あとあとまで後悔することになるのよ。いうとおりにした方がいいのよ」

と猫なで声を出した。興奮のため何が何だかわからなくなってしまったイーラは、夢中でうなずいたのである。こうして、装身具も一切とり除かれると、イーラはいよいよ生まれたままの姿となってしまうことになる。

「口を大きくあけてごらん」

主任がいうので、オズオズと口をあける。

小さな舌先がチョロリとのぞいた。

「もっと大きくッ」

シャヒが例によって大声をかける。あわてて歯医者にもかかるときのように、あけられるだけ大きく開いた口を主任が丹念に検査して言った。

「よし、口の中には別に細工はないようだ」

一方で、シャヒがイーラの髪をメチャクチャにほどいていた。口のつぎは、鼻の穴、耳の穴まで調べられる。

「さて最後に……」

といって主任が立上った。不意に後に回ったシャヒが椅子の背ごとイーラの胸を羽交締めにした。ものすごい力である。

「ヒイーツ」

イーラはありったけの声を出した。

「最後の検査ばかりは、おとなしくしろっていつでも無理だからね」

といいながら主任は手馴れた動作で要所要所を紐で縛って行った。それで、シャヒが手を放したときには、イーラは全く身動きも出来ないように椅子に固定されてしまっていたのであった。

二人はイーラを椅子ごと持ち上げると、部

屋の片隅に置いてあったテーブルの上に、イーラが仰向きになるように置いた。そして、イーラを極度に狼狽させるような出来事が起こったのである。

カタリ、と音がしたかと思うと、スーッと股下のあたりが涼しくなった。木製の座板が蝶番で落ち込むようにはずれたのである。縛られているイーラには見えなかったけれども腰掛けている座板がなくなれば、どんな状態になるかということだけは理解出来た。

「オー、ノー」

絶望のあまり、言葉にもならない。

「そんなに驚くことはないよ」

狼狽するイーラの頭上から声が降った。

「検査するだけさ」

「これから先はあたしたちでやるわけに行かない。越権行為になるからね」

主任の声が聞こえた。

「専門のお医者さんによく診て貰うんだね。」

ハハハハハハ……」

シャヒが男のような声で嘲笑した。二人が出て行く音がして、入れ替りに一人の靴音がコツコツと近づいてきた。

(未完)

濡れにぞ 濡れし

若

布

酒

芳 野 眉 美

今年の冬はブーツの女性が多い。防寒とおしゃれと流行の魅力にブーツブームになったものだろうが、通勤の殺人的なラッシュアワーにも原因がありそうに思える。ハイヒールでは、とても乗車できる状態ではないからである。ブーツなら安心して突進できる。

若い女性のブーツで感心しているのは、短いブーツをおっかなびっくり、恥ずかしそうにはいていた頃と違って、ひざ下すれすれのロングブーツを大胆にはきこなしているというところである。

短いブーツは、大根のようなあしを、より以上に太く見せて男からは悪評であった。ロングブーツのほうが、かくされて足の線がきれいに見えるわけである。

ミニスカートの流行がブーツの人気を呼んだことになっているが、ファッションの宣伝力は、まったくたいしたものだと思う。オフイスレディはミニスカートは少ないが、ミディでもブーツの愛好者は多い。むしろ、ミニスカート族より一般化してしまっただろうと思う。



泰

35センチのロングブーツが人気らしいが、ひざ下すれすれのロングブーツをはくなら、やはりミニスカートにしてもらいたいものである。冬でもそのほうがカッコがいい。春なら春霞にうたれていような状態に男どもを悩殺すること請合いである。

雨の日など、男はあいもかわらずゴム長でしょぼしょぼ歩いているのに、ロングブーツでさっそうとしていられると、まったく現代は女上位じゃないかしらと、ゴム長のうすっぺらな感触（ゴムマニアの方には失礼だが、

この場合はカンペンして下さいが、なさけなく、みじめになるのである。

三月号にかいた「ストッキングブーツのレミ」のような、足のつけ根まですっぽりと包んでしまうストッキングのようなロングブーツは、まだまだモデルさんたちの世界だけのものだろう。伸縮性のある合成皮革の開発は足の魅力をあらためて、のっかることしか知らない男どもに認識させたわけである。

——とまあロングブーツ礼讃のようなことを書いたものの、ハイヒールの女性は、やはり女性らしくて最高だと思う。別にブーツに反逆しているわけではないが、皮革の生活感情が欧米と違うのだから、好みをそう簡単に変えるわけにもいかない。

ストッキングにも種々な変化があつて、色もののストッキングから、網目のもの、がらものと多種多様に発売され、ブーツと同じように流行しているのは珍しい現象だと思う。ものめずらしくて、女性のストッキングをじろじろ見るという失礼なことを平気でしてしまうのだが、舞台衣裳と違って、どうもパツとこないように見受けられる。

サイケ調がはやるにつれ、従来の人肌のナチュラルストッキングが美しく見えて仕方が

ないのである。はいているのか、はいていないのか、わからないようなストッキングの忘れられていた魅力が、かえって再認識されたのかもしれない。

黒い網のストッキングとロングブーツのミニスカートの若い子より、登校中の女学生が、はったい黒の、なんでもないストッキングが、はっとするような美しさを秘めているのに気づくのである。

かなり天邪鬼かもしれないが、美しいものは美しいのである。

満員の階段で（表現が少しおかしいが）、前の若い女性のハイヒールに触れたのか、片足が脱げて私の前に残ったことがあった。国電の客で立ち止まっていられない状態だったのである。

「あっ」

と、その女性は叫んだ。とっさにその脱げたヒールをつかみ、その女性の前に置いた。

うしろを振り向きもせず、ヒールに足におさめ、うつむいたまま階段を上って、私の視野から群衆にまぎれて消えた。

その女性の顔は知らないが、脱げたヒールのあたたかい感触が、妙になまめかしく性感をくすぐったのである。

私の顔を見なかったのは、羞恥のためかもしれないと考えた。この場合、脱げたヒールをひろって彼女の足元に置くのは、私でなくてもかまわないわけである。

見も知らぬ男に脱げたヒールを手でつかまれたという事実が、彼女にとっては振り返ることも、礼をいうこともできないほど、恥ずかしいことだったのに違いない。ハイヒールには、男の考えがおよびもつかないほどの、若い女性の微妙な羞恥心を含んでいるものなのだろう。

彼女の脱げた、顔も知らぬその女性の、体温の残るそのハイヒールに、接吻しなかったことが、あとあとまで、くやまれた。

残念でも、駅の瞬間的な出来事であれば、脱げたヒールに残った彼女のあたたかい足のぬくみの感触を、いつまでも忘れないのだろうと思うのである。

靴を脱ぐということが、これほどすばらしいものだとは知らなかった。

一月十五日

この日ばかりは、日頃はロングブーツのお嬢さんも、中振袖の訪問着で淑やかになる。一人では着られないから着くずれたら最後で

ある。従ってデートしても帯を解くわけにはいかない。彼女を抱くにはそれなりのテクニックが必要になる。俗称、昆布巻とはこのことらしいが、未経験だからくわしいことは知らない。高価な訪問着を汚されたくはないし抱かれたとしても女性は気が気ではないだろう。また、この点に加虐的な（被虐的な）悪の愉しみがあるのかもしれない。

訪問着が白一色の画一的なのは気に入らないが、成人式とあらば、結婚式は白無垢と相場が決まっているし、やはり白の清楚なお嬢さん方の氾濫となるのは仕方がない。

中振袖でも、かなり袖が長いから、「おトイレのとき、袖がじゃまになって困るでしょう」

と店に遊びに来た訪問着の娘さんにきいてみた。

「どういふふうにするの」

「エッチ」

「うちのトイレで袖を汚してしまったら私の責任ですからねえ。よろしかったら、その間うしろから袖をお持ちしましょうか」

昔風でいえばお女郎さんだが、朝起きて洗面するときに、うしろから抱きかかえるようにして丹前の袖を持ってくれる優しいひとが

いたものである。袖を持つささやかな仕草に昨夜の甘い余韻が残り、ほのぼのとした暖い彼女の体温が背中につたわって、ホンワカとした気分になり、部屋にもどるなり、また布団にひきずりこんでしまったものである。

遅い朝であり、彼女との別れを惜しんでいるうちに時間を忘れ、大学の年末試験（文学部は年に一度だった）を放棄してしまったことさえあった。

トルコが味気ないという中年の男性が、お女郎さんを知っている経験者に多いはずである。トルコを最高に上手に使っているのは、SMプレイに徹するその道のベテランの方々であろう。

脱線しすぎました。

「袖を肩にかついでしまうのよ」

と一人の勇敢な女性がいった。

「それでうまくしゃがめるの」

「裾も気になるから中腰になっちゃうわ」

「話だけではどうもよくわからないから、見せて頂けると有難いのですが……」

「馬鹿」

水洗では、その飛沫が足袋に散るかもしれない。振袖の娘さんには、三月号の「濡れにぞ」で紹介したが、長崎の「廁のいろいろ」

のような廁が似つかわしいようである。

ロングブーツなら洋式でもサマになるが、振袖と草履ではサマにならない。

「袖を胸のところで縛るのですよ」

と彼女たちにトイレの作法を伝授した。といっても、又聞きなのだけど。

「それに、なるべくなら、おパンティは穿かないほうがいいですね。トイレに行く度に着くずれてしまう」

「御心配なく。着物用の小さながあるんです」

「伸縮自在で、いちいち脱がなくてもいいのもあるのよ」

「それは知らなかった。見せてよ」

「スケベ」

「あら、はしたない」

「お見せしたくても、わたくし、何も穿いておりませんの」

「そうね、純毛のあたたかいのを穿いていらっしゃるから」

「WH」

「純毛でもいいから見せて」

「知らない」

コーラで彼女の顔が赤くなった。

「困ったわ」

と一人の彼女が、もじもじした。

「そんな話ばかりするから、トイレに行きたくても行けないじゃない」

今年の正月といい、成人式といい、塩酸魔が出現しなくてよかった。こういう変質者は絶対に許せない。

店に日本人形（芸者）と朝鮮人形（プレゼントの品だが）が飾ってあるのだが、チョコリ（襦）とパーチー（袴）を着て見せてくれた娘さんがいた。御存知のように、朝鮮服の上衣は短く、下はフランス人形のように長く深く広がっている。

そこでまたトイレの心配。成人式を迎える女性のお客様に、いちいちトイレで頭を悩ましているのだから、世の中は楽しいものである。

ミニスカートの流行のせいか、クラシックロマンがファッションの基調のせいか知らないが、ミニドレスでもワンピースでも、ハイウエストにしている若い女性に気がつく。

バストの下にポイントを置いて、飾りもベルトも乳房を盛り上げるようにするから、乳房の魅力がまた一段と光り輝くわけである。

朝鮮服は、そのハイウエストの代表のようなものだから、若い女性をことさら美しくし

ているのだろうと思われる。

そして、着物もハイウエストだから、成人式に出席する訪問着の女性たちが、むやみやたらに美しく見えるのだらうと思う。

「それでは、われわれも成人式に出席することにするか」

と、日本人形を見ながら相談が決まった。「そうですね。やっと成人したから童貞を捨ててもいいでしょう」

電話がしてあったらしく、綸子の着物の芸者が二人、それぞれの横に侍った。若い。

綸子の美しい光沢や、滑らかでやさしい肌ざわりは好きである。

酒席が、かなりはずんでから、
「あたたかいところに参りましょう」
と仲居さんが促した。

緋の長襦袢になった姿をみると、彼女の華美な伊達締めが、きゅっとくびれた腰に巻きついている。

「寒いわ」

と寄り添うから、抵抗なく彼女を迎えてしまふ。長襦袢の上から彼女の腰をまさぐり、

「ウエストはどのくらい」

「50センチぐらいかしら」

最近の若い女性の平均ウエストは60センチ前後だから、小柄な彼女にしては当然の数字と見受けられた。

長襦袢の胸をかきわけると、白いふくよかな乳房がこぼれた。ほっそりしているわりには豊満な乳房であった。

伊達締めの結びに手をかけたとき、彼女はふっと溜息を洩らしたようであった。解き易いように心持ち腰を引く。

結び目を解いたが、ひとまわり残して伊達締めを、きゅっとしぼった。

「痛い」

そのまま結ぶ。

「苦しいわ」

乳房は晒^{サラシ}で、きちんと締めつける。お尻と

腹部は腰紐でウエストまで持ち上げるように締め上げる。その上から帯でがっちりとおさえる。着物を美しく着るコツだそうである。

これでは帯がコルセットの目的に使用されたとしても、胴を細くくびれさせ、乳房を持ち上げて大きく豊満に露出させる、本来のコルセットの目的とは完全に逆になる。

「お乳の下から腰紐で締めつけるから、コルセットのようにはいかないわ」

と彼女はいった。そこだけが蜂や蟻のよう

にくびれている伊達締めを、苦しうにあえぐ彼女の腰からはどいた。

私の親指と人差し指の間隔は約15センチ強である。(男の標準よりは小さい。念のため)ほどいた伊達締めを指の間隔ではかる。

「30センチ強、というところかな。かなり細くなるね」

二月号の「濡れにぞ」に書いたが、35センチ強のコルセットをつけたスーザン嬢は、それで日常生活を送っているわけだから、私が伊達締めで彼女のか細い腰を締め上げたのは立場が違う。

いきなり上からたたきつけられるように抱きつかれて、舌を噛まれた。

「成人式だなんてウソでしょう」

「ウソじゃないよ」

「はじめはそう思ったの」

「はじめからそうですよ」

「違うわ。童貞なんてウソ」

「今日は、童貞ですよ」

女上位の顔を見上げて唇を求めた。

「わからないわ」

「俺もわからない」

彼女、二十三才だが、自前で、数人の芸者を抱えていると、ここの仲居さんがいって

たっけ。ヤリテなんだな。

芸者のいる家を置屋。抱えはこの置屋に住んでいる。自前は独立して、置屋をかねた家に住み、通いはアパートから置屋に通う、そうである。

廊下に仲居さんの声がしたので、銚子を二本たのみ、部屋を暗くした。仲居さんが銚子を入口にそっとおくのを待って、枕元の行灯風のスタンドをつける。

「成人式の盃を頂きたいのですけれど」

夜具をはねのけて、緋の長襦袢の裾をはだけ、

「膝をあげて」

「内腿をぴたっとつけて」

いやおうなしに彼女にいった。

銚子をかたむけた。

「いや」

まっ白な内腿に酒がこぼれて、くすぐったいのか、膝を動かした。酒は白肌を流れて脛につたわった。

あわてて唇が追う。すんなりした細い脛に口をあてて、酒を吸う。

「今度はもっと上手にするわ」

何もいわないのに、上半身をそらせて優雅な谷間をつくり、彼女は私にいった。銚子の

酒はダムをつくった。彼女が少しでも体を動かせば、布団が濡れてしまう。

恍惚となった。

「早く、飲んで」

彼女のなめらかな肢体が微妙にゆらいで、苦しうにつぶやいた。

「早く……」

新春の若布酒であった。

大映の「貴三郎一代」では、勝新太郎が淡路恵子に、ヘソ酒をするシーンがある。原作(有馬頼義)では、ヘソ酒はヘソ下三寸に流れてすることになっているけれど、映画では脇腹にこぼれて、それを勝新が吸う光景になっていた。

面白いことに、最近、ピンク映画の三本立てで、このヘソ酒のシーンにぶつかったのである。題名を忘れてしまったが、温泉マークの女中が、中気の旅館の主人のためにヘソ酒をしてやるのだが、彼女のヘソのまわりに酒がちよこなんとたまるのがとても楽しかったのである。

それを、主人がスプーンですくって飲むのがまたおかしかった。このシーンを考えた奴はよほど頭のキレル奴に違いない。ほほえましいシーンで、ピンク映画ならでは、こうは

描けまいと感心したのである。

いつ会えるかどうか分からないが、もし再び彼女に会えることが出来たら、ユーモラスなヘソ酒でもしてみようと思っている。

彼女の名は、有名な流行歌手と同じ名前であり、私は、この流行歌手の歌を聞く度に、彼女を思い出すわけである。

それにしても、よく、下にこぼれなかったものだ。人肌の酒とはこのことだろう。

三十九年十一月十四日の東京新聞朝刊に、『有害雑誌指定の第一号——都青少年条例を適用』

という見出しがあった。

「青少年の不良化を防ぐため東京都は青少年条例をつくり、有害図書・の追放を計画していたが、その第一弾が十三日開かれた東京都青少年健全育成審議会で決まり、東京都知事に答申した。ヤリ玉にあがったのはエログロを売りものにする八雑誌で青少年には売ったり貸したりできなくなる」

その有害八雑誌の中に、SM関係では、裏窓、奇ク、風奇（いずれも十二月号）が指定されているのは、御存知の方も多いことだろうと思う。裏窓（あまとりあ社）は、すぐに

サスペンスマガジンとして再出発して指定を逃がっている。

『審議会は十三日午前十時から都議会第五委員会室で開かれた。出席した委員は、業界保護者、学識経験者、関係官庁と都側代表計十八人』

『審議会は話し合いのすえ、八雑誌とも条例第八条の不健全な図書類、いちじるしく性的感情を刺激し、またははなはだしく残虐性を助長する、ものとして、不良図書に指定することを決めた』

『指定を受けた図書類は十八才未満の青少年には売ったり貸したりすることができなくなり、これに違反した場合には警告を発し、きき入れないときには三万円以下の罰金を科される』

以上が、おおまかな記事である。

小見出しがあり、

『指定放任の恐れも——立ち入り調査員は十六人なので十分な監視は期待できず、指定のしっぱなしということも考えられる。対策として調査員の増員を検討しているが、結局は業者の自粛と家庭の協力がものをいうことになりそう』

指定はしたものの、その対策はゼロという

のが本心なのは、あくまで十八才未満の青少年対策であり、多くの読者である成人ははいっていないから無理もない。

しかし、奇クを開いても、巻頭に、

『本誌自粛の徹底』

とあるように、業者の自粛に待つより方法がないとは、人間性を無視した有害雑誌の指定に対する痛烈な皮肉のように思われる。

家庭の協力というが、放任主義の多い日本的な家庭に、協力をもとめるのは土台無理である。親子の対話というのが最近流行しているが、時代の差というのはどうしようもないらしく、親子で話が合う家庭など皆無といっているのではないかと思う。

ともあれ、さまざまな社会的制約で縛られているとはいえ、通刊二百五十号に、心からお礼をのべ、読者の一人として感謝する次第である。

古新聞を持ち出したのは、リーダーズ・ダイジェストの二月号に、アメリカの現代作家（南太平洋の著者）であるジェームズ・A・ミッチェナーが、

『わいせつ本を追放しよう』

というのを書いているのが目にとまったからである。

『……それはただの好色本でなく、サディズムとマゾヒズムと暴力とを扱った残酷性に満ちたもので、ところどころにセックスを加味して、魅力を増し興奮をかきたてるように書かれてあった。そのセックスも、変態的で、ぞっとするほど残酷だった。』

それは、男が女を虐待するサディズムの要素、男が女に頼んで自分を鞭打たせるマゾヒズムの要素、男たちが女を殺す暴力の要素を兼ね備え、おまけに男女の正常な性関係に付ひとことも触れず、さまざまな異常な行為をあたりまえのものとして並べたてた変態的なものだったのだ』

これが発端。以下、ミッチェナーの考え。

『私はセックスの熱烈な支持者である。セックスは人間のあらゆる経験のなかでとりわけすばらしいものであり、人類が種族保存を行なう神秘的な手段である。そればかりか、セックスは人間のすばらしい快楽の源泉でもある。私の経験では、セックスは心を高めてくれる、楽しく、やさしいものであり、しかも人目をばかすものではあるが創造的な営みであり、こういうセックスの自由を減じるような動きには、私は絶対に反対である』

かくして、ひとりよがりの独断がでる。

『私が昨今のセックスサディズムの氾濫に反対しているのは、ある特定の明確な理由からであり（註、変態的なセックスと暴力を扱った本が十代の青少年の手に渡ることを新しい法律をつくってでもくいとめる必要があるということ）それに対して反論の出る余地はないものと思っている。』

といいながら、

『好色本をちょっと読んだからといって、あとまで害が残ったりするものではないというところぐらい私も知っている。私が云っているのは、そういうことではない。私が云いたいのは、こういう類の書物や写真などは子供の生活にはまったく必要のないものだということである』

やや混乱した感がないでもない。

以下、検閲制度の問題なので下略。

要は、青少年を悪書の影響から守る問題と検閲制度の是非を、混同してはならないということらしい。

青少年向きには検閲制度を認め、芸術におけるセックス（例えば、D・H・ローレンスの有名な八チャタレー夫人の恋人V）は認めるなどということでしょう。虫がいいといえれば虫がいい。芸術作品と称されている小説の中

のセックスの描写には、かなり卑猥なものがありますからね。

さて、ミッチェナー御自身としては、

『倒錯とサディズムと残酷が氾濫している作品こそ、私たちの敵なのだ。先日、私は、最近どのようなものが公然と売られているのか調べてみようと思って、一冊の雑誌を手に取ってみた。それには、二人の青年が互いにさまざまな倒錯行為を行なっているヌード写真がのっていた。私は激しい嫌悪を感じたが、別に何の害毒も受けなかった』

という程度の性知識しか持ち合わせていないように見受けられる。いわゆる正常な性関係しか御存知ない。片寄った論文になっても仕方がないことである。

そこで非常に素朴な疑問。悪書問題はアメリカも日本も同じなのですが、かならず正常な性関係とか、異常性慾と区別して論じられているのが通り相場。セックスに、正常と異常の区別があるものなのでしょうか。男女でも、男男でも、女女でも、セックスはセックスで、区別するほうがおかしいのではありませんか。

倒錯と呼ばれるセックス、サディズムと呼ばれるセックスはいつも集中攻撃を受けて、

残虐性だから、暴力否定と目の敵にされることになっている。暴力と残虐性がそれほど気になるなら、戦争反対を連呼していたほうがまだましだと思います。強いて、理由をつけているようにしか受けとれない。もっとも暴力と残虐性を否定することは、人間抹殺と同じことでしょうが。

子供の生活にまったく必要のない、などとあたりまえのことを書かねばならないのは、よほど理由をつけるのに苦心したものと思われまします。どんな本でも、影響を受ける人は受けるし受けない人は受けないものでしょう。これもまた、わかりすぎるほどあたりまえのことです。

でも、このあたりまえのことが、日本でもアメリカでも問題になる。

いかにセックスに無知な人たちが多いかという証拠でしょう。そして、セックスと聞いただけで、わいせつだ、いやらしいという人たちのなんと多いことなのか。自分自身に対してそれほど偽善ぶる必要がどこにあるのか不思議でならない。

青少年には売らない。それはそれでいいと思います。それほど心配ならば法律を作ってもいいでしょう。しかし、それだからといっ

て、成人向けのSMに関する本を弾劾するのは、はなはだ筋違いだと思ふのである。青少年の悪書問題と、成人の善書とをひとまとめに論じるのは、混同もはなはだしいどころか不自然だと思ふのである。

切り離して論じてもらいたいものである。セックス本論というべきものを展開し、すべてを認め（成人には良書であると）かつし、青少年には不向きであるから売ってはならない法律を作る、青少年には検閲制度をもうけるというなら、立派な論文であり、私など反論しようがないのである。

有名なアメリカの現代作家の性知識がこの程度であれば、悪書問題はいつも混同というやっかいな美名のもとで、馬鹿々々しい議論を繰り返さなければならぬのだらうと思われる。

『わいせつ本を追放しよう』を、実は期待して読んだのだが、失望しただけであった。

といって、アメリカの偉大な作家に、別にうらみがあるわけではない。たまたま、本誌二百五十号にあたり、あまりにも無理解な、（理解をしようというのではなく）常識というものに腹が立ったからにすぎない。

ジェームズ・A・ミッチェナー様。失礼し

ました。暴言はお許し下さい。

『年をとるにつれて、私は芸術におけるセックスの力の大きさに、ますます感銘を受けるようになった。シェイクスピアの悲劇の絶品ハロメオとジュリエットからベルディの歌劇「アイーダ」を経て、現代の小説や戯曲の傑作に至るまで私のこの感銘は変わらない。もし私の住んでいる社会が、セックスというこの最大の題材を芸術家から奪うような挙に出たら、私は心から慨嘆するであろう。検閲というものには、私は体質的に反対なのである。』

追加。二月三日の節分は、常連のバーのママから、一合研にいられた豆をだされて気がついた。鬼は外、福は内の声を、この頃あまり聞かなくなった。年だけたべなさいといわれて、二十粒とった。成人式を迎えたばかりですからね。

悪友と外に出たとき、お座敷帰りの、一月十五日の彼女にばったり会ってしまったのである。

「あら」

にやりとして、喫茶店を指差した。悪友に彼女の若布酒の話をしたばかりなのである。

唇に手をあてて悪友に合図した。海産物の話は禁句だぞ。

夏のお座敷着は紵で、紗は外出着ね、だとか、夏でもサラシを巻くのは、帯に汗がしみるととれないからよ、とか、もっぱら着物の話を引き出した。とにかく、着物に就いてはさっぱりわからない。

白っぽい綸子の着物のときは、あかい長襦袢はさけたほうがいいでしょうね。水色だとか薄いものを選ぶわね。そんなものかと、二人して拝聴した。

「帯が胴に食い込むように締められているのはどうなのでしょう」

「下手な着付けね」

と彼女は、あっさりいった。

「下手なのですか」

少々がっかりした声をだした。下手といわれては、帯がコルセットになる夢は捨てなければならぬ。

「今年も成人式の日に着物が多かったでしょう。帯なんか自分で締められないから、結んでもらうわね」

彼女はこちらが何を考えているのか、そんなことは少しも気にしないで話を進める。

「着くずれしないようにって、うしろからギ

ュッと結ぶから、帯が胴に食い込んでしまうのよ。みっともないわね」

コルセット帯は、着物を着たことのない、お嬢さん方に多いという結論であった。

二月十七日号平凡パンチに、

『華麗なる女の Uching』

という特集がある。

その中の『Osikkoを売る女たち』は、野末陳平対談で、奇くで既に発表済である。SMの男、というのは津川氏のことだろう。

洋式トイレに坐るフオトと、宮本勲のイラストがのっている。洋式の場合は、彫刻が台におさまっているようで、誌上に発表できるのかもしれないが、清潔すぎてどうということはない。

和式のほうが色気はでるようである。

医学的な解説――

『膀胱から尿道口までが女は短いから、放水するときビシッビシッと勢がいい。』

その騒音をゴマかすために、女はしゃがむとすぐ水を流す。

しかし、腔のしまりぐあいを調節できるほどのベテランなら、小出しにOsikkoすることができる』

神酒拝受には、こういうベテランをさがせばいいということでしょう。

『Osikkoが腔に流れ込むことはない』

そうである。以上、駕海正平医博。

『私ってね、女の口とトイレに入って、Osikkoするところを見せ合うのが好きよ』

というOsikkoレズあり。

『私は抱かれるとOsikkoがしたくなるの』

だからニックネームがセミ。

『Osikkoしながらアソコに触れると、ただOnanするより快感が大きいワ』

以上、福島品子カメラマンの話。彼女曰く

『そのコはね、オルガスムスに達しながら、Go Go っていうの。そこまでは当たりまえなの。ところが、腔がゆるむと同時に後ろの門もゆるんじやうのね。Unko しちゃうの』

Coprolagniaには最高の女性でしょうね。

こういうコに会ったとしたら。

『だって勢よく出るときにクリトリスがシゲキされるのよ。クリトリスがジーンと遊んでいる感じがステキなんだもの』

デザイナー椎名アニカさんのお話。かくて女は自然にOnanをおぼえるというわけ。

宇能鴻一郎のしめくくりの話。

『平仲物語に好きな女の Unko を食べる話が

あるが、ホントに惚れぬいた女のものなら、きつといい味がするにちがいない。匂いも香ばしいだろう。

「だいたい、お産のときにはOsikoやUnkoも出る。刺殺されたり、ショック死するときもそう。つまり人間、Unkoにまみれて生まれ、Unkoにまみれて死ぬのだ。この冷徹な事実を知って、もっと女のUnkoやOsikoに暖かい目を注いでやろう」

「かいつまんで紹介しておきました。」

「——てなことを書いていると、ドアが静かにあいて、

「おひとりですか」

と満足しきった顔をしたクレイジードクターが入ってきた。時間からして遊んで来た帰りで見受けられた。

「お土産です」

カウンターに、大切そうにかかえてきたコップを置いた。琥珀色の綺麗な液体がゆれている。

「お土産」

「タクシーで飛ばしてきたから、少しこぼれてしまったけど、まだあたたかいですよ」

ようやく意味がのめこめ、あと思った。

「あの……」

「そうですよ。あなたに飲ませたくて、いただいてきたのです」

「あそのママの」

「そうですよ」

「飲ませてくれたの」

「話だけでは信用しないでしょう。だから証拠を持ってきたのです」

「ホント」

クレイジードクターはコップを持ち、おいしそうに一口飲んだ。

「いかがですか、ママの神酒を一杯」

「俺は弱いんだな、その間接ってヤツは」

「それは知っていますよ。直接でないと絶対飲まないことぐらい。でも、あそのママのなのだから、少しぐらゐは味わってもいいでしょう」

ドクターはいつもサントリールオールドのオンザロックで、私も同じものを飲むたてまえから、えんりよなくオールドのロックを飲むのだが、ママの美しいのをチェッサーのかわりにして、ドクターは私にみせびらかしながら舌づつみをうつのである。

あまりおいしそうなので、ウイスキーを口に含んでから、

「せっかくタクシーで運んでくれたその行為に感謝して、では、ほんの一口」
コップに口をつけた。

「これがあのママの……」

「Urineとは思えないでしょう」

「思えない」

「だから、間接では飲まないと知りながら持ってきたのですよ」

奇妙で面白い友情だと思った。

「では、えんりよなく、もう一口」

ウイスキーではない。あこがれの美人のママのギムレットを、二人は交代に口に含んでは、これほどの幸福はないという顔をしたのである。

「これからママの店に行ってみませんか」
かれこれ十二時になろうとした。午前様になる。

「まだやっているのですか」

「スナックだから」

「じゃ、行こう」

決まれば行動は早い。タクシーを飛ばしたが、クレイジードクターは、行ったり来たりでまったくそがしい。深夜で飛ばしても、三十分はかかる。

階段を上る。小さなスナックは満員であっ

た。客がいるのもかまわず、

「女王さま、立って飲みますから、ビールを下さい」

と彼はいった。酔ってはいないのである。

半分ほど客が帰り、私はカウンターに坐ってママの顔をまともに見ながらビールを飲んだが彼はボックスから動こうとしなかった。

女王さまと同じ位置ではおそれおおいというのである。ボックスに坐れば、カウンターのママを仰ぎ見ることになる。

ボックスに身体をのりだして、彼に耳打ちした。

「トイレはそこでしょう。客がいたのに、よくコップにもらってこられましたね」

小さなスナックでは、トイレは部屋の一部分と同じで、カウンターからでも目と鼻の先なのである。

「メモに、おめぐみ下さい、と書きましたからね、トイレにママが入って、コップにしたのをバケツの裏にかくしておいてくれたのですよ」

ママがごみバケツを持ってカウンターから出て来た。外のポリに捨てるものらしい。

「女王さま、私がいたします」

と彼は追いかけて階段のところに出て行っ

たが、勢いあまってバケツをひっくりかえしてしまったらしい。

「馬鹿、掃除をおし」

ママのよく透る美しい声が聞こえてきた。残っていた客たちが顔を見合せて笑った。

「酔うとね、あれが彼の癖なんですよ」

と私は、その場をとりつくろった。

ママがカウンターにもどり、客にビールを勧め、オンザロックをつくったりしたが、彼はなかなか店にもどらなかった。ゆっくりと丁寧に時間をかけて階段を掃除しているらしかった。

ママもカウンターに腰を掛け、雑談していると、ようやく掃除をおえたらしく、のろのろとドクターが入って来た。

「終りました。女王さま」

「御苦労だったね」

「ほかに御用事はございませんか」

「別にないわ」

「それでは、女王さまのオミアシをおもひたしましょう」

スナックの床に坐り、ママのすらりとした脚をかかえ、呆然としている客のしている前で、彼はママの脚をもみ始めた。

「だいぶこっておいでですね」

「一日中立っているのですもの、疲れるわ」
「私がカウンターのの中に入って、椅子のかわりでもつとめましょうか」

「それはいいけど、ほかのお客様が気味悪がるわよ」

「見えませんよ」

「コップを洗った水がはねるわよ」

「かまいませんよ」

「かなり、スケベですな」

と客の一人がいった。

「スケベなんてものじゃないですよ」

と私は答えた。

「こんな愉快な光景を見たのは、はじめてです」

「私だってはじめてですよ」

「もういいよ」

とママはドクターにいった。そのままトイレに立ち、出てくると、

「お前を残しておいたよ」

ほかの客はなんの話かわからなかったに違いない。

「有難うございます」

ドクターは、そそくさとトイレに入り、入ったと思うとすぐボックスにもどってきた。

華麗な琥珀のあたたかい液体でみたされた

コップを、おそろおそろ両手で持って出て来たのである。

「おやまあ？ トイレで飲んでしまうかと思っただけに」

ほかの客の手前、いくらなんでもギクリとした。

「せっかくのものを、もったいなくて、一人で飲めますか」

少し前、私の店で乾杯したときより、更に新しく妖しい味が舌をしびれさせた。

「ママもいかがですか、一杯」
とんでもないことをクレイジードクターは叫んだ。

「馬鹿、誰がそんなもの飲めるものか」
カウンターに坐っていた客は、なんの話かわからないにせよ、彼とママのやりとりには

驚いたことだろう。

「そういう意味じゃないのですよ。ママのがこんなにもおいしいのが、わかっていただけたかと思って」

「飲まなくてもわかってるよ。お前たちだけじゃないんだよ。飲ませてくれとうるさくまとわりつく男は」

「それはわかっています。本当にすばらしい味ですから」

「それだけわかっていればいいよ」

三時頃、残っていた客が帰り遠慮は不要とみてか、ママがまたトイレに入ったとき、彼はトイレのドアの前にペタリと坐って哀願したのである。

「女王さま、私を便器にして下さいまし。女王さまの神酒を、私の口にいただかせて下さ

いまし」

ひたいでコツコツとトイレのドアをノックして、何度も頭を下げるのである。

「いいよ、ドアを開けても」

女王の声が、天の岩戸の向こうでし、彼は喜びいさんでドアを開け、トイレのタイルににじりよった。

スナックにありがちな、男女兼用のトイレであれば、白い便器を包んだタイルは、男が立つところは低くなっている。

「便器に頭を入れて寝てごらん」
小さな個室で、彼は背広のまま、きゅうくつな姿勢をとった。

女王は私の方に顔を向けたまま、意味ありげに微笑んだ。

「失礼ですけど、女王さま、えんりよく拝見しますよ」

と私はいった。

「いいよ、見ていても」

女王はミニスカートをあげた。

二月七日のことである。

彼が神酒拝受を終った瞬間、階段に客の足音がした。まったく間一髪であった。

(終)

(カット・春川ナミオ)

天星社刊

《限定版グラビア写真集》 在庫案内

山原清子「刺青の魅力を探ぐる」 一部一〇〇〇円(送共) 略号「美7」

◎刺青の女王の魅力を抉ぐり出し、その美しさを最高度に発揮した緊縛フォト結集版。

M写真集「女王様に飼育される日々」 一部一〇五〇円(送共) 略号「M特」

◎M男性が色々の女王様に奉仕し、飼育される生態のかずかずを網羅した写真資料。

◎以上の写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いいたします。

〔告白体験〕

我がSMプレーの実態

幸 崎 健 治

私も御多聞にもれず、SMプレーの大ファンである。妻と結婚以来、二年半の間苦楽を共にして来たが、最近になって、ようやくSMプレーを理解して呉れる様になった事を何よりのよろこびとしている近況である。

結婚当初は、SMプレーをそれとなく誘いかける私に対して、アブだと云って拒否していた妻であるが、私の執拗なまでの説得と、ちょっとしたきっかけから遂に屈伏し、今では土曜の午後から夜にかけて、素晴らしい時間を持つまでに至った。妻を説得するにあたっては、SMプレーの実態と意義を説明する資料として「奇ク」をこよなき武器とさせてもらった事は云うまでもなく、その点改めて感謝の意を表したい。

SMプレー開始以来いまだ日も浅く、現在の所、満足出来るとは云い切れないが、少なからずプレーによつての喜びを感じるまでに至った妻を見るにつけ、目的到達迄の全行程のおよそ三分の一を克服したものと、自分なりに満足している次第である。

さて、私達のプレーの場所であるが、自宅では私の母が同居している関係上、思い切ったプレーは望めない。したがって比較的部屋代の安いホテルを利用する事にしている。月二回ないし三回のホテル代は決して楽な出費ではないが、最高のムードの中で最高のプレーを望む以上、それは仕方のない事と思っている。

幸い、土曜日は私も妻も半日勤務であるが

妻の方は何かと雑用があり私より幾分遅れてホテルへやって来るのが普通になっている。私はその間に週末のゆったりとした気分を味わいながらビールを飲み、その日のプレーの内容やアイデアを検討する。やがて妻がやって来ると入浴を済まし、早速プレーに入る。

私達のプレーの内容は「アヌス責め」「ムチ打ち」「ローソク責め」「バイブレーター責め」と一応バラエティに富んではいるが、極度に激しいものではなく、「花形」はあくまで浣腸プレーなのである。前記の各責めは浣腸プレーの補助的役割を果たしているに過ぎない。しかし、こと浣腸プレーに至ってはあらゆるテクニク、アイデアを駆使して、文字通り徹頭徹尾、追求する。



先ず最初は「直腸検診」つまりアヌ責めである。私は妻を後手に縛り、ベッドの上うつ伏せにし、両足をそれぞれベッドの両端に固定する。次に手術用の薄いゴム手袋をはめ、妻の化粧用クリームを使って直腸診を開始する。プレー三日前よりKCL錠を服用させている為、便秘している事は間違いない。

「相当たまっているようだな」

「だって、わざと便秘させるんですもの」

入念な直腸診を済ますと、いよいよ浣腸開

始である。

グリセリン五百cc入りのビンより、コップに約百ccほど移す。五〇ccガラス製浣腸器に全然希薄しない百パーセントのグリセリンを吸引しそのまま注入する。

注入より排泄迄の忍耐時間は、五分を強要することになっている。プレーを始めた最初の頃は、せいぜい二分しか忍耐出来なかったものであったが、今では訓練の結果か、五分の忍耐時間をこなす事が出来る。

一口に五分と云えば、実に簡単の様であるが、市販されている五〇パーセントグリセリン含有の二〇グラム「イチジク浣腸」などに比較すれば、なかなかどうして、生やさしいものではない。なにしろ、全く希薄なしの一〇〇パーセントグリセリンを五〇cc、一度に使用するのだから。

最初の内は、価格の関係上、グリセリンより安価なドナンや石鹼液を使用していたのであるが、ドナンはあまり強烈過ぎて、強度の腹痛を起こしたり、石鹼液の場合は、いつまでも液が残っている感じで、排泄後の爽快さに欠けると云うので、最近ではグリセリン専門である。

しかし私は、この忍耐時間五分に甘んじている訳ではない。現在、八分そして十分と、忍耐時間を延長する為の調教を、逐次実施しているところである。

その方法として、前記の「ムチ打ち」や、「ローソク責め」が威力を発揮する訳だ。

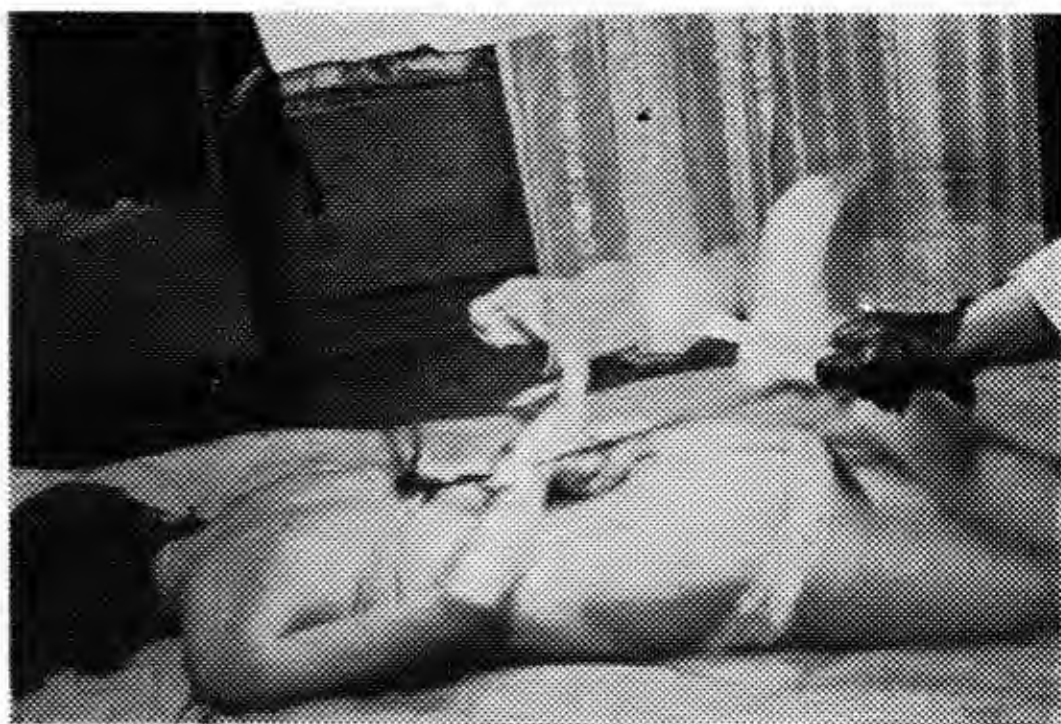
グリセリン浣腸の後、妻は迫り来る便意に耐えきれずに許しを乞う。

「あなた、もう我慢出来ないわ。お願い、許して!!」

「まだ駄目だ。後三分は我慢するんだ」

私はベルトで妻の臀部を打つ。臀部をムチ打たれる事によって筋肉は著しく収縮する。ローソク責めの場合も、約一米の高さからロ―涙を落とすと結果はムチ打ちの場合と同じ作用をするのだ。したがってこの時を得た責めを加えることによって、忍耐時間を延長する事が可能となる。又、注入後ただちに、妻が生理時に使用する押入式の収縮綿（セロポン）を使用する事も試みたが、これは意外と難行し、細心の注意を払って行なわないと、炎症をおこす結果となりかねないことを知った。

いよいよ、限界ぎりぎりともみて許可してやる時、排泄の場所はトイレではなく、バスル



ームのタイルの上で行なわせることにしている。許容時間一杯になるとベッドに固定した足のロープをほどき、先ず生理バンドをはかせ、更に二枚のパンティを重ねてはかせる。もちろん後手に縛ったロープはそのまま、私は妻をバスルームへ引き立てる。妻は決まったように

“お願いだからトイレで……”

と云うが、それは、あくまでジェスチャーであり、やはり私に総てを監視されていると云うことの方が、刺激を強く受けるらしい。

やがて解放が始まると、生理バンドのゴムの部分と二枚のパンティによっていちじるしく阻害される為、なにもはいていない時の様に軽快にはゆかない。

だが妻は、この圧迫されるような感覚が最高だと云う。

“苦しかったかい”

“ええ、とっても。でも、すっかりしたわ”

私はいたわりをこめて、後手に縛ったロープをほどく。

私の体験では、一方的なサディスティックプレーを目的とするのならいざしらず、SMプレーによって、相互の悦びをわかち合うのが目的である以上、強烈な責めの後は、充分ないたわりの心が必要ではないかと思う。ひいては、そのいたわりの心が、SMプレーを一段階、進行させる手段となるのではなからうか。

話がわき道へそれたが、すっかりしたという妻は、バスで身体を清め、更にさっぱりした顔で、ベッドへ戻って来る。これで第一次

浣腸プレーは終了した訳である。

※

※

さて、妻が休けいしている間に、私は第二次浣腸（五〇〇cc、五パーセントブドウ糖点滴注射液に、十ccのグリセリンを混入）の用意を行なう。これはイルリガートルの代用として充分、効果を発揮するのだ。

読者諸兄の中には、手術などで入院をよぎなくされた際、ブドウ糖やリンゲル、アミノ酸等の点滴注射を受けられた方も多いと思うが、それらにほんの少し、手を加えれば立派にイルリガートルとして、高圧浣腸の目的を達する事が可能なのである。

私は用意の五パーセントブドウ糖点滴用バイアル、輸液セット、二〇cc注射器及び注射針などを取り出し、注射器に一〇ccのグリセリンを吸引すると注射針をセットし、バイアルのゴム栓につきさしてグリセリンを混入する。次に、輸液セットの注射針の部分切断してしまうと、点滴注射用セットからカテーテルへの早がわりとなり、もう一方の針をバイアルのゴム栓にセットすれば、準備完了である。

そこで再び、妻を後手に縛り、第一次浣腸の時と同じ様に固定する。しかし今度は前の

場合と違い、ゆうに一時間をこえる為、万一を考えてベッドの上にビニールカバーを敷いてやる。

私は、プレー中は常に施術者であると言う気分を満喫する為に、手術用ゴム手袋を着用することになっている。第二プレーの開始に当り、もう一度、直腸検診を行なう。すでにグリセリンの洗礼を受けているだけに様子は、ぐっと変化している。妻は、

“苦しい、許して!!”と云うが、これもゼスチャアで、苦痛をうったえるのではなく、むしろ、自からの気分を盛り上げるための雰囲気づくりなのである。その証拠はすこしぐずついでやると、いつも“お願い、早く”と要求することである。

第二プレーは、注射針を切断したビニールパイプのカテーテルを約五〇センチ程送り込み、エア針に二〇cc注射器を接続し、注射器を一回操作する毎に、二〇ccずつの液が空気の圧力によって、バイアルの中からビニールパイプを通して注入される仕組みである。

約十分間の時間をかけて、五〇〇ccの溶液を全部使い終ると、五〇センチほどのビニールパイプを一気に取り外す。

妻は、その時の刺激が素晴らしいと云う。

“お願い、もう一度”などと云う時もある。

液が全部なくなると、次は五〇ccガラス製浣腸器による空気浣腸を行う。一回五〇ccの空気を十回、送り込む。これが終わると、液と空気を合わせて一〇〇〇ccという事になる。

しかしグリセリンの含有量がわずかに一〇cc。つまり一パーセントである為、急激な苦痛をひきおこす事はない。(ブドウ糖液自体でも、わずかに腸運動促進作用がある)

それでも三〇分を過ぎる頃になると、相当苦しみをうったえる様になる。

“ああ、もう我慢出来ないわ”

“まだまだ、後三〇分しんぼうするんだ”

“もう、そんなには駄目、ああ”

“では、セロポンを使ってやろうか”

私は、妻の目の前にセロポンを出して見せびらかしてやる。

“イヤ、それだけはかんにんして”

“ではムチ打ちだぞ”

妻は汗のふき出る顔で、コックリとうなずく。私は一回目のムチ打ちの時より、更に強く、ベルトを打ちおろしてやる。真白の肉に赤いみみずばれが走る。

“うーっ、痛い。でもやめないで”

妻の被虐に酔う声に、私も加虐の興奮に酔

いしれてベルトをふり続ける。

五〇回のムチ打ちを終る頃には、妻も苦痛から陶酔へ完全に移行している事がはっきりわかる。それと共に浣腸の効力も極限に至っている。

“お願い、もう行かせて下さい”

妻の顔は、汗と涙と鼻汁で、ぐしゃぐしゃになっている。私はいよいよ最後の仕上げに



入る。

バイブレーター（親指大の大きさ）を作動させて、一気に攻撃をかける。ただでさえ限界ギリギリに達しているところへ、かなり強いしん動をおこしているバイブレーターの攻撃をかけられるのだから大変だ。遂に妻は全身を収縮させて泣き声を上げてのたうつ。

そこでようやくバスルームでの排出を許した訳だが、今回は素晴らしい音と、その状況をつぶさに観察する為に、生理バンドとパンティの着用はしない。バスルームへ足をふみ入れるなり、その総仕上が展開されたのであった。私は後手に縛ったロープをほどき、一気に緊張が解けた為か、くずれ落ちる妻の体を抱きしめて、まだ洗い流していないタイルの上をころげまわるのであった。第二次浣腸プレーのフィナーレである。

※

※

私は、ぐったりとなった妻と共に入浴を済ませ、抱きかかえてベッドへ運ぶ。

お互い相当、疲労度は高い。

三〇分程休養をとって、いよいよプレーのメインエヴェント「百万弗の味」に入る。

私がカバンの中から一本のバナナを出し、皮をむき終える頃には、妻はベッドの上に四



つん這いになり、待機している。

これ迄のプレーは、私がSで、妻がMであった訳だが、今回のプレーは、私がMで妻が女王と云う逆の立場になる。

私は女王様に軽く接吻し、バナナを尻尾にしてみよう。もちろんバナナは折れてしまうが、それでも全長の三分の一ぐらいは可能である。折れてしまってもどうしようもない部分

は、押しつぶしてしまうことになるが、バナナはのり状となって残る。準備が出来ると、女王は、

「なめなさい」

と命令する。私は女王に武者振りついて、のり状となったバナナをなめつくす。

「最高に素敵よ。次はどんなひどい責めも受けますから、御願ひ、やめなさい」

女王の命令は、次第に哀願へと変化する。一時的にはSとMが入れ替る事があっても、所詮、妻はMであり私はSである。

さして変わればえもしない私達夫婦のSMプレーであるが、以上が土曜の午後の現段階におけるプレーの実態である。

申し遅れたが私の主義から、浣腸プレーの後には、必ず、ポラギノールかシェリプロクト等の座薬を使用することになっている。炎症を予防する事は絶対に欠かせないことで、最愛のパートナーがへもにかかったのでは、泣くに泣けないからである。

私の場合、職業柄、各種の医療器具及び薬剤の入手が思いのままである事は幸である。

最後に、読者諸兄姉に対し又いつの日か、我々のプレーの進行状態を御報告する事を約し、本誌の益々の発展を祈るものである。



私の

ゴムプレイ

梅川幸子

先ず着ているものを全部、脱いで鏡の前に立つと、自分の姿を写しながら、最初に素肌にゴム引レインコートを着ます。この品は近頃は全く見られなくなりましたが、マニヤの方々はよくご存知でしょう。襟の形や釦の位置の違いで何種類もあり、いずれもフード、ベルトをたたんで収めるための同生地が袋がついています。大きさは普通「44」サイズですが、私のは特大の「46」サイズ（丈の長さで6センチほど長く、胴まわりも、ゆったりしています）で、色は赤、ピンク、ねずみ、

緑、茶の五着です。

ガサガサと特有の音を立てながら着込み、フード、ベルトをいれる袋を裏がえしにし、（ゴムの部分を表に）顔にあてがい、その上からゴムマスクを目をわずかにのぞかせてあてがい、フードをすっぽりとかぶり、腰のベルトを結びます。そして足には、お百姓さんが田植仕事のときに履く、表裏とも総ゴム製の、底が地下足袋のように平たく爪先も地下足袋のようになっていて、腰まで届くゴム長を履き（文数は私の足にピッタリ合ったもの）

の）両手には、お台所で使うオレンジ色のゴム手袋をはめます。

この姿が基本で、この上から色々なゴム装束を重ねてまとうのです。小柄な私が、この姿になったところを、ご想像下さい。

ゴム引レインコートがガウンを着ているように引きずるほど長く、裾が足首まで隠れています。そして息をするたびにゴム臭く、口や鼻に吸いついたり、ふくらんだりするゴムマスクにあえぎながら、つぎにバイクに乗っている男の人が着ている短いゴム合羽（表は黒、裏は茶色の総ゴム製）を着て、同様のゴムズボンを穿き、フードをかぶり、フードについている鼻から下を隠すベルトをしめました。（通常、男物ゴム合羽のフードは、すべてこのベルトがついています）

そしてこの上に、長さは胸まで届く、養魚場や漁師の人が着ている、見るからに大きなゴム長（水中胴衣と申しましょうか）を穿きます。

この水中胴衣は、表は茶色の総ゴム製で、ゴムの厚さも一ミリほどあり、ガバガバして、見るからに異様なものです。サイズは特大、しかも文数は十二文という大きさです。足にピッタリのゴム長を穿いても楽々

と入り、肩からゴムひもで吊るし、ゴムベルトで腰をしめると、ほんとうに異様な姿になります。鏡を見ると、小柄な私を首から下を完全に覆い隠し、ゴムベルトでしめた胴を境に、下半身は乗馬ズボンを穿いたように、ゆったりとふくらみ、胴から首にかけての上半身はポツテリと異様なふくらみをみせ、この姿を鏡に写して見入っている私のまなざしはうっとり輝き、無意識の中にオレンジ色のゴム手袋をはめて、手で水中胴衣をなでるのでした。

「これだけゴム衣に包まれていれば、寒さも感じないし、どんな責めだって平気だわ」と、つぶやきながら……。

更にその上から、特大サイズの引きずるような男物ゴム合羽（表は黒、裏は茶色の総ゴム製）を前後、逆に着て、腰のベルトを結びます。（このゴム合羽のフードは外してあります）そして今度は同様のゴム合羽をその上から着込み、フードをかぶり、フードについているベルトを締め、腰のベルトもしめました。

これでゴム装束は一段落したわけですが、両手には肩まで届くゴム長袋（漁業用）をはめ、脱げないようにゴムロープで結び、肩か

ら吊ります。それから魚屋さんで使っているゴム引き前掛けを前後、逆にお尻を覆うようにつけて、もう一枚は、きちんと、まともに前につけました。これだけのゴム装束を身につけると、よろよろと今にも倒れそうで、まるで鎧を着ているような重さを感じます。

最後に、私の一番好きな男物のゴムマント（表は黒、裏は茶色の木綿地）を、すっぽりと肩から羽織ります。

何しろこのプレイでは、フードを三枚も重ねてかぶっているのですからゴムマントのフードも、これまでの小さくて窮屈になりましたので、ゴムマントと同生地で特別に大きく自分で作りました。そして、マスクの部分が深く首まで覆い隠し、ボタン三つで止めるような独得のデザインにしたわけです。これで、できあがりました。引きずるような黒いゴムマント。大きな異様な形のフードから目がわずかにのぞき、裾からはゴム長（水中胴衣）の爪先が、ちょっぴりとのぞいています。

さあ、いきましよう、とつぶやくと、暗いお部屋から真暗な寒い雨の降りしづく戸外へでて行きました。

夜半の激しい雨は土砂降りになり、そのあ

たりのドブは湧き立つように溢れ、坂道を水が流れ下っています。暗やみと雨の音に一寸不安を覚えますが、いつもの勝手の知った土地のこと故、田圃道を、せっせと歩いて行きます。

寒々とした雨の中、ズルズルと滑る泥んこ道に足をとられ、時々立ちどまります。激しい雨に打たれて、ゴムマントはゴム独得の光沢でテカテカと光り、次第に雨がしみこんで裏の木綿地は濡れた雑巾のようにぐっしょりとなり、ゴム合羽にびっしょりと、まつわりついていきます。

ゴムマントに包まれた私の秘密を誰が知っているでしょうか？ ジャブジャブと音を立てて泥水をはね上げて歩く私。歩きたびにゴム装束の重みとゴム長の足先にまつわりつく前掛けやゴム合羽の裾で何度も足をとられ転びそうになります。そして、いつもの池のそばまでくると、ホッとした気持ちになり、池のまわりを歩きながら泥の多いところを探します。

背高く生え茂った草をかきわけ、ゴボゴボと泥水の中へ腰まで、めりこんで行くのですから、足腰をしめつける泥水の圧力は相当なもので、へなへたと首まで泥水の中にしゃが

みこみ、色々と体を動かしてプレイをします
これだけのゴム装束ですもの、泥水は殆ど中
に入らず、ゴム装束が全身をしめつけ、体中
から吹きでる汗は、とめどなくゴム装束を伝
って流れ落ちます。

水面を波うたせてポツカリ浮かんだ異様な
フード。泥水の中ではゴム装束に身を包んだ

女が、陶酔に身悶えしている初冬の雨降りし
ぶく深夜……。

それが終ると、全身泥まみれになって、泥
水から這い上り、雨に打たれて池のまわりを
トボトボと歩き、きれいな水の流れる小川に
入ります。ここで泥まみれになったゴム装束
の、お洗濯をします。何といっても間接的に

◎躍進記念◎ 百萬元懸賞 △原稿募集▽

▽賞 金△

入選作品 一席	1篇	五万円	10篇
入選作品 二席	1篇	三万円	10篇
入選作品 三席	1篇	一万円	10篇
入選作品 四席	1篇	五千円	20篇

▽内 容△

一、特異な風俗文藝を標榜する本誌の内容
に、脱皮を企図する本誌の内容充実のため、
い読者の間から懸賞募集いたします。
一、S並にMは勿論のこと、各種各様のフ
テッ、シ、一般、女性切腹、男性切腹、男
婦、美、女相撲、女斗美、生首、珍奇、風
俗、嗜好、見世物、奇態、珍聞、奇習、珍
して、文、献、紹介、その他、古今東西に亘る特異風俗に
る、題材を広くとりあげて下さい。
一、歓迎します。特に従前本誌にて余り扱
いない分野の傑作をお待ちします。

▽規 定△

一、応募作品は、すべて未発表の自作の作品
に限り、出稿（作者、書名など）を明記願
一、原稿は、四角の紙に、縦書き、換算に
以上、二枚、四角の紙に、縦書き、換算に
の、原稿用紙を、毎月十五日、入選作品は
一、締切日は、毎月十五日、入選作品は
一、懸賞金は、原稿に、他の一般原稿と区
一、ため、第一頁に、原稿の返戻の必要の
返、信、料、同封の上、大阪、市、住、吉、郵便局、私
函、第、四、号、宛、送、付、先、は、大阪、市、住、吉、郵便局、私
原、稿、第、四、号、宛、送、付、先、は、大阪、市、住、吉、郵便局、私
て、下、さい。採否は、誌上発表を以てご承知願います。

水が入るのですから、水圧は本当にすさまじ
いもので、首から下が見えないロープでガン
ジガラメに縛られているような圧迫を感じ、
恍惚となります。

「何故、そんな異常なプレイにちん溺するの
か？」と人様に尋ねられても、「だってエ、
好きなんですもの」と答えるより、ほかはな
い私でございます。私一人では物足りなく、
私と一緒にプレイをして下さるお方はいない
ものでしょうか？

最後に、アイデアとしてこんなプレイは如
何でしょうか。

(一) ギリギリに縛りあげて、首まで泥の中に
入れ、長時間、正座させる。体を一寸でも動
かすと泥の中に沈み、起き上れなくなる。

(二) 後手に縛り、腰と片足にそれぞれ長いロ
ープをゆわえ、池の中を歩かせる。岸にいる
一人がロープを引っばると、平均を失ってぶ
ざまな恰好で水中に倒れ、必死になって起き
あがろうとして跳く。

(三) ようやく顔が水面から出るぐらいの深さ
のところ、四つん這いになり、その上に馬乗
りになって歩かせる、等々。

菅原様のアイデアや文章を少なからず引用
しましたことを、ご容赦下さいませ。

緋

ひ

縮

ぢり

緬

めん

地

じ

獄

ごく

(第十三回)

白鳥大蔵

黒縄の五郎蔵

——おや?

黒縄の五郎蔵の目が、小雀を追う鷹のように精悍に光って、いますれちがった女をふり返った。

——あの女は、たしかに、お京だ、立花屋一家のお京にちげねえ。

五郎蔵はしかし、首をひねった。

女掏摸のお京が、あんなぼんやりした顔でこの盛り場をうろついているはずはねえ。

第一、おれの姿をちらッとでも見たら、風

のようにすっ飛んで逃げるはずだ。

腕ききの女掏摸が、岡ッ引きとすれちがって、気づかねえなんてドジな真似をするわけがねえ。

そうは思っても、あの女は、やっぱりお京だ。どう目をこすってみても、お京にちげねえ。

五郎蔵は、首をひねりながら、女のあとを尾行しはじめた。

ここは、江戸随一の盛り場、浅草——。

一年じゅう、参詣人の行列が途絶えたことはない。雷神門をくぐる男女の数は、一日におよそ三万人といわれている。

境内には、絵馬堂、浄水所、輪堂、五重塔などがあって、それぞれ、にぎやかに参詣人をまねき寄せている。

本堂の右手には淡島神社があって、岡ッ引きの五郎蔵が、腑抜けのような足どりで歩いているお京とすれちがったのは、そこから奥山へぬける、最も人通りの多い道であった。

ふらふらと奥山の方角へ歩いていくお京のあとを、五郎蔵は不審に思いながら、なおも尾行した。

そして、その奥山の、猿芝居の小さな見世物小屋の前まで来たときであった。

一見して、田舎から出てきたばかりの風態

の武士の袖を、お京はすれちがいざまに、ひよいと、はたいた。

つぎの瞬間、お京の右手には、もうその田舎侍の財布が移っていた。

手練の早業であった。

——やっぱり、お京だ！

五郎蔵は感歎した。

と同時に、しめた、と思った。

これでお京を、大っぴらにお縄にできる。

そして、お京の親分である、立花屋久六の行方を、お京の口から、ききだすことができる……。

黒縄の五郎蔵は、大津屋彦兵衛から、秘密の依頼をうけていたのだ。

——立花屋久六という悪者に、女房のお静と娘のお雪がかどわかれた。みのしろ金を寄こせと言ってきたのだが、女房と娘をひっさらったまま、久六自身が行方知れずになり、音信不通になってしまった。心配で心配で、夜もねむれない。お上へ訴え出たりすると、相手が悪党だけに、妻と娘の身に、どんな危害を加えるかも知れない。なんとかして、隠密のうちに二人を探しだしてもらいたい。費用はいくらかかってかまわない……。——
というのが、大津屋彦兵衛からの依頼だっ

た。

——うめえ話かとびこんできやがった！

と、五郎蔵は、ほくそ笑んだ。

この五郎蔵も、銭のためなら、なんでもやっける男だった。

権力を持つ者にはあくまでも媚び、弱い者からは徹底的に絞りあげるのが、岡ッ引きという職業を誇りに思っている人間の習性であった。

立花屋久六の行方を突きとめ、大津屋の女房のお静と、娘のお雪をうまく連れもどすことができたなら、こいつは褒美も礼金ものぞみどおりだ。

相手は大身代の廻米問屋。だまっていでも礼金は五十両、いや、百両は出るだろう。

五郎蔵は腹のなかでソロバンをはじき、胸をたたいて引き受けたのだ。

さっそく、尋ねまわった。

だが、浅草馬道の久六の家をひと晩じゅう張りこんでも、石浜神社裏の別宅を探ってみても、久六の姿は、忽然として消え失せてしまっているのだ。

そして、久六のめかけのお仙の姿も、一緒に消えている。さらに立花屋一家には、源次と銀三という腕ききの子分がいたはずだが、

この二人の消息も、なぜかぶつりと絶えている。

——不思議だ。こいつは、ただのかどわかしとはちがう。裏になにか、手の混んだカラクリがあるな？

と、そこは職業柄、五郎蔵には、ピンとくるものがある。

この仕事に、いっそう張り合いと興味をおぼえて、久六の気配を熱心に嗅ぎまわっていた五郎蔵であった。

だからいま、浅草の奥山でお京を見かけ、おまけに拘摸の現場をおさえた五郎蔵が、しめたッとはかりに、手に唾をつけて意気どむのも、無理ではなかった。

すいッと影のようにお京の背後に接近し、「おい、お京、見たぜ。あいかわらず、達者なもんだな」

耳もとにささやくと同時に、五郎蔵の捕縄は、蛇のように、お京の右手首にからみついていた。

その異名のとおり、五郎蔵が愛用している捕縄は、不運な犯罪者たちの、汗と、脂と、涙と、垢の色と、においを、たっぷり吸いこんで、どす黒い色をしているのだった。

愕然としてふりかえり、岡ッ引きの顔をみ

て、あわてて逃げようとするお京の左の太腿のあたりを、ぴしッと十手で打ちすえ、同時に、左手首をつかんで背中へねじあげ、きりきりと縄をかけていく手順のみごとさは、さすがに、黒縄の五郎蔵とよばれるだけの、素早いものであった。

手中の獲物

五郎蔵がお京をひたてていったのは、番屋ではなかった。

今戸八幡の近くに『花鳥』という小料理屋がある。その『花鳥』の女主人のおりんは、五郎蔵のめかけであった。

黒い縄で縛りあげたお京を、五郎蔵はその小料理屋の裏手へつれこんだのである。

「おい、おりん、御用の筋だ。ちよっと離れを借りるぜ」

目くばせをしながらおりんに言うと、五郎蔵は横手の庭木戸から離れへ、お京の背中を小突いて引き立てる。

「ふん、なんの御用だか、わかったもんじゃない」

と、おりんは嫉妬の色をあらわに浮かべて縄つきのお京の横顔に目をやったが、そのつ

ぶやきは、五郎蔵の耳に入らない。

離れは、六畳ばかりの安普請だが、周囲が閑静なので、落ちついた雰囲気の一部屋になっている。

ゆたかな庭木にかこまれていて、時おり、おどろくほど近くで、小鳥がさえずる。

その座敷の床柱へ、五郎蔵はお京を縛った縄じりをつないだ。

腰から煙草入れを引きぬくと、きせるの雁首に粉煙草をつめながら、ゆっくりとお京の顔をみつめた。

「どうした、お京。じつは、淡島さまの前から、おめえをつけていたんだが、なんだか妙な足どりだったぜ」

小火鉢を引き寄せ、きせるの先を炭火に近づけながら、五郎蔵はいった。

「こんな所へあたしを連れこんで、親分、いったい、なにをしようって言うんです」

お京は、ようやく不安を表情にだしていった。

縄をかけられて、奥山から今戸へ引き立てられてくる間に、さすがに正気にもどっている。白昼、うしろ手に縛りあげられて、野次馬の目のなかを、引きずりまわされてきたのだ。

「女拘摸だ、女拘摸がつかまったぜ」

「虫も殺さねえツラをして、他人のふところを狙うなんて、ふてえアマだ」

「それにしても、いい女じゃねえか。まあ、見ろよ、あのようなだれた衿首の白いこと、ゾツとするぜ」

などという好奇に満ちた声を浴びせられると、さすがに、羞恥のために全身が縮んだ。

見世物師やレッケの岩松の家の奥座敷から寺尾半九郎の助けを借りて、ようやく逃げだしてきたお京であった。

あのひげだらけの浪人が、なぜ自分を助ける気になったのか、お京には、まだよくわからない。

無我夢中で、町のあちこちを逃げまわり、やっと浅草の人混みのなかへまぎれこんだとき、お京はホッとした。

だが、長いあいだの責め折檻に心身ともに疲れ果てているお京は、まだ悪夢のつづきをみているような気持ちだった。

手も足も、どこか感覚がしびれていて、まだ自分のもののように思えない。

人混みのなかをぼんやり歩きつづけているうちに、つい拘摸の習性がでて、右手の指さきが、他人の懐中物をすりこってしまった。

ハッと気づいた瞬間、もう五郎蔵の黒い縄が、自分の右手首にからみついていた、というわけなのである。

「ききてえことがあるんだ、なあ、お京。おれのたずねることに、素直にこたえてくれねえか」

鼻の穴から、うまさうに煙草のけむりを吐きだしながら、五郎蔵がいった。

ゆったりとあぐらをかいて、落ちついていゝる。獲物は手中に捕えたのだ。もう、あわてゝることはない。

しかも、獲物は、江戸に数多い女拘摸のなかでも、とびきり上等の容姿をもつお京ときてゐる。

ああ、おれは目明しになってよかった、と五郎蔵は、しみじみ思った。

「さあ、なにをおききになりたいのか存じませんけど、あたしゃたかが女巾着切り。なにも知っちゃいませんよ」

お京は、早くも警戒してこたえた。

背中に縛られた手首の縄を、なんとか解いて逃げだしてやろうと思ったが、さすがは本職のかけた縄、寸分のゆるみもみせない。

直接、手首の骨にくいこんでゐる感じで、それほど痛みをおぼえる縄目ではないのに、

左右の手首をこすり合わせてゆるめることさえ、むずかしいのである。

「そう、つれねえことを言うなよ、お京。おめえの返事しだい、その縄を解いてやってもいいんだぜ」

きせるを煙草入れにしまうと、五郎蔵は真正面から、お京に向いた。

お京は、身の危険を感じた。

岡ッ引きが、つかまえた女拘摸を番屋へしよっぱかないで、こんな小料理屋の離れへ連れこむなんて、ただごとではない。

目的は、わかつてゐる。

きれいなからだではないが、こんな下劣な権力をカサにきた傲慢な男のおもちゃになるのは、いやだ。

お京は、せいっぱいづめた微笑をうかべていった。

「親分、さっさとあたしを、番屋でもお奉行所へでもしよっぱいて行っておくんなさい。あたしゃもう、覚悟はできてるんです」

「まあ、待ちなよ、お京。そう言っちゃ、ミもフタもねえ。ここへおめえを連れこんだのにはな。それ相応のわけがあるんだ」

だんだん濁りを増してきた五郎蔵の目が、縄のかかったお京の乳房のあたりへ、突き刺

すようにそそがれた。

お京の乳房の上と下には、はさみつけるように、黒い縄が巻かれています。

わずか二筋の縄だが、そのくいこみ方は強烈だった。黒い縄にしめつけられている上半身のふくらみは、着物の下にかくされている乳房の形を想像させた。

膝の前に置いてある小火鉢を脇にどけて、五郎蔵はお京の前に、にじり寄った。自分の顔をのぞきこんでくる五郎蔵の目の色のいやらしさに、お京はぞおツとして寒気をおぼえた。

「親分、な、なにをするつもりなんです！」

お京は、戦慄した。

五郎蔵の目が、針のように細くなり、声のない笑いをもらした。

「まだ、なにもしちゃいねえよ。それとも、なにかい、なにか、してもらいてえのかい」
そろりと、またひと膝、お京の前に近寄った。下から見あげるように、背をまるめて、お京の目の奥をのぞきこむのだ。

粘った唾

どんなに下劣な悪党の目の色よりも、この

岡ッ引きの目の色は不潔でいやらしかった。

目のなかに、みだらな虫でもうごめいてい
るのではないかと思われるほど、卑しい光り
かたをするのだ。

岡ッ引きとか、目明しとかよばれて、江戸
の市民たちから、もともと嫌われている人種
にはちがいないのだが、この黒縄の五郎蔵は
その中でも、とくに毛嫌いされている。

弱い者いじめには、天才的な才能を発揮す
る男だった。お京も、むろん、それを知って
いる。この男にみこまれたら、骨まで痛めつ
けられるのだ。

「な、なにをききたいんです、親分。きくこ
とがあったら、早く、早くきいておくんなさ
い。知ってることなら、なんでもしゃべりま
すから」

お京はおびえ、哀願するようにいった。

「ふふふ。まあ、そう、あわてることはねえ
やな。この部屋には、おれとおめえの二人き
りしかいねえ。おれが呼ばねえうちは、だれ
も来ねえことになっているのさ。……なあ、
お京、おれは、なんだか、滅法おめえが、か
わいらしく見えてきたぜ」

いいながら、五郎蔵の膝は、なおも、そろ
り、そろりとお京のからだに、にじり寄って

いく。

お京は息をのみ、腰を左右にうごかして後
退した。が、背中はずぐに床柱にぶつかり、
それから後へは逃げられない。

膝が割れて、着物の裾がひらいた。両手は
背中に固く縛りあげられていて、裾のみだれ
をなおすことはできない。

白い足首の上をみて、ぞくりと、五郎蔵の
血が疼いた。しかし、あわてて目をとじた。

なにも、あわてることはねえ、と五郎蔵は
もう一度、胸のなかでくり返した。

この女のからだを頂いてから、久六の隠れ
場所を白状させることにしようじゃねえか。

そのほうが、案外、仕事は早いかもしれな
い。

せっかく頂けると馳走だ。箸をつけるのが
役得ってもんだ。この女だって、おれの仕掛
けるのを待っているのかも知れねえ。

そうだ、それにちげえねえ。

五郎蔵は、自分の胸へいいきかせた。

「親分、寄らないで。それ以上、そばへこな
いで！」

哀願しながら、なおも逃げようと努力をつ
づけているお京は、足のうらに力をこめ、夢
中で立て膝をした。

同時に、裾が大きくまくれて、白い胫が五
郎蔵の目に灼きついた。

「ちょっと見ねえうちに、妙に色っぽくなり
やがったな、ええ、お京。いままでに、何度
男に抱かれた？」

五郎蔵は、なおも白くこぼれる素肌に遠慮
のない好色の目をやり、口をだらしくひら
きながら、うわずった声をあげた。

「おめえほどの女が、まだ生娘というわけ
もあるめえ、うふふふ……」

立花屋一家のなかでも、ずばぬけて器量の
いいお京である。この数日間つづいた恐怖と
苦痛のために、容貌がやつれ、それが妙に、
男心をそそる凄艶な美しさになっている。

「たまらねえぜ、ええ、おい、お京」

自分の愛用の黒縄で、ぎっちりとうしろ手
に縛りあげた姿が、また、なんともいえない
風情である。

眺めれば眺めるほど、五郎蔵の四肢は、む
ずむずと、いきりたってくる。

こいつはどうしても、裸にして、改めても
う一度縛りあげ、この女のからだの隅から隅
までを、じっくりと指のさきでたしかめ、そ
の反応を見物しながら、そっくり頂かねえこ
とには、せっかくお上から預かった十手に対

して申しわけがねえ。

勝手な理屈をつけながら、五郎蔵は手をのばして、お京の裾をひよいとまくりあげた。

「ひえッ」

お京は、ひきつるような声をあげ、すくみあがった。思わず、膝がひらいた。五郎蔵の目が、女の最もやわらかく白い部分に吸いこまれた。

手をのばせば、すぐにでも触れることのできる近さであった。しかし、五郎蔵は、手ののばさずに、じつくりとそこを凝視した。

「……たまらねえ……たまらねえ！」

うめいて、五郎蔵は凝視をつづけた。

口のなかに、じつとりと、なま唾がたまった。大津屋彦兵衛から依頼された久六の行方を探索する仕事も、いまは完全に忘れ果てている五郎蔵だった。

どうしても、この女を裸にして、いちばん恥ずかしい恰好に縛りあげ……。

くり返してつぶやいた五郎蔵の唇から、粘った唾がひとすじ、糸を引いて畳の上へ、したたり落ちた……。

あぐら弁天

そして五郎蔵は、だれにも邪魔をされずに自分の思いついたことを実行した。

お京の口には、念入りなさるぐつわを噛ませた。これは、店にいるお京に、お京の悲鳴をきかせたくないためである。

さるぐつわで声を封じられたとき、お京は自分が絶望的な状態におちいったことをさとした。

黒い縄が、白い素肌に、色の対照もなまなましく、くつきりと巻きつき、くいこんでいた。乳房の頂点を避けるようにして、その上下にきりりと縄がかけられ、そのために白い隆起は絞られて本来のふくらとした形を失い、苦しげにゆがんでいた。

背中にねじあげられた両腕は、ひじから急角度に折れまがり、たかだかと手首を吊られて、高手小手という形に、強烈な縄目をみせて縛りあげられていた。

両足はあぐらにされて足首をひとつに縛られ、その縄はまっすぐ上にのびて、お京の首のうしろにつながっていた。

そのために、お京の顔はむりやり前にひっぱられて、あぐらに組まされた自分の両足首を、なめるかと思われるほど折れまがる。

苦痛を耐えるうめき声は、さるぐつわにふ

さがれて、虫の鳴くほどにしかきこえなかった。

五郎蔵の手でいちど縄を解かれたとき、お京はそれでも、せいっぱいの抵抗をしたのだった。

着ているものの最後の一枚を剥ぎとられるときは、声をあげ、必死に手足をばたばたさせてあばれた。

が、五郎蔵は、不思議なほど正確に、お京の急所をピタリとおさえ、畳の上に裸身をねじ伏せると、左右の腕を背中にねじりあげ、たちまちのうちに縛りあげてしまったのだ。

両手の自由が失われた後は、もう、いくら暴れても無駄だった。

髪の毛と縄じりを同時につかまれて引き起こされ、お京は意志のない人形のように、黒い縄で征服された。

汚れた手拭いでさるぐつわを噛まされ、声さえも封じられると、しょせん岡ツ引きにはかなわないという敗北感が、黒い縄よりもひしひしと、お京の心に突き刺さった。

女の本能的だが、かろうじて抵抗の姿勢を継続させている。

「いい恰好だぜ、お京。なにもかも、まる見えだ。女の裸ってものは、しかし、いいもん

だなあ。いくら眺めていても見飽きねえ。とくに、おめえみてえな容量のいい女掬摸を、こういうふうにする裸にして縛りあげてみると、おらあつくづく男に生まれてよかったと思うぜ。女のおめえには、男のこういう気持ち、わからねえだろうからなあ……」

帯のあいだから十手をひきぬきながら、ぶつぶつと五郎蔵がいった。

五郎蔵はもう、うっとりしていた。この男にとって、この眺めは、たしかに極楽にちがいはなかった。

お京は、苦しい姿勢のまま、目だけをあげて五郎蔵をにらんだ。憎悪と恨みに燃える目だった。さるぐつわで、顔の下半分がおおい隠されているために、その目はいっそう凄艶だった。

声のでない口惜しさを目だけにこめて、お京は五郎蔵をにらみつづけた。この目をはずしたら、この男は、すぐ自分のからだにとびかかってくるにちがいない。お京は、その危機感におびえた。

こんなみじめな形に縛りあげられたまま、こんなうす汚ない男の手ごめにあうなんて、まっぴらだった。

「にらめ、にらめ。いくらでもにらめ。いく

らにらまれたって、痛くもかゆくもねえや」五郎蔵は平然として、お京の無言の憎悪をはねかえした。

想像以上に色白で、汚れないお京の裸身に、五郎蔵は有頂天になっていた。四肢に力がみなぎり、顔に血がのぼってくる。

「おれの黒い縄が、おめえのやわらけえ白い肌に食らいついて、よろこんで泣いていやがらあ……ふふふ……おい、お京。おめえの耳にはきこえねえか。おれの黒い縄のうれし泣きがよう……ふふふ……まったく、おめえッ

て女は、掬摸なんかにさせておくのはもったいねえ。おめえは弁天さまだ。生きた弁天さまだ。あぐら縛りの弁天さまだ。こうして、いつまでも、床の間に飾っておきてえよ、ふふ……見れば見るほど、男ごころをそそる肉づきをしてやる。たまらねえや……」

五郎蔵はふくみ笑いをしながら、十手のさきで、お京の額を突いた。

身の安定がおぼつかないお京は、たちまちぶざまにひっくり返った。

なにかもかもさらけだした、一匹のけもののような女体が、五郎蔵の目の前にあった。

ひとつに縛られて肩のあたりまで吊りあがった左右の手首が、哀願するようにうごめい

ている。

どこにどう触れようと、どう突こうと、どうなぶろうと、すべては五郎蔵の心のままだった。

白いのが、あぶら汗に光りながら、ひくひくとあえいでいる。女のからだのまるみに沿って、五郎蔵の視線が這いずりまわった。

——これだから、弱いものいじめはやめられねえ。岡ッ引き稼業はやめられねえ！ さっきと同じことを、五郎蔵はうっとりつぶやいた。

この世に人間と生まれたからには、権力の座につくことだ。

権力の座につくことができなかったら、どんな下ッ端でもいい、権力者の下に働いて、そのお裾分けにありつくことだ。権力者がさんざん食い散らかしたご馳走の、おあまりでもいいから、とにかくガツガツとむさぼり食うことだ。

五郎蔵はお京の敏感そうな部分に卑しい目をそそぎながら、自分の考えのまちがっていないことを確認した。

畳の上どころがったまま、お京の呼吸は、しだいに荒くなっていた。

あぐらの形のままで縛り合わされた両足首

が、自分の顔の前にある。背中が海老のように折れまがり、背骨がミシミシときしんでいる。

右肩を下にころがされたので、右半身に重みがかかり、とくに下敷きになった腕のあたりが痛い。

両手首は、首にかけた縄に吊られて、肩のあたりまで引きあげられている。手首をおろそうとすると、首の縄がしまる仕掛けになっているのだった。

お京の心は、苦痛と羞恥にのたうち、うめいた。さらけだされた部分を隠すすべは、なにひとつ無いのだった。

そして、そこに、五郎蔵の、男の飢餓をむきだしにした目が、遠慮なくそそがれていることを、お京は知っていた。やがて、餓えたけだものの、乱暴な攻撃が仕掛けられてくることを、お京は予感した。

「ちくしょう。ひどいことを……」

ねじれまがった筋肉のあいだから、あぶら汗がにじみでてくる。汗はやがて粒となり、黒い縄をぬらした。

「おい、お京。なにも、そんなにあせることはねえよ。おめえが心のなかで待っていることは、もうすこし先へ行ってからしてやる。」

おれはもうちょっと、こうやって、目の保養をしてえのさ」

白い豊満な尻に、いきなり五郎蔵の十手がぴしりつと鳴った。

さるぐつわの奥で、声にならない悲鳴があがった。

たちまち、白い尻の肉の側面に、十手のあとが赤くついた。

五郎蔵は、にやりと笑った。悪くない感触だった。

そして、胸にかかっている縄目のあいだに、十手の先端をこじり入れた。

「む、む、む……」

と、お京の白いのが、蛙の腹のようにふくれあがった。

五郎蔵は、縄目のあいだに突っこんだ十手を、ぐり、ぐり、と力をこめてこじりはじめたのだ。

黒い縄が、すさまじい力で、肉にくいこんだ。むむう、むむう、という鈍いうめき声がさるぐつわの中から洩れ、お京の背中では、苦痛を耐えるために、いっそう海老のように折れまがった。

なおも十手を、ひねるようにこじりあげると、乳房は異様な形にくびれあがって、上下

の縄のあいだから飛びだしてくる。

お京の首すじから胸にかけて、霧をふいたようなあぶら汗がうかんだ。血行をとめられたために、筋肉のあちこちが、白っぽく変色した。

乳房と乳房のあいだにこじり入れた十手を、こんどは、ぐるりと一回転させてねじり、五郎蔵は、お京の耳もとに口臭のつよい口を寄せてささやくのだ。

「おい、お京、ものは相談だが、おれのめかけにならねえか。おれはどうやら、おめえに惚れたらしい。この店をやらせているおりんという女は、じつは、おれの囲い者だが、あんな女より、おめえのほうが若くて、からだもいい。おれはおりんを捨てて、きょうからおめえの面倒をみることにするぜ。ええ、おい、お京。おれの言うことをきけば、この黒い縄を解いて、らくにさせてやるぜ。わるくねえ話だと思うがな」

五郎蔵は、十手を乳房の縄目から引きぬくと、畳の上に投げすてた。

そして、ついに歯をむきだし、息をはずませて、お京のからだを抱きすくめたのだ。

(つづく)



続々・妊婦嗜好あれこれ

石坂洋次郎氏の小説から

羽 鳥 水 江

大分前の資料ですが、雑誌『オール読物』

の43年9月号巻頭に、珍しく石坂洋次郎さんの「ものぐさな男の手記」という短編がのっています。石坂さん独特のユーモラスなタッチ、明けっぴろげの自然なセックスを肯定した書き方で、妊婦マニアにとって見逃がせない題材がとり扱われています。時期遅れですが、紹介して見ましよう。映画にでもなったら面白いな、と思います。

主人公は野崎高夫、六十五歳の老人です。物語は、そのキタ・セクスアリスを回顧するという形で書かれています。主人公が実は作者自身という風にも考えられます。それは読

む方の自由でしょうけれど……。

子供のときに女の子とワイセツな遊びをしたこと、娼婦にかわいがられていたずらされたこと、などの後、中学を卒業して東京に出た主人公が、齒科の学校に入学し、ある稲荷神社の神主の家の離れに下宿します。そこでその大野という神主の妻と娘の両方と関係を持つようになる。しかも、妊娠中の長女との関係が、主人公が女体に接した初経験というのですから、少し変わっています。それが、大らかな、肯定的な筆致で、何気なくさらさらと叙べられているのです。

すでに嫁^{かた}づいていいる大野家の長女・由美子

が妊娠して、ときどき親のところへ帰って来るのですが、ある日、高夫が帰ってみると、由美子が部屋に入りこんでいます。ところどころ引用しながら筋を追って行きましよう。「何カ月か知らないが、もう腹のふくらみがセルの縞の単衣をつき上げてハッキリ見えていた」という具合です。

「……由美ちゃんのお腹がいぶんふくれて、重くないのかね、何カ月というの……」

「七カ月。……少しは重いけど、いい気持の重さよ。男の人だったら金貨がいっぱいつまった金袋を抱いてたらこんなかしら……。手を貸して……。赤ちゃんの動くのが分るのよ」

由美子は着物を開いて、主人公に、じかにふくれたお腹を触らせます。そして、
「ねえ、野崎さん、私を可愛がってよ。私、高夫さんが好きなのよ、ねえ。赤ん坊と一緒に私を可愛がってよ」と誘惑します。

若い主人公は、(赤ん坊と一緒にの私を)という言葉に刺激されて、ふくれた白い腹部をさらけ出した由美子に挑むわけです。それから次のような会話があります。

「でも……由美ちゃんの旦那さんに……」

「いいのよ。お腹の子はあの人のものにまちがないんだし……女は、そうなってるから、よその男の人に抱かれると、身体に栄養液を注射されることになり、胎児の発育にもたいへんいいんですって……」

「どんな医学書にも書いてない学説だと思っただが、お腹のふくれた由美子がそれを言うとき、奇妙な実感があつた。そして、私も由美子の胎児の発育に協力してもいいと思った」

というのです。第二回目も、ふたたび、

「由美子のお腹に行為の結晶が宿っていることが、私の神経をいっそう強く刺激したようだった」と、くり返し書いてあります。

その後、現場を母親のはま子に見つかる場面があり、それがもとで、主人公は母親とも

関係をもつようになり、それをさらに由美子に知られて、母と娘が相互に認め合つて、由美子の出産まで交互に主人公と関係をもつようになります。世間の常識から言うと、それこそんでもない話ですが、ごく自然にセックスを肯定するというのが、罪の意識というのが、さらさらないので。動物のように健康なのでしょう。またまた長くなりますが引用をつづけますと……。

はま子に現場を目撃されたとき、由美子はふくれたお腹をさらけ出したまま、起き上りもしないで平然としています。

「……由美子は、かりにも人妻で、しかも妊娠中なんですからね。呆れたわ。二人とも人でなしだわ。汚らしい……」

という、はま子に、由美子は同じことを言うのです。つまり、

「……お腹に赤ん坊を宿してる女は、よその男に抱かれると、自分も、胎児も丈夫になるって聞いたからなの……」

面白いリクツだと思いますが、本当なのかどうか、お医者さんにでも聞いてみたい気がします。無邪気にそういうことを信じこんでいる女の無知さ加減がたのしく、石坂洋次郎独特のスツとばけた味だとは言えないでしょう。

うか。さて、

「由美子はその後も日を決めて私の所に通つて来た。お腹は見事にふくれ、息づかいも荒くなった。由美子は会うたびに私の手を腹部に当てて胎児の動きを感じさせた。そういう身体ぜんたいの生理が分るせいか、頬が蒼ざめ、唇のうす皮が剥げ、米俵のようにふくれた由美子の姿態が、私に原始の匂いにする素朴な親しみを覚えさせた。例の行爲も私の側の猪突的興奮がおさまって、由美子をいたわり、由美子を勇気づけるようなものに変わっていった」

「僕、赤ん坊の頭をつつついて怪我をさせるんじゃないかと思って心配だよ」

「バカねえ。胎児は丈夫な膜の中に包まれているんだわ。それよりもねえ、高夫さん、女は産月が近づきしだい喜びが少くなるのよ。気持ちがうれしいだけで、感覚はにぶってしまふのねえ。でも、うれしい気持ちにさせていたただくだけで私、高夫さんがとっても好きよ。私に栄養つけて下さるんですもの……」

由美子が男の子を出産して、二人の関係はとだえます。つまり、そういう風に由美子がけじめをつけたわけです。高夫の子を妊娠することを恐れたのでしょう。

ところが、それから六、七カ月経って、ふたたび妊娠した由美子が高夫の前にあらわれます。前の話のくりかえしみたいになりますから簡単にしますが、要するに、妊娠中だけ若い男に体を許す人妻ということで、小説のテーマから言えば、必然性があるのかも知れません。この△妊娠中だけ▽というところが面白いと思います。

「私ね、また妊娠したの。だから、この前のように高木さんに、お腹の赤ちゃんもろとも元気づけていただこうと思って……」

「妊娠したから——。そう言うのが、由美子が私を求める生理的にも心理的にも十分な理由であるように感じられた。どうしてそうなのかという細かい分析は専門の生理学者や心理学者にまかせるしかないが、オーソドックスな分析の仕方では、私自身や読者を納得させる解答は出て来ないだろう……」

「由美子はそれから一週間に一度ぐらい、しだいにふくれるお腹を抱えて私の室に通って来た。手で触って胎児の動きがハッキリ分るぐらいになると、前回同様に、私は由美子の肉体に対して、素朴な親密感を抱くようになり、行為も落ちついて楽しいものになっていった」

主人公はこうして、妊娠中の女によって女性開眼の初体験をしたということのために、妊婦にたいして特別の嗜好をもつ、一種の妊婦マニアになってしまふのです。すなわち、「……神官の大野家の離れに下宿している時嫁づいている長女の由美子に仕つけられたのであるが、出産がしだいに近づいて、大きくふくらんだ白い滑らかなお腹を抱えた女体の魅力に、妄想の中でしばしばひかれた。由美子に仕つけられた好みは、妻の信子の場合にも作用し、お腹に大きな胎児を抱えた彼女を、私は、野獣的でない、素朴な親しみをこめた愛撫で心からいたわってやったものだ。信子も喜んで私の愛撫を受け入れた」

このあと、二、三の物語があつて、この小説は終るわけですが、すでに相当長く引用してしまいましたし、妊婦マニアにとっては、これで十分なので、もうやめます。母と娘が合意の上で一人の男と通じたり、妊娠中に限って体を他の男にまかせたりするという、常識外れな行為を、背徳的なものとしてとがめるのではなく、自然な、健康な、天真ランマンと言うのか、作者自身のことばを借りると、△社会契約以前▽の姿として、あっさりと、トボけた風に描き出しています。それがまた

石坂文学の真ズイなのでしょう。そして、主人公の妊婦嗜好癖は、あるいは、そのまま、作者、石坂洋次郎氏のものであるかも知れないとも思ふのです。作者にそういう体験があったのかどうか、知る由もありませんが、ありそうな気がします。無知で、ぼんやりして、だらしないさそうなくせに、ただ動物的にセックスが好きな由美子という女が、引用したところでも分りますように、かなり理くつっぽい議論をしたりするのも、面白いと思います。作者の一種の理想の女ということでしょうか。

私は昔、女学生時代に読んだ「若い人」以来、石坂文学が好きで、いくつか読みましたが、ここにまた、妊娠中だけ、つまり腹が大きい間だけ、若い男に体を許す女、という意想外のアイデアを、堂々と悪びれずに描き出された、老成円熟した作者に、あらためて敬意を表さずにはいられません。

二十歳以下の健康な男性がまだ童貞である場合、自分では経験したことのない未知のものについて激しい関心を抱き、いわば空想化された欲望が、強いあこがれとなって心の中にふくらんでいくでしょう。そのような若い男性にとって、すでに結婚してしかも妊娠し

ている女、つまり、すでにそれを経験してその結果が疑いようもなくその肉体にあらわれている女は、見るだけで彼の想像力をかきたて、相当の刺激を与えるものと言っているでしょう。この間の心理を、そのものズバリと——と言っても露骨な意味ではなく、文学的にVということですが——作者は捉えています。さすがだ、と思います。

そういう生理的にも欲求を強く持ち、心理的には、好奇心が大きくふくらんでいる若者が、妊娠してお腹が大きくなっていく若い人妻に誘惑されたらどうなるか。それは言わないでも分っていることです。恐ろしい病気になる心配もなく、子供が出来た出来ないでトラブルがおこることもありません。すでに他人によって孕まされてしまっている女なのです。女体の生理を知りたいという興味もあるかも知れません。いわゆる解剖学的V興味だって十分あることでしょう。その上、ヒクヒクと胎動する胎児、新しい一つの生命が、もう一つの生命の中にいるという不思議、腹の中に子がいる、いわば二重生命の状態、という風なことが、彼をいやが上にも興奮させるにちがいありません。彼がもし、年長の友人などから、話の上だけで八孕み女の味はま

た格別だVということなど聞きかじっていたとしたら、なおさらのことです。

若い妊娠中の女の方はどうでしょうか。彼女はもう妊娠してしまっているの、子供の父親が誰だか分らなくなる心配はまったくありません。出産したら浮気をやめればよいので、あとを引くおそれは少ないのです。彼女には夫がいるし、子供までいるわけです。はじめから、すでに他人のものになってしまっていることがはっきりしている女に、思いつめて夢中になるということはあまりありません。にないことです。八妊娠中だけVと言うことで済みます。八お腹が大きい間だけなんてイヤだなVと男が言っても、八じゃあ、コブつきで私と一緒にいる？Vと言えば、大ていの男はしりごみするでしょう。一番安全な浮気の方法といえるのではないのでしょうか。

妊婦を好むか好まないかということとは、たしかに興味の問題です。ふつうの場合、

「妊娠中の、しかも臨月に近いマルマル膨れた腹の女と、一度寝てみたい」

などと言えば、よほど変人あつかいにされるでしょう。ふつうの妊婦にそんなことを申し出た場合、

「まあ、私のような体の女にたいして、一体

何をしようとなさるの？」

と軽べつされても仕方ないでしょう。しかし若い童貞の男だったら、大学生で、下宿人であっても、夫の弟であっても、場合によっては妊婦自身の弟であっても、

「××さん、あなた女の人との経験ある？」

などと、何気なく聞くことから始まって、「私、こんな体だけど、よかったらハダカを見せてあげる」

と言って、興味をもたない男はないような気がします。好奇心で夢中になった男に、「ねえ、よく見て、女の体ってこんなになるのよ。……妊娠中だけだったら、自由にしたいわよ。約束する？」

などと言うのです。私も、そうしてみたかった、と思います。そして最後にいよいよ臨月、予定日を過ぎて、文字通り苦しみのたちち廻りながら、胎児を産み出します。古い言い方で、女が月満ちて、八身二つになるVと言いますが、この光景——八女が身二つになるVところ——は、大ぜいの好事家たちに見物されて、ほんとうにその形容ピッタリだ、などと言われてみたかったと思います。

(おわり)



鬼 六 談 義

信州別所温泉——上野より約四時間、信越本線上田駅よりバスに乗りかえてまた三十分標高六五〇米の男神、女神の両山に抱かれた素朴な温泉境である。東は遠く千曲川から上田市街、更に浅間山が望まれて、湯街は愛染川をはさんで両側に軒を並べ、石湯、大師の

或る女優の話

団 鬼 六

湯、大湯、立寄湯など、石づくりの共同浴場が古くから有名だ。また、この温泉場には別所三楽寺など国宝級の寺々が数々あって、信州の奈良と云われている。と、別に信州の温泉場の宣伝をしているわけではない。宣伝するとするなれば、この温泉場へバス三台を乗

り入れて、十二日間にわたってロケーションを始めたピンク映画「好色一代、無法松」の方である。R映画の創立三周年記念、異色大作というキャッチフレーズがついていて、ピンク映画のオールスター出演、それに十二日間のロケ、制作費は従来の約二倍となれば、とにかく大作という事になる。男優のめぼしいのは、港雄一、野上正義、里見孝二、鶴岡八郎、泉田洋司、伊海田弘、山本昌平、その他多数。女優のめぼしいのは、左京未知子、美也かおる、火鳥こずえ、辰巳典子、林美樹ハニーレーヌ、大月麗子、乱孝寿、千月のり子、その他多数という事になっているが、ピンク映画に明るいファンは、このキャストングの中に、私の書く脚本の中には必ずといっていいくらいに出演している谷直美が含まれていないのを見て、奇異な感じを持たれた事だと思う。

谷直美は、現在、Yプロの所属スターであり、私もまたYプロの座付作者みたいな形で何年か仕事をして来たのだが、ついこの前、私は、Yプロの仕事に倦怠を覚えて、別に社長のY氏と喧嘩したわけではないが、脱走を試みた。その直接の原因は、Yプロがピンク映画館の下らないアトラクションをやり出し

て、私はその下らない脚本を毎月、強引に書かされ、全く嫌気がさして来たからだ。絶対書かぬ。絶対、書かせてみせる、とY氏と奇妙な睨み合いとなり、谷直美がおろおろして中に入ってきて、それでも私にその陳腐な芝居の脚本を書かせようとするのだったが、こうなれば三十六計逃げるにしかず、と私は飲み歩いたり仲間の家を泊り歩いたりして、仕事を途中で、おっぼり出してしまったのだがそうすると私がYプロを逃げ出したという情報が出た。他のピンクプロから追手がかって来た。この際、私にバリバリエロダクションの仕事させろ、というわけである。逃走費用もいるだろうから、と阿呆らしい事をいい出し、それで私は、旅館を転々としながら、いくつかのエロダクションの仕事をした。その一つが、さっきいったR映画の『好色無法松』なのだが、この企画は会社側が私に提示したのである。

R映画の社長は、エロダクションが何時までもエロダクションに甘んじていてはいけな。うちは文芸路線で勝負していくつもり。勿論、採算などは度外視する、と怪気炎をあげ、私をびっくりさせるのだった。びっくりしたというのは、『無法松』というのは、岩下



俊作の名作『無法松の一生』のピンク化であったからだ。「そりゃ、一寸、無茶ですわ、社長」と『無法松』の次は『金色夜叉』などと云い出す、上田吉二郎に似た堂々とした体躯の社長を私はなだめるようにして、その企画の荒唐無稽さを指摘したが、頑として聞かず、すでに監督、スタッフ、キャストは、この企画に大乗気で私の脚本の出来るのを待機

しているというのであった。色々と原作問題がからんで面倒な事になるのではないかと私が危懼すると、この映画を監督する武田氏がやって来て、原作のイメージをこわさず、原作とは似ても似つかないものを書いてくれれば万事うまくいくと、これもまた奇妙な事をいい出した。何だかはっきり要領が呑みこめぬまま、ケツをたたかれ、たたかれて、ベツドシーンや緊縛拷問シーンなどがある奇怪な『無法松の一生』を書きあげたが、それをピンクの制作者達はたずさえて、かつて無法松を映画化した五社の制作者連とかけ合い、原作とは関係なく題名を拝借したという事でケリをつけたそう。盲、蛇におじず、というか、このエロダクション側の強引さには舌を巻き、と同時に、冷汗の出る思いだった。

さっきいったように谷直美は、Yプロの専属で、Yプロの社長、Y氏は、どういうわけか彼女を他社へ出演させようとしな。こういう所にも、彼と私の意見の対立があった。また、他社もYプロに俳優の貸出しをしないという大人げのない意地を張り合っている。——こんな事、別に書く事はないのだが、谷直美はどうしてYプロ以外に出演しないか、という問い合わせがよく私の所へ来るので、



ついでだから書いているわけだが——まるで生意気にも五社協定の真似をやってるみたいで、見ていて阿呆らしくなってきた。これを打破するには私がYプロから飛び出せばいいのだと、あれやこれやと口実を探し、一応、舞台の脚本料が安過ぎるというのを口実にして脱走したのだ。すると驚いた事には、彼は脚本料を今までの倍額にして来た。こんな事なら、もっと早くもめるべきだったと思ったが、もとより金の問題ではないし、また、そんな彼の野放図さが腹立たしく、とにかく、沢山の役者を使える場所で仕事したいんだと口実を変更して、逃げ出したのである。実際、谷直美一人を売り物にしているようなプロダクションでは、こっちとしても面白くな

い。R映画のオールスター出演のピンク映画は、いわば、私がYプロから逃げ出した事を祝って企画されたようなものだったから、私としても、ブツブツいってはいられない。谷直美問題で、Yプロから一せいに引揚げてしまったピンクスター達が、私が仕事場にしてどっと押しかけて来て、まるで祝賀会みたいに派手に騒ぐのである。こっちも、そんな雰囲気が好きで、連中に何だか煽られた恰好になり、このピンク映画としては珍しく大がかりなロケーションに随行する事になった。これも一種の逃避行であった。

さっきいったように、この映画にも緊縛拷問シーンがあり、その日程に合わせ、二人のKK誌愛読者をロケに招待する事にして、ロケの先発隊が出発した翌日、連絡をとってみた。一人は、KK誌でもおなじみ、辻村氏と組んで、悪い事ばかりしている賀山氏。もう一人は、花と蛇の熱心なファンである島田氏である。この二人とも、緊縛術においては

辻村氏に負けず劣らずの腕の持主故、この映画の緊縛シーンの指導を依頼するつもりだったのである。ところが会社社長の賀山氏は沼津か浜松へ社用で出かけられて留守との事。築地で料亭を経営されている島田氏の方は、電話連絡すると、退屈で体をもてあましていたところだった、と大喜び。早速、このロケを追って、信州まで出向く事になったのである。ロケ隊と一緒にバスに乗れば六時間かかるというので面喰らい、私と島田氏は、一足おくれて上野から特急で上田駅へ直行する事にした。

ピンクスターの顔見せ映画（オールスターといっても、大したスターがいるわけじゃないが）しかし、そうなれば、撮影日数も十日以上あるのだし、女優の二人や三人、個人的なカメラハントが出来るだろうと、もとより最初からそれが目的で、島田氏にしても私にしても当然カメラは持参した。

島田氏は、辻村氏とは同じ位の年令、如何にも料亭の旦那らしく、どこかなよなよし華奢な体つきをしていたが、話術が巧みで洒落な人である。上野駅に現われた時のスタイルがまた変わっていた。大島紬の和服姿に縁なし眼鏡、手に信玄袋をぶら下げている。

その信玄袋の中には、小型カメラが入っているのだ。

「どうです。まるで落語家みたいでしょう」と、彼は奥の金歯を見せて、ニーと笑うのだったが、私には歌舞伎の三味線ひきに見えた。そういう私も、ここ半月、自宅へ戻っていないので服を着がえる事が出来ず、友人に借りた皮ジャンパーに登山帽、それに信州の方は今、雪が降りしきっているという情報が入っていたので、ゴムの長靴をはき、毛糸の首巻をまいて、まるで、鉄砲射ちみたいなスタイルだったが、こうした恰好の二人連れは実に人の眼には珍妙なものに見えたに違いない。上野駅で汽車を待つ間も、島田氏はしげしげと幾度も私のスタイルを見つめて、「やっぱり向こうは寒いのでしょねえ」と、粹な和服姿でやって来た自分を後悔し出したのか情けなそうな顔をするのだった。雪の道をペタペタ草履で踏んで歩く辛さを想像し、防寒着の用意を忘れて来た事を口惜しく考えこんでしまったようだったが、呑気なもので、二人とも、信越本線のホームを間違えて、別のホームで突っ立っている事がわかり、発車まであと三分という時になって、通りかかった駅員に聞いてびっくりし、あたふた二階の

ホームへかけこんだ。発車直前の特急車へすべりこんだ途端、島田氏は、草履をすべらせて大きく派手にひっくり返られた。着物の裾がパツとひるがえって、毛むじらの足が二本空間へ突き出たが、薄紫色の豪華な男の長襦袢がさらけ出てそれで島田氏の並々ならぬお洒落を改めて私は知る事が出来た。

特急で上野より上田までは、約三時間である。マニヤ同志の気楽な旅行というものは楽しいものだ。ウイスキーを飲み合いながら、車中ではずっと、とりとめもないSMの話という事になる。これで賀山氏も加われば、マニヤ三人旅、話題も一段とはずむ事なのに、と思ったが、島田氏と語り合っている内、私はむしろ賀山社長が今回来合せなかった事に、ほんとと安堵を覚えるようになった。というのは、島田氏の話題が、もっぱら春江という女性に絞られて来たからで、この女性の名を賀山氏が聞いた場合、ふと、不快な感じを抱くかも知れないと私はそれを恐れたのだ。



春江というのは、現在、島田氏の二号である。といっても、二三週間ばかり前、彼女は島田氏とそういう関係に入ったわけだが、彼女を島田氏に紹介したのは私なのだ。だが、私は彼女を島田氏に紹介する前、賀山社長ともう一人、製薬会社の重役、田川氏にも紹介していた。といっても、何もポン引の真似をしたのではない。彼女の希望で二号となるための見合いを三人の中年紳士にさせたわけなのだ。賀山氏も田川氏も、春江という女性に充分、食欲をそそられたようで幾度も連絡して来たが、彼女が選んだのは島田氏で、結果賀山社長と田川重役は彼女にふられた形になったのである。だから、島田氏が春江の事を

賀山社長の前で、ぬけぬけとのろけたりすれば、社長としては心中、面白くないという事になる。それで、今度の信州ロケ随行に賀山社長が参加しなかった事を、ほっとしたわけである。

私は島田氏と話し疲れて、ふと眼を車窓に転じ冬の田園風景を眺めながら、春江と始めて逢った時の事など、ぼんやり思い出してみ。勿論彼女と私の間には肉体関係はない。KK誌には、いい加減いやらしい小説を書く私だが、自分の手をつけた女性を友人に紹介



するなどという悪趣味は、現実の私にはないのである。

春江は、元、五社の一つの大部屋にいた映画女優だ。三年間、大部屋生活をして、テレビに流れて来、昔、私がテレビの仕事をしていた頃、二三度、仕事の上でつき合った事がある。一寸、藤田佳子に似た肉感的な美人だった。容貌もいいし、性質もいいし、演技力もまずある方だったが、どういうわけか、これという仕事に恵まれない。仕事運が悪いというより芸能界を泳ぎ渡る要領といったものが悪かったのだろう。私がピンク映画

などの低俗な社会に身を持ちくずしてから、久しく彼女と逢う事もなかったが、去年、偶然に六本木のある酒場で彼女と、ばったり出合ったのである。

その時、彼女は女友達二、三人と賑やかに飲んでいたのだが、私を見てびっくりし、すぐに戻って来るから、と私に告げて、酔っ払った仲間を地下鉄の方まで送り出し、再び酒場へ戻って来たのだ。なつかしい顔だった。今も充分に美人である。二重瞼の大きな瞳ふさふさと肩にまで垂れかかる柔らかい感触の黒髪にも昔の匂いを感じとれ

たが、しかし、彼女はもう二十八才になっている。以前は、一滴のビールも飲めなかったのに、現在はかなりの酒量をこなせるようになったらしい。そんな所に彼女の生活の荒さが感じとれるのだった。「今、君、何しているの」という私の質問は、女優である筈の彼女の気位を傷つけるようなものだったかも知れないが、「相変わらずこれといった役がつかず弱っているわ」と気弱に彼女は微笑し煙草を口にするのだった。勿論、以前の彼女は煙草など口にする女ではなかった。銀座の高級酒場に勤めに出た事もあるようだが、それも長つづきせず、目下家でブラブラしているというのである。自分は本当は映画女優なんだ、という自意識が邪魔をして、夜の蝶になり切る事が出来なかったのだろう。

そんな風に彼女と偶然、出合ってから、私は週に一度ずつ、彼女を誘って夜の六本木、銀座界隈を飲んで廻るようになった。チャンスは——つまり、彼女を誘惑するタイミングは幾度もあったが、飲めば飲む程、彼女は眼頭に涙を浮かべて、自分はどうしても芝居を捨て切る事は出来ぬといい、現在、テレビなどで活躍している女優の演技を批評し始め、あの場面はもっとこういう気持で、こういう

芝居をするべきだ、などと、まるで討論でもしかけるような調子で、私にしゃべりまくるのである。私は、彼女のこういう所があまり好きになれないので、フンフンと矢鱈に相槌を打っただけだ。こういう芸術論を好む女性をピンク作者が手をつけるなど何か恐れ多い気がして持前の助平心も萎縮してしまうのだったが、すると彼女は、何か機会があれば、もう一度女優として勝負してみたい、といい出し、それが駄目なら、人の妾にでも何でもなると、何か自棄になったいい方をするのである。「何もそんなに自棄になる必要はないじゃないか」と、酔い泣きしそうになっている彼女をなだめて、その夜は彼女のアパートまで送って行ったが、何となく彼女が哀れにもいじらしくも思えて、その次の日から、私はテレビ関係の仕事をしている昔の友人に連絡をとって、何か機会を彼女に与えてやってみようか、と時間をさいて、相談してみた。一度、逢ってみよう、と快く彼女と逢ってくれるディレクターもいて、彼女はテレビ局へ胸をふくらませて出かけるようになり、うまく好運をつかんでくれればよいが、と私は再び阿呆くさい仕事に戻りながら、彼女の動行を見守っていた。某ディレクターが肩入れし

てくれて、或る新番組のかなりの役に抜擢されるような気配が見え、私も運動してやった甲斐があったと喜んでいたが、それが突然、上司の命令でその役は、かなり名の売れた某女優に振り代わってしまったのである。彼女の落胆は大変なものであったが、私もがっかりして、彼女の事を依頼したテレビ局の友人を酒場に呼んで、くわしい事情を聞いてみたが、実績のこれといってない彼女が突然、役をもぎとられてしまうのは、この社会では別にめずらしい事ではないのである。まあ、そう悲観する事はない、と私はがっくり力が抜けた彼女を慰める。ふと、思いついたのが東映のハレンチ路線だ。内容からいってピンク映画と大差ないにせよ、何といっても相手は東映、プロデューサーに紹介してやるから、裸になって勝負してみようか、と口説き出したのである。そんな事がある前は私は彼女と一緒に例の徳川女刑罰史を見て、その帰り道、いつもの酒場で、ああいう映画を君はどのような気分で見えたか、つまり、彼女にMのけがあるかないかニヤニ



ヤして誘導質問を始めたのだが、あんなひどい目に合わされるのは嫌だけれど、好きな男性に縛り上げられて、いじめられるのは好きだ、と彼女はいい出し、私をわくわくさせたものである。それはとにかく、どうだ、思い切って、あした映画に——と誘いをかけると、彼女は裸にならなきゃ浮かぶ瀬がないのなら、私、決心するわ、といい出し、芸能界に対する未練は、やっぱり断ち切れないようであった。すべて、私に任せるから、よろしく願います、というのである。あきらかに、テレビ出演のキャンセルを喰って、半分、自虐的になっていた。うまい具合に、それから二、三日たって所



用のため東映の天尾氏が上京して来たので、私は彼と夜の酒場を飲み歩いた時、事情を話し、彼女を赤坂の酒場へ呼び寄せた。どんな映画でもいいから一応の役をつけて、突っこんでみてくれないか、と彼女の事を頼んだのである。彼女の容姿がプロジェクターの気を

ひくかどうか、まず問題だったが彼は、若い頃の京マチ子によう似てる、と大分、気に入ったようで早速、次の作品で考えてみましょう、という事になった。

天尾氏も新人女優のスカウトに懸命であり私も彼に協力して、二、三人、十人並の女性を揃えた事があり、天尾氏も喜んだのだが、ところが娘達の両親や兄弟が現われて反対しせっかくの美女達が、一ぺんにかき消えてしまった事がある。親達が『徳川女刑罰史』を見て腰を抜かさんばかりにびっくりしたらしい。ま、娘がああいう映画に出ると知って、驚かない親の方が、おかしいといえるが——その点、彼女には問題はないので事はスムーズに運ぶだろうと思っていた。京都へ帰った天尾氏から電話があつて、彼女を至急、京都撮影所へ寄こしてもらいたい、というのである。仕事の打合わせがあるという。話も本決まりになったのかなと思ひ、私は京都へ発つ彼女を駅まで見送り、向こうへ行ったら、監督さんの前で、下手な芸術論をぶつんじゃないぞ、と笑いながら忠告し、彼女も微笑してうなずいたのである。

それから、こっちも仕事が忙しく、彼女とも逢えなかったが、京都の天尾氏より電話が

あり、監督の意見で、今度の時代劇には不向き故、現代劇をとる時まで彼女は温存しておきたいと思う、というのだ。脚本は彼女に渡したが、やるとするなら、相当ひどい役になると思うし、それは彼女の場合、一寸、可哀そう過ぎるという天尾氏は、彼女の二十八才という年令を、おもんばかったようである。結果的には、徳川女系図にも、彼女はおろされたという事になる。

その夜、彼女を酒場へ呼び出した私は、天尾氏の思いやりのある言葉を聞かせ、もうしばらく時期が来るまで待ってはどうか、と云ったが、彼女は、自分の二十八才という年令に東映がげっそりし、敬遠策をとったと思ひこんだらしい。その夜は、また、自虐的になつて酒を飲み、もう私は駄目よ、おばあちゃんだもの、と荒れ出して私を手古ずらせるのだった。二十八でババアって事あるか、一番脂が乗って女の味の最もいい時だ、などと変な慰め方を私はするのだったが、そんなら、今夜、味わってみたらどう？ と彼女は私の手からみつき、完全に自棄っパチになっていた。こっちなかなり酔っていたし、正直、彼女のお言葉に甘えようと、その時ばかりは思ったが、ついてない時は仕方のないもので

その夜、Yプロの映画脚本を書き上げねば予定している日にクラシク・イン出来ないという事になっていて、明日の朝早く印刷屋のおやじが原稿を取りに来る事になっている。この事が原因で、私はYプロを腹立たしく思うようになったのかも知れないが、とにかく、その夜は、かなり酔っ払って足元もおぼつかない彼女を自動車に乗せ、紳士的に彼女のアパートまで送りとどけたのだ。

アパートの前に車が止まり、シートに酔い寝しているのを私に揺り起こされた彼女は、一瞬、不快そうな眼で私を見、あとも振り返らずフラフラとアパートの方へ歩いて行ったが、その時にはこっちとしては別にあわてなくとも、彼女とホテルへ行く機会はこちらからいくらかもあると、たかをくくっていたのである。

しかし、女の心理とは実に複雑なもので、彼女はその事があってから、妙に私に対し、冷たい態度をとるようになった。仕事が一段落して、彼女を電話で呼出し、酒場で飲む時はあっても、態度が馬鹿に白々しく、義理で私とつき合っているといった様子に見えるのである。「ずっと今夜はつき合ってくれないか。俺、今夜、帰る所がないんだ」と、いつ



もの調子で口説いてみたけれど「私、あなたと、そんな風な関係になりたくないんです。ずっと、お友達でいたい」と、ついこの間は「どこへでも連れて行って」と酩酊して、からみついてきたくせに、手のひらを返した。

ような冷たい態度をとり、ふと腕時計を見て「今夜、テレビの深夜劇場を見たいの。悪いけど、これでお別れするわ」と腰をあげ、さっさと引揚げていくのだ。

こんな事なら、あの時、やっとけばよかったと何か腹立たしくもなり、その時のタイミングを外すと、女はこうも複雑化して扱い憎くなるものかと考えさせられた。彼女もあれから色々と考え、まだ、女優の自分をこれといった所に売りこんでくれない私と簡単に肉体交渉に入っては損だし、自分がみじめだと自重し出したのかも知れない。

しかし、それから数日たって彼女の方から電話があり、私に折入って相談したい事があるという。満更でもない気持で、彼女の指定した喫茶店に出かけると、珍しく和服を着た彼女は静かにストローでジュースを飲みながら私を待っていた。

スポンサーを紹介してほしい、というのである。あなたなら顔が広いから、信用のおかげで紳士を紹介して下さると思う故、相談したというのだ。何だか人を食ったような話で、最初、私は面喰らったが、そんな事を思い切った私に相談せねばならないほど、彼女の家庭の事情は急迫していたのであった。その時

始めて私は知ったのだが、彼女は、母親と高校へ通う弟を扶養していたのである。貯金もそろそろ底をつき、また、酒場へ勤めに出なければならぬが、その根気がどこまで続くかもわからないし、うかうかすると一家心中故、思い切って男性の世話を受ける気になったと、つまり、彼女は二号になるための相談を私に持ちかけて来たのである。

私は、わざとむつかしい顔をして矢鱈に煙草をくゆらせた。ピンク女優達から今まで色々やっこしい相談を持ちかけられた事はあったが、二号になりたいから誰か適当な相手を見つけてくれなどという相談を受けたのはこれが始めてである。何となく腹立たしいのは、彼女が私にそんな相談を持ちかけて来たという事は、私を男性として無視している、という風に受取れるからである。彼女が娼婦とするなれば私はポン引であった。娼婦とポン引が喫茶店の片隅で最近の景気についてボソボソと語り合っているような恰好である。まことに不愉快であった。俺がスポンサーになっただけあかんのか、と冗談まじりに皮肉を云うと「あら、あなたは駄目よ。ラムールの彼女に悪いじゃない」と、何時の間にか彼女は私が親しくしている酒場ホステスの名を知

っていて、クスクス笑うのである。私は啞然とした。彼女が私に対し何となく白々しい態度に出るようになったのは、その酒場ホステスの事を知ったからだとわかり、私は苦り切った。私は決してプレイボーイなんかではないが、彼女は、あっちこちのホステスと簡単に接触するような男の玩具には、なりたくないといった気位のようなものがある。すると私は、ますます、あの機会を逸した夜の事が残念に思われてならない。どう見ても、やはり五社の女優をしていただけの事はあり、私が現在、親しくしている酒場ホステスより彼女の方が、容貌といい肉体といい大分、上等に思われるのである。

それはとにかく、彼女は自分が二号になった時の条件として、束縛されるのは嫌だという事。自分がもし、芸能の仕事をする事になったら協力して欲しいという事。月々、肉の交渉は何度と、その曜日を定める事。月の手当ては五万円にする事など、並べ始めるのである。つまり、アパートなんかを旦那が借りそこに妾みたいに住みこまされるのは真っ平という事だ。

半分、照れながら、そんな事を彼女は私に相談し始めるのだが、私はその間、ぼんやり



とおかしな事を考え始めていた。もし、私が彼女と、そういう肉体関係に陥れば勿論、飼育してMに仕立てあげる肚でいたが、自分の手で扱えないなら、私と同じ趣味を持つ人の手にゆだね、彼の手で彼女にMの悦びを知らしむるという事。そこで、まず頭に浮かんだのが賀山社長、田川重役、そして、料亭の主人、島田氏の事であった。以上の三人は、年



柄年中、プレイの相手を求めている、いわばプレイ紳士である。この三人と彼女を、それとなく見合いさせてみては、どうだろう、と私は考えたのだ。

月、五万円ぐらいの保証は、これらの紳士にとっては高いものではない。また、それだけの値打は充分、彼女にはあると思われる。

いや、むしろ安過ぎるのだが、いろいろと条件を出している手前、彼女自身の方で要求を遠慮したのだろう。

それから何日かたって、久しぶりに飯でも一緒に食いませんか、と賀山社長を中華料理店へ誘い、一人、紹介したい女性がいる、と彼女を呼び寄せた。

くわしい事情は何も語らず、ただ、三人で会食し、談笑して別れただけであつたが、案の定、賀山社長、彼女に大分、心を動かされた様子で、あとから、私の所へ電話が早速かかり、「ね、先生、さっきの女優さん何とかならないでしょうかね——待て待て、まだ二人、見合いが残ってるんだ。私はとぼけて「彼女の方から電話があつたら、大いに脈がありますよ」

二人目は、田川重役で、この見合いは、六本木のレストランで行なわれた。田川氏も賀山社長同様、大いに心を動かされたようである。こんな別嬪、見た事ないとか何とかオーバーなお世辞を云って、ぜひ会社へ遊びに来るようにと云って名刺を渡したり、この次は何時逢ってくださいか、と性急さを発揮するのである。

三人目は、島田氏である。島田氏の懇意に

している銀座の天ぷら屋で、この見合いは行なわれた。この時も島田氏は芝居の役者みたいな粋な和服姿であつたが、彼女も和服姿で登場し、それだけに一層、島田氏を悦ばせたようであつた。すしのうまいのは銀座ではどこ、うなぎのうまいのはどこ、と彼がしきりに食いものの話をする時は心が浮き立っている時で、そんな話をつづけながら、島田氏は彼女の横顔や体つきなど、なめるように見廻すのである。——こうして、一緒に食事した三人の中から、彼女に好感の持てた男性を選ばせるといふのが、私の着想であつた。勿論以上の三人の男性は、一眼で彼女を気に入った様子。ぜひとも交際したいと私の所へ、はっきりなしに電話がかかってくる。

三人とも彼女に名刺を渡しているので、あとは彼女からの直接の連絡を待てばいいわけだ。彼女が選んだ紳士に私が事情を説明し、彼の専属とし、プレイの相手を勤めさせればいいわけだ。

しばらく考えさせて、と彼女は云うのだった。私は彼等が一風、かわった性情の持主である事を一応、彼女に告げておいたが、三人が三人とも、地位も財産もあり恰幅のある人々であつて、優しく、そして紳士的に振舞っ



た見合いの日の印象が彼女に安心感を与えたようだ。前にもいったように「徳川女刑罰史」みたいな、ひどい目に合わされるのは嫌だけど、縛られるという事にそんなに嫌悪は感じない、と彼女は云うのだった。

だが、考えようによれば「徳川女刑罰史」なんかより、もっとえげつない目に合わされるかも知れないのである。私は、三人の紳士の趣向をよく知っている。同じSでも、それぞれ責めの趣向はいささか違っていろいろで賀山社長は、鞭打ちとバイブレーターが好きだし田川重役は、浣腸責めと排尿強制だ。島田氏は絶対的に剃毛なのである。こうした紳

士達のお遊びを時々私は拝見させて頂く事があるが、この三人が三人とも、自分のアジトというものを持っている。賀山社長は、時々辻村氏と一緒にマンションの一室を使って汗水流し、ホヘッホヘッと女の子をいじめているし、田川重役は小さなアトリエを借りていて、絵のモデルになれと女の子を引きこんでは、絵筆

をモデルのエイナスに啜えさせようと懸命の努力を払うのである。島田氏も、アパートの一室を別に借りていて、そこでもっぱら女性のある部分を散髪しているのだが、私はそこへ何度か邪魔し、彼が安キャバレーのホステスの散髪をする所を、つぶさに拝見した事がある。

傑作なのは、この部屋にある、彼の考案による鏡ベッドだ。これを参考にして、何時か「花と蛇」の中でも書いた事があるが、頭の部分を上に、足の部分を下に、ベッドの表面はゆるいカーブで傾斜させる事が出来るようになっていて、足の部分の箆木に鏡が垂直に

差しこめるようになっていて。すると、ベッドの上に大の字に皮ベルトで手足をつなぎとめられた被害者は、眼を開けば、自分の極端な肢態を鏡の中に見る事が出来るようになっていたのだ。

島田氏は、私をこの部屋へ招いた時、ベッドの上に大の字に縛りつけたキャバレーのホステスを、勿論、その仕事は私も手伝ったが——垂直に立てた鏡の中を見るように命じて小さな櫛とハサミを使って、まるで紙切り遊びをするようにチョキチョキやり出し、随分と時間をかけて楽しんだあと、石ケン水と剃刀とで一本残らずきれいに剃り上げてしまったのである。そんな事をやらかす時の島田氏の顔は、いや、島田氏に限らず賀山氏にしても田川氏にしても、プレイに熱中する時は全く狐つきになってしまっている、と人の事は分かり云ってるが、私などもそんな時は化け損った狸みたいになっている事は事実だ。だが今、一言——プレイの時は常軌を逸した行動はとるけれど、彼等は（厚かましいが私も含めて）表面は女性に対して実に優しい紳士連なのである——

落葉し尽した疎林が車窓の外に淡々とつづ

いている。汽車はすでに小諸も過ぎ、目的地の上田へ、もう間もなく到着するようだ。汽車に乗った時から飲み続けたウイスキーの角瓶ももう底をつき、島田氏と私は代りばんこにトイレへ立ちながら、飽きもせず、しゃべり続けている。

島田氏は、あの鏡ベッドへ春江を縛りつけるまでの苦勞を得意げになって私に語るのだった。島田氏は最初からそうした自己の性情をむき出しにして、彼女にぶち当たったのではない。二人の最初の肉の交渉は箱根のデラックスなホテルで行なわれ、それはまるで新婚旅行の二人のような初々しい交渉で終わった。うだが、その時、彼女の肉体の魅力を感じとった島田氏は、一日も早く彼女を例のベッドに縛りつけたくて、狂おしいばかりの思いになったそうである。マニヤの肉の悦楽は二回あるわけだ。彼女の肉体を征服した島田氏は次に彼女を飼育してM化させるための努力に精力を使い始めたのである。その機会は意外に早く来たと島田氏はいう。

目黒でスナックバーを始めた友人の開店祝いに彼女同伴で出かけた島田氏は、その帰り銀座のナイトクラブ、赤坂の酒場など何軒かを飲み歩き、大酔して足元も危っかしくなっ

た彼女を、やっとアパートにしているアパートへ連れこむ事に成功したのだ。ソファにくずれてしまった和服姿の彼女と、次の間のからくりのあるベッドを見くらべた時の島田氏は、

正に天にも登る心地。動悸する胸を押さえつつ、慄える手で彼女の衣類を一枚一枚、剥ぎ出した事だろう。素裸にした彼女を横抱きにしてベッドへ運ぶ途中、その重たさに大して力のない島田氏は腰がぐくぐくしてしまったそうだが、それでも、この一番が勝負とばかり、ようやくベッドへ彼女を仰臥させ、しかし四隅の綿紐に彼女の四肢を固定しようとした時は、彼女は全身酒の酔いで痺れ切っていた。が、眉を不快そうに寄せて頑に手足をちぢめ、今夜はおとなく、このまま寝かせて、などといってくるりと背中を向けてしまい、島田氏をまごつかせてしまったという。助けてくれと哀願したのは彼女ではなく島田氏の方なのだ。俺を助けると思って、俺の云う事を聞いてくれ、と島田氏は彼女をかき口説いたので



あった。

そして、俺のいう事を聞いてくれるなら現在、彼女が母親と弟と一緒に住んでいるアパートから高級マンションへ引越させてやってもいいと条件までつけたのである。六帖、四帖半二間きりしかない狭いアパート住いを彼女は愚痴っていたのだ。そんな事までしてくれなくともいいと彼女は首を振りながらも、やはり金の力には弱かったらしい。それとも母親の事や弟の面倒まで見てくれようとする島田氏の思いやりに心動かされたのか、またどうせ、人の妾になるからには、がめつく稼がなければ損だという打算がわいたのか、次第に彼女の抵抗は弱まり出して、遂にはどうともなれと酒の酔いも手伝って、彼の手に身を完全にゆだねてしまったそうである。

四肢をがっちりベッドに固定された彼女を前にして島田氏は全くの有頂天となり、マンションまで借りてやると約束したからには、それだけの分だけは、こっちもがめつく楽しまねば損だと、突いたり、さすったり、ゴム球を押せば先端がふくらむという怪しげな道具まで使い出して、まるで子供が玩具遊びに夢中になるように、心ときめかして遊び呆けて彼女を喜悅にのたうたせたが、鏡に眼を向ける事と断髪

だけは、彼女は最後まで頑強に拒否した故、中止したという。それから、彼女は、島田氏の熟練した指さばきや腰さばきでそんな姿のまま幾度も絶え入りつつ、このようなみじめな姿をさらしてしまった自分の事を絶対、私に云ってくれるな、と彼に何度も念を押したという。

色事師とか遊び人とかいう種に属す男達は自分が捕獲した獲物をどのようにして料理したかという話を酒の席などで自慢げに語り合うものだ、二号になっても未だに気位を傷つけられる事を恐れる彼女は、そんな事まで危懼しているのであった。

女優として立つ夢は、はかなく消え、生活



力すら失った彼女は、その敗残の身を一人の好色漢の手で素っ裸に剥がれ、ベッドへ大字に縛りつけられ、淫虐な責めを真っ向うから受けて哀れ落花無残のあられもない姿を露呈してしまったのだ。自尊心と驕慢さを兼ね備えた女優の奈落に落ちた、みじめな姿だ。

女も、マニヤの手にかかるようになれば、もうおしまいだと、自分がマニヤのくせに、おかしい事をいうようだが、実際に私はそう思う。かつては監督相手にむきになって演劇論をぶちかましていた彼女の、そのひたむきな眼の色を、ふと私は思い出して何ともいえぬ惨鼻な思いになった。と同時に、ついこの前までは、何とか彼女を芸能生活の軌道に乗せ

るため、あちこち奔走していた筈の私だったのに、その努力の甲斐なく、彼女が私の手からすべり落ちてマニヤの所有物となってしまうと、ふと、こっちも自棄気味となり、落ちる所まで落ちていけ。もっとマニヤにいいめられてMに飼育されていくがいい。といった倒錯した加虐心理が起こり出すのである——

それで私は、得々として如何にして彼女を料理したかを語り、これを参考にして「花と蛇」に書いてみませんか、という島田氏に對して、

「何も嫌がったって遠慮する事はないじゃありませんか。いわば売りもの買いのものだからケツの毛まで抜いてやればいい」

などと、何か腹立たしいものを感じて云ったのだ。

彼女の希望によって、私は三人の紳士を紹介し、その一人を彼女は選んだわけだが、それは未来に希望を失った彼女に愛想がつきた私が、変質的な性行為を好む、或る意味では恐ろしい紳士達を、わざと彼女に紹介したわけである。つまり私に変質心理が起こって心の中に不気味な光線が走ったのだ。彼女の仕事について真面目にこっちは尽し、また彼女が人の妾になりたいという希望を満たすため



にも、こっちは真面目に尽そうとした。思えば阿呆な話である。もう一度、いい仕事を、と涙まじりで私に告げた彼女の切実な気持を何も尊ぶには当らなかった。エロ作家ならエロ作家らしく強引に手を出して、S的性欲の満足を買えばよかったと、情ない気分には私は陥ったのである。

飲むうちに酔ううちに、私は段々と島田氏が憎たらしくなってきた。自分で女を世話しておきながら、それに嫉妬を感じるとは救われない話だが何も遠慮する事はない。彼女を徹底的に罵りものにすればいいんだ。所詮、売りもの買ひものではないかと、いささか皮肉まじりの云い方を私がしたのは、やはり嫉

妬から出たものだろう――

上田駅からタクシーを飛ばせて約二十分、別所温泉に到着した時は、もう夕暮れ。紫色に夕映した山々は暗い鉛色となっていて、農家の裏庭で塵埃を焼く赤い火が、薄暮の空気を彩っていた。幸い、心配していた雪は降っていない。

撮影隊の一行は、柏屋ホテル、花屋ホテルに分宿していた。一先ず、私の宿に定められてある柏屋ホテルに直行する。

助監督のB君に案内されて三階へ上り、廊下を幾つか曲ってから、一番奥の二間つづきの座敷へ通された。部屋の入口には団鬼六先生お部屋と貼紙してあって、その座

敷は十畳の広さがあり一応、設備もとのっている。今まで随分とロケには随行したけれど、これ程、立派な部屋をあてがわれたことはなかった。それだけR映画は景気がいいのだろう。ホテルにだって、恐らく別所温泉で一、二を争う豪荘な

もので、宏大な庭園もあり、これなら客人を招待した甲斐があったと私は、ホッとした思になった。

夕食後、二階の大広間で拷問緊縛シーンの撮影は開始された。もぐりの女あんな、つまり、俗に云うパンマが、土地のやくざに無断で商売しやがったという理由で私刑に合うシーンだが、脚本では、女あんな二人、裸に剥がれて縛りつけられ、やくざにムチでしばかれるという簡単さだけど、それじゃ少し芸がなさ過ぎるので、このシーン、島田氏に指導願ったわけだ。このパンマになるのは、千月のり子と乱孝寿で、私の脚本でこの二人を縛ったのは始めてのようである。この二人を散々ムチでぶったあげく畳の上に仰臥させ、彼女達の片肢をつないで縛りあげ、滑車にひっかけて、よいこら、どっこい、と吊り上げる手を島田氏は考案された。吊り股裂きの刑というところか。やくざの幹部に紛した里見孝二が、えへらえへら笑いながら結構、楽しげにロープをひっぱっていたようだ。

こうした映画の拷問緊縛シーンなど今まで掃いて捨てる程撮ってきたから、こっちは別に大して面白くないが、島田氏は始めての事だけに夢中になってしまい、私が一風呂浴び

て部屋の中で酒を飲んでゐるのに中々撮影現場から戻って来ない。私刑シーンの次に今度は別の部屋でベッド・シーンの撮影が始まったのだが、そこまで出かけて行って、つぶさに見学し、スナップを盛んに撮りまくっているようだった。

部屋へ戻って来てからも、何かさかりのついた猫みたいに落着かず、私と一緒に酒を飲みながらも妙にそわそわして、急に立上ったと思うと窓を開けて、星を眺めたり、今は誰のベッド・シーンだろ、とほざくと、突然、部屋からまた撮影現場の方へかけ出して行ったり、こんなに女の裸を見ていきり立つ人も珍しかった。



その夜は、乱孝寿と千月のりを口説いて部屋へ呼び出し、個人用のフォートで島田氏と一緒にとる事が出来たが、それが彼の神経を一層高ぶらせてしまった原因となり、今夜はこのままじゃどうしても眠られぬ、とか何とか云って私を手古ずらせ、遂に旅館の番頭に地理を聞き、芸者遊びに二人で出かける始末となった。

旅館にもどったのは、もう夜中の二時過ぎていたが、ぐったり疲れて夜具へもぐりこんだ私に、島田氏は、「実は、さっき置屋から春江の所へ電話したのですよ」というのである。

ピンク映画のベッド・シーンや緊縛シーンを見ている内、彼女が恋しくなり、明日、ここへ遊びに来ないか、と彼女を電話で誘ったそうだ。それで彼女はどうか答えましたか、と私が聞くと、「退屈している所だから、そんなにいい温泉場ならぜひ行きたいが、貴方も一緒だというと、そんなら行くの見合すわ、と吐かすんです」と島田氏は私の顔を見て苦笑するのだ。私がいるから行

くのを見合すとは、恐れ入った御挨拶で、こっちは何も彼女に毛嫌いされる理由はないと、何となく不快になったが、彼女のそんな気持もわからぬ事はない。

さっきいったように自分が島田氏に彼女を紹介しておきながら、それに嫉妬を感じるとは真に不可解な私の心理状態だが、私にスポンサーを紹介してくれと頼んで島田氏の二号になりながら、彼女の方も、私とはバツが悪くて顔を見合わせられないという複雑な心理を持っているのだ。

その翌日、島田氏は東京へ戻った。昨夜の電話で彼女が早く帰ってくれるようにと甘えなかったそうで島田氏は晴れ晴れした表情であった。私は、R映画の次の作品とKK誌の原稿をここで仕上げる予定であったから、そのまま撮影隊と一緒に三、四日、滞在する事にする。

二日ばかりたって、柏屋ホテルへ島田氏より電話がかかって来た。

「ロケの御招待、有難う。実に楽しかったですよ」と島田氏は、はずんだ声で云い、次に「昨夜、とうとう彼女に断髪を行ないましてね。大分、手古ずりましたが、貴方のおっしゃる通り、こっちも強引な手段に出ました

よ」と、島田氏は、それを私に聞かせたくて電話してきたらしい。スクリーンドライバーみたいな酒を飲ませてグロッキーにした彼女を例のベッドに縛りつけ、遂に剃刀を使ったという。彼女は泣きわめいたそうだが、心を鬼にして一本残らず剃り取ったと島田氏は云い、彼女の泣きじゃくりを聞きながら剃っていく時の快楽は如何ばかりか、と彼は盛んに私をうらやましがらせようとするのだった。島田氏と私とは、それから電話で大体、次のように話した。

「彼女を最初、紹介して下さった貴方は、つまり縁結びの神だから、彼女の毛を二、三本奉納しようと思って、それだけは、とってあります」

「そうですか、そりやどうも有難う。しかし、そこまで来たのなら次の浣腸責めなんか如何がです」

「浣腸ねえ。でも、そいつはいくら何でも」

「売りもの買いものじゃありませんか。何でも実験してみなきゃ、損ですよ」

私は電話を切ると、腹立しさと痛快さが同時に胸にこみ上って来

た。そして、何とはなしに物哀しい冷たい風が私の心を吹き抜けていく。

なんとか気分を変えようとその日の仕事のない役者を連れて、土地の酒場を飲み歩いてみたが、やっぱり面白くない。一人で部屋へ戻ったが、島田氏の電話で、妙に体が燃えてきた故か、島田氏じゃないけれど、どうもこのままでは眠られそうでない。

そこで階段を降り、女優部屋をのぞいてみる。

「誰か今夜、閑なのはいいかね」

辰巳典子と大月麗子が、今夜の仕事はもうないという。この二人は、この映画で芸者役を演じているのだ。



「かつらを持って俺の部屋へ来てくれ。撮影がすんだら一杯おごるよ」

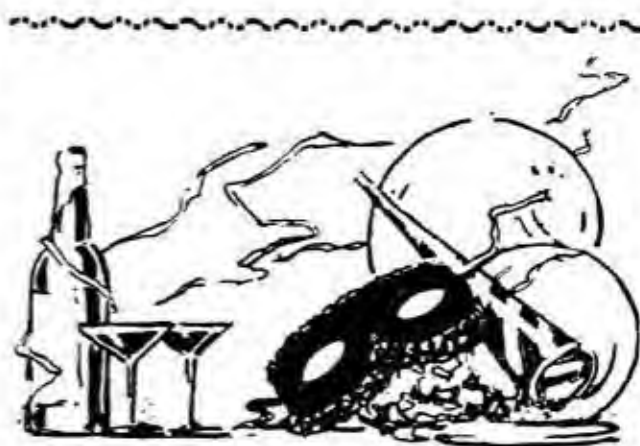
また私の悪いくせが出たと知って、彼女達は顔を見合わせたが、すぐに気軽に応じてくれる。

辰巳典子と大月麗子に、かつらをかぶせてそれから個人用フォートをとって見たのだが一向に心は晴れなかった。

今夜あたりも彼女は島田氏の執拗極まる責めを受け、身も心もズタズタにされているのかも知れない。そうして、次第に彼の手でMに飼育されていくのだろう。奥行が深そうな女であっただけに、ふと惨憺な思いがするのだ。

所詮、女とは、馬鹿に出来ているものなのか。いや、何の事はない。彼女をSMの泥沼に引きずりこんでしまったのは、この私じゃないか——そうした自責の念もからまって私はいらいらし、酔った足を踏みしめながら、二人のピンク女優の、何だかわけのわからぬ子供だましのような写真をとってしまった。読者の眼にかけられるような、代物ではないのだけれど——。

—(おわり)—



人間の行為は

どこまで

許されるか

井上俊彦

我々は心のうちで、ああしたい、こうしたいとあらゆる欲望を持っている。そしてできることならば胸の内に秘めた欲望を、現実の場に移して実現させることを望んでいる。しかしながら我々は社会に生きる人間であり、社会協同生活の枠内において、我々の行動の全て、ないし一部は、社会協同生活の全体としての向上発展と合致する限りに於て許されるものである。すなわち社会には自己と同等の他人が存しており、その他人の人権を無視してまで自己の欲望を満たすことは、法の是認せぬところである。

では一体どの程度まで我々の行為が許され

るであろうか。ここでいう行為とは、意思に基づき外部に表現せられた人間の身体の動静を言う。外部に表現せられない限り、いかなうな考えを持とうとも、法はこれに関知しない。キリスト教は心の中でも姦淫してはいけないと言ったが、法の世界では心の中で誰を姦淫しようとも、それは犯罪となることはないのである。何故なら犯罪となるには、まず行為と言える人間の身体活動がなければならぬからである。

本論に移る前に私が強調するのは、私これから述べることは、本誌の愛読者のためになる、ということである。本誌は決して世に

犯罪者を作り出すものではない。そのためにはどのような行為が犯罪とされ、どの程度までは犯罪とならないかを明確にしておく必要がある。私は愛読者の一人として痛切にそのことを感じ、愛読者の誰もが犯罪者にならぬことを切実に願望するので、ここにこれを書き述べるのである。

さて各々の具体的行為を述べる前に総論的な問題として『被害者の承諾』を考えなければならぬ。すなわち自己の法益の処分（自損行為）は、それが他の法益を害しない限りに於ては違法ではない。——ここで違法とは刑法的評価の面に於る違法であって必ずしも倫理的な意味での違法とは異なる、すなわち犯罪とするのが適当であるという意味で違法なのである——。では同様に、被害者の承諾がある場合は違法性が無くなるのではないか、が問題とされる。法益の有無、優劣だけによって違法性阻却を考えるならば、これを肯定するのが妥当であろうが、しかし違法性は規範的なものであり、法の理念によって判断されなければならない性質のものである。従って被害者の承諾が違法性を阻却するためには承諾が、判断能力のある者の真意に出た事前

の承諾だというだけでは足りず、その行為の内容が、客観的にみて承諾があれば違法性が阻却されると是認されるものでなくてはならない。ことに傷害（これについては後によく出るから注意）などについては、相当の理由（治療行為等）がない限り、承諾は違法性を阻却しない、すなわち犯罪とされるのである——刑の減刑になるや否やは別問題で、通常は違法性が弱いために酌量減刑されるであろう。

以上の総論的な問題を踏んまえて、具体的な行為を一つ一つ検討してみたいと思う。

△縛る▽

まずは初歩的なものからである、Sにとって婦人を縛ることは、あらゆる責めへの前提必要な行為である。婦人を縛ることは、婦人の自由を一時的に拘束することであるから、逮捕・監禁罪が成立する。すなわち逮捕罪の典型的な例が、緊縛による物理的方法による逮捕である。直接的に身体を拘束するのであれば、服の上から縛るのも、裸にして縛りあげるのも、いずれの方法によるを問わない。判例も、単なる一瞬間の拘束は暴行罪にはな

っても逮捕罪にはならないが、五分間両足を縛ってひきずりまわしたのは逮捕罪になる、としている。

立木等に縛りつけるのは監禁罪になる可能性がある。しかし逮捕も監禁も同一構成要件内に於ける単なる行為の態様であるから、強いて区別する必要はない。

縛り方はいずれの方法によるを問うものではないが、裸にして跨間縛りにするのは場合によっては強制猥褻罪の成立が考えられる。

逮捕・監禁罪は五年以下の懲役に処せられる。尚婦人が縛られることに同意した場合は違法性が阻却されて犯罪にはならないものと解するが、強度の緊縛により内出血を起しした等のとき、察空の下で立木に縛りつけ放置したために風邪をひいたとき等の場合は婦人の同意があっても傷害罪が成立することに注意されたい。

△鞭打ち▽

婦人を鞭打つ方法も千差万別であり、特に効き目のあるものには、吊り下げて体を鞭打つ方法がある。また打つ道具にも、皮製の本格的な鞭から、竹、ホース等もある。いずれによるも、婦人の体を鞭打つことは、暴行・

傷害罪が成立する。暴行とは人に対する有形力の行使であり、鞭打っただけで必ず暴行罪が成立し、鞭打ちにより婦人の生理的機能に障害が生じた場合は、傷害罪が成立する。

生理的機能の障害には鞭打ちにより内出血、皮膚の破損等を引き起こしたり、失禁下痢を起したりすることが、あげられる。また鞭打ちの苦しさのために発狂するのも、生理的機能の障害になるし、鞭を避けようとして婦人がつまずいて負傷した場合も同視される。縛りあげた上で鞭打つのは、逮捕・監禁罪との併合罪となる。

暴行罪は二年以下の懲役、もしくは二万五千円以下の罰金、又は拘留若しくは科料。傷害罪は十年以下の懲役、又は二万五千円以下の罰金、若しくは科料に処せられる。傷害罪については被害者の承諾があっても違法性を阻却しない。故に鞭打ちにより婦人が死亡した場合（殺意があれば殺人罪であるが、殺意のないときは）傷害致死罪が成立し、一年以上十年以下の懲役に処せられる。暴行罪については被害者の承諾は違法性を阻却する。もっとも、かくは言え、被害者が届け出ないときは捜査機関が強制的に捜査することは難しく犯罪となるからと言って、必ず行為者が懲役

等に処されるとは限らない。しかし行為者の運命は婦人の手に握られていることは注意を要する。

男が婦人を鞭打っている現場で、男の方に助勢した者は一年以下の懲役に処せられる。一緒になって鞭打てば、もちろん共犯であつて、助勢するとは「やれやれ！」とか「もつとやれ」とか言つて勢を助けることを言う。

△体毛の除去▽

いわゆる毛の除去である。一本でも引き抜けば傷害罪になるというのが、判例である。切断の場合は暴行罪になるという。思うに判例は生理的機能の障害ということにあまりにも束されている。婦人の頭髮の除去は、身体の完全性を害するものとして、バリカンで刈りとつた場合でも傷害罪とするのが妥当だと思ふ。頭髮以外の毛については難しい。特に通常人目に晒すことのない部分については難解であるし、判例も見あたらない。しかし判例に則して言えば、ひき抜いた場合は傷害罪、切断した場合は暴行罪が成立することにしろ。私の説に従えば、果してその毛の存することが身体の完全性の要件であるか否かによるが、難かしいので結論はひかえる。

婦人の同意がある場合は△鞭打ち▽の項と同様である。

△浣腸▽

婦人に無理矢理浣腸するのは、医療行為による相当の理由がない限り傷害罪を構成するであろう。何故なら婦人に浣腸を施すことはその結果を伴うものであり、それは婦人の自発的な意思によるものではなく薬によって意図されたものであるから、生理的機能の障害と言える。

しかし浣腸を婦人に施した後、その効果を目の前でとくと見学するのは、何ら犯罪を構成しないであろうし、婦人が過度の便秘であることを十分に熟知し、婦人の悩みを救おうと無理矢理、私人（非医師）が浣腸を施した場合さえも傷害罪に關知するのは行きすぎであらうと思われる。

前に、傷害罪は婦人の同意があつても違法性を阻却しないと云つたが、浣腸は医療行為の一種であり、私人もこれを為すべく薬局に大量に出まわっているのであるから、婦人の承諾の下に浣腸を施すのは、何ら犯罪とならないものと解したい。

以上の四つは、婦人が行為者の妻であると否とは問わないものである。愛読者は婦人の真意に出た事前の承諾さえあれば、婦人を死に至らしめない限り一応安全であり、犯罪とはなつても法廷に呼び出されることは、まずないと言つてよいであろう。懲役を食うか否かは、正に婦人の承諾の有無による。

婦人が行為者の妻であることによって結論が異なりそうなものには、次のようなものが考えられる。

△貞操帯▽

婦人に貞操帯をはかせたらどうか。婦人の承諾がある場合は論外である。

一、妻の意思にかかわらず貞操帯を妻に装着させた場合。

古い判例では夫が妻に貞操帯をつけさせたときに、妻が合鍵を使いやたらに貞操帯をはずした場合、姦通罪が成立する、としたのがある。この判例の意思を推し進めれば、妻の意思にかかわらず、夫が貞操帯をつけさせるのは罪にならず、となるであろう。尚かつ夫婦は互いに貞操の義務があるのであるからこの判例の意思が認められるようにも思われる。しかし今日のような人格尊重の時代とな

り、特に妻の保護が叫ばれるようになると、右の結論をそのまま受け入れる事は難しい。

貞操帯については夫婦間の愛情に委せるより方法はあるまい。特に法は家庭にはいらずという理想からみても、そうである。殺人・傷害等については法も家庭内にはいるが、妻に貞操帯をつけさせたからと言って別段傷をつける訳ではなし、妻も安全なのであるから法の枠外と考える。

しいて妻が訴え出たような場合は、妻以外の婦人に貞操帯を装着させた場合と同様に解する。

二、妻以外の婦人に貞操帯を装着させた場合
貞操帯を装着することは、その婦人の性的自由を害することになる。これを逮捕・監禁罪に問うことはもとより正当ではあるまい。

何故なら逮捕・監禁罪は婦人の身体の行動の自由を奪うことをその構成要件の態様とするのであって、婦人が貞操帯を装着されたからといつても、身体行動の自由は有するからである。

強要罪はどうか。強要罪とは、生命、身体自由、名誉若くは財産に対し害を加えるぞと脅迫し、または暴行を用い、人に義務なきことを行なわせ、または行なうべき権利を妨害

することを言う。しかし暴行・脅迫によって貞操帯を婦人に装着しても、果してそのことが、義務なきことを行なわせ、行なうべき権利を妨害したと言えるかは、難しい。ここでは単的に暴行罪とするのが穏当であろうと思われる。むしろ強要罪の成立する可能性は充分あるが未だ判例がなく、性的自由に対する侵害としては強制猥褻、強姦のみで、おそらく刑法も貞操帯による性的自由の侵害を考えていなかったと思われる。しかしながら婦人にとつては、貞操帯を装着されることによつて、全くその性的自由を奪われてしまうものであるから新たに罪を設ける必要がある。飯案にも準備草案にも、貞操帯による婦人の性的自由侵害罪はない。

△強姦▽

承諾なくして婦人を姦淫すると、強姦罪になる。承諾は判断能力のある真意に出た事前の承諾であり、後からプレゼントしたり食事をしたりしても、行為の違法性を阻却するものではない。しかしホテルへ行く等は推定的な承諾があるものと解せられているが、必ずしも一概には言えない。

夫が妻のいやがるのも構わず、姦淫した場合に果して強姦罪は成立するだろうか。

判例は否定しているように思われる。学説は強姦罪成立せずとの説を通説とする。曰く

元来性交の自由は一個人の権利にして、特定人に対し一時的もしくは永久的に、承諾上その自由を制限ないし放棄することができ、夫婦の場合はそうである。一時の承諾はいつでも取り消すことができ、承諾の取消し後ははじめから承諾のない場合と違ふところはな

い。これに反し夫婦関係の如く身分関係に変更を生じた場合には、この関係が消滅しない限りは性的自由に対する制限は排除することができない。故に夫が妻の意に反して性交を遂げても強姦罪は成立しない。しかし夫は妻に対して暴行・脅迫を加える権利はないのでその際、暴行・脅迫を加えた場合には、暴行罪・脅迫罪が成立する、と。

私も右の説に賛成する。しかし離婚のために別居中のような場合には、強姦罪が成立する可能性は十分ある。学説にも妻に應ずる義務がない場合（病氣中・産前産後等）には強姦罪成立するとの説が存する。

以上のことを愛読者は充分に考慮し、絶対犯罪者とならぬよう注意して欲しいと思う者である。

男性虐待快樂術 (第五話)

半処女繁盛記

(後篇)

馬 族 保



無断借用

「おや」

円谷美香は、トラヤ・マンションの螺旋階段を二階へ昇り切ったとき不審をうった。

五十近い年配の男が、二〇七号室の部屋の扉の鍵をあげようとしているのである。たしか朱子は東京出張中で、留守の筈であった。この男は、いったい朱子の留守に何をしているのか。

午後一時を少し廻った時刻だった。

午後四時になると美香は彼女の経営してい

るスナック喫茶・ミカドに出勤するのだが、街へ買物に出て、店にゆく支度をしに帰宅したところである。

美香の部屋は二一〇号室である。従って、彼女の部屋に這入るには、いやおうなく朱子の部屋の前の廊下を通らなければならない。

「あなた、どなた？」

美香にとがめられて、男——飽楽庫太は、どきっとしたらしく、こごめた腰をのびし、美香に向かって姿勢を改めた。

「はい。実は朱子さんに、たのまれた用がある——」

さすがに、てれている。朱子の留守に、戸

締りをあけるのは、たしかにうさんくさい挙動にも思えたが、見ると服装も立派である。

「たのまれた用って、何よ」

「はい。実は、それが——」

ハハーン、と美香は頷くものがあつた。

「掃除とか、洗濯ものでしょう」

凶星を指されて、飽楽は、そうだともいえず顔を伏せた。

「このおやじ、案外、純情じゃなか」

すると、突如、円谷美香の胸中にうずくような計画が、ニョキニョキと茸のようにあたまを擡げて来た。

望月朱子は、モデルの仕事で目下、東京出

張中であつた。

鴨下岩見の舌の初卸しを、美香が試食したため一悶着あつたが、その直後、朱子の東京出張の指名が来て一応落着いたものの、そのかわり、東京出張に鴨下岩見を、朱子の専有とし、随行させるという条件であつた。

美香は、承諾をしぶつたが、初穂食いをお先にすることで、結局、朱子の申出を許可する形になつてしまつた。

そんな、おだやかでない気分的美香に、偶然、飽楽庫太との出会である。

しめた！

と美香は舌つづみをうった。朱子に対し、報復の快感がうずいた。

「温泉旅館を経営してるといふのは、あなたなの？」

「はい。そうです」

「ふうん。——それで思い出したわ。あなたが来たら、渡すように朱子からたのまれた物があるの。そちらの用が済みしだい、わたしの部屋に来て頂戴。二一〇号室。いいわね」

「はい。伺います」

「本当よ。忘れたら承知しないから」

「はい。必ず伺います」

円谷美香は、すばやく、あたりを見廻して

人の気配がないのを確かめた。

いきなり、飽楽庫太の頬にピシリと平手打ちをとばした。耳たぶをつまみあげ、彼女の太腿辺まで引き下げて、股の間に飽楽の首根っこを挟みこみながら、

「わかつたわね」

美香は妖しい媚笑をうかべ、何事もなかったように二一〇号の前に立ち、鍵を使って戸をひらき、匂いこぼれるように部屋の中へ身をかくした。

飽楽庫太は、電気の衝撃をうけたようにピンと張り切り、朱子の部屋に這入ると下手糞の鼻歌を口誦み、朱子の汚れものを洗いはじめた。

円谷美香は、マンションの彼女の部屋からミカドのレジャーの女の子に、今日は都合で五時過ぎ出るむねの電話をかけた。

長椅子に寝そべり、テレビのカラー番組を見ているとポーンとチャイムが鳴った。

「這入れ、犬」

勿論、飽楽にその言葉がきこえるはずはない。満面に愛想笑いをつくり、鞠躬如とした物腰である。

その容子を見たたん、もう美香は腹立た

しさにムカムカして来た。

「バスの支度をしな」

「はい」

バス・ルームから出てくると、

「おい。わたしの服を脱がすんだよ。ポヤポヤするとひどいわよ」

ピシリと平手打ちが来た。飽楽は勝手が違うので、すっかり逆上気味である。

望月朱子の場合、帰宅間際にあらかじめ全員に電話で召集をかける。合鍵の一つを、各自が渡されていて、駆けつけた者から、潔癖な朱子の好みを満足させるために、分担に従って点検し、たとえば床の絨緞のチリ一つにさえ、ところを配るのである。

望月朱子は、時間を見計って帰宅する。

奴隷達は、寄つてたかつて、朱子女王の服を脱がせ、靴下を取り、ブラジャー、パンティを、彼女の身体から剥ぎ取ってゆく。

沐浴ゆあみともなると、それはもう文字どおり手とり足とりである。

朱子の裸身は、決して坐ることをしない。

二本の円柱を開きめにし、流しよい姿勢を取って立つ。太腿を洗うもの、お臀のくぼみにシャボンの泡を立てるもの、肩から湯を浴びせるもの。その風景は、一糸乱れぬ孜々と

した働きぶりだ。

円谷美香は趣向が違っている。必要に応じひとりずつ交代で奉仕を命じる。要求する演技も多種多様である。

浴室から出ると裸身を寝台に横たえ、その上をバス・タオルでおおい、首筋から揉みほぐすように命じる。

朱子の言葉すくない——時々じろりと冷たく眼を光らせる傲慢さとは对象的に、美香は陽気で、肉感的饒舌家であった。次から次へ言葉に出して奴隷臣従の表現をしないと実感が伴わない性分らしい。膚のキメが細かく柔らかい。うすく脂が載り、飽楽庫太の揉む掌がピタッと吸いつくのである。

いわゆる、もち肌だ。

太り肉のお臀や腿のみごとな発育ぶりは蠱惑的で、蕩かすような体温が、掌に直接に伝わってくる。

「飽楽」

「はい。美香女王さま」

「お前は、わたしの犬だよ。どうすれば、わたしがよろこぶかわかるだろう？」

「はい」

「わたしは朱子よりも何倍も凄いからな。いいな」

「はい」

「美香女王さまの気分を最高に高めろ。わかったな、犬」

「はい。美香女王さま」

「どうわかったんだよ」

「これから、ご命令どおり奉仕します」

「馬鹿野郎！ いちいち、命令しなくては、何にも出来ないのかよ。お前は、でくの棒だよ。さあ、腰をお揉み」

飽楽庫太は、かしてまっつて、美香の腰に力を集中した。プリプリと若いお臀の肉は、揉むほどに弾力を増してゆく感じである。飽楽の額から玉をなして汗が落ちる。

「奴隷のけがらわしい汗を、わたしの貴い体に落とすな」

「はい。お許し下さい。美香女王さま」

「おい、飽楽」

「はい」

「この罰は、あとでゆっくりしごいてやるからな」

「——」

「奴隷、美香女王さまの腰をうやうやしくお揉み」

「はい」

円谷美香のお臀のマッサージは、時間が長

い。そのときが最高だと美香はいう。実際、マッサージさせながらエクスタシーを覚えたことも、しばしばである。

美香ウイスキー

女性の皮膚は全身が性感帯だという。

円谷美香は、特に皮膚の刺激にもろい。それだけに、彼女の敏感な神経は逸はやく相手を見抜いていた。飽楽の年配に似ず、女摺れしない純情さと中年のねばり強さは、めっけものだ。飽楽も、始めてのわたしとの接触到どうやら夢中であるらしい。

店にゆくの、今夜はよそう。——美香は、たっぷり愉しむつもりだった。

「飽楽、電話しておくれ」

「はい。どちらでしょう」

「53局の六三三番」

電話は通じた。飽楽は、黙って送話器を美香にわたす。

「もしもし。あ、ヨコちゃん。わたしよ。ち

よいとやば用ができて、今夜ゆかれないから由地君に伝えといて頂戴」

「はい。わかりました。あつ、もしもし、ママさん！ 島袋さまが待っていらっしやいま

すが、どうしましょ。ママさんに、ご用があるそうです」

「そう。ちよいと代って頂戴」

「もしもし。ママさん、島袋です」

美香は、声をおとした。しかしウキウキした声である。

「飲みに来たの」

「ううん。まあ、そうです」

「いま、何を召上ってるの。ビール？ ウィスキー？」

「ビールです」

「美香の温いビールが飲みたいのでしょう」

美香はいたずらっぽく眼をして笑い、飽楽の顔を見た。

「飲ましてあげましょうか」

エヘン、という咳ばらいが聞こえた。周囲を、はばかった返辞である。

「ゆっくりしてらっしゃい。一時間経ったら気取られぬように、こちらに来てもいいわ。

世界の美女、美香さまの神水入りウィスキーを飲ませてあげるわ」

「ありがとう。じゃ、また」

電話は、それで切れた。美香は可愛い舌をペロリと出し、また飽楽を見て、妖艶に笑った。

「飽楽、お前は朱子の神水を飲んだことがあるかい」

「いいえ」

「朱子は、誰にも飲ませないの」

「朱子さまは、飲ませません」

「ふうん。——お前は欲しくないのかい」

「——」

「わたしのなら、飲みたいだろうよ」

「——」

平手打ちが、またピシリととぶ。

「おい。犬の分際で、嫌だともいうのかよ」

美香は、枕の下から一束になった鎖を取り出し、金属の摺れる音を立てながら、飽楽庫太の首につけた。

「犬、ここへおいで。……お立ち」

パンツ一枚の飽楽の下腹部は、小山のようになっている。

美香はそれを確めてから、

「ふん。お前は、もう完全にわたしのものだわ。これから、わたしの意のままに奉仕するんだよ。そこへお座り」

美香は、鎖の端を寝台のあたりに結いつけて、寝台を降りた。衣裳簞笥の中から、真紅のネグリジェをとり出して着る。三面鏡の化粧椅子に腰をおくと、いそいそと顔の化粧直

しにとりかかった。

シューツと全身に香水を撒く。

白い鳥の羽のついたサンダルを穿き、赤い絨緞の上をしばらく散歩しながら、美香はそのスタイルを三面鏡に映しみて、彼女の全身から発散する色香をたんのうしたあと、

「さあ、これから、犬の運動だよ」

寝台の端のくさを解いて、手許に引っ張った。曳かれるままに庫太は、寝台を降りて絨緞の部屋的美香の足許へ、四つん這いの姿勢ですり寄る。

「チンチンをして、ワンとほえろ」

「ワン」

美香は、憎々しげにその姿を見降ろしていたが、サンダルの足をあげて飽楽の頭をグツと床にふみつけた。

「おい、飽楽。あと二十分すると島袋という男がここへくる。この男は祐徳火災の契約課長で、もちろん、わたしの奴隷。この男は、殊のほか美香ウィスキーの愛好家だ。美香さまは、いつも奴隷は一足しかお使いにならないが、今晚は特別二足を使ってみる。いいわね。お前も、島袋を見習って、代りばんこに奉仕するんだよ」

踵の下にギューギューふみにじって、

「もうよしというまで、駆ける」

美香を軸にして、庫太犬は四つ肢で絨緞の床をグルグルかけまわる。速度をゆるめると鞭がピシリとお尻にとんでくるのだ。

十周もするとパンツ一つの体は汗まみれになった。それでも美香は許してくれない。鼻にかかった悩ましい声を、なめらかに滑らせて残酷な命令を強いるのである。

つぶれた犬の首筋を、もう一度グイとサンダルでふみ敷き、

「咽喉が渴いたか」

「――」

飽楽は激しい呼吸づかいの下から、うなずく。

「ようし。あとで飲ましてあげる。ふ、ふ、

ふ。おいしいわよ、きつと。それまでの埋め水――口をあいて」

アーンとひらいた庫太の口中に、ツーツと糸をひくように、美香のつばきが細い線をつくって垂れてゆく。

そのとき、チャイムが鳴った。

「来たわ」

くさを邪慳に曳っぱって、飽楽に随いて来いという。一方のサンダルを飽楽にくわえさせて、チンチンをしると命じる。

「恥ずかしい」

飽楽が尻ごむとムチが、またピシリと鳴った。

いなやはなかった。命じられたとおり飽楽がサンダルをくわえて、チンチンの姿勢を取ったところで、

「お這入り」

と美香は合図した。

部屋の土間に立った瞬間、島袋は意表をつく光景に、棒立ちになった。例によって、ピシリと美香の平手打ち。

「ほら。わたしの足にキスおし」

ネグリジェの裾をたくしあげて、白い、やわ肌の足を彼の目の前につきつける。

「跪きなさい」

島袋は、命ぜられたとおり土間に膝をついて、差出された美香の足の甲にうやうやしく接吻した。

「服をお脱ぎ。それから、すぐバスの支度をおし。今晚は、二足の奴隷を代りばんこに使って、愉しむからな。眠らせないわよ」

支度が出来ると円谷美香は優雅な裸身をすべらせるように、バス・ルームに這入ってゆく。

「さあ、よく洗うんだよ」

ふたりがかりで入念に洗い終ると、美香は浴槽に腰をかけて、こぼれるような媚笑を湛えた。

「島袋、お前が先に手本を示して見せな。こいつは芸なし猿だからよく教え込むんだよ。

甘美な美香ウイスキーを飲んだが最後、もう夢中になって、わたしのものを欲しがるようになるわ。――おい、飽楽。先輩犬のすることとを、よく見ておくんだよ」

島袋八屹やおきは、タイル張りのゆかに正座し、円谷美香の堆うすたかい雪の裸身にむかって、御神殿を礼拝するように拝みはじめた。

半処女万歳

暦は、もう九月にはいつていた。

十二日間もコバルトの快晴がつづき、秋日和の空は、いっこうに崩れる気配さえみえなかった。

仕事の帰途――ヒマで退屈したとき――望月朱子は、かならず美香の店に電話をかけて寄越したが、それは一つの習慣のようなものであった。

そんなある日、

「あ、朱子。あなたに紹介したい人物がいる

の。すぐ、おいで」

美香が待ちかねていたように弾んだ声を出した。

「何よ」

「うん。来ればわかる」

ミカドに寄ると店は満員だった。

カウンターの美香に、

「千客万来ね」

朱子がテーブルに行きかけると、

「朱子、お待ちよ」と美香が呼びとめた。

「ちょっと」

美香は声を落とした。

「ほら、九番のテーブルに坐っている、そうそう、ピンボウ・ダナオに似た男——あの人があなただを、ぜひとも紹介して欲しいというのよ。名前は天門聞多、五十歳、テンモン農機具KK社長。朱子に、ぞっこんらしいわ」

「——」

朱子は視線を九番のテーブルの人物に注いだ。品定めをしているのである。

「わたしを、いつ——」

「もう五回ぐらいは、朱子を見たらしいわ。」

「どう？ 中々の風采じゃなか」

「ふーん」

朱子は鼻を鳴らし、下唇を突き出すように

尖らせた。男に対する挑戦の意思表示であった。

「朱子、紹介するわ。いらっしやい」

美香はカウンターのくぐりから出ると九番のテーブルへ、つかつかと歩み寄った。

「社長さん、ご紹介するわ。こちら、望月朱子さん。朱子、天門社長よ」

望月朱子は上体を軽く下げて会釈した。

「やあ。僕、天門です。さあ、どうぞ」

巨体をゆすって立ち、破顔一笑すると朱子に椅子をすすめる。

「望月さん、貴女を宝石で飾ったら、光り輝くのではないかと、僕はいつも想像していました。耳・首・腕・足首をダイヤモンドや金環で飾ったら、どうなるか。まるで、クレオパトラを再現するのではないかと夢想して、悦に入っているのです。朱子さん、現代のクレオパトラに扮してみたいと思いませんか」

「——」

天門の提出した話題が、あまりに突飛であったから、さすがものに動じない朱子も、あつけにとられて、男の顔をみつめた。

「どういう意味ですの」

「意味はありません。貴女の美貌に、現代離れの装身具をつけてみたいのです。宝石や貴

金属で。如何でしょう。ご承諾下さいませんか」

「だしぬけなので、何ともご返辞しかねますわ。——わたくしに何をお望みなのかしら」

「ごもっともです。子供じみた話ですから、嗤わないで聞いて下さい。僕には子供のときから、古代ギリシャや古代ローマの王妃、貴婦人の風俗に憧れる感情がありまして、成長するにつれ、いよいよ強くなる一方です。映画でも、クレオパトラやテオドラの作る作品は、欠かさず見ました。監督によって、美女の扮装もいろいろ違って、気に入るのは稀ですが、アラビアンナイトには、白人の女優が扮するので、夢中になって、数回見に行っ

たものです。朱子さんを始めてみたとき、僕は貴女にクレオパトラを発見したのです。現代のクレオパトラ——ロング・ヘアを肩まで垂らし、奴隷に侍づかれていた女王の姿態を再現してみたいと思いました。それは真剣な希いです。朱子さん、貴女に三百万円の宝石の装身具を贈りますから、ぜひ僕の夢を叶えてやって下さい」

「光栄ですわ。でも、そんなムードを、わたくしが出せるかしら」

「出来ますとも。大丈夫です」

「さあ。自信がありませんわ。でも、正直いって、三百万円の宝石は魅力だわ」

「貴女の場合は、塔ノ上肥後から聞いて、だいたい知っていました」

「塔ノ上肥後」

朱子は咄嗟に胸を衝かれたように表情をこわばらせた。

「そうです。塔ノ上は僕の会社の社員ですから」

「あら。彼は社長さんにどんなこと、お話ししました？」

「大事なことは話してくれませんが、彼が貴女の熱烈な崇拜者であることは、たしかのようです」

天門聞多は声をひそめて、

「クレオパトラと奴隷たち。——僕の写真帖に納めておきたい。僕の家宝にします。ねえ朱子さん、お願いです」

この男は、いったい、わたしの何が欲しいのだろう。と朱子は戸惑うのである。クレオパトラ——装身具の宝石類——写真——このつながりを、どう整理すればいいのか。

望月朱子は、あから顔の、いかにも精力絶倫らしい新興実業家・天門聞多のおどろくほどの純粋な必死の視線をうけとめながら、彼

の企図するほんとの意味を読み取ろうと苦心していた。

もしかしたら、わたしを二号にしたくて、遠まわしに写真をもち出しているのではないか。

「朱子さん、貴女は僕の言葉の裏を読もうとしないでいらっしゃるようですね。はっきり申し上げますが、そのご心配はぜったいありません。僕も天門聞多です。嘘は申しません。信じて下さい」

「信用するとか、しないとか、それは考えていませんわ。ただ、あなたの趣味の中心がどの辺にあるのか、それを知りたいのですわ」
ともすれば、高まってくる声音を、天門聞多は沈めた。

「卒直に申しあげます。マンションの望月朱子の八奴隷のいる風景Vを写真に撮らせて、頂きたいのです」

「まあ。すると、わたくしがエリザベス・テラになればいいんですの」

「そう」天門聞多は、わが意を得たといわんばかりの笑顔をつくった。「そうなんです。お願い出来ますか」

「何回ぐらい」

「そうですね。二カ月ぐらいで結構です。そ

の間に、望月朱子——いや、現代クレオパトラのすべてを撮影します」

「他人には絶対見せないと誓えるの」

「それは誓います。誓約書を入れましょう。

違約したときは、一千万円の違約賠償金を支払う条件をつけます」

「ふうん。——考えとくわ。明日、ここでも一度お会いしましょう。あ、そうそう。社長さんも、わたくしの奴隷志願者だと判じても構いませんの」

「いや、違います。その傾向はありますが、僕自身は奴隷にはなりたくない。もっぱら、觀賞して愉しむ方です」

「ふん。嘘いいやがって。まあ、いいわ。まず、三百万円の宝石類を手に入れなくちゃVもったいない、と朱子は思った。明日を約して、席を立ち、カウンターの方へ歩いてくと左側のテーブルの男から声がかかった。

「望月さん」

枚方日置^{へき}だった。

「あら」

朱子らしからぬ愛想のよさである。日置のテーブルに腰をおろし、

「もう噛み破ったのでしょうか」

「よくわかりますね」

日置は、それで羞恥心が一挙にふっとんだようである。半オーバーの物入れから、朱子の穿き古したストッキングを紙袋ごと出してみせた。

「ほら。このとおりボロボロなんです。もう一足、恵んで頂きたいのですが……」

「いいわ。いくら？」

「三千円」

「この次から、五千円よ。今日は、それで恵んであげるわ。わざわざ北九州市から出て来たご苦労賃にサービスするのよ」

朱子は、カウンターまであるくと美香に何か耳うちしていたが、美香はクスリと笑って日置を見た。美香がカウンターを出ると、かわって朱子が、くぐり戸を這入った。

「美香、香水貸してよ」

「そのかわり今晚、鴨下を借りるわよ。いいわね」

「こらっ！ 狡いわよ、美香。たった香水ぐらいで」

「そこがつけめよ。イエスカノーか、返答しだいでは、香水は貸せないぞ」

「チエツ、仕方ない。鴨下を貸したげるわ」

ふたりの美女は、腹の底からこみあげてくる幸福の歓びを、お互いにニコリ笑い交し

たのである。

現代クレオパトラ

ガスストーブの焰が青白く燃える闇——外は十一月の冷気が、落葉樹の梢をしっとり包み、寒天にちりばめた星粒の色も、一と際、冴える夜であった。

望月朱子は、今さき、バス・ルームから出たところである。

塔ノ上肥後、飽楽庫太、鴨下岩見、青柳環の従臣の面々を侍らせ、緋色の闇に、ゆったりと身体を横たえていた。

奴隷たちは、定められた分業に従って、胸部のマッサージをするもの、腋の毛を抜くもの、腹部を担当する奴隷はなだらかな丘の手入れに懸命で、櫛を入れて、わずかに、あたまの方を缺で摘みながら形を整えているし、足を受けもつ男は、爪を剪り、ペディキュアの作業に精を出し、つづいて踵の皮を歯で軽くけずる作業に移っていた。

それはたしかに、天門間多のいう、古代エジプトの女王クレオパトラの再現に間違いなかった。

望月朱子の求めた最高の贅沢と快楽！

しかも、奴隷志願者たちの夢は叶えてあげられたし、真実、男達は随喜の涙さえ流しているではないか。

朱子は充実した満足感で睡気さえ催おしていた。

態位を俯伏せにし首すじ、両腕、背すじ、お臀から腿にかけて、ふくら脛、足の裏へと生きた道具たちの作業はつづく。

最後にむしタオルで隅なく拭き終ると粒子のこまかい上質の乳液を掌で刷いてのばし、指尖のマッサージを丹念に施すのである。

そこで全身美容は終わった。

朱子は、大型の眩椅子にすわる。

すると奴隷たちは、彼女の頭に、小粒ながら、ダイヤモンドの輝く王冠を載せ、次に同じダイヤのイヤリング、首にルビーのネックレス、双つの腕に金環を、お臍、腰、足首に光沢もまぶしい、それも多角的に色彩の変化する宝石・貴金属を鏤ばめた装飾品——ああそれは正しく、現代に君臨するクレオパトラの容姿であった。

金色の靴を穿かせ、ミンクのオーバーを肩から羽織らせると奴隷たちは、部屋の右側にズラリと並び、あぐらをかいて控えた。

朱子の掛けた眩椅子の前には、正面の位置

に、等身大の鏡台が置かれ、朱子の体中から発散する神秘的なエロチシズムを吸い取るように、その肢態を映している。

「朱子さん、それを一枚」

次の間で、撮影準備を終え、ワンカットの場面を狙っていた天門聞多は、待ってましたとばかり注文を出した。

「――」

朱子は軽くうなづく。

「ムチを持って下さい」

塔ノ上肥後が、天門社長のために鞭掛から細身のものを一本抜いて、朱子に手渡す。

音をたててフラッシュが閃めく。

天門が朱子を撮りはじめて、もう六回を数える。始めは、朱子も従臣達も、興をそがれる感じが強くて、不機嫌であったが、最近はどうやら慣れっこになり、落ちついたとみえて、天門にはお構いなしに演技に没入するようになった。

いや、むしろ、ある場面では、かえって撮られることで刺激を増強したのである。

天門聞多の朱子に約した言葉には、ウソはなかった。

彼は決して奴隷の仲間に加わることをしなかったし、次の間からその光景を眺め、興奮

する場面、価値ある場面になると、あらゆる角度からフラッシュをたいた。

朱子は、かつて読んだ本の中に、天門とおなじ趣味のある国王や貴族がいたことを想い出した。

たとえ天門の趣味がそうだとしても、――朱子は、彼女自身の魅力にぜったいの自信をもつだけに、やはり天門は不思議な男のひとりにちがいはなかった。

天門が次の間に退くと、朱子はすうっと立ちあがり、控えている奴隷達の前まであゆみ寄った。

鴨下岩見の顔をムチですくいあげて顔を見入っていたが、ペツとつばきを吐きかける。

次の塔ノ上肥後の顔は靴の爪さきで仰むかせ、ムチをひと握り二た振りし、連続して、背中を打った。

飽楽庫太には、靴の爪さきを口中に差しこみ、その姿勢で足に力をつける。「アオ、アオ」と言葉にならぬ苦痛の悲鳴を、飽楽はもらすのである。

青柳環の前に来たときには、新入の彼はすっかり逆上してしまい、まるで死刑囚のように顔いろが蒼白であった。朱子は、靴の踵で彼の膝をキリキリとふみにじり、妖しく光る

眼を、じっと二十八歳の青柳の苦痛に歪む表情に注ぎ、愉しんだ。

望月朱子は、一ことも発しない。

ムチの合図一つで訓練し、飼育するのである。

朱子の手にしたムチが横へ一文字を描くと奴隷たちは、床の上に顔を伏せる。

その背中を、朱子はサッシの窓枠に手を支えながら、青柳から順に渡ってゆく。渡りおわると、

「朱子女王さま！」

四正の奴隷は、総くずれとなって朱子の脚にしがみついた。パンツ一つの奴隷たちの裸体へ、ムチだけが容赦なくピシリ、ピシリと鳴り響く。

さっきから、天門のカメラがいくつかの角度を変えて、フラッシュをもやしつづけていた。

ムチはしきりに鳴ったが、空に弾ける音の高いわりに、ある手加減が加えられているとみえて、奴隷たちの身体の皮膚が破けて血をふき出すようなことはなかった。赤いみみず腫れの無数の線が、あざやかにうき彫りの模様を描いて、苦痛に身をよじらせる男たちの甘美に酔う肢態が、そこにはあった。

天門は、それにカメラの焦点をあて、性感の狂宴における極限を録画しようと全力を傾けていた。

シューツ、シューツとフラッシュ・ランプが連続して閃光を放つ。

望月朱子は、悠然と眩椅子に帰る。頬と眼ぶたが紅潮し、美しい顔であった。

朱子のムチをもつ手が下に向かって振りおろされると一同は横へ一列にならび、神妙顔に控える。

いよいよ、今夜の朱子の相手役が選ばれるのである。

望月朱子のムチの先端は、青柳環の顔のまん中を指してとまった。

鴨下岩見は、敏捷に朱子の椅子のうしろに廻り、胸のブラジャーと腰の宝石バンドを外し、膝立して、次の動作に這入るための時間を測っていた。

塔ノ上肥後は、朱子の右足の下、飽楽庫太は左足の下に端座し、彼女の靴を脱がせる。

青柳環だけが、望月朱子の両脚の間まで膝行し、かしわ手を打って、うやうやしく女王の御尊像を拝み祭り、おぞそかに、腰のくぼみに唇をつけて接吻した。

朱子は、鏡の中に映し出された彼女自身の

姿に、うっとり見惚れながら陶醉していた。

奴隷のいる風景の中で、彼女の華麗な肉体の栄光を象徴するために、うちひしがれた、あわれな奴隷たちの姿態があった。

鴨下岩見が、朱子の二つの乳房をゆるやかに揉みはじめると塔ノ上肥後と飽楽庫太は、その足の甲を接吻し、それから足の指の一本一本を口中にふくみ、しゃぶりはじめた。

青柳環の奉仕にも、電気が通じたように熱気を帯びてゆく。

望月朱子は、波のように押し寄せてくる快感にしばれて、静かに眼を閉じた。

天門間多のカメラだけが、ロング・クローズ・アップしながら、前にうしろに、右に左に動きまわり、フラッシュを燃やしつづけていた。

クレオパトラ・朱子の視覚も聴覚も、現実をはるかに遠のいた夢幻の世界にかすみ、ときどき、ピクリと体を痙攣させながら、呼吸をつめて官能のうずきに耽溺してゆくのだった。

奴隷飼育します

「社長さん、わたくしの贅沢を認めて下さる

なら、牛乳風呂に這入りたいわ」

あるとき、朱子が天門間多に切り出した。

その日、ミカドは店を休業していたが、テールに、美香を混えて鼎座し、雑談に花を咲かせていたところである。

「いいですよ。朱子さんが美しくなることなら、スポンサーになりますよ」

「また、写真お撮りになるの」

「勿論です」

「じゃ、百万円」

「おや、おや。牛乳だけで勘弁して貰いたいな」

「いや」

「困った女王さまだ」

「とにかく、今晚から牛乳風呂に這入るわ。すぐ手配して頂戴」

「はい。承知しました。女王さま」

電話のベルが鳴り出した。美香が取って応

待していたが、

「いいわ。奴隷にしてあげる。月謝はどのくら

い出すの？——フーン、そればっか。わたしに死ぬほどいじめて貰いたかったら、出直すことね。……え、今日お会いしたいって？

だめ、だめ。今日はお休みなのよ。じゃまたお電話して頂戴。——ばかにしてるわ」

電話を切った美香は、口ほどもなく、ニコニコした笑顔であった。

「また、奴隷志願者？」

「そう。二、三日前から、しきりに掛けてくるの。図書館に勤めている係長とかで、何となく湿っぽいやつよ。見ただけでムズムズするわ。——ああ、美女はつらい」

美香がおどけてみせたので、朱子も天門もふき出し、三人は声をそろえて笑った。

「現代の女の魅力は、どんな型かしら」

朱子が話題をかえた。

「半処女だ」

天門聞多が、たちどころに答える。

「ハイ・レディは、男奴隷を貯える資格がある」

「賛成！」

△ハイレディ・エンド・半処女▽

望月朱子と円谷美香は、現代の女性の魅力

地獄図絵ショー見聞記

三

谷

豊

四月号サロンに、一条小百合の蠟燭ショーについて、掲載されていたが、過日、小生はそれに勝るとも劣らぬ、SMショーを観る機会を得たので、投稿させて頂く。

ストーリー（アナウンス）「江戸時代、吉

原女郎の亡骸を葬った松源寺。住職が死者を蘇生させて閻魔大王の代理として処刑する」

一、舞台暗黒。ほんのりと淡いブルーの浮き立つ様な照明が仄暗く点く。舞台正面に「南無阿弥陀仏」のマンダラ。左右に、百匁蠟燭仏花。

二、僧、読経後、「喝」と号し、祭壇上にあ

る棺桶に祈念し、じゅずは空を切る。と、棺の蓋がゆれ動き、バタリッと落ちる。内より蒼白い手が棺のふちにかかり、ゆっくりと、洗い髪、白衣、紅い伊達巻、うなだれて放心した態の女性が身体を起こす。僧の招きに応じて、手をとられ舞台中央に進み出る。

三、僧は女の肩に手をおき坐らせる。法衣を脱ぎ白衣になった僧は惨忍な笑みを浮かべて女の伊達巻をむしり取り白衣を肩より落す。上半身裸体。僧は傍らの火鉢にさしてある焼火箸をとり上げ、チリ紙を巻く。ジリジリと紙がこげる。と、見るや背後に廻り、女の肩

を代表するかのよう、黒い眸を輝かせて、うなずき合い、ふたりの美貌の繁栄と奴隷飼育の技術を、おたがいの胸の奥で画策しつつあった。（第五話おわり）

「男性虐待快楽術」のカット写真にふさわしいモデルを探しています。撮るのは水着スタイルです。謝礼はいたします。ご希望の方は編集部経由ご連絡下さい。馬族保

をしつかりと掴み背中中焼火箸をあてる。うなだれていた女は突然、絶叫と共に大きくのけぞり、眼をくわっと見開く。背中よりジリジリと白煙があがり、はっはっという荒い呼吸。乳房が上下にゆれる。はては、失神し横倒しにどうっと倒れる。

四、僧、女をおお向けにして、腰にまつわりついた白衣をはぎとる。紅い湯文字一枚の乳房をひきちぎらんばかりに、両三度掴む。女あえぐ。僧、縄をとり出し（径3cm、長さ5m位、すでに菱縄の様式になって居る）首縄をかけ一直線に身体を縦に縛しめ、ぐうっと引き締める。背中中十字に締め、左上臍部を二巻き、胸の菱形へぐうっとしめてとおす。右も同様にして背中中きっちり締める。その間に女はうつぶせにされて居る。

五、その姿勢のままの足の方へ廻り、両肢を

ぐうっと引き、両の足首に竹の棒を真田紐でしばりつける。開股しばかりである。舞台天井より下って居る滑車に、竹の棒の中央に作られて居る輪にフックをかけて、綱をひきしぼる。女は逆「く」の字の形になって足の裏を上に向けさせられる。腹部が床よりはなれるや、僧は足で綱を踏み、右手で綱を握りながら左手に弓の折れを持ち、女の腰部にぐりぐりとねじる様に突き立てる。女はあえぐ。僧曰く「海老責の刑と云う」——女、唯々、悲鳴。髪をふり乱し首を僅かにふるだけである。

六、僧、弓の折れを投げ捨てるや、一気に綱をひきしぼる。女体くるくると廻りながら逆さ吊りになる。絶叫の連続。僧、廻る女体をとめて、背中の縄をとめた個所に棒を差し入れて、しぼる様に廻転させる。客席へ、女体正面を向ける。乳房はしぼり上げられてぶつくりと突出し、大きく開いた口からはよだれが流れ、逆さにたれた長い髪の毛は汗で光って居る、あご、首の部分にまつわりついて居る。(伊藤晴雨画伯の責め絵の再現か?)とに角、迫力のある場面であった)僧、叫ぶ。「地獄逆さづりの刑と云う」

七、滑車より女体を降ろす。女ぜいぜいと荒い呼吸。よだれが胸まで流れて背中では波打っている。そして冷汗がべっとりとふき出している。僧、上膊部の縄をとく、残った縄は、

うなじから引き締めた縦縄のみとなる。僧は後より、自己が脱いだ法衣の帯をとり臀部をびしびしと打ちすえる。その音は客席までひびき渡るのだ。女はうめきながら、それを逃れんと床をじりじりとはって、花道へにじり出て来る。僧、突然、縦縄の縄尻を握り一気に、ぐうっと引く。女体は一回転。もんどり打って舞台中央へ引き戻される。その瞬間、両足は宙に舞い、湯文字は乱れ臀部は露わになって、湯文字の下は何も着けて居ないことがはつきり判るのである。

八、僧、女体を抱き、ゆっくり坐らせる。女は瀕死とも云うべき状態で、ぐったりと首を垂れて身体は傾いて居る。僧、釘抜きを取り出し女のおごに手をかけ、誇示するかの様に顔前にゆっくり動かす。女は眼をひらくが恐怖のあまりそれを追う視線は定かではない。僧は、左手でぐうっと女の顔を上げ、右手の釘抜きを口中へ。女、うめくのみ。「ぐうっぐうっ」と口より血を吐く。白い肌を、胸の谷間を、のどを、血が流れる。僧の手にした釘抜きには、抜きとられた舌がはさまれて居る。女、最後の力をふりしぼり、僧につかみかからんとするが、力つきて悶絶する。幕。

以上が、舞台上で演じられたすべてだが、逆吊りは五分以上。床より約1mの宙空でくるくる廻って居るのだから、その苦痛は想像以上のものがあるだろう。血は逆流して、胸

の菱縄はしめ上げられて、呼吸も苦しいであろう。又、背中には焼火箸の傷痕が、みみず張れに赤くふくれて二条。全くのトリックなしと見えた。これがマゾ女性そのものではないうだろうか? 一日四回公演、一興業は十日四十回の責めに耐えて行く彼女。瘦身ではあるが芯に強いものを秘めて、加えて公衆の面前での迫真の演技。マゾに、更に露出性も充分あるのだろう。映画の一カットずつの合成ではない。生の連続シーンである。マゾ性の者は、それが段々に進行して行くとか? 近い将来、私達の想像も出来ないショーを演ずるのでないかと思われる。又、その私生活を窺い見る事が出来たら予想外のものがあると思われる。出来得る事なら、貴誌で探訪される事を希いたい。此の小稿が読者諸氏の参考となれば幸いと思う。尚、此のショーは、

「関五郎と忍耐子『地獄図絵ショー』」

である。小生は二月二十日、十三木川劇場で観たのであるが、同劇場でロング・ランをして居る筈である。勿論、小文が掲載されたとしても、間に合わないものと思うが、冒頭一条小百合ショーと比較したが、実は小生もロウソク・ベッドを観た事があるので、絶対勝るとも劣らないものであると断言出来るからである。

(完)



未完の告白——(下)

村山百合子

看護学院時代の体験

K病院看護学院はO市の郊外にあり、病院も大きく、すぐ前には大きなフットボールやラグビー場などがあって広々としていて環境としては全く申し分ありません。六階建ての病院の脇には三棟の鉄筋の建物があり、そのうちの一つが学院で、あとの二つは私達学院生の寮になっています。三学年制で私達のクラスは四十八名。クラス担任が各学年に一名宛いらっしやって貫禄十分の教務主任と四人の常勤の先生はすべてナースで、看護学を教えて下さるほか、病院の部長先生が臨床科目W大学の先生が一般教養科目の講義にお見え

になるというように、なかなか充実した毎日でした。

ナースの国家試験は年々難しくなっていくせいもあって、看護学のお講義と実習はとても厳しく、つらい思いをしましたが、今から思うとなつかしくもあり、先生方には心から感謝しています。

一年生は、はじめはお客さん扱いで、私達も珍しいことばかりで、張り切っていました。が、先輩からも聞いていた通りキャッピング(ナースの帽子をかぶることを許される式)の時は本当に感激しました。

この後、いよいよ基礎看護の授業が始まり

ます。普段は、少くとも個人的には人情味があつてママのような感じの主任のA先生が、別人のように厳しい態度で授業されます。

ある時、検査のI先生から「君達、基礎看護をどんな所迄習ったかね」と聞かれた時は「あー、ベッド交換とか検温とかそれから」つぎを答えようとして、みな顔を赤くしました。ふだんは、排尿だの排便だのと、いろいろお勉強していましたが、とても、いくらお医者さまでも男性には口に出していいないことをお勉強していたわけです、又、私達は一番羞しい年頃でもあったわけです。ですから実習は大へんでした。

今でも忘れられないことがあります。九月の実習の始まる日にA先生は、「このつきから実習を始めます。来年になると病室へ配置になり、実際に患者さんについて実習していただきますが、皆さんがもし患者さんの立場だったら、今日始めてという方に、お小水をとってもらいたいと思いますか。でも、いやでも必要なのです。ですから病棟へ出る前には十分技術に成熟してないといけませんし、その様に私は皆さんを教育するつもりです。上手に患者さんのお世話を出来るようになる早道は、まず自分自身でいろいろな処置を実際に経験してみることです」とおっしゃいました。そして例年「患者さん」になる希望者が少ないので、あらかじめクジでその順番をきめておき、もし都合の悪い場合は責任もって誰かと代ってもらおうようにとの事でした。

クジをひいたら、何と私が一番でした。お教室が三つありその向うに大きい実習室があります。半分はベッドが十程並んでいて等身大のお人形が毛布をかぶって寝ています。何も知らない人が突然この部屋に入ったら、驚かれることでしょう。もし夜中だったりしたら腰を抜かすかも知れません。このお人形は精巧に出来ていて、(私達は「お人形ちゃん」)

と呼んでいました)投薬でも胃腸洗滌でも可能なように作られています。でも先輩の方のお話では、先生方は、どうしても真剣味を欠くというので「お人形実習」を嫌われるとの事でした。

クラス担任のE先生は、以前小児科のナースをしてただけあってやさしく、希望者のない時など、御自分で試験台になって静脈注射などさせ「ああ皆さんにビタミンを三人前も打ってもらったので元気が出て来たわ」などとおっしゃって学生を感激させました。厳しいかったのはN先生で、私は一番目のクジを引いていたのでとても心配だったのですが、幸い「ベッド交換」ということで二時間の間、いろんな体位をとらされただけで済みました。

これに反して、大量皮下注射だの胃洗滌だのは苦しいことで、又剃毛だの導尿だのは恥かしいことで当たった人は災難でしたし、包帯交換だの清拭だのは幸運な方でした。

ある日N先生につづいて当番の実習準備係の子が、両手に一杯器具をもってお教室に入ってきました。「この前は皆さんあまり真剣でなかったから今日は罰として全部の人に、患者さんに交替でなってもらいます。いいで

すね。では二十八番から五人の方、まず向こうでガウンに着代えて仕たくして下さいな」その時、二十九番だったR子の顔ったら。

彼女のような美しい人も、こういう時は同情の目で見られることはないのです。さすがにR子も顔を覆って膝を合わせて細かくふるえているようでした。

N子先生はR子の下半身を教材にしておいて、はじめの怖い勢いはなく、却って上機嫌で丁寧に説明されます。一寸生意気なR子をいじめることが先生をそうさせるのでしょうか。

カーテンで閉め切られたお教室で、ベッドの上で患者になったR子を固んでN先生と学生達。Rのお尻にスポットがあてられてこれからエネマの実習が始められようとしています。ベッドのかたわらにはスタンドが立てられ、大型のイルリガートルが下がり、赤く太いカテーテルが曲りくねってN先生の右手に握られています。

私はいつの間にか自分が学生であることを忘れ、すっかりこの雰囲気の中にみ込まれていました。しばらく沈黙が続いた後、N先生は「Rさん、我慢出来なくなったらいつでもおっしゃいね」といっになくはずんだやさしい

声をかけられましたが、一向に手を休めようとせず、いろいろ体位を変えて、こういう時にはこうしてと何度も説明なさるのでした。便器が本当にあてられた時はR子の額は汗で光っていました。

この時、私ははじめて体のしんがつきぬけるような感動を覚え、いつか高校生の時に初めて、極めて自然にお流腸された日の想い出が、突然よみがえって来たのです。

つぎはS子の番で、肛門ブジの説明がありました。カテーテルで導かれた水の入った容器に、空泡が本当に出て来たのにびっくりして、現実にはひき戻されました。それからが大変でした。各グループで相互にグリセリン、高圧浣腸の実習がくりひろげられました。

羞しい年頃の乙女達がお尻を出して奇声をはり上げながら、戦場のようでした。でもさすがに真剣そのもので「お人形ちゃん」の時のように笑ったりする子はいませんでした。

私はS子さんに高圧をやりJ子の実験台になりました。きっと知らない人がカーテンのかげからのぞいたらびっくりしたでしょう。

確かにN先生ではありませんが、「人権?」でも、あなた方のような不勉強な学生に処置

される人達の方が、よほど人権無視よ」には違いないのですが、学生には地方出の純情な子が多かったのだ、このような強引な実習も可能だったと思いますし、処置される身になって勉強することは尊いことだと思います。

A先生は、「昔、私達の頃は大人だったのよ。学院の新入生はお医者さんや上級生の練習台にされたのよ。その時さんざんいびられたので、自分が実習する番になると徹底的にやったものよ。「生理」なんていったって許してもらえなくて、生理ならそういう時の処置の仕方を教えてあげますといわれて泣いたものよ」と云っていられた。昔の学生は人間扱いされなかったそうです。ことに戦争中は、養成を急ぐあまり、出来ない子は婦長さんから体罰を受けることが多かったそうです。でも真夜中に呼び出されて裸にされてぶたれるなんて、今では想像も出来ないことです。

このようにして四カ月間、殆んど毎日の午後、みっちり実習で、しぼられました。例の「患者さん」になる順番はその日によって人数が違うので順番が予想通り行かず一喜一憂の連続で、私は清拭、ベッド交換、筋肉注射採血と割に助かっていたのですが、お終いに

採便が当たってしまって、それまでの「借」を一度にとられたかっとうでした。幸い婦人科の洗滌は既婚のMが進んで「身代り」になってくださったので、うまく行きました。

きびしい実習でしたが、我ながらよく勉強したと思いますし、又主任の先生にも「このクラスは、きつと全員国家試験合格よ」と、ほめられました。

でも勉強がこんな風ですから、寮などではさぞかしと思われるでしょうが、皆が遊びたい盛りですから、じめじめした事は全くなく、勉強時間とは正反対に快適そのものでした。

クラスメートが病気になると、一同で至れりつくせりの看護に当るのはさすがでした。その代り一寸お腹が痛むなど云おうものなら大変でした。がその時のことは御想像におまかせします。

三年の学院生活の間にはずい分、病院の先生方の御研究のアルバイトもしました。主として実験台になることで、喉に麻酔剤を注射して一定時間毎の血球の変化を調べられたりお腹に超音波を当てられたり、いろんなことをやりましたが、体のいろいろな場所での体温測定や細菌の検査には参りました。腸の形

を調べるお腹のレントゲン透視も大層苦しくて、アルバイトにしては辛すぎる感じでした。

ナース時代の体験

無事国家試験に合格してからは、上京してしばらくM病院に勤めることになりました。読者の皆さんは、ここで私が見たことを知りたいと思われるかも知れませんが、それは大部分職務上の秘密になりますし、又実際大きな病院ではすべて医師の指示で処置が決まるのでナースには勝手なことは出来ないのです。唯患者さんに処置する時はとても余計な感情

は起こらないのに自分に施されると想像するだけで、身振いする程興奮したりすることがあるのは、私が異常なのでしょうか。

今迄も、自分がナースでありながらエネマの体験を書いて、主として関心の対象がそれにあることを白状してしまいましたが、ある時オペ室のナースに、「婦長さんたらひどいのよ。面白くないことがあってふてくされていたら、あんた何か飲んだんじゃないでしょうね。この頃おかしいわよって、無理やり引っ張って行って高圧をかけるのよ」とふんがいて言うのを聞いて、とうとう虫が治まら

☆奇クサロン ☆原稿募集

一、大好評の「奇クサロン」の掲載に適した短文、写真、絵画を求めます。

一、内容は本誌の編集方針にふさわしいもので、寄稿家編集者執筆者に対する呼びかけ、読後感、感想、批評、映画鑑賞、短信往来、SM時評、図書雑誌紹介、見聞記、詩、歌、川柳、漫画、諷刺、などなど。

一、投稿には必ず「奇クサロン原稿」と明記して下さい。誌上の匿名は御自由ですからペンネーム（筆名）を添記して下さい。

一、採用の可否に拘らず応募下さった方全員に対して編集部作成のフォトを贈呈いたします。

す。贈呈フォトの枚数は作品の出来に従って増減いたします故御承知下さい。

一、誌上に掲載しました作品に対しては枚数に応じて稿料又は謝礼を呈します。

一、奇クサロンに掲載可能な絵画、写真、映画スチール、イラスト、漫画などに対しては、寄稿者全員に編集部作成のフォトを贈呈いたします。優秀な作品は誌上に発表の上、画料をお支払い致します。

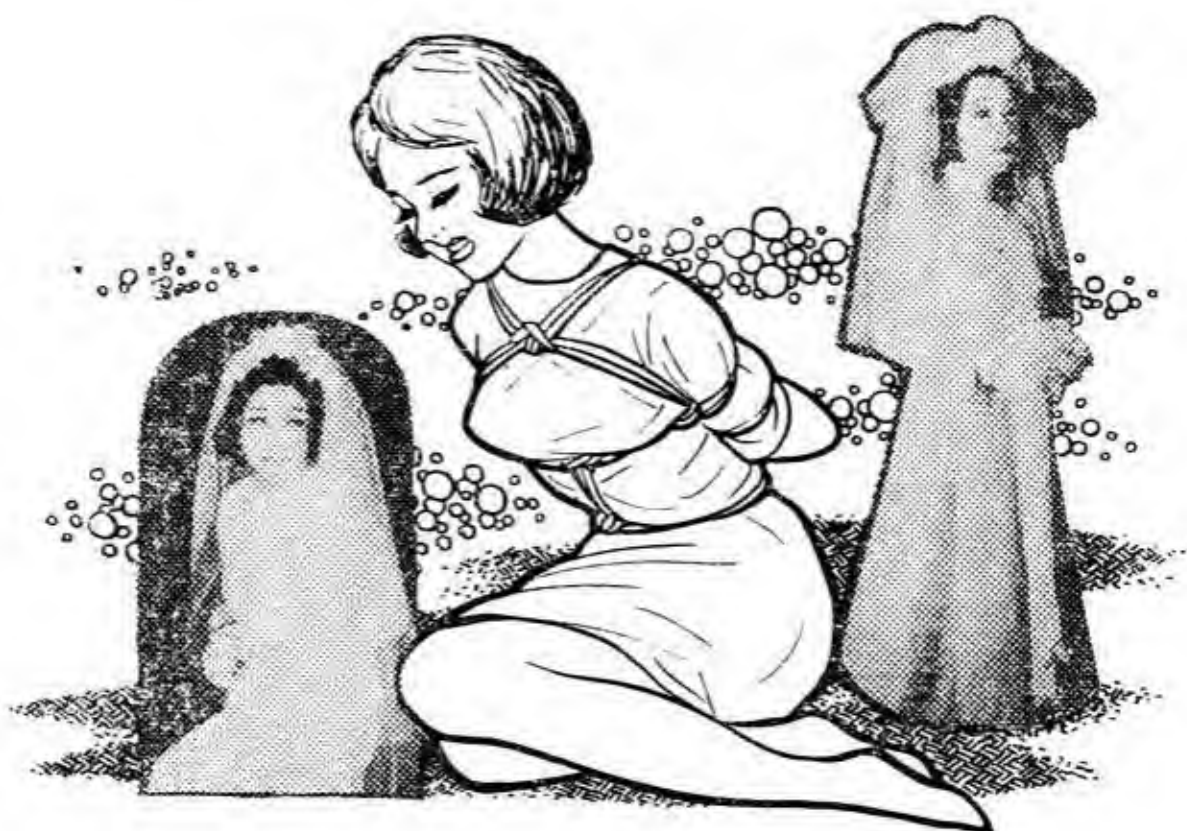
一、編集参考資料の提供に對しましては、出来るだけ高価に購入したいと思しますので、お手放し可能の方は内容の詳細に希望価格を附してお申込み下されば、折返しお返事差上げます。

なくなってしまうのです。

深夜（夜勤）のある晩、素敵だと思っていたH先生に、「あの、お通じがずっとなくてお腹が苦しいんですけど」と打ちあけ、「じやお薬あげようか」とおっしゃるのに、わざといやいやをしました。「薬はいや注射もいやじゃどうしろというの。君だって一人前のナースなんだから聞きわけなくちゃあ。それともエネマにでもするか」と、とうとう言わせてしまい、いやいやをしながら自分で処置室のベッドにすすんで横になり処置し易いようにするのでした。それからしばらくして、自分の病院ではいやだといって、先生に紹介状をいただいて、直腸癌の検診を受けたりしたこともありましたが、何といっても強烈なのは泌尿器科での検査でした。

今、私はある小さい診療所にお勤めしていますが、ふとKK誌を読む機会があって、自分と同じようなことに関心を持つ人がたくさんいることを知って、実は驚いて筆を取る気になりました。私はそれこそしがたい一人のナースですから、平凡な体験とも思われるでしょうが、勤務時間以外ならそのような方々のために多少はお役に立てられるかも知れません。

(画・野江三郎)



≪小説≫

女 装 の 家

— 井 風 呂 秋 於 —

1

年々過密化されてゆく交通ラッシュは、数年前までは殆ど田舎同様であったこんな地域にまで、至極当然のように波及された。その公害現象と言えよう、舞い埃や撥ね泥のために町は……いや、周囲の家々は、皆一様に灰色となって穢れていたのである。

が、そのなかにあつて、その家だけはマア何とか、表から見て拭き掃除の行き届いた小綺麗な感じがしないでもない。言わば、その家の印象は他の家々と比べて、それぐらいのことと多少なりとも目立っている具合であつた。つまり、私がこれから訪ねようとするその家は、一見して何の変哲もない、裏町のしもたや風の家である――

午後一時。

その家の前で、私は大きなトランクを片手にしたあまり恰好のよくない姿で、頬を火照らせながらタクシーから降り立った。

こうして此処へやって来るのも、いままでに五たびをこえるというのだから、普通なら馴れのおかげで、もう少しぐらひは平穩な気分でいられそうだった。だが私はそうはいか

なかった。それが何度目であっても、この家の前に着くと決まって胸が早鐘をうち、異常な興奮気分にある自分を思い知らされるのであった。

私は、落ち着こうとする意味もあって、いつものように左右をゆっくりと見回し、空を仰いだ。

やがて、空溝に渡した踏み板の上に立ち、玄関脇の高い位置にある呼び鈴のボタンを押したとき、『をざき』と細い筆法で書かれた表札が傾いているのに気がついた。

トランクを足許に置いて、ゆっくりと表札を直した。

そのときガラリと格子戸が開いて——
馴染みのお市婆さんの小さな顔がチヨコンと覗いた。

「あらま……」

お市さんは、例によって左眼だけをシヨボシヨボさせた、ややこしい表情で言った。

「こりゃまた井風呂さん、どうしてこんなに早く?……」

「いえね」

私はちよつと照れ臭くなり、鼻の頭を小指で掻いた。

「今日は訳あって、念入りにやりたいことが

あってね……それでその、尾崎さんには此の前許可を貰ったのだけど……少しでも早い時間から掛かろうと思って、こうして駆けつけました」

「あらま」

と、お市さんはまた口癖のことを言って、

「でもねえ井風呂さん、あたしゃまだ、お風呂の用意もしてないんですよ」

顔の皺の数を増やしてみせた。

「いえ、その御心配なら要りませんよ、出掛ける前に浴びてきましたからね」

「はア、そうですかア」

「いいですか、入って?」

「ア、どうぞ、どうぞ」

私はトランクを抱えて玄関に入った。お市さんはそれを見て、大げさな目つきをしてみせた。私は上り口にトランクを置くと、いつものように——クリーム色の壁に掛かった大鏡にわが身を映して、しばし突っ立った。

この狭く美しい玄関に、この鏡の大きさでは、普通から言って不釣り合いというより他ないだろう。だが、この家では、そんなことは普通のことだった。内部に入るとこの程度の大きさの鏡なら至るところに、と言ってもいいほど此処彼処に掛けられてある。

言い換えれば、たとえそれが不釣り合いに見えたとしても此の家を訪ねて来た者にとつては、これこそ、この鏡というものこそ絶対必要欠くべからざるものであり、場所などにとられず、なるべく数多く掛けて置いてほしいものであった。

「あれ、やアだよ、井風呂さん——」

そのとき急に、お市さんがふりむいた。

「あんた、今日は念入りにやりたいとか言ってます。そんなこと今更言わなくても、あんたったら、いつも念入り過ぎるくらい念入りだと、旦那さんや皆さんが言ってたわよオ」

何を言い出すのかと思ったらお市さん、さっき私の言ったことが今になって可笑しくなってきたのらしい。

顔をよりくしゃくしゃにさせて、口唇もとに掌をあてて、妙なシナまでつくった。そして普通ならホホホと愛想笑いのひとつぐらい聞かせるのだろうが彼女の場合、残念ながら喘息みたいな風音がただけだった。

「ところで、おばさん。旦那さまは?」

苦笑しながら私は訊いた。

年甲斐もなく頬つぺたにポツンと汚みつかせたにきび一つ。それを恐ろしく爪先でつぶしながらでもある。

「旦那さん？——旦那さんは、いまさっき頭のセットに出掛けましたよ」

「ふふ。髪の毛のセットでしょ、おばさん」

「え？ あらま、やだよ井風呂さん。そんなこと、どっちでもいいじゃござんせんかね。さあ、そんなことより、早く上って、その何ですか、念入りの事でもお始めなさいませう」

お市さんは妙な手の振り方をして、笑いを浮かべた。

「お湯はポットに入れて、すぐに持っていけますからね」

言いながら奥へ消えてしまった。

私は靴を脱ぎ、それを『百合』と小さく貼り紙されたところにしまいこむと、淡い間接照明の螢光灯が天井近くにぶら下がっている板廊下を、擦り足で歩いて行った。

私たちが此の家を訪ねて来てよい時間は、午後三時から先である。しかし私は主人の尾崎さんをお願いして、こうして、『規約』より二時間も早くお邪魔させて戴いている。

——未だ誰も集うては居ない部屋々々は、奥へ行くにつれ、表通りの騒音からは隔絶され想像できないほどの静けさに、ひっそりとしていた。

しかしやがて。

この部屋々々は、静けさこそ左程かわらないだろうけれど、集い来た十数人の人々によって美しい、妖しい、極彩色の大輪の花を咲き誇らせるのである——

北から南から、空路をはるばると飛んで、この一刻の夢をもとめて馳せ参じる紳士がある。たった数時間の、その陶醉感を得るために列車に揺られ、長旅をこらえてやって来る人たちもある。

いや、こらえて、ではないだろう。此処を訪ねた人にとっては、それまでの、そんな苦勞は微塵の苦勞ともなっていないのが事実であつた。此処には、それだけの『価値』があつた。苦勞を苦勞と感じさせない夢が……ひそかな願望にもだえはじめた自分をひよつとしたら救い満たしくれるかも知れない、夢が待っていた……

私は、『勝手知つたる』足どりで、裏庭に近い階段脇の小部屋に着いた。

この部屋は、私が『実質的』に此の家の会員となれた日以来、ずっとご厄介になつていく部屋であつた。

相部屋式、とでもいうか、この部屋を当日使用できるのは私の他に、『千代子』さんと

『えり』さん、ということになっていた。

千代子さんとえりさんが何処に住む人なのか、知る由はない。そんな事を知りたいと思うのは此の家ではタブーである。たがいにそれらのプライバシーに関する言葉は交さず、またその必要はなかった。

都合によつて私たち三人が、同室していたこともあるし、また、一人が欠けたり、私ひとりだけであつた夜もある。

さて今日はどうなるだろうか？ とフト思つたりしながら、私は部屋にはいった。

そして、トランクを隅っこに置いてきて、部屋の真中でドツタリ坐ると、男としての自分としばしの別れを意識して腕を伸ばし、無遠慮な恰好で思いつき大きな深呼吸をやらかした。

——一方の壁際には、揃いの、小さなスタイルの鏡台が派手な覆いを掛けられて並んでいる。奥のほうから『千代子』さん、『えり』さん、私、の順序である。

鏡台と鏡台の間には、これもまた揃いの、乱れ菊の絵の衝立てが置かれてある。

此処へ来る人は総じて、素顔を見せ合うといったことは極度に嫌つた、と言つてもよからう。一応、社会人として立派に生活を営み

また自分は紳士であると「自覚」している方々だったから、その折り一面識も無かった人が相手ともなると尚更のことだ——とこれは理解できた。

そういう私だって、別に立派に生活を営んでいるというわけではないが、素顔を嫌う云々は然りである。

だから、素顔でこんな部屋に入ってきた人は、同室の人には挨拶もホンの口先だけみないな態度で早々と、この衝立てのなかに「隠れ」てしまうのだった。衝立ては、その人の意向によってその役目を果たす。

——そして、片一方の壁には、立関のものと同じ大きさの鏡が貼りつけられてあった。

これは語呂通り、「姿見」である。

私たちが研究し、矯正し、より、飲びをおぼえ、そしてそれに酔い痴れんがために絶対必要なものであった。

私は、如何に落ち着きはらった態度をとってはいても、それらを見つめているとやはり逸り立ってくる気持は、どうすることもできなかった。

やがてそわそわと立ちあがり、鏡台の前へ行った。

すると、そのとき廊下に足音がして、と思

うともう障子が開いて、

「お湯とタオルを持ってあがりましたよ」

と、お市さんの声がした。

私は衝立ての陰から、

「ありがとう。其の辺にでも置いていてください……」

と応えた。

早や、鏡台にむかっている自分を見られるのが、なぜか羞しかった。

「旦那さんが帰りました。すぐに、こちらへ来るそうですよ——」

言い残して、お市さんは去った。

2

この家の主人、尾崎さん。この人に就いて知り得たことを、いまここに書きならべる気持は無い。

ただ言えるのは、尾崎さんとは、女装する楽しみから生まれる『夢』をこれまでひたすらに追いつづけてきた人である、ということだ。誰がみてもこの人こそ真の「女装愛好」の人だと認めよう、ということであった。

当然、好きこそ物の上手なれ、と言ったら失礼かも知れぬが、私からみてこの人の女装ぶりは、まことに御見事の一言に尽きた。

尚これは私だけではなくて、この家の会員すべての者がその女装ぶりに感嘆を惜しまずひいては、それをお手本とし、目標とすると共にその、良い意味での練れた人間性をも愛し尊敬もしている感があったことだ……

その尾崎さんは、いま、薄むらさきの地に同濃色の鶴模様が飛び交うている、しっとりとした和服姿で私の横に坐り、顔化粧の指導のあれこれを熱心につとめてくれていた。

——以前、私はよくひとりで化粧をした。

だけどそれは、いまから思えば我流もいゝところで、ひどいものだった、というより他ない。

みじかい時間を、あわただしく過ごし、その僅かな女装の楽しみを得んがための、行き当りばったり式の化粧でしかなかったのだ。

此処の会員となれた私の化粧は最初の一回、この尾崎さんに一から十まで教わらなくてはならなかった。

五回目のときだったか、

「あなた、上達がお早いわ……」

とか何とかおだてられて、いい気持になってひとりやってみた。

しかし今日、そのうぬばれもすっかり醒めて、またも何かと忙しい尾崎さんに無理をた

のんでこの態たらくである。手間の掛かるヤツだと言われても仕方ないのは当然だが、私も此処へ来るたび尾崎さんへの甘ったれの芽を大きくしている自分を認めざるを得ない。

午後四時。

やっと私は化粧を終えた。

始めてから二時間。それが長過ぎた時間だったのか普通だったのか、私にはそんなことはわからない。具合をみてもらいながら、ヘア・ドレスを被る。

やがて私が立ちあがると、尾崎さんは部屋の中央を仕切る朱鷺色とぎのカーテンをさっと引いて閉めてくれた。

「じゃ、あたしはこの辺でね……」

尾崎さんはゆるい笑みを浮かべて言った。

「あちらの方も、もうボツボツ終ったころだと思うから、ちょっと寄ってあなたの事を伝えておきます。で、あとのことは御本人同志で……適当に、ね」

私がうなずくと尾崎さんは、化粧中の『千代子』さんと『えり』さんに何やら愛想言葉を話し掛けながら、部屋を出て行った。

私は、おふたりに、

「では失礼して、お先に使わせていただきます——」

と言ってカーテンの向こうにはいった。

それからの私はヤケに胸が高鳴りはじめ、ともすれば手先がふるえて、役立たぬ有様であった。

息苦しく、喘ぎながら、まず化粧着代りにしていたピンクのネグリジュを脱ぎすてる。

ブラジャー、コルセット、パンティ、などの状態を夢中でたしかめながら、トランクから出しておいたドレスを着はじめる。

そのときはまだ鏡など覗くのは恐ろ過ぎてなるべく離れて立ちながら、背中のチャックを閉め、鉤ホックをとめる。

それから漸くにして鏡に自分を映してみることができた。

しばらく、凝つと視つめていて、ヘッド・ドレスを取りあげた。

落ち着いて、上手に被るんだ、と念じつつ頭にのせた。

つぎは、手袋だ。絹のやわらかい、つめた感触がふるえる指先に心地よかった。

——こうして、私の女装は、やっこのことで出来あがった。

そして、こんな自分を鏡に映していればいるほど胸に不安の粒が生まれ、また見なければ見ないで、揺とした不安の渦を巻き起こし

はじめる。そんな、どう仕様もないやり切れなさに追い立てられるようにして、私は間もなく部屋を出て行く決意をした。

「あのう……おわかりましたから……お先に失礼させていただきます」

ほかに言えることはないのだろうか、と我ながら思うのだが、仕方がない。カーテンの向こうのお二人に言って障子を開けた。

「まア！ 美しい……」

かん高い声にびっくりしてふり向くと、カーテンの片側、衝立ての向こうから口紅をひいている手付きのままの『千代子』さんが、大げさな表情をつくってこちらを見ていた。

彼女とは、まだ心ゆくまで話し合ったこともない私だが、私の感じたことでは彼女はきつと本質から明かるい、ユーモア好みの人であった。

私は彼女の、この「絶大なるお世辞」を正直に、というより実は照れ臭がっている余裕などなかったものでそのまま有難く頂戴して、廊下へ出た。

廊下へ出てすぐに階段のほうへ——

なぜか、ほかの人たちにはまだこの姿をみられたくない思いの気ぜわしさで、私たちの『会見』の場である階上の部屋へと……着馴

れないロング・ドレスの裾を、チト乱暴に蹴りさばいた。

私の着たドレス、それはおこがましくも、ウエディング・ドレスだった。

3

女装して――

ただそれだけでチンマリと、いつのまにやら綺麗事のうちに時間が過^たってしまう。

そんな人は、この家では多分新しく入会した人ぐらいのものではなからうか。

他の先輩のベテラン会員はと見ると、そこはそれ、各々が適宜に、女装するだけの単なる？ 段階から一歩前進して……と言ったら語弊があるかも知れないが、この女装したことに託していままで出来なかったことや是非してみたかったことなど、言わば性向からくる願望などを何とかこの際、うまく現実化させて、しかもそれで心を満たそうと欲張った努力をつづけているように見受けられた。

むろん一概には言えないだろうけど、女装する者の、これは自然にたどるコースなのかも知れなかった。

ところで私など、当然「チンマリ」組に入るのだろうけど、なにぶんとも無茶苦茶なが

らも自宅でひっそりと女装をつづけてきたという「経験」がある。それに厚かましい。より刺激をもとめてうろろしていたぐらいだから、入会して日も浅いくせに早やうずうしくも自分の希望を述べ、その希望が果たせるべく事を運んでくれるようお願いしたりして、もうベテラン会員たちのなかに混りこもうとしていた……

もちろん尾崎さんは、常々言っていた。

自分の女装美？に有頂天になり我を忘れて――ともすればその願いを満たそうとハッスルするあまり、思わず過度の状態に陥ってしまいかねない会員、そんな方にはくれぐれもお願ひすることだけれども、そんな方は事前に、これは会の主旨に反することではなからうか、また紳士同志として結び交した規約の違反になるのではないだろうか、ということがまず考え判断できるだけの余裕を、日頃から必ず備えてるよう、このほうの努力も大いにしてもらいたい――と。

純粋に女装するだけの世界に耽^ひっている尾崎さん、もしこれが本当だったら、会員たちの、いや私みたいな会員のこの自然の現象はあまり有難いものでなかったらう。むしろ、幾何かの不都合なことであつたらう。

が、そうは言うものの私の知る尾崎さんはそれら会員のしていることが何であっても、正面から「拒否の態度」をとっていない。

結局、尾崎さんにしてみれば、それらはすべて会員各自の良識に俟つ、ということなのだろうと察した。

だから私なんか、良識に俟たれるのはいいけれど、おかげでその「過度の状態」の判断がなによりもむずかしくて一体どこからが過度となつてどこまでがそうでないのか、自分で明確な一線の引けようもなくすっきりまごついたものであった。

その点、さすがベテラン会員は、見た眼にも堂々としていた。当然のことだろうけど私みたいに判断もつかずオロオロしている風がちっとも無い。

――会員の「ちどり」さん。

彼女^こは、凝りに凝った衣裳で夜の散歩に出掛けるのが唯一の趣味であつた。二十五年前の流行歌を、いつも声高らかに歌いながら、颯爽と外出して行く。外でどんな経験をしてくるのか、それは知る由もない。

『和子』さんは、芸者姿が大のお気に入りともえた。よく、持ちこみの邦楽のテープを鳴らしては恍惚として、ナントカ流の日舞をそ

れも誰彼なしに通じかかった者を其処へ引っぱり込んではその眼前で、強引に繰り展げようとするヤツカイな癖があった。私も一度曳きずりこまれて、部屋の隅っこから拝見させていただいたことがあるが、その踊りが上手なのかどうかは、知る筈がない。ただし、踊る時ぐらいいは、スネのハリガネみたいな毛だけは剃っておいたらいい、と思う。

『美枝』さんは、私同様洋装に魅せられている人だった。とても美しい。——黙っていたら品位さえただよ。が、なんだかミニ・スカート専門で、時折りその脚線美を自慢したいあまりそれこそ過度？ のポーズをとったりして同座の皆さんを煙に巻き、ギョッ！とさせる。そんな趣味がある。それに大の下着自慢であり、なるほど精通もしていた。

『みつる』さんはホモ——いや、レズ？ 趣味がある。過去にどれ程の御経験があったのか知らないが、眼の色変えて話すといったらその事に関したことばかり。お化粧がうまく肌ののらないといった悩みをお持ちで、時々はげちよろけたお顔をしているが愛嬌があって、親切で、それに大したインテリでもあった。此の家には、残念ながら俗にいう「お立ち」とやらの趣味の人は居なかったので、周

期的にヒステリーがおこって実に困ります、と本人がのたもっている。

『とみ子』さんも、『みつる』さんと同じ趣味があるらしかった。が、此処ではおとなしく、純粹？ に女装だけの楽しみに耽っている、とみえた。英語がお得意で、いつか訪ねて来た二人の外人とペラペラやっていたのを通りすがりに私も聞いたことがある。偶然この家の前で一緒になったことがあるが、平常時の彼は四十歳前後の立派な紳士である。

『千賀子』さんは、被キッス魔である。興があれば、すぐにキッスしてえと言う。とりわけ、『和子』さんのテープの、あのリズムが妙に伸びたり縮んだりするややこしい邦楽が聞こえてくると、きまって近くに居る人にキッスしてえと、抱きついてくるというんだから、私にはその感受性の具合にどうも見当がつかぬ。豊満すぎるぐらいの美人で、話によると酒豪でもあるらしかった。

そして『千代子』さんと『えり』さんは、共に演劇派？ であるらしくて、よくふたりで、今日はどのようなお芝居をしましょうかなどと相談しているのを耳にするが、やがて二人仲良く冗談を交しながら何処かの部屋へ行ってしまふ。

——というようなわけで、そのほか色々。

さて、そして『沙絵』さんという……これから私と会うその人は、今までは廊下などで出会っても単に目礼を交すだけだった人で、尾崎さんにもその程度がわからないという、サドであった。

4

沙絵さんと私は、二階の西側に面した部屋で向かい合っていた。

この季節の、太陽の沈むのは早かった。もう夕刻がきて、すでに夜が忍びはじめていた。

間もなく階下では、尾崎さんを中心にしたいつものような楽しい会食がはじまることだろう。

その尾崎さんは、先刻途中で一度あがって来て、ふたりに気を利かし甘いテープ音楽を掛けていってくれた。この音楽が終ったところには、ちょうど階下で食事が始まるからね、と言うのも忘れなかった。

「それで……」

と沙絵さんが言った。紺いろの地味な和服姿だが、それがまたよく似合っている。面長の白い容貌が薄暗いなかであって映え、形よ

くセツトされた髪から数本がほつれて片頬に
触れている。それを、時折りしなやかな指先
で掻きあげる仕草がとても色っぽく思えた。

多分、私より十ばかりは上でもあろうが、

「女」としてはとてものことに、私なんかそ
の足許にも及ばないだろう、と思った。

「……あのう、奇譚クラブへ投書したという
あなたのものは、あたしも読ませてもらった
ことがございますけど、あれは……」

沙絵さんは言いかけて、ちょっといたずら
っぽい目つきをした。緊張のし通しでいた私
は、またここであわてて、言った。

「ハ、はい……あれは、そのう、実を申せば
本当の事半分……嘘が、ではなくてあたし
の願っている夢みたいなことが半分……です
のよ」

やわらかく揺れるチュールをつまんで、そ
れでこの羞しさで紅くなっただろう顔を覆う
てしまった。

「でも、今までに誰方かとプレーなさったこ
とは……」

「はい、それは一人、二人——あたし自身が
現在ほどではない頃に」

「で、どうなさいました？ その人」

「お前を苛めてるばかりじゃ面白くない、自

分のほうも苛めてほしいから……と言って何
処かへ行っちゃいました」

沙絵さんの顔がいっぱいに笑みを浮かべ、
それから近づいた。

「では、ズバリ訊きますけど、お気を悪くな
さらないでね。あなたに、同性愛は？」

私は戸惑い、思わず小首をかしげていた。

「あたし……その経験はありませんし、わか
りませんわ」

「じゃ、それに就いて如何お思いです」

「どう思うって……そうね、それについて知
ってみたいという気持があることは、言えま
すわ」

「——」

「でもあたしみたいな者、そのことで相手に
してやろうなんて方はだアれも居ない筈だし
と言って、あたしのほうからはとても……」

相手が黙ってこちらを見つめているだけな
ので、私はまたまたあわてていた。もちろん

言ったことは本当だし、本心であった。

——部屋のなかは暗くなっていた。

ふと沙絵さんは立ちあがり、灯りをつけよ
うとした。が、その手を止めて、ゆっくりと
私のほうをふりかえると、

「ではあなたは苛められたいだけの人。あた

しは苛めたいだけの人間。いまのところ二人
はそういうことなのね」

と笑みをふくませた声で言った。

「そ、そういうことかしら……」

私は窓のほうに視線をのがしてこたえた。

「じゃアあたしが今夜から苛めてあげる。あ
なたも、あたしに苛めさせて——」

「ええ！」

沙絵さんの言いも得ぬ宣言の旋律？ に私
の心はふるえた。

「あたしの責め方は、単調だろうけど随分と
ひつつこいわよ、よくて？」

「……いやだわ。よくはないわ。思いつき
あばれて、反抗してあげる！」

「言ったわね」

「言ったわ」

妖しい歎びに顔をゆがませてふり仰いだと
き、不意に灯りがついた。目と目が合って、
顔が熱くなった。

「それでは可愛い花嫁さん、たがいのスタミ
ナのためにここはひとまず小休止として、階

下へ降りてパクつきに参りましょうか」

小腰をかがめ、大仰に手振りをいれて沙絵
さんは言った。

「ええ、結構なことでございますわ、では参

りましょうか」

——音楽はまだ鳴っていた。
でも、終りに近い。

私は立ちあがり、そっと身装りを確めた。
いままでの緊張で、肌の部分々々が妙に汗ばんでいる。いや、普段からさほどの緊張をしなくたって、すぐに汗の出る私。丸くくった襟で首もとがびっちりと詰まり、長い袖に長い裾、それに手袋……沙絵さんとあのような話しをしていて、当然平気でいられる筈はなかった。——そして、大体が私というヤツもふざけていると思うのである。

洋装好みなのはまあいいとしても、いつもイザとなると我が不様な大根足を陰敵すべくすぐにロング・ドレスなんかを着用に及ぶ。

今回に至っては、相手が「男装」の人ならともかく、レッキとした女装の人だとわかつているくせに、自分でも説明できないウエディング・ドレスなんかを大層に着込んで静々と登場したりしているのだから、あとになつてわが事ながら苦笑を禁じ得ないのも道理であつた。沙絵さんと話し合う約束ができた時に、すぐに着て行く服としてウエディング・ドレスが脳裡に疾^はつたのも、いつも、女の一番素晴らしい身装りは花嫁姿であろう、とい

う潜在意識があつたからと思うが、相手の沙絵さんにしてみればそうはいかない。会話だけの約束だつた場に突然「花嫁」があらわれたのだからびっくりしたことだろう。いや呆れてしまったことだろう。多分、何を感じていてンでしょうこの人、なんて胸中に呟いていたかもしれない。

私は、折角の花嫁姿、この有終の美？を飾るべく、随分としとやかに、そして楚々々として「花道」である階段を降り始めた。

いくらなんでもこの恰好で皆さんの前へ出て行くのはオーバーだ。せめて、あの花柄のワンピースにでも着換えていこう……

そして「あたしが苛められる」ときは、あの真紅のドレスと、あのピンクのネグリジェの二枚を用意しよう……

澄ました顔の裏では、そんなことを考えていた。そのとき、前を降りていた沙絵さんがフト、振りかえって、小声で言ったものだった。

「ほんとに綺麗。見ていて、なぜかあたしの若い頃がひどく恋しくなっちゃう。でもいいわ。すぐにあたしがこの綺麗な子を思いきりに無茶苦茶にしてやるんだから」……と。

二時間ばかりのち——

特別に「提供」してもらつた離れ家の閉めきつた部屋のなかで、私は沙絵さんに——うしろ手も高く、犇々と縛りあげられていた。

興奮にまかせて出来るかぎりの抵抗をしめす私の手首をつかんで、そのスラリとした姿からはとても想像できなかったような力が強引に背中へねじ回し、まずそこから縛り、両の二の腕を引き絞つてから胸の上下に縄を喰いこませられた。

さすがに、サドを自称するだけあつて縛りにも手馴れがあつた。私には予定通りの、華々しい抵抗をするいとまがなかった。

ふたこと、みこと罵つてやったとき、眼の前の和服の裾が派手に割れたと思うと不意に肩先を足蹴にされて、仰向けにひっくり返ってしまった。

「さ、これから逆様にでも吊り下げて、ぶっ叩いてやろうかしら」

と、足許に纏れている縄を乱暴に撥ね飛ばしながら、沙絵さんが恐いことを言った。私はびっくりして呻くのを止め、首を捻じてその顔を見あげたが……気がつくとなん

くセットされた髪から数本がほつれて片頬に
触れている。それを、時折りしなやかな指先
で掻きあげる仕草がとても色っぽく思えた。

多分、私より十ばかりは上でもあろうが、

「女」としてはとてものことに、私なんかそ
の足許にも及ばないだろう、と思った。

「……あのう、奇譚クラブへ投書したという
あなたのものは、あたしも読ませてもらった
ことがございますけど、あれは……」

沙絵さんは言いかけて、ちょっといたずら
っぽい目つきをした。緊張のし通しでいた私
は、またここであわてて、言った。

「ハ、はい……あれは、そのう、実を申せば
本当の事半分……嘘が、ではなくてあたし
の願っている夢みたいなのが半分……です
のよ」

やわらかく揺れるチュールをつまんで、そ
れでこの羞しさで紅くなっただろう顔を覆う
てしまった。

「でも、今までに誰方かとプレーなさったこ
とは……」

「はい、それは一人、二人——あたし自身が
現在ほどではない頃に」

「で、どうなさいました？ その人」

「お前を苛めてるばかりじゃ面白くない、自

分のほうも苛めてほしいから……と言って何
処かへ行っちゃいました」

沙絵さんの顔がいっぱいに笑みを浮かべ、
それから近づいた。

「では、ズバリ訊きますけど、お気を悪くな
さらないでね。あなたに、同性愛は？」

私は戸惑い、思わず小首をかしげていた。
「あたし……その経験はありませんし、わか
りませんわ」

「じゃ、それに就いて如何お思いです」

「どう思うって……そうね、それについて知
ってみたいという気持があることは、言えま
すわ」

「——」

「でもあたしみたいな者、そのことで相手に
してやろうなんて方はだアれも居ない筈だし
と言って、あたしのほうからはとても……」

相手が黙ってこちらを見つめているだけな
ので、私はまたまたあわてていた。もちろん
言ったことは本当だし、本心であった。

——部屋のなかは暗くなっていた。

ふと沙絵さんは立ちあがり、灯りをつけよ
うとした。が、その手を止めて、ゆっくりと
私のほうをふりかえると、

「ではあなたは苛められたいだけの人。あた

しは苛めたいだけの人間。いまのところ二人
はそういうことなのね」

と笑みをふくませた声で言った。
「そ、そういうことかしら……」

私は窓のほうに視線をのがしてこたえた。
「じゃアあたしが今夜から苛めてあげる。あ
なたも、あたしに苛めさせて——」

「ええ！」

沙絵さんの言いも得ぬ宣言の旋律？ に私
の心はふるえた。

「あたしの責め方は、単調だろうけど随分と
ひつつこいわよ、よくて？」

「……いやだわ。よくはないわ。思いつき
あばれて、反抗してあげる！」

「言ったわね」
「言ったわ」

妖しい欲びに顔をゆがませてふり仰いだと
き、不意に灯りがついた。目と目が合って、
顔が熱くなった。

「それでは可愛い花嫁さん、たがいのスタミ
ナのためにここはひとまず小休止として、階
下へ降りてパクつきに参りましょうか」

小腰をかがめ、大仰に手振りをいれて沙絵
さんは言った。

「ええ、結構なことでございますわ、では参

りましょうか」

——音楽はまだ鳴っていた。
でも、終りに近い。

私は立ちあがり、そっと身装りを確めた。
いままでの緊張で、肌の部分々々が妙に汗ばんでいる。いや、普段からさほどの緊張をしなくたって、すぐに汗の出る私。丸くくった襟で首もとがびっちりと詰まり、長い袖に長い裾、それに手袋……沙絵さんとあのような話しをしていて、当然平気でいられる筈はなかった。——そして、大体が私というヤツもふざけていると思うのである。

洋装好みなのはまあいいとしても、いつもイザとなると我が不様な大根足を陰敵すべくすぐにロング・ドレスなんかを着用に及ぶ。

今回に至っては、相手が「男装」の人ならともかく、レッキとした女装の人だとわかっていてくせに、自分でも説明できないウエディング・ドレスなんかを大層に着込んで静々と登場したりしているのだから、あとになつてわが事ながら苦笑を禁じ得ないのも道理であった。沙絵さんと話し合う約束ができた時に、すぐに着て行く服としてウエディング・ドレスが脳裡に疾^はったのも、いつも、女の一番素晴らしい身装りは花嫁姿であろう、とい

う潜在意識があったからと思うが、相手の沙絵さんにしてみればそうはいかない。会話だけの約束だった場に突然「花嫁」があらわれたのだからびっくりしたことだろう。いや呆れてしまったことだろう。多分、何を感じていてンでしょうこの人、なんて胸中に呟いていたかもしれない。

私は、折角の花嫁姿、この有終の美？を飾るべく、随分としとやかに、そして楚々々として「花道」である階段を降り始めた。

いくらなんでもこの恰好で皆さんの前へ出て行くのはオーバーだ。せめて、あの花柄のワンピースにでも着換えていこう……

そして「あたしが苛められる」ときは、あの真紅のドレスと、あのピンクのネグリジェの二枚を用意しよう……

澄ました顔の裏では、そんなことを考えていた。そのとき、前を降りていた沙絵さんがフト、振りかえって、小声で言ったものだった。

「ほんとに綺麗。見ていて、なぜかあたしの若い頃がひどく恋しくなっちゃう。でもいいわ。すぐにあたしがこの綺麗な子を思いきりに無茶苦茶にしてやるんだから」……と。

二時間ばかりのち——

特別に「提供」してもらった離れ家の閉めきった部屋のなかで、私は沙絵さんに——うしろ手も高く、犇々と縛りあげられていた。

興奮にまかせて出来るかぎりの抵抗をしめす私の手首をつかんで、そのスラリとした姿からはとても想像できなかったような力が強引に背中へねじ回し、まずそこから縛り、両の二の腕を引き絞ってから胸の上下に縄を喰いこませられた。

さすがに、サドを自称するだけあって縛りにも手馴れがあった。私には予定通りの、華々しい抵抗をするいとまがなかった。

ふたこと、みこと罵ってやったとき、眼の前の和服の裾が派手に割れたと思うと不意に肩先を足蹴にされて、仰向けにひっくり返ってしまった。

「さ、これから逆様にでも吊り下げて、ぶっ叩いてやろうかしら」

と、足許に纏れている縄を乱暴に撥ね飛ばしながら、沙絵さんが恐いことを言った。私はびっくりして呻くのを止め、首を捻じてその顔を見あげたが……気がつくとなん

私を逆様に吊り下げられるような、柱や鉤などはこの部屋には無かった。

私は気がついたように、矢鱈と下半身であばれてやった。

が、腕がすぐにしびれてきて、わざわざ演技などしなくても充分に顔が歪むほどの痛苦が襲ってきた。

「あれ、どうしたの。もう、暴れるのを止めたの？」

つめたい、皮肉な声が飛んできて、私は俯伏せになりかけた横腹を踏みつけられた。

「あら、あら。指先がこんなに冷たくなっちゃって……可哀そうに」

痺れを通り越しはじめた私の指に触れ、それを弄びながら、言葉とはうらはらの、少しも同情などしていない声音で、沙絵さんが言った。

苦しまぎれにその横顔を下からにらみつけていると、今までは、気がつかなかったが、彼女“の喉仏がひどく突き出ていた。

すると不思議なことに、その喉仏の突起に気がついたとたん、私は本当の恐怖に見舞われてしまった。

此の家に集まる人たちは、さすが女装に溺れるだけあってか、喉仏の突き出ている人な

んて一人も居ない。いや見掛けたことがなかった。それは偶然に過ぎなかったかも知れぬが、この私とても喜ばしいことには喉仏など全然突き出ていない。だから、いつのまにやら此の家では、それが至極当然の事なのだとさえ思いこんでいた――

なのに今。眉目形は何処からみても誰にもまけない女そのものの人が、それこそ露骨すぎるほどの男性の「甲状軟骨突起」を、私の眼の前に曝している。

「……か、かんにんして」

呻きといっしょに、私は思わず口走っていた。あまり視つめてみると、私の体の骨々のほうが、いまにも不気味な軋み音を立てそう、そんな恐怖すら襲ってきたのだった。

「では、ぼつぼつと……」

沙絵さんは、切れ長のするどい目で私を流し見て、言った。

「これから串刺しのお仕置きと参りましょうか……」

おそろしいこの言葉にまたギョッとして首をねじると、沙絵さんはやっと私から離れて部屋の隅のほうへ行くとこらだった。そしてなにやらゴソゴソと――と思ったら、今度は黒く塗った竹鞭らしいものと、細長い丸棒を

持って引き返してきた。

(な、なにをする気なの!?……)

声にはならない叫びをあげて、私は不自由な身をすくませた。すると沙絵さんは、口もとだけの薄い笑いを浮かべながら、不意に片手を突き出した。

竹鞭の先尖が縄目を縫い私の脇の下に突き立った。次いで横腹が突かれ、剥き出しだった太股の内側に痛覚が襲ってきた。

「ひッ……ひイ!……」

悲鳴もままにならず、私の鼻先はキナ臭くなっていった。泪があふれでて、その泪は体をよじるたびにふりこぼれた。

この竹鞭の執拗な責めがつづき、それがやつのことで止んだ時――

私はもう見栄も何もなく、縛られた身をい穢く仰向けに、大の字にして曝していた。すると。

とつぜん足首に手が掛かって、すぐに縄が巻きついた。果ては、あばれる私の太股のところにドッカーリ打ち跨って緊縛がはじめられた。

やがて、文字通り上下ぐるぐる巻きにされて身動きも出来なくなってしまった私に、「いよいよ串刺しよ、観念なさい」

と、変にやわらかい口調で言って、沙絵さんは例の丸棒を手にした。

「ど、どうする気……」

もう駄目だ、何をされてもどうする事も出来ない、とはわかってはいても、いっばいに目を見ひらき相手の動きを追う、その裾に突然。——つめたく固い棒が進入してきて腹部を這い、縄と肌の間をこじ入って、頤の下にその先端が出てきた。

こじ入れられる痛苦に私の視界には白い光の粒子が飛び交い、悲しい唸り声に押し出された唾がそのまま涎となって頬をベタベタに濡らした。

沙絵さんはまた縄を取って来て、この丸棒に私の首と、膝頭と、足首の部分にくくりつけた。

「さあ、出来上がりよ。一度立たせてあの鏡で、この姿を見させてあげようかしらね？」

相変わらず気味悪い猫撫で声で言う沙絵さんに、私はそれが僅かながらも首を揺すって必死にいやいやをくりかえした。

「ああ、そうなの、嫌なの？」

奇怪な形をした喉仏が、不様に動いた。

「じゃァ勝手になさいよ……ひとが折角、親切どころで言ってやっているのに」

喉仏の激しい動きの割りにはその眉のほうは少しも動かず、沙絵さんは腕を露わにまくると身をかがめた。そしてこの、私に「突き刺さっている」棒を乱暴にゆすりはじめた。——まことに羞しいお話だけど、私の気持ちに悦びが湧き上りそれがすぐに、陶然とひろがったのは、このときからであった。

6

「串刺しの棒」が引き抜かれ、足の縄が解かれて、トイレに曳き立てられていったのは、それから大分経ってからのことであった。

既に用は済んでいて？ 必要は無かったのに強引に曳き立てられたのである。

強引にパンティを剥ぎとられ、うしろ手縛りの縄尻を取られたまま便器に跨る私を、後方から凝視している沙絵さんの感じは、それまでの沙絵さんより一層不気味に思えた。

そして、不意に、

「浣腸したげようか」

と言われたときのショック。

私は眼も眩んでしまうような思いで、全身で嫌々をしてみせた。

「そんなに嫌がっても、あたしは思いついた事はきつとするわよ。でも今夜は、残念なが

ら用意してなかったから勘忍してあげる。そのかわり今度はきつと本格的なのを徹底的にね……」

私には浣腸された、した経験はなかった。正直言ってこの時、こんなことを聞かされても懼れただけしか湧かなかった。

——縄尻をとられ、その縄に、ふざけた事にはとられたパンティを引っ掛けられて、冷たい廊下をよろけながら部屋へ戻る途中、裏庭で何やら立ち話をしていたらしい千賀子さんとみつるさんともう一人、新しい顔の人の三人にみつかつて、彼女らはすぐにこちらへ近づいて来た。

「あらァ！ 百合さんたら、縛られちゃってるの！」

と、千賀子さんが派手な声をあげた。

「そうなのよオ——」

声が掛かるのを待っていたかのように、その拍子に沙絵さんは縄を引っ張り私を止め、幾分か得々とした風情で話し始めた。

「この人ったら、大切なところで自分ひとりがいい気になってしまふんだから、ちょっとお仕置きをしているところなの。ね、ホラ……この通りなのよ」

沙絵さんは縄を揺すってパンティの事を言

った。

「ねえ、この人、これからどんなお仕置きをされるの？」

「まあ、色々と——ね」

「いっぺん、見せていただきたいわあ、ねえ見学させてちょうだいな……」

「ええ。でも今夜は——もう駄目。いずれまたね」

「きつとよ」

きつとよ、と言ったのはみつるさんであった。私は、三人の、大らかそうな言葉や仕草であっても、これだけは妙にするどい視線を交互に浴びながら、忽ちに身の瘦せていく思いであった。

と言ってこの際、縄尻を振り切って逃げ戻ったりすると、これからまたどんなお仕置きが襲ってくるか知れない。

背中が固く結えつけられた腕がもう我慢出来ないところにまできているから、もしそんな事をしたなら、それこそ失神の破目になりかねない。

部屋に戻ったら今夜のところは、これで許しを乞うて、なんとか縄を解いて貰おうと思っていた矢先だから此処はどうでも、たとえ羞しさに身が細ってもグツとこらえていなければならぬ……

ればならぬ……

「でも、ずいぶんとひどい縛られ方ね」と、みつるさんが言った。

新人？ のひとは、ただ呆っ氣に取られたように私をまじまじと見ている様子である。

「こんなの、ひどくないわよ」

「でも見ていると、あたしまでが痛くなってくるようよ」

「じゃ、あなたも縛ってあげようか」

「やアだ、そんなの！」

みつるさんは大層にとびのいてみせた。すると、

「……いっぺん、あたしもくくられてみようかな？……」

と千賀子さんが「陰にこもった」低声でつぶやいた。

「あたしになら、あんたみたいなのは、駄目よ。趣味じゃないもの」

すかさず沙絵さんが言った。

「あら、何故よ」

「あたし、あんたみたいなお肉・体・美のひとは手に合わないわ」

私は知らなかったが、この会話では沙絵さんと千賀さんは親しかったらしい。普通なら此処の家でそんな事言ったら、忽ち取っ組み

合いになるだろう。

「それなら、この百合さんは何故——」

「このひとは、そのう……あたしにお仕置きされる運命を背負っていたのよ」

「まあ大げさな言い訳。ふんだ。いいわよ。どうせ沙絵さんは、可愛い子ちゃん好みなんだから！」

「あら、あら」

「いいえ、どうせあたしみたいな女は、どうても可愛い子ちゃんではないもんねッ」

なんだか、状況は沙絵さんが苛められているみたいになってきた。

「さあ、もう行くとするわ……」

いまになって相手がわずらわしくなってきたのか、沙絵さんは縄尻を私の肩に当てた。

「百合さん、がんばってね、こんなひとに負けたら駄目よオ」

お肉体美などと言われたことを根にもってか千賀子さんは奇妙な声援をおくってきた。

私は、やっと、最も苦しかった責めから解放されて……顔をあげ、小走りになって部屋にむかった。

芯では、まだまだ何か燃え立っている。なのに、身体は、夜気のために震えるぐらいに冷えきっていた。……



長尾晴景側室乱行異聞

春日山城秘話

城 剣 太 郎

天文十六年十一月、越後春日山城の城主で

ある守護代長尾晴景は、骨肉相食む戦国の世のならいとはいえ末弟の長尾景虎（のちの謙信）の軍勢に撃破され、米山峠を越えて敗走していた。その報せが、早馬で城内にもたらされたのは、いまにも泣き出しそうな空から北国特有のつめたい時雨が時折りパラつく晩秋のある日のことであった。わずかの手勢の者をのぞいては、年寄りや、女子供しか残っていない城中は、この報せに動揺した。しか

し、いたずらに歎き悲しんでばかりいる時ではない。留守役を仰せつかつていた老臣殿原豊後守は、善後策を講じるべく、この悲報を晴景の側室藤紫に報告した。

藤紫―晴景が金に糸目をつけず、京の都から捜し求めて来た美女である。堂上の生まれであった藤紫の美しさは、たとえようもなかった。その上、堂上人としての自負から気位が高く、その冷たい美貌と相まって、相対するものに畏怖と崇敬の念を抱かさずにはおかなかった。しかし、その虫も殺さないような美しい仮面の裏側には、生まれながらにして持っていた淫蕩で、しかも残酷な血が流れて

いた。それは、晴景の寵を得るようになってから日増しに激しくなっていた。

その残酷の限りをつくしたエピソードは、枚挙にいとまがないほど多く、領民も、藤紫という名前を聞いただけでも、ふるえ上がるというほどだった。

藤紫がある時、小女をつれて城を出、夏の夕のそぞろ歩きを楽しんでいた時のことである。一人の百姓風の若い男が、藤紫とは知らずに、頭も下げず、「きれいなおなごだな」というように、好色そうな瞳を向けてきた。

「ド百姓の分際で……」藤紫は、その男の態度に腹を立て、ただちに、家臣に命じて、その

百姓男を、ひっ捕えて、城内に拉致した。その時になって、はじめて藤紫と知った男は足元に頭を土にすりつけて、許しを乞うたが、藤紫は鼻でせせら笑っただけで、もとより許しはしなかった。

「ド百姓の分際で、わらわの顔を見るとは、神をも恐れぬ不届きな奴。これからバツをあたえてやるわ」

と、うしろ手にしばられ白州に坐って首をたれている男に、藤紫は一段高い所からにらみつけた。そして懐剣を抜くと、やにわに段をかけ下り、あっという間に男の両眼をくり抜いてしまった。盲目にされて放逐された男は、やがて世をはかなんで自害したという。

また、ある年の花見のことであった。春日山城から小一里のところにある金谷山へ、お女中や小女を引きつれて藤紫は花見にやって来た。地酒に、ほんのり頬をそめた藤紫は、近くで、一人静かに酒をのんでいる職人風の男を見つけ、いたずら気をおこした。食べかけの料理の残りものを小女に持たせ、男の傍まで行くと、目の前へ重箱の中のを芝草の上にぶち撒けさせた。

「お前たちには、もったいないものじゃ。とらすによって手を使わないで食べよ」

藤紫は、ほおにさげすみの笑みをたたえながら、驚く男にいった。

「いらねえ。おらあ乞食じゃねえや」

男は、太い眉をあげて、藤紫をにらみつけるようにしてさういふと、立ち去りかけた。

「お待ち、この藤紫様のたまわりものが食べぬというのか」

藤紫は、直ちに引きつれていた下役人に命じて、男をしばらく上げた。

「さようか、こんなものではまずくて口に合わぬというのかえ。よいよい。それでは、もそっとおいしいものを進ぜよう。又とない珍味を鰯腹食べさせてとらさうではないか」

藤紫は城内へ男をつれて来ると、広間に男を正座させた。

「藤紫と知っていれば、あんなことをいうんじゃないかった。犬のように地に這いつくばって、食べかけの玉子焼きや、魚の煮付けを食べるんだった」と、男は心の中で後悔した。

「残虐無残なおなごだそうだが、一体何を食わすつもりなんだろ」と不安は心の中で大きく広がってゆく。

しばらくして広間に、お女中を後ろに従えて、藤紫が姿を見せた。お女中の一人が、目の高さに盆をさし上げて、男の前へやって来

た。見ると盆の真中に朱ぬりの椀がおいであり、ホカホカと湯気が立っている。

「なんだ、牡丹餅でも食べさせてくれるのだわい」男はいまままでの取り越し苦労を忘れたように、ホッと安堵の息をついた。

「これ、男、この珍味はのう、この藤紫様がみずから作った、またと得られぬものぞ。よく心して味わうのじゃぞえ。さあ一つのことらず、全部食べるがよい」

藤紫のことばに、男はひよいと椀を手にとって中を見ておどろいた。つんと鼻をつく独特のにおい、それが何であるかは、一目瞭然だ。しかも、それを藤紫は、自分や、お女中の見ている前で食べるというのだ。

「まさかその方、食べられぬとは、いわぬであらうな」

じっと、上から藤紫に見下ろされ、男は慄えあがった。必死の思いで、そのつややかな茶褐色をしたしろ物を箸でつまみあげ、眼をつむって口中へほうり込んだ。

「お前たちとは食べものが違うから、味は格別であらうが。ホホ……」

のどにつまんで、目を白黒させている男を面白そうに藤紫は目を細めて眺めていた。「馳走ついでに、わらわの手製の、格別のお

酒をつけてやろうほどに、ゆるりと過ぐすがよいぞえ」

しばらく、座をはずした藤紫は、さらに、抹茶茶碗になみなみと満たされた手作りの酒を小女に持たせて、男の前においた。毒をくらわば皿まで……と男は観念したのか、あるいは死ぬ思いだったのか、男はぶるぶる震えながら、その茶碗を手にとった。

「どうじゃ。美味であろうがの。礼をいうかえ」

といわれ、男は

「誠に結構なもの、職人風情にはもったいなほどおいしいものでございました」

というなり、藤紫や、お女中の嘲笑を背に逃げるように城外へ走り去った。

二

豊後守が侍女の取り次ぎで、藤紫の居間におそろおそろ顔を出した。藤紫は火桶に手をかざし、三枚重ねの緋座ぶとんに端座していた。城内の異様な空気から、うすうす殿の敗北を察知していた藤紫は、豊後守の

「お部屋様、殿の軍勢が、景虎様の軍勢に敗れ、殿は馬回り役四、五人に守られ、からくも逃げのびられたそうでございます」

という報告を聞いても、顔色一つ変えなかった。

「采配は豊後、そちにまかせる。きっと殿を救い出してたも」

豊後守が部屋から下がると、藤紫の態度は急に変わった。そわそわした落ち着きのない態度で、侍女の松を呼んだ。

「逃げなくてはならない。早く、どこか景虎様の手のとどかないところまで、逃げなくてはならない」

藤紫は、自分が領民はもとより、城内の家臣からもうらまれていることをよく知っている。いままでは殿の庇護があった。しかし、その殿が敗れたとあっては、自分をにくんでいる家臣はじめ、景虎までが、自分に刃を向けて来るのは火を見るより明らかである。自分は牙をむき出しにした狂犬に食い殺されるヒナ鳥のような運命にあるのだ。そう考えると藤紫はブルブルと身ぶるいした。思いあたることは数え切れないくらいあるのだった。

去る日、家臣の一人が、藤紫の侍女の一人に手を出したことがあった。城内においての不義は勿論、侍女に手を出すことは禁じられていた。この家臣に対する藤紫の処置は常識では考えられないはずかしめと、凌辱で悶死

させたのである。

禁を犯した家臣を、広間に召し出した藤紫は、その家臣を全裸にした。大の字に寝かせた男の手足を、戸板にしっかりゆわえつけてしまった。堅い筋肉でおおわれた胸には、房々と胸毛が渦巻いて、それが半身を包むように流れて光っていた。

「さあ、これからそちの、一番好むことをしとらすぞえ」

男は、ウウ……と呻いたが、真っ赤なお腰で猿ぐつわをかまされているため言葉にならない。目配せを受けて、一人のやや年増だが、切れ長の瞳をもった侍女が男のそばへにじり寄り、労働をしたことのない、きれいな手が伸びた。

男はその手によって、武士として考えられない恥辱をひき出されたのであった。しかもその言語を絶する責苦は、休む間も与えられず、次々と続けられたのだった。十二、三人の侍女が代わる代わる同じ責めを、延々十時間余も続行した。男にとっては、それは死に勝る拷問であった。遂に男の皮膚は破れて鮮血がほとばしり、あぐくの果てに、おびただしい血を噴き出して悶絶した。

藤紫の乱行は、相手が女性であっても、い

ささかの情容赦はなかった。侍女の菊に対する仕打ちには、それを聞いた晴景も、眉をひそめた程だった。

菊は色好みの晴景が領内の新井郷の百姓の家から見つけて召しかかえた女だった。色はやや浅黒いが、すらりとしたかもしかのような脚やくびれた胴、はじけそうな胸の隆起、いつもなかなかに開いているような厚い唇、白痴的な黒目がちな瞳……どこを見ても男心をそそらずにはおかない。百姓ことば丸出しの菊を晴景は毎晩のように寵愛した。

晴景の寵を得るようになった菊に対し、藤紫は激しい嫉妬の炎を燃やし、折りあらばとその機会を狙っていた。しかし、十日も経つと、もう晴景は菊に飽きてしまい、闇から遠ざけた。晴景によって女になった菊は、生まれつきの淫蕩さからか男なしには生きられぬ女になっていた。あの男から、この男へとさそいの手をのばし、城内ではとかくの噂が絶えなかった。

「よし、それ程に牡が欲しくばとらそうぞ」

と藤紫は、菊を下役人に命じて馬場の一隅へ引き出した。そこには、四本の柱が立てられてあった。着物を全部はぎとられた菊は、手足をしっかりと四本の柱に麻縄で固定され

た。そこへ、下役人が発情して狂ったように暴れる牡馬を一頭引き出してきた。

「ギャーッ」

という魂消るような声が、菊の口から発せられるのを、藤紫は平然と見降ろしていた。すさまじい牡馬の猛り狂うさまを興味深げに見ていたが、菊の絶叫と共にこと切れるのを見届けるまで眼を外らすことがなかった。菊の死体は股裂き刑のような裂傷を受け、腹膜まで破られていたという報告に藤紫は、さも面白げに笑いこころげた。

三

呼ばれた松は、おずおずと藤紫の部屋へはいつて来た。

「松や、そなたはわらわのいうことを守れるかえ」

「ハイ」

「では、わらわの身のまわりのものと、殿にいただいた、かんざしや帯止めなど、金銀でできているものを一まとめにしてたも」

「ハイ、かしこまりました」

松は、かいがいしく働いた。女手では持ち運べない大きな風呂敷づつみが出来た。これをついで逃げるには、松だけの力では、と

ても無理だ。どうしても男手がいる。一体誰に頼めばよいだろうと、藤紫は考えた。いくさに敗けた今となつては、家臣の誰一人として、藤紫の命令に従うものはいないだろうと、いうことを、彼女はよく知っていた。

「松や、庭掃除の善助を呼んでおくれでないかえ」

善助は、府中（直江津市）の在にある谷浜の漁師のせがれであった。からだが大きく、草相撲では大関格だったが、生まれつき頭が弱かった。侍には無理だということで、庭掃除の下男にでもと、晴景が召しかかえものであった。善助は、ほかの家臣のいいつけには、あまりよい顔をして従おうとしなかったが、藤紫のいいつけだけは、どんな無理な命令にも喜んで従った。

いつか、例のいたずらっ気を出して、縁側に出た藤紫は

「善助、ここへ来て、わらわの足の裏をなめてみる気はないかえ」

といったところ、ほうきをほうり出して走りより、縁側からつき出した藤紫の足をペロペロと、犬のようになめたことがあった。

「ホラ、もつとなめて指の間の汚れをきれいにしておくれ」

という藤紫のからかいに、善助は真剣になつて忠実に従つた。

「あの男なら、私のいいなりになるだろう」藤紫はそう思ったのだった。

松につれられて、善助は、藤紫の部屋の入りにのっそり顔を出した。

「善助、そなたこの荷物をかついで、わらわの供をしやれ。逃げるのじゃ。よいな、松も一緒じゃ」

頭の弱い善助には、なんのために逃げるのかという理由など説明する必要がなかった。

「へい、かしこまりやした」

というこのうすのろの善助の面上に、かすかな喜悅の表情が走つたのを、藤紫は見のがさなかった。

「裏門から出て、山を越え、そなたの在所である谷浜まで逃げ、そこから舟で、能登まで逃げよう」

藤紫は、そう指示すると、先に立って部屋を出た。春日山には松の木が多い、時に潮鳴りのように松の梢をならして、北風が吹き過ぎていった。三人は一かたまりになって、裏門へ急いだ。裏門には、敗戦の報せのどさくさで、番人が一人もいなかった。三人は、裏門からただちに、山道への道をとった。しば

らく歩いたところだった。

「お部屋さまア」

後ろから大声で藤紫の名を呼んで、追っかけて来るものがある。藤紫がふりかえると、それは、ハアハアと犬のように息を切らしている豊後守であった。「しまった。見つかったか」藤紫は心の中で舌打ちした。「だが、追っ手は一人だけだ。しかも、昔は戦場で鳴らしたといつても、七十歳を過ぎた老人だ。なんとかなるだろう」藤紫は善助に

「豊後は悪いヤツじゃ。善助、そなたその荷物をおろして、豊後をとりおさえや」

「へい」

善助は、細い山道に、大手を広げて、豊後守の前に立ちふさがった。

「どけっ、下郎め」

豊後守の怒声に、善助は、無言で組みついて行つた。腰のものを抜くひまもなかった。

頭は弱くても、力は抜群である。老人の豊後守はたちまち、ねじ伏せられてしまった。

「早く、縛りあげるのじゃ」

善助は、着物をぬぎすて、禪一枚になると自分のへこ帯で後ろ手に縛り上げた。

「お部屋様、あなたは悪いおなごじゃ、民百姓を苦しめるだけ苦しめ、旗色が悪くなれば

逸早う逃げようとしなさる」

豊後守は藤紫の顔を下から見上げながら、苦し気な息をついて言った。

「その口も封じておやり、そうじゃ、そなたのそれをかましや」

さし示された善助は、うすよれた禪をすするととくと、たちまち、その禪で豊後守に猿ぐつわをかませた。

「さあ、豊後、最後の引出物じゃ。わらわの手でそなたに進ぜようのう」

藤紫はその美しい顔をゆがめてほくそ笑んだ。すらりとした雪のように白い脚が、まくれ、着物の裾からのぞいている。そして、豊後守の目の前で、さらに、その裾を上の方まで、ぐっとまくりあげた。豊後守は観念したのか、すっかりまぶたを閉じてしまった。

「善助、豊後のまぶたを開かせや」

藤紫の声に、善助は豊後守の後ろへ回り、親指と人指し指で、まぶたを上下につっぱるようにして開く。藤紫はその目の前で、あられもないポーズをとり始めた。

「こんどは、鼻を押えて、口を開けさせるのじゃ」

善助の動きと共に、豊後守の顔に銀線がほとばしった。豊後守は必死に顔をそむけよう

とするが、善助の太い腕にがっしりと頭をおさえこまれていたため、それもかなわない。呼吸もならぬ豊後守は顔を真っ赤にして、せき込んでいた。

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	三五〇円(送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円(送共)
半年分	6冊	二一〇〇円(送共)
一年分	12冊	四二〇〇円(送共)

郵便番号
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたらという御希望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時に、お手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下されるには大阪住吉局私書箱第四十一号出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお込みの上、何年何月号より何力月分と御指定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分二十円(切手可)の御負担を願います。

○本誌は十月号から定価三五〇円に値上げになりましたので、予約購読料は三月分三冊

「苦しいかえ、それでは、もそつとやさしくかわいがってとらそうかえ」

藤紫は豊後守をまる裸にすると、みずから手でいたぶり出した。老人の体に変化が現

一〇五〇円、半年分六冊二一〇〇円、一年分十二冊四二〇〇円になります。今後当分の間誌代の改訂はしない予定です。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代送料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何力月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細表を雑誌に添付致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に△本号にて前金切の判を捺印致しますから継続お申し込み願います。継続のお申し込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたしますから、数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

われ、のたうちをみせ始めた。

「ウツウツ……」と猿ぐつわの中で豊後守は呻くが、藤紫は冷然と見下ろしながらいたぶり続けていたが瞬間、懐剣を抜き「ヤッ」とばかりに横なぎに払った。

「ギューッ」という悲鳴が、猿ぐつわからもれ、血と共にふっ飛んだ小塊が認められた。

四

「さあ、とんだ邪魔者で時間をつぶしてしまったのう。急ぎや」

と藤紫は、平然として立ちあがった。しかし、善助は、目のあたりに見た残忍な出来ごと、すっかり昂奮しきっていた。

「ホホ……。善助、そなたの気持、わらわにはよう分っている。したが、ここでぐずぐずしては、また追っ手に捕まってしまう。そなたへの褒美は、落ちのびてからゆっくりと……。さ、はようしや」

善助は平伏しながら、何度も頷いていた。いつか時雨が上がり、松の葉を通して、晩秋にしてはあたたかい陽差しが洩れていた。三人は無駄にした時間をとり戻すべく山道を急いだ。小半時も黙々と歩いた。歩きなれない藤紫は足が痛くなり、時々立ち止まって休

んだ。

「もう少し登れば峠で、元気を出して歩いてくんなせえ」

善助はその度に元気づけた。

「殿様はどうしていらっしゃるだろうか」短いいいとしても、春日山城へ晴景の愛妾として迎えられてから三年余、やりたいことはなんでもした。しかし、本当に心の底から愛し、愛されるという人間的な恋愛は遂に経験し得なかった。というよりは、藤紫の性格からして、そんな恋愛を自ら避けていたのかも知れない。晴景との間にも精神的なものは何一つなかった。愛欲の末に晴景がきまって求める狂態。——それは、藤紫の太腿に首をはさみつけられ、信じられないような痴態をみせることだった。さらに、日によっては、豊満な双丘に口も鼻もふさがれて喜ぶといった狂気振り——。しかも、それを侍女に見させて、さらに藤紫も晴景も奇妙な陶酔度を高めた。そんな生活はもうもどってこない。私は豊後が言ったように、本当に悪いおなごかもしれない」と藤紫は心の中に思った。

「お部屋さま、海が見えますだ——」

二人より先に登っていた善助が立ち止まって、大声で呼んだ。そこは峠で、そこから見

下ろすと、荒れ狂う日本海の波打ち際や、あまり豊かでない漁村の家々が一目だった。

「さあ、少し休んでいくべ。これから下りだから早いぞな」

善助はどっかと、道端に腰を下ろした。

「ここまで、来れば追っ手も、もう来ないだろう。さっきはおあずけだったから、こんどはゆっくりただかせておくんなせえ」

善助は、下から上目づかいに藤紫を見て、舌なめずりをしている。

「この先どうなるかわからない。こんな下郎に、我が身を与えるのはもったいないが、やむを得ないだろう」藤紫は観念して、枯草に横になった。

「善助。まずは、足を舐めや」

善助は犬のように這いつくばって、嬉しそうに足指をなめ始めた。松はいつの間にか姿を消していた。藤紫は晴景の病的な弱々しさにくらべ、若い、汗くさい男のにおいを嗅いでいた。

「お部屋さま。のどが渴いてなんねえだ」

藤紫は、善助ののぞみを容れてやった。

丁度、岩清水に口をあてて飲むように善助はゴクゴクとのどをならした。

いつか、短い秋の日は、日本海の彼方に沈

みかけていた。

「夜になったら、漁船を盗み出して、海へ出よう」という計画の藤紫に命令され、善助はうなずいて、峠から下りはじめた。

松は自分の在所である名立の方へ行つたのであろう、それきり、二人の前には姿を現わさなかった。もはや藤紫の頼るのは、善助以外になくなった。

海岸まで一気に下った二人は、夕闇の中を歩き廻って、漁船を捜し始めた。うまい具合に一そうの漁船が、波打ち際に放置してあった。善助は、力まかせに、その漁船を海へ押し出した。

「早く乗っておくんなせえ」

藤紫が船に乗り込むと、善助は慣れた手つきで、かいをあやつってへさきを立てた。十一月の波は荒い。小さな小舟は、木の葉のようによれる。風がいやに冷いと思ったら、いつの間にか、小雪まじりの時雨にかわっていた。

小舟は、風に向かって、のろのろ進んでゆく。運を天にまかせて藤紫は、じっと冷い舟底に坐っていた。

—(終)—

S.C.R. (性問題相談室) 開設

担当……弓削性科学研究所長 医学博士 弓削達人先生

他人に打ちあけ難い悩みなどについて

編集部の長年の懸案であり、近時急速にその必要に迫られていました性問題相談室 (Sex Counselling Room 略称 S. C. R.) を開設致しました。

この欄は無料相談であり、結婚生活一般から夫婦問題、さらにホモ、フェチ、サド、マゾなど性的倒錯に関する悩みの打ちあけ、巾広いカウンセリングに応じます。また誌上公開をはばかれる方には、転送先を明記すれば仮名で解答して差支えないとの御好意あるお申出をいただいております。担当の医学博士、弓削達人先生については、公的な身分はさしひかえますが、某民間病院附属の性科学研究所々長であります。

○ 本誌の愛読者の方で、医学博士弓削達人先生に性問題に関しての解答をお求めの方は、御遠慮なくお便りをお寄せ下さい。

○ 個人の秘密については絶対御迷惑はお掛けいたしません故、御安心の上、何んなりとお尋ね下さい。

○ 誌上に掲載するものについてはすべて匿名とし、御希望によっては先生の御都合のつく限り、直接の解答も致して貰います。

○ 御相談についての診断及び回答についての費用は一切不要です。

○ 宛先は編集部気付、弓削達人先生として下さい。

御遠慮なく相談をお寄せ下さい

お問い合わせ 弓削達人

再び、杉並区のNさんへ。

(1) 前回の問いあわせに対するあなたの御返事を拝見しました。

(2) これによると、この問題はなかなか複雑なようです。私は最初、「あなたの相手の側に問題があるのではないか」と考えていましたが、実はあなたの側に心身ともに問題があるようです。

(3) 従って1カ月に1回、1カ月遅れの再質問と回答のやりとりでは、とても間に合いそうにありません。それで、あなたのお勤めさきを知らせて下さい。あなたと同じ性の差出し人の名で連絡します。

(4) 早く結論を求められるお気持はわかりますが、状況を正確に把握しなくては、正しい回答をさし上げることができません。文体そのほかのことからして、知性と教養もあり、性格的にも調和のとれた方だと思えます。それだけに手数と時間はかかって、正しい解決の道を見いだしたいと考えているわけです。

○ (一般読者の方には大へん申し訳ありませんが、学会出席と演題提出のため繁忙を極めていますので、今月号並に次号は回答欄を休ませて戴きますよう、お願い致します。)

った生活できたえた肌は、驚く程若く見えるのだった。

田代と森田は、ドアの隙間から、この美女二人をつぶさに観察し、胸をときめかせている。

「カモがネギを背負って来たとは、この事だが、こりゃ大変な大物が入荷したよ。こっちの手に負えるかな、え、親分」

田代は、さも楽しげに眼を細めて森田の肩をたたくのだ。

名門の令嬢であろうと、大家の令夫人であろうと、一旦、田代邸の門をくぐったからには、もう表へ出すわけにはいかぬ。一匹の雌猫として、いや、それ以下の下等動物としてこっちは扱うだけだと田代は北叟笑むのだが千原流家元の令嬢と医学博士夫人というこの二人の美女を落花微塵に打砕くのは、静子夫人や小夜子の場合より更に困難が予想されるのである。だが、それが楽しみといえば楽しみでもあった。容貌にしても肉体にしても、珠江夫人と静子夫人とが異質のものを持っているのが、また面白い。

気品と優雅さに満たされているのは両夫人の共通点であったが、珠江夫人は、色白で細身の艶麗な体つき、容貌もどちらかといえ

細面の硬質陶器のような冷ややかさを含んだ繊細な美しさであった。それに対して、静子夫人は絹餅のようにふくらした美しい瓜実顔。肉体的に見ても、静子夫人の場合は、胸も腰も、見事な曲線を持つ二肢もムチムチ成熟して、ねっとりした官能味を盛り上げている。静子夫人がバラの華麗さを持つ美女とするなれば、珠江夫人は牡丹の艶麗さを持つ蘭たけた美女であった。

美沙江もまた肌理の細かい清らかに澄んだ美女で、小夜子が洋装の似合う近代的美人とするなれば、美沙江は和装がぴったりの古風な美しさを持っている。

奥様風にしっとり落ちついた珠江夫人と令嬢風な初々しさを持つ美沙江とをドアの隙間から飽かずのぞき見していた田代は、森田の耳元に口を寄せて、これからの段どりを説明する。森田はうなずいて、二階へ上って行った。田代は、ネクタイの乱れを直して、ドアを開けた。

「や、どうも長らくお待たせ致しました」

静子夫人の容態を見に行っておりましたので、と田代は説明しながら、どっかりと椅子に坐りこみ、煙草を口にするのである。

「あの、お差し支えなければ、すぐに静子奥

様にお逢い致したいのですが——」

珠江夫人は、美しい眉をやや神経質に動かして、三十分以上も自分達をここへ待たせ放しにした田代の非礼をとがめるような口ぶりで云った。珠江夫人も、同じく千原流の後援者の一人である静子夫人とは、親しい間柄であったのだ。

「遠山家の奥様が行方不明になってからもう何カ月にもなります。それがどうしてこのお屋敷においになったのか、くわしい事情を奥様の口から直接お聞き致したいのです」

そう云う珠江夫人の端正な容貌を田代はしげしげと見つめながら、ゆっくりと煙草の煙を吐いて

「よほど、この屋敷の居心地が良かったのでしょうかね。もうここから外へ出るのは嫌だとおっしゃるんですよ。そこで、貴女方、お二人に御相談したいと思って、ここへおいで願ったわけですが——」

と、面白そうに云うのである。

「おっしゃる事がよくわかりませんわ。とにかく一眼、静子奥様に——」

先程から、無遠慮にジロジロ見つめてくる田代の濁った眼を不快に思っ、うつむき加減に顔をそらせていた美沙江が口を開いた。

「ま、あわてる事はないじゃありませんか」

と、田代は美沙江の一抹の憂いを含んだ美しい瞳を見つめながら、

「さすがに生花家元のお嬢さんだけあって、全く清楚な美しさだ。和服がとくにお似合いのようですね」

と、話をそらせ、珠江夫人と美沙江に一層不快な感じを抱かせるのだった。

そこへ、ノックの音。

どうぞ、と田代は振り返りもせず^{はす}に声をかける。入って来たのは、裏葉色の単帯を斜^{はす}かに締めた千代と、豪華なアフタヌーンを着た大塚順子であった。

大塚順子をふと見た千原美沙江は、一瞬、顔色を変える。前衛華道という事を売りもの^{はす}にしている湖月流は、折にふれ、怪文書などを発して千原流華道を誹謗しつつづけている。その理由は、隆盛の一路をたどる千原流に対し、衰退の兆しが生じた湖月流のひがみ以外の何ものでもなかった。

成金じみた大きな指環のついた手で、口を覆い、指環ぐるみ、ほほは、と笑って、四十二、三にもなりながら、娘のような、しなを作った大塚順子は、

「お嬢様、妙な所で、お眼にかかりましたわ

ねえ」

そして、順子は、隣の千代を「この方は、私が娘時代から親しくして戴いております千代さん。お嬢様をここへお連れするため、色々とお骨折りを願ったのよ」と、紹介するのだった。

珠江夫人も、硬化した表情になって、柳眉を上げ、順子と千代を交互に見る。

「一体、貴女方は、家元のお嬢さんに何の御用がおりなのです」

すると、千代は珠江夫人の方へ一歩進み出て、

「奥様、私をお見忘れですか」

と、如何にも意地悪そうに笑って見せるのだった。

「あつ、貴女は」

珠江夫人の顔色が変わった。

「千、千代さんじゃありませんか」

珠江夫人は遠山家に何度も出入りしていたから、女中の千代とは面識があった。静子夫人が失踪後、それが原因で気がおかしくなった遠山隆義は、この女中の云うがままとなり莫大な財産まで千代の手で管理されているという噂も珠江夫人は知っていた。

その千代が、静子夫人が静養しているとい

うこの田代の屋敷にどうしているのか、暗い恐ろしい疑惑が珠江夫人の脳裡をかすめた。

「最初は、家元のお嬢さん一人を誘拐する計画だったのですよ。それが、医学博士夫人のおまけまでつくとは思わなかったわ。いえ、ひょっとすると、珠江夫人は、家元のお嬢様より価値のある獲物かも知れないわね」

千代がそういった途端、珠江夫人と美沙江の表情からは血の気が失せて、二人は、恐怖のあまり、手を握り合う。

「ど、どういう意味なんです。はっきりおっしゃって下さい。一体、何が目的でお嬢さんを――」

珠江夫人は、今にも失神しそうになっている美沙江を支えるようにしながら、田代に向かって必死な眼を向けるのだった。

にわかに殺気をはらんだ無気味な空気が周囲にたちこめてくる。

芝生に面したガラス障子がゆっくりと開いて、吉沢と井上、そして鬼源の三人がヌーと顔を見せたのである。

恐怖の戦慄が珠江夫人と美沙江の身内を走り、二人は、その場に棒立ちになる。

森田が顔を見せると田代は、煙草を灰皿に押しこんで、やっと椅子から腰を上げた。

「それじゃ親分、このお嬢様と奥様を別室へ御案内を。お二人も、由緒ある家柄の貴婦人だから、くれぐれも失礼のないように」

と云って腹を揺すって笑うのだった。

「さ、二人とも、俺について来るんだ」

吉沢が、恐怖の慄えと共に、ぴったり身体を寄せ合っている珠江夫人と美沙江の肩をうしろから突いてドスのきいた声を出した。

「待、待って下さい」

珠江夫人は美しい切長の瞳にキラリと憎悪の色を走らせ、反撥的に身をよじらせる。

「貴方達、お金が目的なら私が主人と連絡して、いくらでも都合致します。今日は、このお嬢様にとって、いえ、千原流にとって大切な日なのです。どうか、お嬢様だけは解放してあげて下さい。その間、私が人質となりますわ」

と、動揺する自分を押さえて珠江夫人は冷静な口調でそう云ったのだが、

「千原流の発表会をたたきつぶすのが、こっちの目的じゃないか。何をとぼけた事を云ってるんだ」

と、吉沢は冷酷に云い放ち、順子の方を見て笑うのだった。

えっ、と珠江夫人の顔がひきつると、順子

は、さもおかしそうに眼を細めて

「身代金など頂戴するためにお嬢様を誘拐したんじゃありませんわ。やがて家元を継ぐお嬢様を、この世から隔離するのが私の最初からの目的。ホホホ、湖月流発展のためには、こうした非常手段も己むを得ない事だと思いますの」

それを聞いた途端、美沙江は、全身から力が抜け、フラフラとよろめいて、その場に身体をくずして行つた。気を失つたのである。

「あ、お嬢様」

珠江夫人は、狼狽して、倒れた美沙江を揺さぶり始めた。

「これだけで気を失うようなお姫様じゃ、これから先の事が思いやられますね、社長」

森田が苦笑して田代の顔を見る。

「仕方がないな。一まず、この奥様の方から運んで行けよ、吉沢」

田代に命令された吉沢は、うなずいて、失神した美沙江に取りすがっておろおろしている珠江夫人の両肩をうしろからつかんだ。

「さ、行こうぜ」

「な、何をなさるんですっ、離して下さい」

珠江夫人は昂^{たか}ぶった声で叫ぶと、さっと吉沢の手を振りほどいて、いきなり、ピシヤリ

と吉沢の頬を平手打したのだ。

「あいてっ。くそ」

吉沢は、打たれた頬に手をやって眼をつり上げた。田代と森田は、それを見て、ゲラゲラ笑い出す。

「この人妻もなかなか手に負えないぞ。大分気性が強そうだ」

珠江夫人は、その冷たい象牙色の頬を憤怒の興奮で火のように上気させながら、きつとばかりに吉沢を睨んでいるのだ。

「無礼者、下がりや、といった顔つきだな。

やれやれ、これは静子夫人のようなわけにはいかないかも知れないぞ」

と、田代や森田は盛んに面白がっている。「この阿女。下手に出てりゃあ、つけ上りやがって」

吉沢は、おどかすつもりでジャンパーのポケットから匕口を引き抜くのである。

珠江夫人は、ハッとして、ぴったり背を壁に押しつけ、必死な眼を吉沢に注いでいる。

「おいおい、相手は医学博士夫人だぞ。そう乱暴に扱うんじゃない」

と、田代は吉沢をたしなめて、珠江夫人に眼を向けると、

「こっちは、今日の千原流生花発表会さえ妨

害すれば、目的は達せられるわけです。下手に騒ぎ立てて怪我でもすりゃ損じゃありませんか。今日一日、おとなしくして下されば、奥様もお嬢様も、明日は私が責任を持ってお宅まで送りとどけますよ」

屈辱の色が深刻に珠江夫人の顔にひろがっていく。

「ね、今日一日の辛抱です。お二人の身に危害を加えるような事は絶対致しませんよ」

つづいてそう云った田代の顔を、珠江夫人は、さも口惜しげに唇を噛みしめて見つめていたが、

「わかりました。お嬢様に絶対に危害を加えないと約束して下さるなら、その屈辱に耐えます」

今にも大粒の涙を落としそうな哀しげな顔をそよがせて、珠江夫人はうなずいて見せるのだった。

一旦、この男達のいうなりにならないと、どのような恐ろしい手段を彼等とはとるかも知れず、家元の令嬢を危急から守るためからもこの際、彼等の網にかかった方が無難だと珠江夫人は、とっさに判断したのである。

ソファの上へ身を伏せていた美沙江が、かすかに身動きを見せた。

「おや、お嬢さん、正氣づいたらしいぜ」
吉沢がニヤリと笑った。

珠江夫人はすぐに美沙江の方へかけ寄ると「しっかりなさって下さい、お嬢様」と、ぼんやり眼を開いた美沙江を抱きしめるのだ。

ようやく正氣を取戻した美沙江は、ひしと珠江夫人の手を握りしめる。

「お嬢様。私、私、一体、どうすればいいのです。ね、お嬢様」

「今日一日、我慢なさって下さいね。いいですわね、お嬢様」

珠江夫人は、慄える美沙江の手を握りつつ必死な願いをこめたように云うのだった。

森田と吉沢が田代の眼くばせを受けて、廊下に束ねてあった麻縄を無難作に肩にかついで戻って来る。

「そう、お二人とも、おとなしく両手をうしろへ回して」

再び、恐怖と嫌悪の戦慄が、美沙江と珠江夫人の身内を走る。

「な、なにをなさろうというのですっ」
いきなり吉沢に手をとられた珠江夫人は、

眼の前に突き出された無気味な麻縄を見て、おびえたようにいった。

「貴女達お二人は、今日一日は私達の捕虜。一応、逃亡を防ぐ意味で自由は束縛させて頂きますよ」

「お嬢様も私も、取乱すような事は致しません。縄をかけるなんて事はやめて下さい」

昂ぶった声音を出して、珠江夫人は激しい抵抗を示すのだったが、

「よっ、云われた通りにしねえと、その美しい顔をこいつでズタズタにするぜ」

と、今度は井上がヒ口をひき抜いて、絨氈の上から床を通して、ブスリと突き立てた。

珠江夫人と美沙江は、ぞっとしたように再び身を寄せ、慄えるのだった。

田代は、そんな二人の美女を楽しそうに眺めて

「こういう風にうちの若い衆は皆んな氣性が荒いので困るんですよ。逃亡を防ぐために、素っ裸に剃ぐという方法もありますが、私はそんな手荒な真似はしたくない」

田代は、言葉で強迫を始めている。

「お嬢様、夢でも見てるつもりで、今日一日我慢遊ばすのよ。いいですわね」

そう美沙江に声をかけた珠江夫人は、遂に屈辱の口惜し涙を流しつつ、吉沢に両手をうしろへねじ曲げられていく。

美沙江も、わなわな慄える白い頬に幾筋もの涙を流しつつ、森田に両手をねじ曲げられていくのだ。

床の上へ身体を縮めるようにして、豪奢な和服の上からひしひしと縄がけされている二人の美女を、千代と順子は、してやったりとばかり含み笑ひして眺めている。

田代は、順子の傍に近づいて、ニヤニヤしながら小声で云った。

「女ってのは、最初からおどかしちゃ駄目。僕のように上手に騙してかからなきゃいけませんよ。明日になりゃ、無罪放免されるといふ風に一応、希望をつながせておくんです。ハハハ、これでこの二人の美女は、もう二度と娑婆へは、可哀そうだが戻れないってわけですね」

田代がそういうと、順子は、とってつけたような奇妙なしなをつくって、田代の肩をたたき、

「本当に社長さんったら悪い方ねえ」と、笑って見せるのだ。

美沙江は揚げ葉蝶に結ばれた帯の上へ両手をねじ曲げられ、森田に縄がけされているので、その手首の激痛に美しい顔を曇らせている。

「こんな御大層な帯を結んでいるから手首が痛いんだよ。何なら、この帯を解いて縛ってやろうか」

と森田が云うと、美沙江は、嫌々と哀しげに首を振って見せるのだった。

「いい匂いだね。こりゃ、たまんねえや」

森田はようやく美沙江を後手に縛り上げると、美沙江の襟元から首筋、耳元に至るまで鼻を近づけ、その甘い香料の匂いをうっとり嗅いでいる。

「それにこのお嬢様は、今どき珍しいロングヘアだ。俺は、髪の長い娘を見ると、ぞくぞくしちゃうんだよ」

美沙江は、恐らく乳房あたりまで垂れるのではないかと思われるような長髪をアップスタイルに高くまとめ艶々しくセットし、珊瑚の平打ちを低めにさした若々しい髪型を作っていた。

珠江夫人の方は、すっきりなでつけた髪の流れの延長を大きな髷に作って、それに美しい銀の飾り櫛をつけるという立人っぽい髪型で、これも顔を横に伏せているため、くっきり浮かび出た艶々しいうなじのあたりを、吉沢にクンクン鼻を押しつけられながら、後見結びの帯の上に両手をねじ曲げられている。

「さ、立つんだ」

やがて、縄尻を取られた二人の美女は、よろよろとその場へ立上った。

「お嬢様のために、冷暖房付きの牢屋を新築してありますのよ。じゃ、奥様も御一緒に、一まずそこで御休憩になって下さいましね」

千代もそう云って、がっくり首を前に落としたまま、吉沢と森田に引き立てられて行く二人の美女を心地良さそうに見るのだった。「こううまく、事が運ぶとは思わなかったわ。ほんとに貴方達のおかげよ」

二人の美女が応接間から姿を消すと、大塚順子は、ほっとしたようにソファに坐り、煙草をケースから取出しながら、田代と千代に向かつて云った。

「ま、千原美沙江がこっちの手に落ちたとなりゃあ、もう千原流生花は崩潰したも同然ですよ。湖月流が息を吹き出す機会ですね」

田代は、順子の煙草にライターの火をつけてやってから、ぼんやりとそこに突っ立っている鬼源を面白そうに見た。

「何をぼんやりしているんだよ。鬼源」

鬼源は、ふっと我に返ったように田代の方を見て、急にニタニタと黄色い歯を出して笑いながら云うのだ。

「あんな別嬪を、また俺が調教出来るのかと思うと、妙に体が燃えてきましてね。ほんとにいいんですか。あの二人を、この種の女に仕込みあげたって」

「今更、あとへ引くわけにはいかないよ」

と、田代は棚の上のウイスキー瓶を取り出して云った。

「最初は殺し屋を使って、あの令嬢をこの世から消してしまふ計画だったんだ。だが、あれだけの美人をむざむざ殺してしまうのは、何としても惜しいじゃないか」

「そりゃそうですよ、社長」

「だから、俺が大塚女史に相談してこっちへもらい下げたってわけだよ。煮て喰おうが焼いて喰おうが、こっちの自由さ。商品として通用する体に早く仕上げて欲しいものだね」

何しろ、生花に使う花より重いものは持った事はないという名門の令嬢だけにこれを調教するのは大変な苦勞があるだろうな、と田代が笑うと、鬼源は、

「いや、それだけにまたこっちにとっては、やり甲斐のある仕事ですよ」

と、楽しそうに受け答えるのだった。

「今夜は、新しい獲物が入荷したお祝いをやらなきゃあね」

と、千代が珠江夫人と美沙江を引っ張り出して酒宴を張る事を提案する。

「それはもうちゃんと予定してありますよ。」

今夜、早速、皆んなの前で、あの美女二人に御開張させるつもりなんだ」

と、田代はうなずいて、

「だが、あの気性の強そうな珠江夫人と初心で世間知らずの美沙江嬢を素っ裸にするのはまた大変な手間がかかる事だろうな」

と、しかし、満更でもない顔つきで顎の下をさすのだった。

千代は、ふと何かを思い出したように顔を上げた。

「そうそう、社長。今、私の部屋で、静子夫人が岩崎親分や津村さん達のお酒の肴になっているのよ。一寸、ごらんになってみない」

千代は、静子夫人に、千原流家元の令嬢が親しい友人の珠江夫人と一緒にこの屋敷の捕われ人になった事を告げてやりたくて、うずうずしているのだ。それを聞かされた時の静子夫人の狼狽ぶりを想像すると、千代の胸は高鳴るのである。

汚辱に泣く花

乳色に輝く見るからに官能味を盛り上げた優美な二肢は大きく割られて相変わらず垂直に吊り上げられている。パイプレーターなどによる淫靡な攻撃を一旦、中止した春太郎と夏次郎は、次の責めについて、ヒソヒソ相談し始めているのだ。

量感のある豊満な静子夫人の双臀は、高い枕の上にでんと据えつけられ、もはや、逃げも隠れもならず、その羞恥の……をあからさまに好奇な見物人達の眼に晒している。

美しい富士額にべっとり脂汗を滲ませている静子夫人は、上気した頬をシーツの上へ横に伏せ、固く眼を閉ざしたまま、かすかに息づいているのだ。

二人のシスターボーイの落花無残な攻撃を息を殺して凝視していた見物人達もその小休止にほっと溜息をつき、夫人の濡れた肌を酒の肴にして盃のやりとりを始めるのだった。

男達の卑猥な野次や女達の淫らな哄笑なども、今はもう夫人の麻痺し切った感覚を素通りするばかりだ。

川田が這うようにして、夫人の顔の傍へ近づいた。横に伏せている夫人の顔に手をかけて自分の方へ向けさせた川田は、

「お客人達はかなり御満悦されているようだ

が、もっと、客を意識して大胆に振舞ってみるんだな。甘ったるい声を出して、もっと、ああして欲しい、こうして欲しいとねだってみたり、自分がどんなに悦んでいるか、はつきり口に出してみたり——」

川田は、ニヤニヤしながら夫人の熱い耳たぶに口を寄せて、さも楽しげに、あれこれ夫人に指示しているのだった。

「ね、川田さん」

静子夫人は、ぼんやりと眼を開いて、情感を湛えた濡れた瞳を川田に向けた。

「流腸をなさるのなら早くなさって。もうこれ以上、騷りものにされると、静子、気が狂うかも知れないわ」

甘えるような声音で、ひっそりと云う。

「馬鹿云うねえ。千原美沙江を救うためならどんな羞しめを受けたってかまわねえと云ったのは奥さんだぜ」

静子夫人は痛い所を突かれたように眉を寄せて眼を閉じた。

「どうでい。俺の云った通り、振舞って見せるんだな」

静子夫人は、切なげに眼を閉じ合わせたまま小さくうなずいて見せる。

「そのかわり、家元のお嬢さんだけは。後生

ですわ、川田さん」

「ああ、わかったよ」

春太郎と夏次郎が何か相談がまとまったらしく再び配置についた。

春太郎は、咳払いして一座を見廻すと、まともや一席、口上をやり始めたのである。

「これより、酒流しというお遊びを御覧に入れますが、これは、ぬる燗をした銚子の酒を……へわずかずつ飲ませていく。やがて満腹となり、溢れ出た酒は滝川のように下方へ流れ、小さな……へ吸収されていくという他愛のないお遊びですが、これは一種の女体拷問方法なのであります。この遊びを始める前にこの美しい……を徹底的に責めて、あと一歩というギリギリの所まで追いつめておく。そこで、責めの矛先を引揚げられた女の口惜しさ、腹立しさ、そこへ燗酒を注ぎこまれ、ジワジワ、したたり流れる感触を味あわされる女の辛さは、正に気も狂わんばかりの壮絶なもの——」

そんな事を得々としてしゃべりつづけていた春太郎は、傍に並んでいる責具の中から皮袋に入っていた大小二つの棒状の責具を取出した。全体に干瓢のようなものが巻きつけてある。

これは皆様よく御存知の九州名産の何々で出来たもの、と春太郎は唄うように云って、それを見物人に示し、次にそれを静子夫人の鼻先に近づけていく。

「今度はね、奥様、さっきよりもっと素敵に気分浸らせてあげるわ。今度のお道具は特製のよ」

それで、ふっくらした頬をくすぐられた静子夫人は、長い睫を気弱にしばたかせて、ちらと視線を走らせたが、すぐにとろりと潤んだ瞳を夢見るように天井の方へ向けて「静子、今より大きな声を上げて泣き出すかも知れないけど、笑わないで」

「フフフ、誰が笑うもんですか。じゃ、始めますわね」

と云いながら、春太郎の両手はもう夫人の二つの豊かな乳房と薄紅色の乳頭をゆるやかに……始めていた。

二人のシスターボーイの攻撃は、まるでリズムを合わせ合ったように巧みで正確であった。女の泣き所を一切熟知しているような……動きはやがて次第に下半身に移向し始めたが、わざとその部分をさけて腿の付根のあたりを隠密に……してから、切れ切れに喘ぎ始めた夫人の熱っぽい吐息を心地よく聞きつ

つ、

「さ、奥様。お客様方にはっきり教えて差し上げるのよ。羞しそうな顔をしているこれは一体何なの？ さ、大きな声でおっしゃって」

春太郎に指で突かれた静子夫人は、燃えるように美しい顔を赤く染めて、左右に首を振った。

「知、知らないわ。知りません」

「そんなにカマトトぶるなら、これにヤイトをすえるわよ」

見物人達は口を開けて、どっと笑った。

「——ひどいわ。どうしても、云わなきゃ駄目ですの」

「そう。云わなきゃ駄目」

そんな男と女のやりとりを見物人達はモソモソ官能を高ぶらせ、浮き立つような思いで見つめている。

「それはね、静子の、静子の、ああ嫌々。お願い、そんな羞しい事、云わせないで」

それも見物人達の欲望のうずきを刺戟する一種の演技かも知れないが、静子夫人は、もうすっかり全身を燃え上らせ、甘い繊細なすすり泣きを口から洩らせつつ、眉をひそめてなよなよと首を揺さぶっているのだった。

「じゃ、ここは？」

春太郎は、指を滑らせていった。

「ここなら、はっきり口に出して云えるでしょう、奥様。さ、おっしゃって」

「——嫌、嫌。お願い、そんな事、云わせないでっ」

高々と吊られている乳白色の優美な二肢をくねらせ、さも羞しげに双臀を揺さぶって見せる静子夫人を見物人達は魂を宙に浮かせたような表情で見つめている。

「フフフ、そんな事云えないといったって、奥様は、お客様の眼に嫌という程はっきり晒しているのよ」

春太郎と夏次郎は、客達の方を見て、クスクス笑い、

「それじゃ、奥様がはっきり云う気になるまで、こことここ、これから、たっぷりいじめてあげるわ」

指先の責めから始まって、やがて、二つの道具が使われる。その瞬間、「あっ」と絹を裂くような悲鳴が夫人の唇から洩れた。

「ひ、ひどいわ、ひどいわ、ああ——」

静子夫人は、上ずった声をはり上げ、真赤に上気した顔を左右へ激しく打振っている。

川田は、酒を吸いこみながら、片頬を歪めて、懊悩と狂乱の間をさまよっている静子夫

人の狂態を眺めていたが、ポンとうしろから肩を叩かれ、振向くと鬼源と千代であった。

「なかなか派手にやってるじゃないか」

と鬼源は笑って、ついさっき、千原美沙江と、その後援者である珠江夫人が、こっちの異にかかったと小声で教えるのだった。

「へえ、ほんとか」

川田は、眼を輝かせる。

「今夜、新しく入荷した二人の別嬪さんのためにパーティを開くそうさ。また、これからいろいろと忙しくなりそうさだぜ」

鬼源がそういうと、千代が、二人のシスターボーイに責められて、すさまじい狂態を演じている静子夫人の方を面白そうに見つめながら、

「そろそろ事実を静子に教えてやらうと思うんだけど、ホホホ、どんな顔をして驚くか楽しみだわ」

「そうだな。だが、今、教えてやっちゃあ、せっかく気分が高まってきた所だけに可哀そうさ。浣腸責めが終るまで、おあずけという事にしようぜ」

川田は笑いながら、そう云った。

心をそり立てる程に優美な線を描く二肢は、ますます激しく揺れ動いている。

それは、静子夫人にとって、始めて味わう辛い、口惜しい拷問であった。

夫人の身悶えがあらわになり、火のような涕泣を洩らせ始めて、あと一步でゴールという所まで漕ぎつかせると、春太郎は、一方の責めをわざと中断させ、夏次郎だけに攻撃させるのだった。そして、六七合目までゆっくりと落として行き、そこからまた春太郎の攻撃が続行される。

夫人の緊縛された上半身は、脂汗でテカテカ光っている。それを揺さぶり、のたうたせて、八合目から九合目と再び追い上げられて行き、満座の中で最奥の羞恥を晒け出す苦痛と屈辱をぐっと歯を喰いしばって耐えようとした時、突然、攻撃は中断されるのだった。

「——意、意地悪っ」

静子夫人は、さっと顔を横に伏せ、おどろに乱れた髪を憐れませて口惜し泣きを始める。

「フッフ、大分、頭にきたようね、奥様」

春太郎は朱美が運んで来た盆に乗った銚子を取上げて

「お待ち遠様。丁度、いいくらいにお燗が出来たようね」

すると、夏次郎が、お酒の滴で布団が汚れちゃ困るわ。といいながら、中央の枕の下に

ビニールを敷くのだった。

「さ、奥様、お酒を御馳走するわ。遠慮なさらず、あーんと大きくお口を開いて頂戴」

「あっ、な、なにをなさるの。嫌っ」

春太郎と夏次郎は、まるで何か化学実験でもするかのように銚子の酒をわずかずつ流しこんでいくのだった。

「あっ、あっ、そ、そんな——」

云いようなない戦慄めいた感触に夫人の高々と吊られている優美な二肢は削いだようにピンとはり、華奢で繊細な足の指先までが慄えるのだ。

悶絶寸前まで追いつめられた火のように燃えさかった肉体に、流しそそがれるぬるま酒の感触は何にたとえればいいだろう。

そして、溢れ出た甘美な酒は、ゆるやかにしたり流れて、その息の根も止まるような激烈な痺れに夫人は全身を牽ったように慄わっている。

銚子一本分の酒をゆっくりと注ぎこみ、貪るように見つめている見物人達を充分に悦ばせた二人のシスターボーイは、再び、先程までの責めに切りかえた。

「——お、お願いっ、止めないでっ。止めちゃ嫌っ」

意地悪く、春太郎の方が途中でまた引揚げようとする、汗みどろの夫人は狂乱したように首を振り、必死に哀願するのである。

「駄目よ、奥様。もっとゆったりした気分にならなきゃ」

春太郎は一息入れ、夏次郎だけが小さな責めを、笠にかかって続行する。

「——ああ、静子、気が、気が狂ってしまうわっ」

苦しげに、切なげに身を揉む静子夫人を凝視していた見物人は、ほう、と軽い驚きの声を出した。まさかとは思っていたが、口上通り、夏次郎の攻撃を受けて夫人は目に見えて変貌し始めている。

「まあ、あきれた。一寸、見てごらんさいよ、鬼源さん」

千代は、それに気づくと、口に手を当てて笑いこける。

「この分なら密輸運びの調教も大丈夫と思うな」

鬼源は、千代に注がれる酒を口をとがらして吸いこみながら、せせら笑った。

しかも、夫人は、貪欲で甘美な吸引力まで示し、見物人達の眼を楽しませているのだ。

「——ああ、ど、どうすれば、いいのっ」

やがて、その責めも中断され、再び、酒を含まされる夫人は、息も絶え絶えになりながら自棄になったようにうめくのだった。

しかし、悪魔のような執念深さを持つ春太郎と夏次郎は、まだ静子夫人を解放しようと思わない。

「どう、奥様。もう駄々をこねず、おっしゃって頂けるわね。ここそこ」

「——云います。云いますわ」

完全にシスターボーイの支配下におかれた静子夫人は、二人に指摘された部分を、ねっとりと情感を湛えた妖しいばかりに艶っぽい瞳を薄く開いたまま、ハスキーな声で教えるのだった。

「奥様って可愛いいわ。大好き」

二人のシスターボーイは、汚辱にまみれてシクシクすすり泣く静子夫人の頬や首筋に熱い口吻をしてから、

「じゃ、苦しみを解いてあげましょうね」

この世のものではないような陰密で酸鼻な同時責め——野卑な男女の好奇な視線の前で最奥の羞恥図を晒すという事に夫人はもう何のためらいも羞しさも感じない。

「最後まで、ね、最後までやめちゃ嫌っ」

眼がくらみ、背筋に冷たいものが走った。

夫人は、ほとんど呻き声さえ上げられず、忽ちにして苦痛は通り越したのだ。

「——」

はつきりと屈伏をむせび泣くような声音で示した静子夫人は、失神を必死に耐えるかのよう、ぐっと歯を喰いしばった。体中の血はカーと熱くなり次にどっと噴き上げてくる。

見物人達のどよめきや哄笑も、もう夫人の耳に聞こえて来ない。あるのは熱い解放の悦びと、遂に抵抗を諦めきれた自虐感だけかも知れなかった。

「随分と長い間、頑張り続けたな。奥さん」

川田は、身心ともに痺れ切り、唇を半開きにしている、夫人の赤らんだ頬をつつく。

「一度、自分をはっきり見せてやるぜ、そろ少し、顔を起こしてみな」

川田と千代は、夫人の頭の下へ手を差し入れて強引に夫人の顔を持ち上げるのだ。

夏次郎が大きな手鏡を双臀の下へ当てている。ふと、それに眼をやった静子夫人は、悲しげに眼を閉ざして顔をそらせた。

「しっかりと鏡の中を見るんだ」

川田に鋭い声で叱咤された静子夫人は、もうそれ以上さからわず、未だ妖しい夢の中をさ迷っているような朦朧とした視線を鏡に向

けるのだった。

「自分自身のこんな恰好を、こうもまともに見たのは始めてだろう。何か感想があったら云ってみな」

と川田が笑えば、夫人の首の下を押さえている千代もクスクス笑って

「これを見れば、自分は元、遠山家の令夫人なんていう気位は、けし飛んだ事と思うわ。それにしても、すごいじゃない。少しは恥を知らないさいよ」

元、遠山家の運転手と女中は、かつての女主人をそんな風に嘲笑して楽しんでいる。

「静子は、もう昔の静子じゃありません。ですから、お願い、もう過去の事は何もおっしゃらないで」

静子夫人は、みじめな自分の姿を鏡の中に見ながら大粒の涙をハラハラこぼし始めた。

「その心掛けはなかなか感心だ。じゃ、気分の変わらねえ内、浣腸もしてしまおうじゃねえか。いいな」

静子夫人が、涙を滲ませた長い睫を憐れませて小さくうなずいて見せたのに気を良くした川田と千代は、そっと夫人の首を元通りに倒し、津村の方に眼くばせる。

うなずいた津村義雄は、先程から、猿のよ

うに小さく身体を縮ませ、恐ろしい拷問を受けている夫人から必死に眼をそらせていた小夜子の縄尻をとった。

「さ、お嬢さん、愛する人に浣腸をしてあげるんだ。立ちな」

死んだようにぐったり首を落としていた小夜子は、ハッと狼狽して、激しく首を振り始めた。

「嫌っ、嫌ですっ」

「馬鹿野郎！」

いきなり、小夜子の調教を受持っている竹田と堀川が小夜子の髪の毛をひっぱった。

「俺達の云う事にゃ絶対服従するんだ。まだわからねえのか」

わっと小夜子は、その場に顔を埋めて泣き出した。

それをニヤニヤ見ていた川田は、静子夫人の縄に緊め上げられた乳房を指ではじき、

「奥さんの方からも、一つ説得してやったらどうだい。小夜子がぐずると、結局、奥さんが痛い目に合わなきゃならなくなる」

静子夫人は、名状の出来ない哀しげな顔をし、しばらく眼を閉ざしていたが、やがて、決意したようにねっとりした瞳を開くと、よよと泣き沈んでいる小夜子に対し、

「小夜子さん。この人達のおっしゃる事にさからっちゃいけないわ。貴女も私も奴隷なのよ。さ、こっちへいらっして」

「だって、だって、小夜子、出来ない、出来ないわ」

「——お願い、静子の頼みを聞いて。そうでなきゃ、静子、もう貴女が嫌いになるかも知れないわ」

小夜子は、一瞬、驚きと狼狽に満ちた顔でマットの上に固定されている静子夫人を見たが、自分を庇うため身を汚辱の底に沈ませようとしている夫人の心中を察して、激しく泣きじゃくりつつ、竹田と堀川に縄尻をひかれるまま立上るのだった。

苛責の残り火に、未だに吊られた優美な二肢と麻縄を巻きつかせた乳房を波打たせている静子夫人であったが、後手に縛られた全裸の小夜子がチンピラ二人に引き立てられて来ると、翳の深い憂愁の色を浮かべた瞳の中に繊細で気弱な微笑を見せ、

「小夜子さん、いいこと。もう、私達は人間じゃないのよ。辛さも羞しさも忘れて、この地獄で生きられるだけ生きなければならぬのよ。ね、わかって頂戴」

川田の命令で、小夜子はその場で二人のチ

ンピラから縄をとかれた。

自由を得た小夜子は、両手でひしと両乳房を押さえ、その場へ身をかがみこませようとしたが、堀川がすでに石ケン水を一杯吸った浣腸器を小夜子の手をひったくるようにして握らせる。

「さ、始めるんだ。こいつを一滴残さず奥様の体へ注ぎこみゃいいんだよ」

邪怪に竹田に背を押された小夜子は、ひきつったような顔で、マットの上の静子夫人にも一度、眼を向けるのだ。

静子夫人は、今はもうすっかり覚悟を決めたように美しい象牙色の頬を冷たく凍りつかせて、薄く眼を閉じ合わせている。

「先生、許してっ」

小夜子は、夫人の胸の上に顔を埋めて泣きじゃくった。

「さ、始めて、小夜子さん。これ以上、皆さんを怒らせちゃいけないわ」

深い哀しみを湛えた濡れた瞳をそっと開いた夫人は、優しい声音で諭すように小夜子に云うのだ。

川田は、千代と顔を見合わせてクスクス笑いながら、

「小夜子はされた事はあるが、人にしてやる

のはこれが始めてだ。まごつかねえように奥様の方で、ちゃんとリードしてやる事だな。

これは、いうなれば流腸ショーだ。そのつもりで二人ともしっかりやるんだぜ」

それを耳にした静子夫人は、再び、囁くような声音で小夜子に云った。

「それじゃ小夜子さん。静子の云う通りになさって頂戴。いいですわね」

小夜子は涙を振り切ったように顔を上げると、悲壮な決心をしたように枕の上に高々と乗せ上げられた双臀の方へ身体をずらして行った。

「始める前に、コールドをたっぷり塗ってほしいわ、小夜子さん」

クリームの瓶が春太郎の手から小夜子に手渡される。小夜子は残忍な気持で自分をけしかけるようにしながら、白魚のように白い優美な指先にたっぷりクリームを盛り上げた。

「こうするの？ ね、先生」

小夜子は、柔らかくすりこみつつ、おそろした声を出すのだ。

「嫌っ、もう先生なんて云わないで。ねえさんと呼ぶ約束だったでしょう」

静子夫人は、かつての日本舞踊の愛弟子であった小夜子の指先を感じつつ、次第に凄艶

な表情になっていく。

「——もう充分だわ。さ、始めて頂戴」

上ずった声でそう云った静子夫人は、美しい眉を寄せ、切なげに眼を閉じ合わせた。

慄える手で小夜子が流腸器を寄せると、静子夫人は、唇を血が出る程、かたく噛みしめて、さも羞しげに熱くなった頬を横へそらせるのだ。

「——駄、駄目よ、小夜子さん。もっと力を入れて、ねえ、小夜子さんったら——」

静子夫人は、慄えるばかりで力の入らぬ小夜子の仕事をじれったがり、鼻を鳴らして量感のある豊かな双臀を、さも口惜しげに左右へ揺さぶるのだった。

見物人達は、どっと哄笑する。

千代も和枝や葉子と肩をたたき合って笑いこけているのだ。

「ホホホ、如何が、奥様。日舞のお弟子さんだった小夜子嬢に流腸される御気分は？」

と、千代がからかえば、川田は小夜子に向かって、

「どうでい、踊りのお師匠様を流腸してあげる気分は。へへへ、そうもたつかず、しっかりやりな」

踊りの美しい師匠を踊りの美しい弟子が流

腸している——千代は、葉子に注がれた酒を

口に含みながら、ふと、小夜子が踊りの名取りになった時、その盛大な披露会の席で、保

名を踊った静子夫人の艶姿をぼんやり想い出すのであった。野辺の春草を素袍袴で踏み、

狂い狂い舞台へ現れた保名に扮した静子夫人の水のしたたる美しさ。会場の視線を一せいに受けて美しく静かに舞いつづけたあの静子

夫人は、今ここに、やくざやゴロツキの視線を一せいに受けて——そう思うと千代は、再

び胸を突き上げて来るような笑いに耐えかねて、懊悩の極にある夫人の顔の近くへ身をす

り寄せて行く。

「今ね、奥様。私、小夜子嬢の名取り披露会

の日の事を思い出しましたのよ。あれは、新橋の会場で、奥様は、たしか保名を踊られた

わね。素ばらしかったわ。観客が奥様の美しさに皆んな溜息をついていたみたい」

千代が、そんな事を楽しそうに云って聞か

せると、夫人は、脂汗の滲んだ美しい富士額

を苦しげに歪めて、唇を慄わせるのだ。

「——もう、もう以前の事はおっしゃらないで、後生です。こんな仕打ちを受けている静

子に、あ、あんまりです」

そう云って顔をそらすのと同時に夫人は、

シクシクと、さも悲しげにすすり泣きを始め
たが「ま、いいじゃないの。そこにおられる
和枝さんは、今、浄瑠璃を勉強されているの
よ。奥様十八番の保名を一寸語って頂くわ」
すると、和枝は、その場へ坐り直して、心
地良さそうに、しねしね顔を動かせるのだ。
へ岩せく水とわが胸にくだけて落つる涙には
かたしく袖の片思い——

静子夫人も小夜子も、ねじるように顔をそ
むけ合って、消え入るような、細いすすり泣

きを始めている。

「あら、ごめんなさい。お二人に昔の事を想
い出させてしまったようね。私は、何も悪気
で保名を語ってもらったのじゃないのよ」

千代は、そんな事を云ってクスクス笑い、
「さ、続けて頂戴。小夜子さん。奥様が排泄
なさるまで皆んな貴女の受持ちなのよ」

と、小夜子のスベスベした肩をたたくのだ
った。

小夜子は、そんな千代に対する憤怒を夫人

新発足 懸賞△告白、手記、体験▽原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	三千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここ
に新しく、「告皆、手記、体験」の原稿を
広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな
告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字
塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告
白をもって誌面を飾る考えであります。
一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表
したいという熱意のこもった原稿を求めま
す。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうま
さは求めませんから、実際に体験されたも
の、事実の裏付のあるものが大切だと思ひ
ます。従って必ず自作の未発表のものに限
ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲
載分としては、三十枚乃至五十枚が適当で
す。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さ
い。締切日は毎月十日。翌月号より発表。
一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送り
いたします。応募原稿は読者原稿と区別す
るため「告白懸賞」とお書き下さい。

へぶつけるかのように、ふと自棄になって、
形のよい唇を噛みしめ、再び、夫人に立向か
ったのである。

夫人は、大きく呻いて、艶やかで柔媚な、
うなじをはっきりと見せる。

「ああ、小、小夜子さん」

夫人は、苦痛とも快楽ともつかぬ表情を示
して、ブルブル双脛を慄わせた。

「おねえ様っ、許して」

小夜子は、激しく泣きながら更に力を入れ
て——

「許してほしいのは静子の方だわ。こんな、
こんな事を貴女にさせるなんて、ああ——」

「——おねえ様っ」

「——わ、わらわないで、わらっちゃ嫌。小
夜子さんっ」

静子夫人は、優雅な涕泣を洩らしながら、
ゆっくりと双脛をくねらせて、更に自分の方
から進んで行く。

粘着力のある深い吸引力は調教によって夫
人が身につけたものであるうけれど、そのま
るで軟体動物のような作用はハッと小夜子を
驚かせたのである。

「体験告白記」



被虐の陶醉者

小 高 純

○ 言うに言えぬ体験を公けに告白することの
勇気と、加えて作文に自信の無い事が、公表
の時機を自ら逸していた事に気付きました。

御誌「奇ク」に集う広域の学識者、全国同
好の方々のエッセイや体験記等、赤裸々な御
研究発表を、具さに拝読させて戴いている中
に、其の無気力な私の初心を覆し、どれ程力
づけて下さったことでありましょうか。この
機会を得さしめて下さった御誌に対し、先ず
は感謝申し上げます。

○ 小学校四年生の頃、留守番の時であった。

学校帰りに級友の一人、幸雄を自分の家へ誘
って降参ごっこをしたことがあった。彼は顔
立ちも性格も非常に女性的で、色も白く体も
スマートな秀才型であった。従って何時も遊
びからは仲間外れにされ、偶に相手にされる
時は意地悪ツ子の弱い者いじめの対象になる
時ぐらいであった。そんな時の、なよなよし
く女々しい彼を見ていて可哀想に思えると同
時に、何か彼に心を惹かれていた。

或時私は彼と家の中で相撲を取った時、私
がそれとなく負けたことがある。すると彼は

仰向けに転んだ私の胸の上にすぐさま馬乗り
に跨って、お尻でグイグイ圧しつけ私が「降
参」と言うまでは、二十分でも三十分でも降
りようとはしなかった。私が苦しめば苦しむ
程彼は上気し、これでもかこれでもかと口走
りながら面白がって居た。そうする事が彼に
とって日頃のウッポン晴らしの吐け口になっ
たのかも知れない。又、私は私で女の子みた
いな彼に馬乗りされることが楽しく思えたの
である。

もう一つ。やはり其の頃、レンゲ畠の中で
近所の子供等男女混合の騎馬戦遊びの折、引

き落とされて仰向けに転んだ私の上に女の子
三人が飛びかかり、其の中の一人敵の大將で
ある一番体の大きい女の子が私の首の上に馬
乗りにつけて敵の首級を取る真似をしたので
あったが、此の時ほど苦しく恥かしい時はな
かった。敵味方のヤンヤの囃し声にすっかり
興奮し恥ずかしさで熱くなった私は、ただ夢
中で彼女のお尻の下から脱け出そうと必死に
抵抗したのであるが、足の方にも二人の女の
子が乗り掛かって押えつけているのでどうす
ることも出来ず、完全にお尻の下敷きになっ
て征服されたことがある。

生まれて初めて而も数人の友の面前で女性
に馬乗りに組敷かれ非常に恥ずかしい思いを
したのであるが此の時、私は或種の快感と云
うか恍惚感と云うか、を強く感じてしまった
のである。

以来、常に其の時の情景と感じが私の脳裡
に強烈に灼き付いて忘れられず、もう一度そ
うされ度いと云う激しい願望に取り憑かれて
しまったのである。

○ 赤線が廃止になる少し前、私は地方の高校
を卒業して上京し目白の或るアパートの一室
を借りて、そこからサラリーマンの一步を踏

み出した。

数カ月が経ち朝晩は非常に心地よい季節と
なった。そして土曜日の夜——それは私にと
って生涯忘れ得ぬ記念日である——此の日の
為に長年の念願を果たすべくサラリーの中か
ら貯えた幾枚かの札をポケットに秘めて、新
宿の夜の街へくり出した。以前、二、三度街
の下見はしてあるので、あとはパートナーを
選ぶことだけであったが、そう易々と見つかる
かどうか。忘れられぬ願望が、叶えられる
か否かの不安と期待の交錯に高鳴る胸を鎮め
ながら、思いきって店へとび込んだ。

彼女は厚化粧こそしていたが、現在の歌手
大形久仁子を一と回り小さくしたようで、よ
く似て居たと思うが、私の好みのタイプであ
る。本当にこの女性のお尻に敷かれることが
出来たらどんなに幸せだろうか。しかし實際
に、そんな事をして呉れるだろうか。取引き
をし乍ら私はそんな事を思いめぐらし乍ら、
不安と期待のこももした気持で些か緊張気
味であった。勿論、斯様な処へ足を踏み入れ
たのは初めての事であった所為もあるであろ
う。

二階の部屋に通されて、飲めぬ盃を交し乍
ら雑談をしていたのであるが、頃を見計い、

突撃の心境で切出してみた。

「実はね、ボク、普通のことには余り興味が
無いんだ。その代りボクのことを苦しめて呉
れない？」

思いがけない言葉を聞かされた彼女は吃驚
りした表情であった。

「苦しめる？……ってどんなこととするの？」

「つまり、実はね、君の様な人に馬にされた
り、椅子にされたり、兎に角、女性のお尻に
敷かれてギューギューという目にあわされて
みたいんだ」

「……へえー、そんなことを？ でも、面白
そうじゃない。あんたがされる方だったら、
やってもいいわ」

希望こそしていたものの、予期せぬ嬉しい
答えが返ってきた。商売柄とは云え、こうも
あっさり承知して呉れるなんて、やっぱり来
てよかった。何でも当ってみるべきだ、など
と独り合点したのであるが、私の頭の中は其
の時にはもう、これから陶醉させられるであ
ろう様々な被虐の図が、次々とめまぐるしい
ほど巡り、胸は喜びで高鳴った。

○ 部屋は六畳の日本間、蒲団一組が部屋の中
央に敷かれていた。そして私は上半身裸、下

は女性用の白いタイツ。彼女の方は私が頼んだ通りのスリップ姿である。彼女に女王様役としてどの様に振舞って貰うかの粗筋を話して、あれこれ打合せた。

その彼女はもう、掛蒲団を四つに折り畳み腕組をし乍ら其の上にとっか腰を降ろしているのである。サジスティックなそんなポーズをとった豊満な彼女を見るなり、私は射すくめられた蛙の様に最早、芝居気など全く失せてしまった。

打ち合せにはなかったが、いきなり彼女の前に平伏した。

「どうぞ本当にドレイにして下さい」

興奮した気持でついそんな言葉が飛出してしまったが、事実もう其の時には彼女の豊満なヒップの下に顔を敷かれて窒息死させられても本望だ、という興奮しきった不思議な心境になってしまつて居たのである。

「分ったわよ。本気なのね？ そんなに苦しみたければいくらでも苦しめてやるわ。音を上げた承知しないよ。ほら、馬になれ」

四つ這いになった私の背中に、どしんと馬乗りに跨った彼女、

「さあいいか？ よしと言うまで歩くのよ。途中でつぶれたらひどいよッ」

女王然とした彼女の態度に、私は心地よい威圧感を感じた。彼女の体付から想像される以上に重く、その何とも言えぬ重量感に私は背骨をきしませ乍ら、畳の上をよたよたと這い回った。

しかし六畳の部屋を二回りもする頃は、ヒザ頭がひどく痛み、重い彼女を支えている手足はガクガクし額には汗が浸んで来た。三回はとても歩ける自信が無くなって、這いつくばってしまった。

「まあ、だらしない、男のくせに口程にもないじゃないか。ほらッ、もう一度やり直し。立ち上れッ」

蛙みたいに押し潰されて、ハアハア肩で荒い息をしている私の首筋に、ずっしり跨り直した彼女は体を揺すり始めた。其の重苦しさ手足をバタつかせていると、今度は私の頭髪を掴んで頭を抑えつけられてしまったから堪まらない。窒息しそうである。「む……う……」声にならない声で呻き暴れる私の髪を引き上げ

「うるさいね、外に聞こえるじゃないか」

と言ひざま腰を浮かして髪を引張って私を仰向けにした。十の字形に寝転んだ私の二の腕をヒザで抑えつけ乍ら、今度は胸の上にず

っしりと馬乗りに跨り、お前はこんな目に遭わされて悦ぶ哀れな男ね、と言わんばかりの笑みを含んで見下ろして居た。

「お願いです。もっと苦しめて下さい」

「うるさいね、お前は。ガツガツ言うんじゃないよ。いま締め殺してやるから」

俄然、彼女は、嗜虐性に火がついた様に豹変した。バシッバシッと私の頬にビンタの雨を降らせたのだ。余りにも咄嗟の、彼女の変わり様に驚きと恐怖すら感じ乍ら、も少し手加減をして貰おうと思つたのだが、狂った様に連打を続けるので、どうすることも出来なかった。しまいには、お臀を首の上にまでずり上げて、頸にまでのし掛かって責めつけて来た。

「少しは思い知ったか？ この青二才野郎、くたばってしまえ」

力みの籠った彼女の膝はぐいぐいと締め上げてくる。荒まじい重圧に喉首を責め上げられ、殆ど息も絶え絶えの私は、其の地獄責めの中から、辛うじて「く……く……く……ゆ……許して……下さい」と、微かに哀願した。

その芝居を通り越して切迫した私の状態を察知したらしい彼女は、我に返った如くに、すぐさま私を跨いだまま立上った。その時の

私は彼女を見上げる程の力も無く、目を開くことすら煩わしかった。

両腕は殆ど無感覚なぐらいに痺れ顔は火の様に火照り熱かった。ただ貪る様に息をしていただけである。

後で考えたのであるが、どうして此の時、一時的にせよ、狂気の如く猛り狂った彼女なのであろうか。彼女に温存していた嗜虐性の素質が突然異常興奮を起こさせたものであろうか？ それとも、これまでの彼女の人生経験の中に、男性に対して、何等かの復讐執念を抱いていたものが、興奮の余り暴発してしまったのだらうか？ などなど、様々な憶測を試みたが、何れも所詮は想像の域を出ない。

何れにしても、その時の彼女の髪を乱した形相は、すさまじかったものである。同時に彼女の吐いた荒々しい暴言は、男も顔負けの鋭さで、私は舌を巻いたものである。というより内心は、Mである私にとっては快い響きとなつて今でも耳朶に残つて居る、と言った方が正直かも知れない。（大分、横道にそれてしまったが）

さて、私を跨いだまま立上つて、私の様子を見下ろしていた彼女は目を明けた私を見て

安心したのか

「おどかさんじゃないよ、びっくりするじゃないか。これ位じゃ、まだ許せないからね、いじめついでに、もっとやってやる」

彼女は、部屋の隅の三面鏡の前から背凭れの無い椅子を持つてくると、私を見下ろし乍ら胸を踏みつけ

「いつまで寝てんのよ？ ほら、寝るんなら此の上に寝な、椅子にしてやるから」

座面の長い方へ、言われる通り仰向けに寝てみたが、どうも落ちつかず具合が悪い。背骨の途中までしか椅子にのらないからだ。それでも脚を開いて投げ出した恰好で、どうか寄りかかることが出来たが、モジモジ具合を取っていると

「何をモゾモゾやってんのよ」と言いざま私の胸の上に腰掛けた。二度三度、お尻を動かしていた彼女は

「やっぱり腰掛けたんじゃ、どうも坐り具合が悪いわ」

そう云つて、スリッパの裾をたくし上げ大きく跨いで胸の上に立ちはだかった。

「いい感じね。男を足の下に見降ろすなんてジーンときちゃうわ」

と、この時を、暫し楽しむかの様に、真魚

板に載せられた鯉同然の、観念した哀れな私を見下ろしていた。

突然、掛声もろ共、弾ちきれんばかりの大きなヒップが、私の胸の上へ落ちてきた。

「いい気分。このまま走れば馬になるわね」

独り言の様に、満足そうに、そう言い乍ら足を浮かせ、全体重をお臀にかけた。其の苦しいことは、磐石に押し拉がれている様である。今にも胸骨がポキポキと音を立てて、折れてしまひそうであった。次第に彼女のお尻がずれて、再び先刻のように、顎の上にのしかかってきた。私の吐息が彼女の体臭とミックスされて、はね返ってくる。

「く、苦しい。許して、許して下さい」

余りの臀圧に、私は先刻の二の舞とならぬ内、悲鳴を上げてしまったのである。

「うるさいな、切角、調子づいてんのに」

さあーとウソの様に、私の喉首から重圧が去つたが、次の瞬間、彼女は後向きになつて私の顔の上を跨いで居た。スリッパをウエストのあたりまでたくし上げ、パンティが丸出しになっていた。

「お前はうるさいから、何も言えない様に、ヒップ責めにしてやるから、覚悟しなッ」

実際には、こんなにも巨きかったのだらう

かと思う程、豊かなヒップであった。今にも弾じけ切れてしまいそうな薄いパンティが、その巨大なお尻をやっと包んでいた。その豊満なお尻はジワジワと眼前に迫り、次第に視界を狭めて来た。今や絶対絶命、巨大なお臀は私の顔を真上から押し潰し、尚も覆い被さってくる。私の後頭部は、椅子のクッションの中に沈み、私の目、鼻、口は完全に彼女のお臀に制圧されてしまった。

声も出ず、呼吸も出来ず、暗闇の中で重圧に押し拉がれているのである。その重圧は、此の世の物とも思えぬ程の重量であり、拷問地獄（否、私にとっては天国であるが）では無かつたろうか。嗚呼、このまま、私の顔全体が彼女のお臀の下に煎餅の様に敷き潰されて、死んでしまってもいい……。

ぐいぐいと男の顔を敷き潰している事による異様な征服感を歎び乍ら、微笑して居るであらう彼女の顔を想起し乍ら、気の遠くなる中で私は願望の実現にウットリしていたのである。

○
気が付いた時は、彼女は先刻の椅子に腰を掛けてタバコを吸っていた。私は蒲団の上に寝かされていたのである。あのヒップ責めに

されて、体力の殆どを失い、半ば失神してしまつたらしい。しかし彼女の方は、まだ虐め足りないといった様子だった。

「もう一度虐めさせて貰うわね？ わたしには、まだしてみたいことがあるんだから。今度はもう殺さないから」

私を気絶させることを「殺す」と云っている処をみると、彼女も大分興奮している様に見える。

「今度は座ぶとんになって頂戴。お化粧するんだからね。その代りご褒美あげるから」

私には、ご褒美というのが、何であるかピンと来なかった。彼女は三面鏡の脚台を外すと、鏡だけを持って来た。

「ほら、手が邪魔、両手を横に伸してッ」

命ぜられるままに、またまた十字形に仰向いた私の腹の上に、鏡を置いた。

「女王様は冷え症なんだから、お前の顔でお臀を温ためて頂戴」

スリッパをたくし上げ、後向きで私の胸の上を跨いだ彼女を見上げ、また気絶させられると思った。又しても折れてしまいそうな肩の骨、はずれてしまいそうな顎。私は脂汗が滲んでくるのを覚えた。正に座蒲団そのものの有様である。そして今となつては私は、最

早、圧死を覚悟の必死の忍耐である。辛うじて呼吸の出来る事だけが、せめてもの命綱ではあるが、其の困難なことで、それに必要な努力の如何に烈しいことか。ムンムンと蒸せる様な、お尻の下で、ふと生暖かい矢の様な風が、さっと音して、顔にあたった。次の瞬間、強烈な匂いがスリッパの中に充満した。

「アハハ……、ごめんね坊や、アハハ……」

大きいお臀を揺って笑う彼女に敷きつぶされ乍ら私は、彼女のお尻の中に居る様な、はたまた、彼女のパンティになつてしまった様な、そんな錯覚の中で再び陶然としてしまった。

やがて彼女は、堪え切れなくなったのであらう

「じっとしてんのよッ、まだ終ってないんだから」

といい置いて、急いでトイレへ駆け込んで行った。

このおかげで私は随分、助かった。彼女が戻って来るまでに二十分以上も経ち、其の間に幾らかでも体力を回復出来たからである。

ほっとしたからであらうか、それとも、次の責め手を案じてきたのであらうか、ニコニコし乍ら戻って来た彼女は

「おとなしい坊やね、いい子だわ。もう少しで終るからねえ」

わざと意味有り気に語尾をのばして言うとき、再び先刻の要領で逆馬乗り顔の上に跨ってきた。今度は、パンティがないのだ。「臭いッ」だが、それはもう声にはならなかった。彼女の黄金の香りであった。しかも、私の為の後始末をしないでいるのだ。

いやという程、気が遠くなるほど、長い時間、嗅がされたのである。否、其の様な表現の仕方は恐れ多い。私は夢にまでみた女王様の芳香を、充分に有難く頂戴し、其の御慈悲ある御恵みに感泣したのである。

女性写真モデル募集

分譲写真撮影のため

奮て御応募下さい

○本誌では、代理部分譲品用の写真を撮影するため、女性モデルを募集しています。
○本誌愛読者の方でしたら、年令、遠近は問いません。分譲品用ですから誌上に発表いたしません。誌上発表可能でしたら尚結構です。又、助手介添え或はプレイのみ出演御希望の方は御照会下さい。
○出演又は参加御希望の方は、年令略歴記

此の悦び、この感激こそは、同好の士以外に誰が知るものであろうか。十年前の、其の状況を今改めて甦生想起する時、やはり同じ興奮を禁じ得ないのである。況や、偶然とは申し乍ら、長い年月に亘り只管被虐の願望を燃やし続けた甲斐あって、あの時、初めて達せられたという事は、私にとって幸運以外の何物でもなかった。

しかし、被虐者が被虐を甘受し、其の苦痛(?)を忍耐している時間の如何に長く感ぜられることか。そして其の責苦から解放された時に感ずる責苦時間は短少であって、更に虐待続行を期待する。という二つのわがままな欲望の存在を痛感したのであるが、これは

載の上編集部宛お申込み下されば、報酬その他詳細につき、お返事いたします。

○応募されました方々の個人的な秘密は固く厳守いたしますから御安心下さい。尚お好みの傾向を附記下されば好都合です。

○本誌の内容充実のため、並に皆様の文献研究資料作成のため、奮って御応募御参加下さるよう、お待ちいたします。余暇を利用しての御参加も大いに歓迎いたします。
○特に妊婦資料の作成に御協力下さる婦人を求めています。撮影可能の方は、遠近に拘らず御一報下さるようお願いいたします。

▲奇ク編集部▼

私一人に限った事なのであろうか? 世のM男性諸士の御意向を伺い度いと思う。

なぜ、このような奇妙な状態に、このような悦びを覚えてしまうのか。我ながら頭をひねることもないではない。だが理由を考えても無駄であることは早くから悟っていた。

自分自身で結輪らしきものが出ないのに、他人に理解できるはずはない。陶醉出来る願望を追い求めることは、自分に対する義務ともいえると思うのである。

此の時から今日まで、勤めの関係と時間的な関係もあるのであるが、この『夢よ、もう一度』の幸運な機会は、叶えられることなく十年、平凡な歳月が経ってしまった。僅かに其の心を慰め、癒して呉れる「奇ク」を耽読するのみである。

私は、あの被虐の陶醉にのみ、生き甲斐を感じずる男です。女王様の中で御慈悲のあるお方、此の哀れな被虐願望者をお救い下さい。三十分でも、一時間でも結構です。貴女様のヒップの下に身を投じて、どんな罰でもお受け致します。

(了)

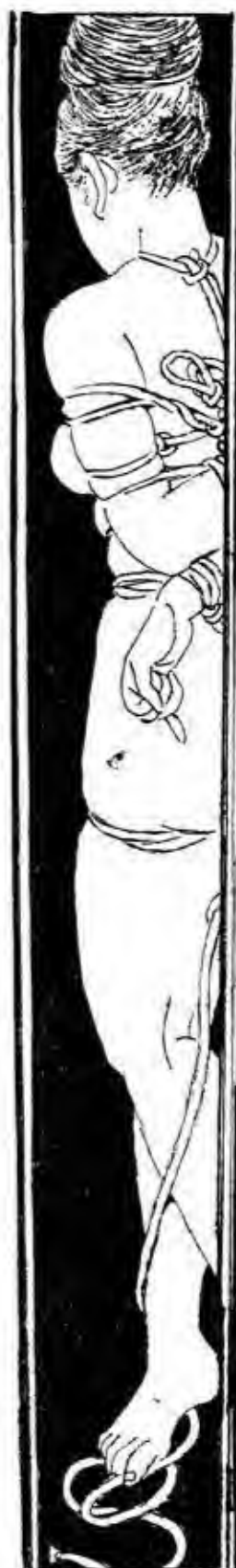
「カット・東京赤ちゃん」

懸賞入選

新・枕草紙

処女啼泣

筑紫太郎



……口上……

これは戯曲でも小説でもない。筋は矛盾に満ち、描写は、同じものの反覆に過ぎぬ。閨の座興に、はたまた独り寝の無聊しのぎに、一卷の枕草紙として扱って頂けばよい。どこから読み、どこでやめてもよい。戯曲めきたる文体をとったのも、この種の読物には本来不必要な説明的部分を少しでも減らさんが為にて、他意なし。

マリの受難

1 夜の波止場・倉庫街

大小の倉庫の並ぶ舗装路を、新聞社の社旗をハタめかせた車が一台、のろのろと進む。

台風18号の名残りで、激しい雨と風。

2 車の中

運転手 ひでえ雨だなア。(時計を見)午前

一時か。そろそろ最終版だな。

カメラマン いつもながら、台風の取材は骨

が折れるぜ。早いとこ、帰ろうや。

運転手 (雨水が滝のように流れるフロントガラスを透し見ていたが) おっ、ありゃア、

何だ?

カメラマン え、どれ(助手席から乗り出しガラスに鼻をくっつけ)おっ、人間じゃないか。裸みたいだぜ。

——車、スピードを早める。

運転手 ほ、ほんとだ。裸の、女だ。狐に化

かされているんじゃないか?

カメラマン 裸の如来様なら、狐だって狸だ

って歓迎だよ。や、病人じゃないのか!

3 再び車の外、倉庫街の路上

篠つくような雨に濡れつつ、ヘッドライトの光茫の中にくっきりと浮かびあがる全裸の女体。白い背中、滑らかな腰から双臀にかけての曲線が男心をそるようにくねる。が、

ひどく疲れているらしく、よろり、よろり、

千鳥足で五、六歩進んだと思うと、バツタリ

両手をつき、そのまま水溜りに顔を埋め、崩

れるようにうつ伏せてしまう。車から飛び出す二人。

運転手

おっ、これはひどい(背中から張り

のよい腰、双つの丸い丘にかけ、斜めに走る赤いみみず腫れ。火傷のような火ぶくれも見える)

カメラマン おい、しっかりするんだ(首を抱き顔を覗き込んで)大変だ。このままじゃ死んじゃうぞ。病院だ。

4 病院の廊下。

院長を取巻く新聞記者の群

院長 駄目でした(目を伏せる)——沈黙。

記者A 死因は?

院長 外傷が若干あります。鞭で打たれたと思われる条痕や、ローソクによるものと思われる火傷の跡。吊られていた形跡もある……が、すべて、致命傷とは思われない。むしろ……

記者B むしろ?

院長 精神的拷問、とても申しましようか。心理的な迫害——たとえば激しい恐怖とかを越えた屈辱などに、余りに長時間、休みなしに晒されると、神経がおかしくなる——いわゆる気が狂うというやつですね。とくに感覚の繊細な処女の場合、ケタ外れの羞恥を加えられますと、耐え切れなくなつて、時に死に至ることもあり得るわけです。その証拠に……

記者C その証拠?

院長(苦笑いしながら)こんなことは記事にしないで下さいよ。つまり、被害者への攻撃が、専ら、女として最も恥ずかしい個所に集中している点です。例えば……(絶句する。小声で、ひとりごとのように)むごい。言語に絶する……(ふと首を伸ばし)もう、いいでしょう、これ位で。具体的に話しても申しあげられませんね。

5 キャバレー「桃園」

早朝。前夜の媚めかしい華やかさを失い、雑然と静まるホール。歓楽のあとの空しさを索莫と漂わせている。ホールの通用口を入ると長い廊下。左右に踊り子やバンドマンの控室、道具部屋、事務室。突当りに極のドア。その奥は地下へ通ずるコンクリートの階段。降りきった所にまたドアがあり、地下休憩室の看板。「関係者以外立入りを禁ず」の貼紙がしてある。

6 地下休憩室の中

円卓を囲み、数脚の椅子やソファ。壁の一方は本棚。三人の男女が密談している。健 姐さん、申訳ねえ。あんなにぎっちり縛ってあるから大丈夫、と思って、つい鍵をかけるのをサボっちゃった。でもねえ、布

っ切れ一枚着ていねえでしょう。おまけにあの雨と風だ。逃げるなんてこたあ想像もしなかったなア。

ハル子 そうよ、健さんの罪じゃないと思うわ。きっと誰かが逃がしたんだ。いったい誰が……

桃花(中央のソファに足を組み煙草をふかしている。中国服の大きく割れた脇から、むっちりとした脂の乗った白い太腿が、ほとんど尻のあたりまでむき出しになっている)ウフフフ、見当はついてる。そいつがサツにタレ込んだかどうか、いわば勝負の別れ目だ。

ハル子 誰ですの、そいつは。店の娘?

桃花(うなずき吐捨てるように)美沙だよ。ハル子 え、あのオボコ娘が!

——ドアが開く。新聞を手に、ゴム草履をはいた愚連隊ふうの男が飛込んでくる。

竜次 姐御、マリの野郎、死にましたぜ(新聞を卓上に広げ指さす)死ぬ前に、しゃべったかどうか、気がかりだったもんですから、ブン屋に化けて病院に探りを入れましたが、どうやら何もバラせねえまんま、お佗仏したらしい。刑事の取調べにも、まったく話は何にもできず、うわごとみたい

に『許して』とか『もう、かんにん』って言うばかりだったそうで……。

桃花 おや、そうかい。それは、ご苦労だったね。で、美沙の方は？

竜次 うまいことだまして下宿から呼出し、例の場所に擲り込んでありますが……。

桃花 白状したかい？

竜次 それが、真っ青になって、ふるえるくせに『知りません』の一点張り。ところがね、ウフフフ、小娘のやることって、どっか間が抜けてまさァ。例の場所に入れる時万一薬など用意していられたんじゃ困ると思ひましてね、身体検査したら、ポケットからこんなものが出てきましたね。一発で露見でさァ。(竜次、ポケットから一通の封書を取り出し桃花に渡す)

桃花 なんだった？(声を出して読む)『私が三日経っても戻らない時は開封してね。』

美沙子さんへ・マリ——ホッホッホ。こりゃあ傑作だねえ。

竜次 ウフフフ。中味はもっと傑作でさァ。

美沙公にね、おめえも馬鹿だな。何故これを証拠に警察へ駆込まなかったんだ、ってカマをかけてやりますとね、昨夜ひと晩考えた末、今朝そうするつもりだったんです

ってさ。さも口惜しそうにオイオイ泣き出しゃがった。

桃花 そうかい、じゃア昨夜も今朝も、サツには知らせていないってわけだね。オッホホホ。小娘の浅智恵のおかげで、どうやらまあひと安心してところだけれど、ちよいと危なかったわね。

竜次 そうなんです。もしも、今朝、マリの逃亡を発見するのが、もう三十分も遅かったら、あつし達の首にも縄が掛かっていたかも知れねえところでしたぜ。

ハル子 ああ陰呑、陰呑。それだけに益々腹が立つわ。うんと仕返しをしてやらなくっちゃ……。ねえ、お姐さん。

桃花(蛇のように冷い瞳をキラリと光らせ、うなずき)でも、せっかく助けに忍び込んだくせに、何故、縄をほどいただけで一緒に逃げてやらなかったんだい。

竜次 あつしもそこらへんが、あんまり馬鹿げているんで、問い質したんですが、どうやら怖くて夢中だったようですねえ。忍び込んだものの、段々怖くなり、目の前に素っ裸であぐらに縛られて呻いているのを見ると益々怖さがつのり、おまけに、少々頭が狂ってきたマリに『ああ、こわい。許

して。あつ、誰かくるわ』なんて絶間なく口走られてみると、もう生きた心地も無くなって、縄をほどいてやるのがやっと。夢中で一目散——というような具合だったらしい。やつ自供から察するとね。

ハル子 お姐さん。それより、その置手紙の中味を拝見しましょうよ。悲しき乙女マリさまの辞世の文ふみだもの。

(暗転)

マリの声『美沙ちゃん。私は恐ろしい予感があるの。それを確かめようと決心したの。先日、私用で港に出かけた時でした。私は車に乗ったうちのマダムを倉庫街で見かけました。中国人のような男と一緒に。何気なく見ていると、ある倉庫の前で停まりました。二人ともすぐ中に入りました。ところがその直後、一台のトラックが、そこに着いたの』

7 倉庫街の路上

大きな倉庫と倉庫の間に挟まれた、ひっそりと目立たぬ一軒の倉庫。横付けにされたトラックから、大きな梱包が次々とおろされてゆく。全部で八个。

マリ(電柱の陰から覗いている)あの倉庫、うちのキャバレーと関係があるのかしら。

(急に身を固くする。倉庫から桃花と中国人Ⅱ王竜白Ⅱが出てきて、マリの隠れている方に歩いてくる)

桃花 このどの品は上ものばかりですわ。全部で八匹もいますのよ。からだもいいし、みんな処女ですよ。値はすこし張りますけれど、仕込み甲斐のある、値打ものの牝ばかりですわ。

王 品物、直ぐにでも見たい。でもわたし、きょう、とてもとても大事な会議ある。駄目。残念ネ。

桃花 オホホホ、結構ですわ。リャンさんも劉さんも今夜は都合が悪いそうですし、私も船長と、香港行きのこととで打合せがございますの。セリは明晩、ということにしましょうか。

王 場所、こんども、この地下ネ。OK。

また白いからだ、たっぷり見られるネ。

(桃花に手を振り、車に乗る。桃花、艶然と微笑を返し、波止場の方に去る)

マリ(物陰に、すくんだようになって身動きもしない。顔が、やや青ざめている)八匹と言ったわ。牝とも言っていたわ。犬かしら。いえいえ、あの梱包の大きさは犬じゃないわ。それに、犬に、処女なんて言葉を

使うかしら。からだもいい……白いからだ……香港行! もしかすると……(顔さらに青ざめる)まさか……(首を振る)でも……(何ごとか決意したように唇を噛む)

(暗転)

再びマリの声『私は今夜、そのセリとかいうものを、何とかして覗いて見ようと決心したの。見つかったら……と思うとからだがふるえたわ。でも、もしも本当に娘たちが香港に密売されているのでしたら許せません。警察に知らせたほうが……とも考えたのですが、ハッキリ証拠を掴んだ上でのこと、今夜は私だけで行くわ。でもね、私も馬鹿じゃないわ。用心して、少しでも危険を感じたら中止するわ。もしも私が三日経っても帰らなかったら、警察に知らせて下さい・マリ』

8 再びキャバレーの地下休憩室

桃花(読み終えた手紙を灰皿の上で燃やしながら)ウフフフ、馬鹿じゃないと書いてあるけれど、やっぱりお馬鹿さんだよ。いちばん警戒の厳しいセリの日にノコノコやってくるなんて。(回想する表情)入ろうにも入れなくて表でうろうろしている所へ、私の車が到着。おやお前、こんな時間に

こんな所で何の用? と高飛車にきめつけてやったら、もうガタガタふるえているのさ。オッホホホ。大馬鹿だよ。

ハル子 でも、そのお馬鹿さんのおかげで、まる三日間、あんな素敵なショーが見られたんだわ。ああ、思い出しただけでもぞくぞくしてくるわ。ねえ、お姐さん。三日分ずうっと映画に撮ってあるでしょ。あれ、もう一度見たいわア。

桃花 ウフフフ、暇つぶしに、じゃア試写会とするか。……そう、そう、いいことがある。檻の中の可愛いお客さんにも見せてやろうじゃないか。

ハル子(手を叩き)名案だわ。で、おベベもすっかり脱がせて?

桃花 いや、ストリップはしばらくお待ち。

ちよっと計画していることがあるの。あの娘には生易しいやり方じゃ我慢できない。何しろ私たちの事業を邪魔しようとした憎い牝だからね。(淫らな微笑がじわじわと口許に広がる)

9 キャバレー「桃園」地下・Sサロン

地下休憩室の壁の隠しボタンを押すと一方の壁面に取付けてある本棚が半回転、ポツカリ通路が開く。その奥は、長い廊下。突

当りにスチール製のドア。金文字で大きな『S』の字が書いてあり覗き窓つき。これが『Sサロン』と呼ばれる、このキャバレーのもう一つの「顔」だ。

——カメラ、室内を次々移動——

広さは十五坪以上もある。壁、天井はクロス、床は寄木張り、天井には数カ所にシャンデリアが灯りゴージャスなムード。

中央に一段高く円形ステージ。周囲にソファ。ステージ中央に太い円柱。数カ所の天井に小穴が開き、そこからロープ、鎖がステージの上に垂れている。

壁の一面は天井まで届く大鏡。反対側には巨大なロッカー、木馬、金属パイプ製の椅子数脚。鉤釘には、十数種にのぼる様々な形の鞭。映画用の撮影カメラ、照明具。婦人科の医院にある検診台を複雑にしたような形の、奇妙な椅子。部屋のいたる所、太さも多様な縄、鎖がうず高く積まれている。

ロッカーを開くと、男性の形状をした、薄桃色の皮張りのコケシが直径三センチから七センチの超巨大型まで十数個。温水タイプ、電動タイプ、滑らかなもの、イボのついたもの、等。ほかに数種の手錠、足枷、首枷、犬の首輪。単純な皮紐のものから顔のほとんど

半ばが覆える金属製のものまで猿轡二十個。女の口を開いたまま、歯の動きを封じ舌の動きのみを促す『上淫用』と貼紙のついた特殊な轡、犬・馬・牛用の轡なども混る。

ほかに大小の浣腸用具。小道具では太さ多様の筆、刷毛、鷹の羽、羽毛の束、木綿針や畳針、クリップ、画ビョウ、西洋カミソリ、生花用剣山、ローソク。スケール。

電気製品も、専用に特別に作らせたパイプレータ、クリップ付電極、電圧計、豆電球。

——カメラは最後にこの部屋の最も特長な部分に移る。その壁面は床から一メートルの高さで押入れの様にくり抜かれている。広さは畳一畳ほど。前面には鉄格子が植えられ他の三方と、天井も鏡だ。床はことさら粗くザラザラに作られたコンクリート。つまり広さ一畳・高さ一メートルの三方と天井は鏡になった横長い檻が作りつけてあるわけだ。

ドアを入ると直ぐ傍の壁に状差し様の箱があり、女性の羞恥の個所を印刷したピンク色のカードが何枚も入っている。細かく記された文字を読んでみよう——

『この世で最も美しく最も淫らなものは女。裸の女。その羞恥をみなさま、心ゆくまでご観賞下さい。トビラのSは、SLAV

E、SEX、SADO、或いはSPACIAL、SEACLET、また日本語ならシロシロ、責め、触る、叫ぶ、授ける、させる、等々、皆様のお好きなイニシアルに解釈下さいませ・店主敬白』

10 Sサロン・檻の中

両手首を背中の中ほどに荒縄で縛られ、両足首も揃えて縛られた女。からだをくの字に折り横臥している。セミ・スリープのツーピースの胸許ははだけて、牛乳を練り固めたような、甘く柔らかい双つのふくらみの麓が覗いている。スカートも、裾が大きくまくれ上り、ナイロンのストッキングに包まれた太腿が半ばまで露わに、ぴっちり閉じ合わせた膝小僧が小刻みに慄え続ける。

美沙子（眉をひそめ長い睫をふるわせながら呻くように）ああ、私は、どうなるのかしら。あのことが判ってしまった以上、どんな恐ろしい羞しい目に遭わされることか……。ああ、あの、見るのもおぞましい数々の奇怪な道具類！ ああ、何とかして……（後手にされた両腕をものがかせたり、上体をエビのように曲げ足首の縄を噛み切ろうと試みるが、空しく曲線がくねるばかり）ああ、私はどうしてきのう、あのまま警察

に走りこまなかったのだろう（唇を噛む）

あの、マリさんの姿。おお、羞かしい！

素っ裸だったわ。足を、足を……男みたい

に、あぐらに組まされて、仰向けに柱に……

……ああっ、いや、いや。あの瞬間、私は頭

の中が燃えるみたいになった。目をつむっ

たわ。でも、あのマリさんのからだは、も

う刻印されたように、私の網膜に灼付けら

れてしまった。目を閉じて……見えるの

よ、ハッキリと。ああっ、また首筋に血が

昇ってくるわ。乳首が血を噴きそうになっ

てくるわ。ああ……いや……いやッ。わた

しも、あんな姿に、さ、されてしまうのか

しら。ああ、助けて！（固く閉じた眼蓋の

奥に涙がみるみるたまり、あふれて、コン

クリートの床に横たえた頬をツウと伝わ

る）

11 Sサロンの中

——急に、ドアの外が騒がしくなる。足音

や笑い声。美沙子、はっと軀を固くし、伸ば

していた足をキュッと締め、恐怖の入り混っ

た瞳をあげ、おずおずとその方を見る。ドア

が開く。ハル子を先頭に竜次、健、まだ少年

の面影を残すチンピラの三郎、同様に少女の

面影の残るズベ公町子。そして口許に惨忍で

淫らな笑みをたたえた中国服姿の桃花。最後
に映写技師の岩見。

三郎（まっ先に檻まで駆寄り）ちえっ、まだ

剥いでないじゃんか。（靴先を鉄格子の間

に入れ美沙子のアゴを仰向かせ）ベッピン

だなあ。おい、お前、生娘かい。

町子（三郎の後から駆寄り）ほんと。つまん

ないの。あたし、生まれたまんまの姿を期

待してたのにさ。（桃花の方を向き）ねえ

マダム、まだダメなの？ あたし、このご

ろ女性の裸について研究してんのよ。この

お姉さんのも見たいわ。

桃花（苦笑いしながら）このごろは未成年者

のほうが惨忍だね。まアお待ちよ。いずれ

堪能するまで、いたぶらせてあげる。

ハル子 どう？ 檻の居心地は。どっちを向

いても自分のみじめな恰好が眺められて、

とっても楽しいでしょ。

竜次 もっと楽しいものを、今から見せてや

るぜ。ホラ、お前が昨晚、縄をほどいて逃

がしてやったマリの映画さ。凄えぞ。全巻

上映したらまる三日かかるんだ。何しろ、

まる三日間、休みなしに入れかわり立ちか

わり可愛がってやったのを、残らず写して

あるんだからな。でもな、オレ達も忙しい

し、一番イカすシーンだけを選んで見せて
やる。てめえの親友の大熱演だぜ。尾花ミ

キも橘ますみも遠く及ばねえ。

美沙子（耳に栓をしたいような思いで唇を噛

みしめ、顔をうつ向け、化石のように固く

なって耐えている）

桃花 出しておやり。

三郎 待ってました（檻の錠前をあげ、腰を

かがめて上体を入れ）さあ、出るんだよ。

ウフフ、おっぱいが見えらァ。（指をくね

くねと伸ばし、乱れた襟元から手をすべり

込ませる）

美沙子 や、やめて下さい。いやッ。

三郎 ウフフフ。（右手で髪を掴み、左手で

首を抱えて力まかせに引きずる）

美沙子 あっ……あっ。い、痛いっ。（ずる

ずると檻の外に引出される）

桃花 足の縄をほどいて、ソファに坐らせ

ておやり。

町子 手伝うわ（足首の縄をほどく。何気な

く触った、という調子でスカートの裾に手

をかけ、思いきり逆さに引上げる）

美沙子 あっ（折るように腰を引き、両膝を

痛くなるほど閉じ合わせる）

町子 ウフフフ。いまの顔。目の玉が飛出す

みたいだったわ。

——三郎と町子、左右から抱えるようにして、いやいやをする美沙子をソファーまで引立て、中央に坐らせる。両側に三郎と町子が坐る。

ハル子 おやおや（桃花と顔を見合わせ）若い連中には、かなわないわね、まったく。特等席をとられちゃった。

——一同、横一列にソファーに坐る。壁にスクリーンが張られ、映写機にフィルムがセツトされる。天井の灯りが消され、豆ランプがつく。

美沙子 あっ、あっ、やめて……（軀をくねらす動きが室内の空気を乱す。ソファーのスプリングのきしみ）

ハル子 暗くなったとたんに、もう悪戯しているわ。

——クツクツという三郎と町子のふざけ合いう忍び笑い。

岩見 はじめますぜ。（白光がスクリーンに投影され、カタカタとフィルムの廻る音）

12 マリの映画港の倉庫地下。競売場。

壁、床、天井とも、むき出しのコンクリート。天井に鉤が数カ所。ロープや鎖が垂れ下っている。竹の棒、縄、鞭などが散乱。中央

に低いテーブル。広さは畳三畳ほどもある巨大なもの。テーブルの一方の側に、桃花たちキャバレー側の八人と、王ら招待の中国人五人。反対側には——身にまとうもののすべてを剥ぎとられた一糸まとわぬ娘たちが八人。いずれも両腕は高々と後手に縛られて並んでいる。縄は乳房の上下にもからみ、細くくびれた腰には肉に食込む腰縄。さらに、腰縄から伸びた一条の、見るからにおぞましい感じの、細い毛バ立った縄が、白い下腹部にキリキリと食込んでいるのだ。

——好色淫乱な男たちの野卑な呼称。陰湿惨忍な同性からの羞ずかしい質問。それらを耳にし、なめ回すような二十六の視線に晒され、裸女たちは一様に肩を慄かせ、膝をよじれるばかりに閉じていた。八人とも二十歳前後の処女ばかり。縄に上下をくびられ大きくふくれ上った蕾の乳房も、その頂点に固くしこって慄える赤い木の実も、ほっそりした胴から腰へかけての悩ましいまでの曲線も、たえず羞恥を発散させている、むちむちとした太腿も、すべて布で、手で、いや一枚の木の葉でも隠しておきたいだろうに……。それが、なに一つとして隠すこともできず、ことごとく、白光の下に、環視の前に、晒され尽

す羞恥。

ああ、と呻き天井を仰いで、涙のこぼれを防ごうとする娘。がっくりと、首を折り、乱れた豊かな黒髪で胸のふくらみを少しでも包もうとする娘。唇を噛み、睫毛を固く閉ざして顔を横にそむける娘。眼蓋こそ閉じてはいないが健気に顔を正面に向け歯を食いしばるうち、やはり耐え切れず茫沱たる涙を頬に伝わせる娘。その姿態こそさまざまだが、一様に首筋から頬、肩先から胸乳のほうまで、まっ赤に染めて、立ちすくんでいる。

——甘く淫らに溶けてしまおうのではないかと思われるような室内の空気をふるわせて桃花の艶然たる嬌笑が響く。

桃花 オッホッホホ。みなさま。八人の裸女の観賞、お気に召した様子。何よりと存じます。いずれ表を上げ裏をめくる本格的な展示と競売は後刻に譲りまして、ただ今より、特にアトラクションと致しまして、素晴らしいショーをお目にかきたいと存じます。（手にした答をピシリと鳴らす）

——入口と反対側のドアが開き、二人の男に左右から手首を掴まれたマリが引きずられるようにして出てくる。八人の裸女も一瞬、わが身の羞恥を忘れ、その方を見やる。

男A さあ、ぐずぐずせずに……。

男B 素直にした方が身のためだせ。

マリ (二十人を越す観衆の視線を感じて激しく肩を振り抵抗) いやっ、いやですっ。

——男二人、両側から脇の下に手を入れ、担ぎ上げるようにして台の上へ。

桃花 (惨忍な微笑を絶やさず) この娘は、セリにかける売物ではございません。殿方や同姓の方々の目を喜ばせ、さらには裸の八人の方々の目まで楽しませて差上げようとはわざわざ、自分から望んで出かけて参りました。近ごろ奇得な心掛けの娘でございます。(男二人に向かい) はじめておやり。

——うつ伏せているマリの両腕を左右から掴み背中にねじあげる。一人が背中の上で両手首を合せて掴む。一人が前に回りツー・ピースの上衣のボタンを外し、くるりと剥ぐ。後の男が、それを手首の先から抜取る。

マリ あっ、いやっ……やめて…… (頬が羞恥のため、次第に上気してくる)

——前の男、足許に回り、スカートを引きずり下す。ブラウス姿のマリ。

マリ も、もう、許して……いや、いやっ。

——男二人とも無言。冷酷に迅速に動く。

男の指が、ブラウスにかかる。裾を両手で掴

み恐ろしい力で引裂いてゆく。引裂かれボロ切れのように丸められて、捨てられたブラウス。

マリ か、かんにん。かんにんして下さい。

ああっ……い、いやっ。許して……

——ブラジャーとパンティを残すだけとなる。腕を後に、高く逆さに引張られ、脇腹のあたり、白い肉がくねくねと引きつるようによじれる。苦痛に眉を寄せ、あえぎ呻く。しっかりと閉じ合せた膝小僧が小刻みに慄え続ける。太腿の白い輝きと、その奥、小花の刺繡に縁どりされたナイロンのパンティのふるえが、観衆の目を喜ばせる。

桃花 (長い鞭の先で露わな脇腹を突つきながら) さて皆様。皆様はこの牝犬の、どこどこを最も鑑賞なさりとうございます？

——俗語的な呼称も交えて、ある部分を示す叫びが一せいに湧き起こる。気も狂わんばかりにもだえるマリ。全身を火柱のように紅に染めてうつむく八人の裸女——。

桃花 オッホッホ、さすがに皆様。女をいたぶる急所を心得ていらっしゃいますわ。残念なことにご希望の個所は、まだヴェールの陰にひっそりと身を隠しておりますわ。

(右手を伸ばし、マリのアゴの下に、指を

かけ、顔を仰向かせ) マリさん。聞いたかい。お客様がたはお前の全ストがどうしても見たいとおっしゃる。お前、自分から望んで、出演に駆けつけた以上、ご希望通りにしないと、意味がないわね。(マリ、肩を、腕を、両脚を、振りまわし抵抗しようとするが、一人の男に背後から腕を逆にねじ上げられ、も一人には足首をがっしり押えられているため、いたずらに胸から腰、太腿をくねらせ、却って観衆の目を楽しませるばかり)

桃花 じゃあ、全部脱がせておやり。

——男二人が押えつけている間、別の男が飛上がり、引たくるようブラジャーをむしり取る。ミルク色の処女の双つのふくらみが、頂点の木の実を紅くほてらして、プリンプリンとはずみ出る。にじみ出る汗で、しっとりと湿る肌。

マリ (まっ赤になって身もだえしながら) ああ……もうやめて……ゆるして……。

桃花 いよいよ最後だよ。どうなるのか、もう解っているわね。お前の、その、腰の回りを巻いている薄い布切れを、お前の希望通り外して差上げようというわけさ。ウフフ、それが外れると、どうなるのかしら

ねえ。どう見ても、一枚の布も無くなるように思うんだけど。そんなあられもない姿で、お前、羞ずかしくないの。(今はただ黒髪をふり乱し、いやいやをするように首を振るマリのアゴに再び手をかけ、顔をくつつくほどに近寄せ)ふうん、そう。羞ずかしくないの?へえー。私だってね、男なんか何人でも知っている私だって、こんなに大勢の目の前で、その布切れまで取られてしまふとなると、とても羞ずかしくて逃出したくなるわ。だのに、お前、生娘なんだろ。それでいて羞ずかしくないの?よしよし。お望み通りにしてやるわ。ええっと、どんな風な剃き方がいい?一思いに、サッとめくるほう?それとも一センチずつ、じわりじわり外すほう?あ、そう。一センチずつの方がいいのね(まるで自分で自分のセリフに酔ったように、淫らな恥ずかしめを加え続ける桃花は、いまや観衆のことも、念頭にないと思われる。呻き、叫び、訴え続けていたマリのかすれた声は、いつの間にか、切々と魂をえぐるような、悲しい悲しいすすり泣きに変わっていた)

13 P市の警察・刑事室

刑事E キャバレーの踊り子が何であんな場所をふらついていたか、そこらへんが鍵だと思ふんだ……。

刑事F キャバレーから誰かに連れ出されたと推定して聞込みをしているんだが、うまい線は出てこない。

刑事G 被害者の交友関係や同僚の線もダメだ。あのキャバレーの女どもは淫売みたいな不良が大半で、処女を守っていたマリは同僚からも虐められ、村八分にされていたようだな。どの女に聞いても「知らない」「あんな人」という調子で、むしろ、死んだのを喜ぶフシさえ見える。

部長刑事山崎 マリの親友で、やっぱり数少ない生娘の一人に、美沙子という娘がいたはずだが。

刑事G それが少々、臭いところがあるんだね。美沙子は両親もなく、女子短大に通っている妹の雪子と二人暮らしなんだが、雪子の話じゃ、今朝、夜が明けたばかりのころ、アパートの管理人から、電話の呼出しがあり、飛び出したまま行方不明なんだ。

山崎 キャバレーにも顔を見せていないか。刑事G うん。もっとも、何となく不審な点もあるんだが、何しろ朝のキャバレーなん

てガランとして誰もいない。目撃者がいないんだ。だから、ひよっとすると、あの店の中のどこかに居るのかも知れないが、探りようがない。

山崎 同じ店の踊り子で、どっちも処女で、同僚からは、憎まれていて、一方が裸で殺され、同じころ、もう一方が行方知れず……。こりゃア、やはり臭い。あのキャバレーに鍵があるね。よし。客に化けて、張込みを続けよう。

14 「桃園」の地下・Sサロンの中

薄暗い照明の中で、悲しきマリを主人公にした淫らな映画の観賞会が、なお延々と続いている。時々、忍び笑いが漏れ、陰湿で熱っぽい空気がよどむように立ちこめている。

15 再び映画のシーン・港の倉庫地下室

中央の台の上で、遂に身を包む最後のものを足首の先からスッポリと奪い去られた全裸のマリが、背を丸め両膝を縮め、少しでも環視の中から羞恥を隠そうと二つ折りになってうつ伏している。背中からヒップの双つの丘にかけて、噴出る汗にしっかりと湿めりを帯びた悩ましい肌が、白昼をあざむくような照明を浴び、うぶ毛のそよぎまでありありと晒け出され、絶間なく小刻みな慄えを繰返して

いる。周囲には——桃花や王らの淫虐な男女の群と、同じ身の上にすすり泣きを漏らす八人の裸女たち。

桃花（小花の刺繍に縁取りされたピンク色のナイロン製の布をぶら下げ）オッホホホ。軀が軽く、涼しくなって、さっぱりしただろう。これからどうすると思う？ 教えてやろうか。ウフフフ、お前におしめりを授けてあげる。どんな花でも水をやらないとおれるからね。（二人の男にアゴをしゃくって）おやり。

——男二人、相交わらず無言のまま、左右からマリの肩を抱く。

マリ（愕然として）あ、いや！ さ、さわらないで下さい。

——腕を胸の下にしまおうとするのを、非情に手首をつかみ背中中にねじり上げる。一人が押え一人が縄をさばく。マリの両手首は高々と後手に縛られてゆく。髪を掴んで上体を引起こし縄を胸にかける。乳房の上下に二巻き。上下をくびられた乳房はぷっくりとくびれて盛上り、頂点の赤い乳首が、そこだけ別の生物のように、プルプルと慄える。正座して、両腿を痛くなるほど、閉じ合せているマリ。息苦しいばかりの羞恥に、固く閉じた睫

が慄え続ける。

——男たち、こんどはマリの肩に手をかけ台の上に仰向けに押倒す。

マリ あっ、い、いやっ。

正座の姿勢のまま上体を後に押し倒されたため、足首を臀の下に敷いて反り返るような形となる。腹が上向きに、弓なりとなり、膝が大きく開く。慌てて腰をよじり、足首を拔出して、やっとのことでもと通りに閉じ合わせるが、一瞬の羞恥に朱の色が全身に広がる。マリ あっ、あっ。も、もう、かんにん。

——板張りの台と、自分の上体の間にはさまれた手首の激痛。上体は、髪を男の靴に踏まれて完全に上向きに露呈されたが、せめて下半身だけは真上を向いてしまうのを防ごうと、腰を極端なまでによじり、下肢を海老のように縮めて横たわるマリ。そのため、前面はどうにか好色な視線を避けることができるが、背面は上向きに全くのむき出しとなる。くびれた胴から下へ、豊かに張りきったヒップ。うす桃色の媚めかしい双球。その下に、すんなり伸びる太腿までが、逆に一同の前にあかあかと晒け出されてしまう。ハル子 ああ、私、もう、たまらんワ（身内を突上げてくる興奮に、思わずうわずった

声をあげ、手を伸して、丸い双球をペタペタと叩く）

マリ ああ（びくっと慄え）よ、よして。

いや、いや（臀部の側を一時、隠そうと軀を表返しにしかけ、ハッとしてもとの姿勢に戻り、しくしくと泣く）

王（ハル子につられたように）ウフフフ。お餅みたいネ。その娘、まだ男を知らない。そうでしたネ。あまりきれいで、わたし食べたくなるネ。

桃花 オッホホホホ、マリさん本望でしょ。皆さん、とてもお気に召したようよ。さ、もうひと頑張りするのよ。

——男たち、左右からマリの足首を別々に掴む。うーん、とかけ声を出し力いっぱい、じわじわと引張ってゆく。

マリ あ、あーっ。ひーっ。やっ、やっ、やめてッ。も、もう、許して。ゆるしてくっ……。（膝小僧のあたり、まるで肉のコブ

のように筋肉をふくれ上がらせ、全身の力をこめ、開かせまいと闘う。男たち、無理をしない）

男A おい相棒（はじめて口を開く）

男B 何だい。

男A こんな時の処女の力ってやつは、馬鹿

にならねえもんだ。死物狂いだからな。急いでも疲れるだけさ。じっくりやろう。じわっ、じわっと、女が疲れるのを待ちながらやるんだ。(マリの耳許に口を寄せ)おねえちゃん、聞いただろ。いくらでも力を入れな。俺たち、ゆっくりと、一寸刻みにお前さんがくたびれるのを待って、拡げてやるからな。

マリ ああ……(絶望の呻き。にわかに膝の力が抜ける)

男A ウフフフ。待っていたんだ。

——二人、急に力をこめる。マリ、台の上に人の字型になる。

マリ あ、あっ。いやーっ。(絹をさくような悲鳴が室内をふるわせる)

——別の男、かけ上り、押えつけられている両足首に一本ずつ、ロープを巻きつける。壁のボタンを押す。天井の鉤を経て、滑車につながるロープは、約四尺の間隔をとったまま、平行して上に引き上げられてゆく。キシキシというロープのきしる音。

桃花 いい眺めだこと。

——マリの両脚は大きく天井の方向に、逆八の字に開いて吊上げられてゆく。上半身は台の上に仰向きに横たわったままだがロープ

が上るにつれ、双臀が少しずつ浮き上り、やがて腰も僅かに台を離れる。

マリ あっ……あっ……いやっ、や、やめて。

桃花 伸ばすほうはそこでストップ。左右を、もう少し裂きかたが足りないようね。

——男が別のボタンを押す。と、滑車と鉤が天井のレールに沿って、じわじわと右と左へ間隔を拡げはじめる。

マリ あ、あーっ、ひいいっ……かんにん……して……く、ください。

——マリの下肢は八の字を通り越して、いまや横一線に近付いた。完全に真上を向かされた太腿。極限にまで緊張させたバイオリンの弦のようにピリピリと怒張し、ひきつり、青く静脈のすけて見える柔らかい肉が、ひくひくと痙攣している。腰は台から完全に浮き上り両肩と頭で全身を支えるだけ。ロープが動きを止めたとき、マリは既に叫ぶ気力も無く、股の裂けるような痛みと、それを上回る羞恥に、失神寸前。目を閉じ唇を噛み、全身をオコリ患者のように慄かせ続ける。顔をそむけ、すすり泣く八人の全裸の娘たち……。

桃花 ほんとにいい眺めだわ。オホホホ。

マリ う、ううっ。

桃花 皆様、準備は整いましたわ。いよいよ

素敵なショーにとりかかることと致しましたよう。太めの筆をちょうだい。

ハル子 これ位でどうかしら(手渡す)

桃花 いいわ。皆様、この筆は、とくに毛の柔らかいものを選び、水の中で穂先をほぐした後、乾かし、穂先を切りそろえたものでございます。このような時に用いるため特に造らせた特製品でございます。

——どよめきが一座を流れる。

桃花 これを、その八人の裸の娘さんにくわえて戴き、この主役をコチョココチョとやって貰うという趣向でございます。

——パチパチと拍手の響き。

桃花 ただし、口でくわえてくすぐるというのは、案外に難しいことでございます。未練習の八人にどこまで出来るか疑問でございます。そこで皆様方に、この主役が何度失神するか、を投票して戴こうと思ひます。時間は一人二十分間。……いい当てられた方には、賞を差上げる用意がございます。

——云いながら桃花は、差し示した筆を動かして見せ、ニンマリと視線をマリに移して残忍そうな笑みを浮かべた。

——(未完)——

ある針灸医のカルテ



獲 物

山 本 一 男

静かな郊外の住宅地に針灸医院を開業して
もうかれこれ十年になる。患者は大半が中年
過ぎの年輩によって占められているが、それ
でも一カ月に一人位は若い患者が訪れる。

私はこれら若い患者の訪れを楽しみに治療
を続けてきた。若い美しい肌に針をあちこち
打って、その痛さにガマンしている顔をいじ
わるく眺めるのは、なんともいえぬ戦慄感を
覚えるからだ。

ここに述べる二、三の例は、ここ半年ばか
りの間に訪れた若い患者のカルテである。

ある日、女高生が訪れた。学校帰りか、カ
バンを持って玄関に突立っていたが、「どこ
か悪いのですか。治療なら上へあがってくだ
さい」と声をかけると、無言のまま治療室
に入ってきた。

セーターのよく似合う、あどけない可愛ら
しい女の子である。しばらく顔を赤らめて、
もじもじしていたが、

「先生、私、生理不順で困っているんです。

いろいろ薬を飲みましたが、効きません。本
で読んだのですが、針がとても効くとか」

「それは困られたでしょう。若いあなたによ
うな人にはよくある病気です。よろしい、治
してあげましょう」

「痛くありませんか」

私をジッと見つめる可愛い眼元が、不安気

に、またたく。

「そりゃあ、何といっても針をさすのだから
多少は痛い、大したことはない。それにあ
とスーッとするよ」

とやさしく肩をたたいて笑ってみせると、
緊張もほぐれたのか、コックリと、うなずい
た。

「それではセーターをぬいで」

ややためらっていたが、覚悟をきめたよう
にベッドに上った。女高生といっても、体格
がよいので、スリッパ一枚になると、丸味を
帯びた肌は、もう立派な大人である。

「腰とお腹にも針をするからスカートをずら
して」

という、顔を赤らめながらも指示に従っ
た。

まずおおむけにさせて、やわらかな色白の
腹をアルコールで消毒した。小さなヘソがな
んともいえぬほど愛くるしい。

不安そうに時々チラッと私を見ては、目を
つぶっている。

私は一番目の針を勢いよく打った。「ウツ
ツ!!」と顔をしかめ、口をゆがめて耐えてい
る。私は、ヘソを中心にあちこちと針を打ち
続けた。その度に「ウツツ!!」「痛い」「ウ
ーム」と低いうめき声を出した。

私は無表情をよそおいながらも胸の高なり
を抑えきれなかった。若い女のやわらかな腹

にブスブスと針をさし込んでゆくのは、たまらない快感にひたれる。

腹が一通り終ってからうつ伏せにし、スリッパからのぞいている背中にも容赦なく針をさし込んだ。「痛い!!」といいながら背中を波打たせていたので「動いてはダメ」と肩を強く押えつけた。

ようやく終わったという感じで、横坐りになっているのを横眼に、さり気なく、

「針もよく効くが、お灸の方がさらによく効くのだからなあ」

声をかけると、驚いたように

「お灸!! 跡がつくからイヤです。それに熱いでしょう」

「いや、跡が簡単に見えるところへは据えなさい。それに小さいのだから、熱くないよ。針の痛さよりガマンできそうだ。小さいのを二つほど据えてあげよう」

「どこへですか」

「お尻の一寸上へだ。あそこなら水泳に行ってもパンツでかくれるし、別にはずかしいこととはない。早く病気を直したいだろう」

と念を押すと、しぶしぶ承知した。

早速スカートをずらし、真白いパンティからのぞく丸い尻が目の前にあらわれた時は、一瞬食いつきたい衝動にかられた。

腰の下の方に二つ印をつけた。小さいお灸といったが、一ついじめてやろうという気持ち

がむらむらと起こってきて、もぐさを大きくしてやった。ピーナツほどの大きさにした。

「一寸熱いがガマンするんだよ」

丸い恰好のよいお尻から二筋の紫煙が立ち昇ってきた。いずれうめいて苦しむだろう、と思うと、もぐさの燃えつきるのが待ち遠しかった。

「ウーム。熱い!! ウーッ!!」

体を大きくうねってうめき声も高くなってきた。それもそのはずだろう。生まれて初めての大きなお灸の熱さが肌をジワジワと灼きつけているのだから。

ぐっと力を入れて尻を押えつけたが、全身の力であれば出してきたため、こちらも必死になって抑えにかかった。

「もう、先生、勘忍して。もぐさのけて、ウー熱い」

とわめいているが、もぐさが大きいので、なかなか消えない。

「もう少しだ。ガマンガマン」

と励まし続けながらも私は、まだくすぶりと続けているもぐさの煙の中で、恍惚感にひたった。

やっと火の消えたあと、灰を払いのけて、また、もぐさをつけた。

「先生、まだ据えるのですか。熱いから、もうヤメて下さい」

と涙声で懇願してくる。なおさら私は、も

つといじめてやりたい胸の高なりを覚えて、わざと冷く、

「中途半端な治療では治らないよ。今度は二度目だから、さっきほど熱くない。これで終りだから、もう少し辛抱しなさい」

といい終らぬうちに、もぐさに火をつけた。再び彼女は「熱い!! ウーッ」と、涙声でうめき続けた。

白い尻から二筋の煙は静かに、彼女の苦しさを知らぬげに立ち昇っている。

ベッドから立ち上がった彼女は大粒の涙をポロポロと流していた。セーターに顔をうずめてしばらくお灸の跡に手をやってジツとしていた。

早春の陽ざしがやわらかい昼下がりであった。玄関で声がするので出てみると、若い男が立っていた。

いま流行のグリーンのタートルセーターに細いストラックスをはいた、背の高い恰好よい好男子である。まだ顔は少年の面影を多分に残している。

治療室で話を聞くと、いま予備校生だということだ。毎日晩遅くまで勉強の連続で、肩がこって仕方ないので針をして欲しいと訴えた。胃の調子も悪いと腹をさすっていた。

私は若い患者がくると針よりも灸をすすめることを極力奨めた。針の痛さに耐える顔より

も灸の熱さに、全身をよじらせてこらえる姿が、より刺激に富んでいたし、いじめがいがあるからだ。

「よろしい。肩のこりなどは、すぐに治してあげる。だが、肩こりや胃の調子が悪いのは針よりもお灸の方がウンとよく効くのだからなあ。お灸をすえようか。そうしたまえ!!」

「先生、熱いでしょう」

「いや、小さいのだから、すぐ済む。恐がることはない。さあさあ」

と肩をたたいて催促してやる。

しばらく、もじもじして考えていたが、私があり、しっこく奨めるので、しぶしぶ承諾してセーターをぬいだ。

若々しい肌は小麦色につやつやして、筋肉質のよい体をしている。

男なら背中に数多く据えても女の子のように跡がつくといって文句は出ない。

私は久しぶりに若い肌を思いきり、いじめようと思った。

肩のあたりから背骨に沿って二例ずつ左右にそれぞれ五つ、合計十個の印をつけた。

そしてまず四つの印に大きなもぐさを置き同時に火をつけた。四筋の煙が静かに立ち昇った。いまに若い肌がうねり出すぞと思うとワクワクしてきた。

やがてもぐさの火が肌をこがし始めたのだろう。「熱い!! ウーム。熱い」と低いうめ

き声をたて出した。

かなり大きなもぐさの火が、一度に四カ所も肌を灼き出したのだから、熱さは相当なもののはずだ。案の定、絶え間なくうなりながら、顔を真赤にして背中を波打たせてきた。私は必死になって背中を押えつけた。

それでも全身であればようとする若い力を押えつけるのは並大抵ではなかった。

やっと火が消えて背中の中うねりもおさまったが、

「先生!! もうやめて下さい。とても辛抱できません!!」

と起き上がりかけた。

「何をいうのだ君。これぐらいは、子供でもガマンしていたぞ。はじめてだから、熱いのだ。今度は少しずつすえてあげるから、もう少し辛抱しなさい」

私は命令調で肩を押して寝かせた。

観念したのか、大人しくなってベッドに顔をうずめていた。燃えつきたもぐさの灰を払いのけると、黒い大きな跡の囲りがポーと赤味を帯びて、いかにも痛々しかった。

「胃の調子が悪い、といっていたな。腰にも一寸すえておいた方がよい。ベルトをゆるめてごらん」

という少ししたじろいでいたが、仕方ないといった態度でベルトをゆるめにかかった。

ズボンと共にパンツを少しずり下げ、腰に

四つ印をつけて、またさきほどと同じようにピーナツ大の大きなもぐさ四つに、同時に線香で火をつけてやった。また苦しみもだえるのかと思うとゾクゾクしてきた。

「ウーン熱い!!」と再びうなり出し、腰をくねらせてきた。「動いたらダメ。もぐさが落ちる」としかりつけながら必死で背中を押え続けた。

すえられる方もすえる方も、もう汗だくになって、もぐさの強烈な臭いの中で半ば格闘していた。

どうにか腰も終り、つぎはまた肩から四つずつ大きなもぐさに火をつけては若い肌をいじめ続けた。

ただ熱い熱い!! のくり返してベッドの上でもだえるばかりであった。

「お腹にもすえたらよいのだが……」

という飛び起きて

「先生もう結構です。ガマンできません」と半ば涙声で拒んだ。

まだあどけなさの残る顔を赤らめて、とてもないというようにしているところは少年らしい可愛らしさにあふれていた。

シャツを着る時に背中をむけたが、そこには黒いお灸の跡が点々と苦斗のあとを刻んでいた。背中全体は充血して赤くなっていた。

その背中にはまた一段と魅力のある若い肌の美しさであった。



1

S君は私の古い麻雀友達である。齢は四十才を僅か越えたくらいだろうが、学生時代にはスポーツも万能選手だったと自称するだけに、押し出しも堂々としていてちょっとしたハンサムボーイである。麻雀の方の腕はまあまあという程度だが、とにかく陽気でにぎやかで、三味線も適当にひくし、負けても決してクヨクヨなんかしない。雀友としてはまことに愉快なメンバーの一人で、誰からも好かれるというタイプの男である。市内の一流会

打明けられた秘密

S 夫妻の一面

藤 間 精

社の総務課のベテラン係長で、課長昇進も目前という、まづどこから見ても結構づくめというのが彼のアウトラインである。実家は辺鄙な山奥の大地主ということで、発電ダムの補償か何かで大金がころがり込んだらしく、三男坊の彼もその余慶で、鉄筋三階建の住宅を建ててもらって悦に入っている、いわばまことに運のいい恵まれた男なのだ。

ところがよく似たもので、彼、女房運だけには恵まれぬらしく、最初の恋女房は五年目にアッケなく病死。二度目にもらったのが数年前に交通事故で即死。今の奥さんは三度目

で、子供は一人もないというのだから、家庭的には決して恵まれているとはいえない。

でも彼とつき合っている限り、そんな家庭の不幸など全く感じさせない。ノンキで明るくて楽しい男なのである。特に最近妙に浮き浮きして、ますます調子のいいのは、ひょっとしたら今度の奥さんがよっぽど気に入っているのだぜと、仲間うちでひそかに噂していたものだが、今度の奥さんというのは、なるほど美人でグラマーで、短大出というだけあって知性的な明るさもあり、グリーン系のワンピースがよく似合う、若さでピチピチしてい

るといった感じで、たまに会う我々悪友にも決して相手をそらさない愛嬌もじゅうぶんという、まず羨ましくなるような、すばらしい奥さんなのである。

悪友たちの中では私など割合点数のいい方らしく、新築の家に呼ばれて、ごちそうされた実績も幾度かある。私の方にも、凄く新鮮な感じのこの奥さんと、親しくおつきあいしたいという気持が手伝っていたことも事実である。

こんなおつきあいが一年くらい続いたある日。それは昨年の暮も押し迫った十二月の日曜日のおひるすぎだったが、全くヒヨンなことから、奥さんとの距離が一べんに縮まってしまうことになってしまったのである。といっても彼の眼を盗んで妙な関係になったというのでは決してない。ただ普通の状態では、良家の奥様として絶対に口に出来ないと思われることを、洗いざらいすっかり私に告白してしまったという次第なのである。

その日は前々から、所用で彼の家を訪問することを約束しておいたのだが、幸か不幸か彼が急な会社の用務で前日大阪に出張してしまったそうで、私が訪ねたときははからずも奥さんひとりということになったのである。

彼女も私の約束を承知していたものの、すっかりして連絡しなかったことをひじょうに気の毒がり、まあお茶ぐらいというので、ムリに応接室に招じ入れられたのだ。私もいささかガツカリしながらも内心満更でもない気持で、彼自慢の豪華なソファに深々と腰をおろしたのだが、たまたま奥さんが、コーヒーか何か作るために台所に立った間に、何気なく傍のマガジンラックからつまみ上げた雑誌が、何とこれがSMを看板にするめずらしい風俗雑誌の一つだったのである。

実は私自身十数年前上京した際、本屋の店先で見つけて物好き半分に読んで見てからすっかり病みつきになり、その後本社に申込んで直接愛読したこともある雑誌だけに、内心少なからずドキリッとし、身内が一時にカーッとするような昂奮を感じたのである。

麻雀をしている時の彼からも、まだ少女の面影を残しているような新鮮そのものの奥さんのイメージからも、どうもこの雑誌のカラーとは結びつくものが感じられない、でも現実にその雑誌がこうしてここにあるのはどういうことなのか。

しかし考えて見ればそう不思議なことではないかもしれない。現に私自身この方面では

相当マニア的になっているけれども、家族を含めて誰一人として私のその半面を知るものはない。私も、奥深く潜んでいる淫靡な一面とは全くうらはらの、明朗で善意に充ちた良識ある紳士として立派に罷り通っているのである。彼や彼女がこんな半面をこっそりかくしもっていても、別に不思議がることはないのかも知れない。

私はかねがね、人は皆大なり小なり、SMへの性向を持っているのが普通だと思っている。ただ心の奥深くに眠っている本能にも似たこの性向を呼び醒まされる機会に、いつ巡り合うかのちがいに過ぎない。映画や雑誌の挿絵に縛りシーンなど出てくれば、内心ドキリッとしながら、うわべは取りすました顔で「そんなもの見る眼はもぢません」というようなフリをしている、そしてそれが紳士や淑女の教養というものだときめこんでいるのが真相じゃないかと思っているのだ。私もふとしたことから、いままで眠っていたのかも知れないSMの虫が、いっぺんに呼び起こされてしまったが、さすがに事が事だけに、誰に打ち明けるわけにもいかず、悶々というほどでもないが、かなりもてあましていたのである。私はラックの中の雑誌を見つけた瞬間、ひ

よっとしたら彼等夫妻とこのミチでの話相手になれるかも知れないというほのかな期待をもったのも、長い旱天に慈雨を望むような焦燥感がたえず潜在的にあったからかも知れないのである。

私は出されたコーヒーを飲みながら、さりげない世間話などしているうち、思い切った例の話題を持ち出して見た。

「奥さん。この雑誌、お宅でもとってらっしゃったんですか。実は私も前から読んでたんですが、最近はこちらとごぶさたしてしまってるんです。もしあいてましたら、これ貸して頂けませんか」

一気にこれだけ喋ってしまった、自分ながら顔が上気して、背中に汗が流れるのを覚えた。奥さんの方は、みるみる内に真赤になって、気の毒なくらい、あわて出したものである。

「そんなもの、——そこにあったのですか？ あの人ったら仕様のない、——別にとってるというわけでは——」

もう、しどろもどろである。

「奥さん、別に恥かしいっていうものじゃありませんよ」

私は度胸をきめて、例の私のあやしげなS

M論をとぎれとぎれに、しかし誠意をこめて披露に及んだのである。

「人間って誰でも心の奥底にはこんな気持をもってるものだと思うんですよ。川向こうの火事は大きい程面白いといいますが、ヤジ馬根性やコワイもの見たさの心理など、結局征服本能や防衛本能の変形で、すべての人間に共通した心理だと思うのです。映画などでも芸術的な格調の高いものを求める反面、西部ものや、アクションものもがもてはやされるのも、結局は自分の奥に潜んでいる征服欲の具体的な表現を楽しむ気持だと思うのです。プロレスやプロボクシングで血を流す場面を、案外女性の方が喜ぶといわれるのも、もともと弱い立場の女性が勝利感や征服感を何かで満足させたい欲望が男性にくらべて強いのだと考えば説明がつくと思うのです。若い人ならとにかくS君や奥さんがこの雑誌を読まれることは、ちっとも不純でも不道德でもないと思いますし、別に恥かしがられることはないと思うんです。私も読んでるからいうわけでもありませんが、これ位の刺激があった方が、ずっと人生は、楽しいと思ってるんです」

彼女は私に雑誌を見つけられたことを凄く

羞かしがってるし、うっかりほうり出しておいた不用意さを後悔している様子なので、私も奥さんを何とかしてその「羞かしさ」から解放してあげねばという気持、私も含めて、この種の趣味が決して恥ずべきことでないということの立証に大わらわだった訳なのである。

それから一時間ばかりもひとり喋りまくったが、何を言ったのか自分でもあまり覚えていない。しかし最初真赤になって、その場にはいたたまれないような、コチコチの風情を示した彼女が、だんだんほぐれてきて、私の大長講の終る頃には、すっかり安心したように、うなずいたり、ニコリほほえんだり、相槌さえも打ってくれるようになったのは大成功であった。

私が巧みにあげる例話や、私自身の真偽と里ませた体験談などで、すっかり私をそのミチの先輩とでも思い込んだのだろう。二度目のコーヒーを入れた頃にはすっかり打ち解けてしまっ、むしろ積極的に感想や意見なども言えるまでになったのである。女性なんてヤッパリ甘いものなのかも知れない。

「私、一、二年前でしたか、主人のカバンの中から偶然この雑誌を見付けて、退屈なまま

に読み耽っているうちに、何となく妙な気分になり、むしろ私の方から頼んでこの雑誌をとってもらうようになったんです。この頃じや一寸人には言えないようなこともすることがあるんですよ」

「奥さんも安心したとなると、まるで水を得た魚よろしく大胆になってくるのである。私も適当に水向けながら少しづつ羞恥のベールを脱がせるように巧みに誘導していくことを忘れない。」

「何しろ二人っ切りの所へ、このうち大き過ぎるでしょう。鉄筋というだけで何をして外には分らないという安心感があるもんですから。……思い切って私たち二人の生活お話ししちゃおうかしら。でも恥かしいな」

と彼女、コケティッシュなしぐさで茶目っぽく首をかしげて見せるのである。

「別に恥かしいことなんかないですよ。どんなことかしらないけど、私だっていつもとてもないこと空想したりしてるから大ていのことには驚かないと思うな。でも私なんかせいぜい空想だけしか出来ないけど、奥さんなんか思ったことをなんでも実行できるんだから羨ましいみたいなのです」

いよいよいい線に乗ってきたのだ。奥さん

の気の変わらないように私もここを先途と水を向けることに懸命だ。

「じゃザックバランにすっかりしゃべっちゃいますわ。でも主人にもほかの人にも、絶対しゃべっちゃいやですよ」

こうして彼女のしゃべり出したのが、次のような彼女ら夫妻の世にも楽しい生活振りなのである。

思うことを自分ひとりの胸の中に秘めておかねばならぬということは何とも苦しく味気ないものである。彼女もきつとそうだったに違いない。それが、はしなくも私という水を得、妙な機会を得て、まるで堰を切った奔流のように流れ出してしまったというのが、この告白なのである。

他に漏らさぬという約束ではあったが、せっかく聞いた楽しい物語りを私だけが独占しているのもいかにも惜しい感じ。世の同好諸氏にこっそりおすそわけしようというのがこの拙稿の趣意である。表現の便宜上、彼女の「手記」という形を採んだこと、言葉の足りない部分は私の想像で若干補ったことを予めおことわりしておく。

2

私たち夫婦って、少し変わってるといえば変わってるのかも知れませんがね。

もともと主人は平凡なサラリーマンだし、私も学校を出てから地方銀行の窓口係として六、七年も勤め、婚期のはずれかけるところへ、お世話下さるかたが現われたってわけ。三度目ということも、齢が十幾つちがうことも承知の上で、かねて仕事の上で顔見知りだった彼とスナリ結婚にふみ切った。ここまではどこにでもある平凡な夫婦というだけですが、子供もなし、誰に遠慮もいらぬ二人切りの生活、それに経済的には割合ゆとりがあり、おまけに棚からぼた餅みたいに恵まれました環境が、つい退屈し切っていた二人を、こんな「生活」に誘い込んでしまったということなのでしょね。

キッカケになったのはもちろん、偶然見付けたこの雑誌だったことはたしかですが、私にも彼にも、もともと心の奥深くには、きつとSMの素質みたいなものがソツと潜んでいたと思うんです。私たちの生活の中にその雑誌はいり込んできてからは、今までのような淀んだような退屈さはスッカリ影を消しました。夕飯がすむと、きまって二人でSやMについて話し合うようになりました、ドキド

半するような楽しさについて時間のたつのも忘れるくらいでした。主人の麻雀の回数も目立って減ってきました。

誰にも分らない二人だけの楽しみ、二人の間だけに通い合う共通のよろこび、それは二人の仲を急激に接近させてしまいました。晩婚の場合、ともすれば理性的な冷たさや、すいもあまいも知っているといるというある横着さが二人の間に坐りこんでしまつて、どうにもシツクリ来ないということもしばしば耳にしていきましたが、私たちの場合は、偶然に見つけたすばらしい刺戟剤のおかげで、まるで高校生のような初々しさが甦つて、二人の心もからだも隙間もないほど、ピッタリくっつき合ってしまったのです。

キザな表現ですが私は完全に彼の一部、彼もまた私の一部なのです。彼の求めることなら何をしてもいいと思いますし、彼も私のいうことは何でもきいてくれるのです。

私はそのうち彼とただ話し合つてただけでは物足りなくなりました。

「ねえ。ちょっと私の両手を縛ってみて下さらない？ その方がもっと刺戟が強くなると思うんだけど」

ある晩、私は思い切つてそう彼にねだつて

見ました。彼もきつとそう思っていたのにちがいないけれど、さすがに彼の方からは言い出しかねていたのでしよう。

「そうだね、君さえよければ……じゃ軽くやってみるか」

素晴らしいながら、ダンスの抽出から私の絹紐を見つけてきて、背中に重ねた私の手首をソツと縛ってくれました。

「イヤーン、もっと強く縛らなきゃ。胸の上も縛らないと気分が出ないわ」

私は精いっぱい甘えながら縛ってもらいました。初めて経験する快い被虐感に、ゾクゾクするような興奮を味わいましたし、縛る彼の手も心なしかふるえているようでした。顔は二人ともスッカリ上気しています。縛り終えたあと、彼は私をシツカリ抱きしめて、嵐のような口づけをしてくれました。いまだかつてない強烈な接吻です。

両手を後手に縛られて、無抵抗の姿で受ける口づけの甘さ。とても、ふだんのものとは比較になりません。

それからの二人はもう無我夢中でした。彼は映画のシーンに見るように、縛られた私を軽々と抱き上げて、ベッドに運びます。荒々しく下着をはぎ取ると、まるで飢えた獣のよ

うに私に襲いかかるのです。そのあとのことにはよく憶えていません。全身が一瞬硬直するような激しい刺戟、頭の中がクラクラするようで、何もかも分らなくなってしまったのです。

こうして私たち二人は「新しい生活」のよろこびを痛いほど心と身体に刻みつけられてしまったのです。

それからの私たちのSMゴッコは、弓をはなれた矢のように、加速度的に、その程度を高めました。スーツの上からの縛りでは物足りなくなり、素肌に直接縄をかけるようになりました。初めはブラジャーをはずすことさえためらわれたのに、あとには求められれば一糸まとわぬというのもめずらしくはなくなりました。

愛し切っている彼、信頼し切っている夫の手で、一枚一枚脱がされていく気持。アラレもない羞かしい姿で、次々縛りあげられていく間のゾクゾクするような期待。そしてその後で彼から与えられるであろう責めと愛への没入。私の胸は充ち足りた幸福感に大きくふくれあがってくるのです。

縛りかたも二人で随分研究しました。高手小手というのは凄く苦しいものだということ

も分りました。亀甲縛りは、あとで菱形を作るときグッと吊り上がる両腕の緊張感が、痛いには痛いけど、すぐ快感を誘うものだということも知りました。肌に傷をつけてはと彼の心遣いで、縄は絹紐や綿紐を多く使いますが、時々使う麻縄やロープの荒々しさもなんともいえません。私の一番好きなのは革の縄紐の締め具合ですが、肌にクッキリ跡がつくのが欠点です。彼は太腿に縄がけするのが好きらしく、お仕置の意味の加わったときなど、必ずこれを加えます。腿に深く喰い込む独特の被縛感を受けたものしか分らないでしょう。でも私もきらいではないのです。歩くことも出来ないという気持と鮮烈な痛覚は、シビれるような陶醉を覚えてくれたからです。

ムチ打ちの痛さも思ったより激しいものです。雑誌などによく皮ベルトでメッタ打ちするなどと書いてありますがとんでもありません。私たちは細いナメシ皮の紐をそれもひかえ目に使うのですが、それでも飛び上るような痛さで、とても十回とはがまんができません。お灸や縫い針もやって見ました。小さなお灸でも相当に熱いものですね。ことに眼の前ですえられる時は、実際の熱さより、

今火をつけられるという脅迫感の方が、先に責めの効果をあげてしまうのです。柔らかな所を針の先でチクリチクリとさされるのも痛い痛さを感じずるもので、十何回くらいでクタクタに疲れてしまいます。

私たちの場合、私が「やめて」といえば、やめてくれる約束になっていきますが、これに猿轡が加わると状況はたちまち変わってしまいます。歎願の表現は身体と眼だけに限られてしまうからです。彼は時々意地悪をしてわざと私の歎願に気づかないフリをして、プログラム以外の責めまで執拗にくり返すことがあります。そんな時は本気で彼が憎らしくなり、猿轡まで許したことを後悔することがあります。でも本当の責めは、やはりすべての抵抗の手段を奪われていてこそ真の醍醐味があるのかも知れません。手も足も縛られ、猿轡までかけられた無抵抗のからだに、予期しない数々の責めを次々繰り返えされるとたしかにその時には痛さ苦しさで悶えのたうちますが、その後に残る余韻のような後味は何ともいえないものです。元来責めというのは常に責められるものの意思に反して行なわれるのでなければ意味がありませんね。合意や妥協があっては本当の責めではないかも知

れません。

私たち夫婦の間の責めっこには、初めっから愛情と信頼という基本線があるのです。どんなにはげしく責められたとしても決してケガをさせたり、傷跡を残すほどのことにはならないことが最初から分っているのです。その範囲での責めなら、一切のわがままや妥協を封じての、責めを求めるべきかも知れませんが。時には暴力でねじ伏せられて——という状況のもとで、一切の抵抗を断ち切られた惨めな責めに屈服しなければ、ほんとうの責めの味とはいえないのかも知れません。私たちもきつと近いうちにそんな風に成長していくような気がします。この頃彼の責めっぷりの中に、時々「遊戯」を超えたキビしさを感じ取ってドキッとすることもあるし、私も責めに泣きながら、心の中で「もっと、もっと」と求めている自分を発見してハッとなることがあるのです。彼の嗜虐性も私の被虐性もこのごろびっくりするような速度で成長していくのが分るのです。大丈夫とは思いますが、ちょっと心配になることもあります。このままの調子で、どんどん進んでしまうと、あとには一体どうなるのだらう。時々新聞に出る「変質者」のような性格になり、わるくする

と、社会的な廃人になってしまふのではないだろうか。私も急に心配になったので、彼と一晩このことでゆっくり話し合ったことがあります。そして結論は「少くとも私たちに關する限り絶対にその心配はない」ということになったのです。

私たちのしていることの基調は「憎しみ」ではなくて、絶対の「愛情」なのです。相手から「奪う」のではなくて、お互いに「与え合う」のです。しかも二人の間には十分な教養も知性もある。いつでもブレーキをかけることの出来る判断力もあるのです。ただ平凡のくり返しだけではマンネリズムに陥り易い日常の生活に新鮮な刺激を呼び込んで、「骨まで愛する」新しい愛情の型式を二人だけで実験し創造する楽しいゲームに過ぎないのだと理解すれば、何の不安も心配もいらなわけです。そう割り切ってから私たちの「新生活」は、また一段と楽しさが加わりました。

それからまもなく彼の提案で、彼の指定した日には、彼が会社から帰宅する時間に、私は全裸にサロンエプロン一枚という姿で、彼を迎えねばならないことになりました。短いサロンエプロンだけでははいっさい身につけることを許さないのです。胸もとをむき出

しにすることはいくら夫の前でも羞かしいものですが、それにもまして後向きになったときにお臀を見られているという意識は、身を切られるような羞恥心を伴うものです。その晩はそのままの恰好で、お掃除からお炊事など家事いっさいをしなければならぬのです。

この思いつきは、凄く彼を喜ばせたようです。私も嚴重な戸締りや、念入りにしめ切ったカーテンにもかかわらず、どこかで誰かに見られているような不安が絶えずまつわりつき、縛られている時とはまた異質なある被虐感が、全身の肌を這いまわって、しらずしらず快い被虐感に引きこまれてしまふのです。

すべての家事が終わったあと、彼に後手に縛られてから「講評」というのを聞かされます。時には「判決」などという言葉を使うこともあります。彼が帰ってからの私の言動のいっさいから、何かいんねんをつけて、これから始まる、責めの口実にしようというのです。今日の料理は塩からかったとか、台所でスリッパをはこうとしたとか、椅子にかけるときお臀に手をあてたとか、他愛もないことがすべて「罰」の対象として数え上げられ、お仕置の種類がきめられます。私は神妙な顔

をして、その「判決」をきき、「喜んでお受けいたします」と、服罪の意志表示をしなければなりません。そしてそれからその夜のお仕置ゲームが始まるのです。

この頃お仕置のための責めはすべて口を封じて行なわれます。猿轡も色々やって見ました。ギューギュー詰め込むと随分はいるものだということが分りました。ローぱいに詰めこまれて、上から二巻三巻き嚴重な猿轡をかけられてしまうと、無抵抗感というか、無力感というか「囚われ」の実感が極度に高められて、責めへの屈服感がひしひしと全身を捉えてしまふのです。もう何をされてもどうすることも出来ません。どんなに痛くても、どんなに苦しくても許しを乞う手段がないのです。眼がどんなに訴えても、身体がどれほど悲鳴をあげていても彼から無視されてしまえばそれまでなのです。すべてをあきらめ、責めに堪えて、お仕置の終わるのを待つだけなのです。この間の惨めな被虐感、これが私にとっては、また堪らない桃源境でもあるのです。惨酷なお仕置が終わると、きまって、「ごめんごめん、痛くなかったかい？」などといったわりながら、妻に対する最良の夫として愛してくれるのです。そんな時、こ

のまま死んでもいいと何度思ったか分りません。

いつだったか、彼があとで「帆かけ船」と名付けた特別な縛り方をされたことがあります。後手であおむけに寝かせ、両脚を胸に押しつけて二つ折りにし、両膝の間から頭を出させてうしろで両足を繋ぎ合わすのです。膝から先の両足を頭のうしろ側におっ立てた恰好が「帆かけ船」に似ているというわけなのです。不自然に押しまげられた上体がもの凄く苦しい上に、とんでもない羞かしい恰好になるのです。そんな形でムチやお灸でひとしきり責められました。その時のシビれるような苦しさや喜びは今でも忘れることができません。人間の神経の堪えられる限界だったかも知れません。

さすがの私も翌日は一日寝た切りでした。身体がフシブシはきりきり痛むし、身体中に二日酔いに似たどんよりしたけだるさがよどんでいて、どうにも起きあがれないのです。そのくせあの時の、完全な無抵抗状態の喜びは、今思い出すだけでも電撃のような身ぶるいを感じるのです。

私はある雑誌の中で「強姦願望」という記事を読んだことを憶えています。こんどの

経験で、そのような気持ちが初めて分ったような気がします。女というものはその状態をどんなに望んでいたとしても決して自ら求めるということをしませんでした。全く止むを得ない状況でそうなってしまうのだと説明しようとするズルさがあるのです。そんなズルさがこんな心理に発展するのでしょうか。でも実際の場合にはそんなロマンティックな雰囲気などあるはずはありません。それこそ生命がけで抵抗もするでしょうし、とんでもない悲劇になってしまうおそれだってあり得るのです。ただ私たちのような条件のとなつて、ただ私たちに限って、それに近い雰囲気を経験できる可能性があるということを知ったのです。

去年の夏の初めごろでした。連休を利用して私たちは、自家用車での遠出を計画しました。行き先は奥能登海岸、帰りは加賀温泉郷で一泊という豪華プランです。私もすっかりはしゃいでしまつて、新しいスーツをかうやら、ドライブレ用のお料理を勉強するやら、一週間も前から、まるで遠足を待つこどものように、胸をわくわくさせていたものです。さて当日の朝、準備もすっかり出来たころ、突然主人が、こんなことを言い出すのです。

「ねえ君、平凡にドライブするだけじゃつまらないから、今日は一寸変わった趣向でやってみようと思うんだけど……」

「変わった趣向って？」

私もとっさには彼のことばの意味が分りませんでした。が、ニヤニヤ笑っている彼の顔付きからすぐ「さてはまた何か考え出したな」と気がつきました。

「とにかく、その洋服全部脱いでもらいたいんだ。もちろん下着も全部だよ」

私もちよつとためらったけれど、とにかく彼のいいなりに従うことにしました。せっかく取り合わせまで苦心して用意した衣類一切を脱ぎすてると、彼はチャンと用意してあった絹紐を使って、手際よく後手に縛り、腰紐にしっかりと繋ぎとめてしまします。おまけに細目のしなやかな私の革ベルトを使って股間縛りも加えるのです。脱いだ衣類はていねいにたたんで別に用意したボストンに詰めこみ、私にはサマコトだけを着せかけて、さして出発なのです。夏の初めとはいいいながら、素肌に直接触れるコート裏地のナイロンの感触は、さわやかというよりむしろ肌寒さを感じます。主人と並んで助手台に坐った私は、締めつけられた縄目に注意を奪われて、前方

の景色も、よく眼にはいりません。

今年の春買い替えたばかりのスポーツカー型の新車は、初夏の舗装道路に快いタイヤの摩擦音を残しながら、快適に走り続けます。彼は運転歴十何年を誇るベテランと自称はしていますが、こんな姿で、もし交通事故でも起こしたらと、ふと心配になります。彼の方は一向おかまいのないような調子で、

「どう、ご気分は？」

などと話しかけたりして、すごくご気嫌なのです。あとで聞いて見たら、やっぱり彼も事故のことを一番心配して、随分運転には気がつかったそうです。

途中時々停車して、私にチョコレートなどを食べさせてくれます。ソツとコートの中に手を入れたりしますので、くすぐったいたらありません。でも馴れるにつれてこんな旅行の楽しさがゾクゾクするような幸福感となっていっぱいにひろがってきます。彼の素適なアイデアに改めて敬意を表したい気持ちになったものです。

車は長いなわて道を走り、山陰をまわり、いくつもの町や村を走り抜けます。三時間ものドライブも、それほど退屈しないほど、楽しい彼のサービスも行き届くのです。

とうとう日本海の見える海岸に出ました。すばらしいマリーンプールが、陽の光にキラキラ輝いて、目の覚めるような鮮やかさです。

盆石のように美しい安山岩系の岩肌が屈曲の多い海岸線に沿って真白な磯波の中に立ち並び、形のよい松が梢をつき出して、まるで緑が滴り落ちるようです。全く絵にかいたような美しさです。しばらくは縛られているのも忘れて沿線の風景に見とれていましたが、ふと困った事に気づいたのです。急に生理的な要求が頭をもたげ始めたのです。そういえば家を出てからも四時間あまり。途中でジュースもジャンジャン飲んでいました。催してくるのは、むしろ当然のこと。今まで景色の美しさに見とれて、つい気がつかなかっただけのことなのでしょう。

「ねえあなた、わたしトイレに行きたくなっただけだ」

私は思い切って彼に相談しました。

「じゃ、どこかへ停めるからユックリしといで」

彼、平気な顔してそういうのです。とんでもない、こんなところで、どうしてできるの。私はそのとおり彼に訴えて、何とかしてくれるよう頼みました。

「だったらもう少しガマンするんだな。どうせどこかでお昼にするから」

彼は真面目な顔して、意地悪をいいます。でも、どうしようもありません。考え出すともう堪まりません。だんだんガマンの限界が、近づきます。もう景色どころじゃありません。早く人里離れた所へ行きたい気持ちでいっぱいです。

それから三十分位も走ったでしょうか。車は急カーブで右に曲がり、松林の中の小道を登り始めます。さすがにここらでは車の姿も家の影もありません。ようやく手頃な広場に出ました。前面の木の間から、碧い海がキラキラ光って見えます。周囲を十分確かめた上で、ここを昼食の場所にきめました。

何より先ず、生理要求を処理しなければなりません。事を降りるなり、両手の縄をいって頼みました。ところがなんと彼ったら、「解かなくなっちゃったよ」

という、私の背をかかえるようにしてサッサと奥の方へ連れていくのです。瞬間、私はカーッと身体中が、熱くなるような戸惑いを感じましたが、どうすることも出来ません。草深い中のちょっとしたクボミを見つけると、彼は後からサマコートを持ち上げて合

図するのです。私はガマンにガマンをしたあとです。もう恥も外聞ありませんでした。その時の奇妙な気持。羞かしいような嬉しいような、くすぐったいような妙な気持なのです。

もとのようにベルトを締めると、さてお弁当です。私だけは、小さな木の根元に坐らされ、サマコートを脱がされて、はだかのまま木に縛りつけられました。お臀の下芝草がチクチク痛いけれど、ガマンのできないほどでもありません。それより、

「大丈夫？ 人がきたりしないかしら」

私にはそれが心配なのですが、

「大丈夫さ、誰もきやしないさ。もし来たって要領よくやるから」

彼はサマコートをすぐそばにおいて、自信タップリなのです。おひるの食事は、でもかなり楽しいものでした。いっさい彼が世話をして口に運んでくれるのです。時には口うつしもしてくれます。涼しい風がたえず素肌をくすぐって、すばらしいさわやかさです。

食事がすむと早速出発です。温泉宿へは六時と予約してあるからです。帰り途も素晴らしい絶景の連続で少しも退屈しません。でも温泉町に着いたところには快い疲労が全身を包ん

でいました。いよいよ旅館につきました。車をパークしてさて降りる段ですが、旅館の人がみんな私に注目しているようで思わず顔が赤くなってしまいました。それもそのはず、腕も通さずにサマコートのボタンだけかけていることも不自然なら二つのポストンから私のハンドバッグまで主人に持たせて、私が手ブラというのも不自然なはなしです。女中さんの案内で二階の奥まった部屋にはいるまでもう気が気じゃありませんでした。女中さんも、キット変だと思ったに違いありません。

やっと後手だけといってもらって、素肌のまま宿の浴衣に手を通したとき、ようやく心地がついたようで、急に疲れを感じました。朝家を出てから十時間近くも縛られたままだったんですもの。お給仕をしてくれた女中さん、私のお洋服類が何もないことに気がつかなかったかしら、など思い出すと、食事の間がバカに長いように感じ、早く二人切りになりたいと思っているのに、彼ったら意地になってゆっくりゆっくり食べているんです。

「僕たちドライブで凄く疲れてるからすぐ床をとって下さいね」

彼のことにばに女中さんクスリとしたように思ったけど、とにかくサッサと床を敷いて、

出て行ってくれたので、ようやくホッとすることができました。女中さんには用があったら呼ぶからといってあるので、入口の格子戸に鍵をかけてしまうと、もう明日の朝まで、この部屋は私たちだけのお城です。バスもトイレも部屋についています。彼はさっそく私の浴衣をはぎとり、再び後手に縛ってしまいます。驚いたことにポストンの中には責め道具一式全部もってきてるのです。彼の用意のいいのに二度ビクビクしてしまいました。

その晩はとうとう縄もといってくれず、布切れ一つ許してはくれませんでした。バスもトイレもすべて彼まかせです。ふだんの責めの総おさらいのように、次から次と色んな責めがくり返されて、グッタリ疲れ切った身体を床に横たえたのはもう夜中の二時を過ぎた頃でした。

私は三カ月ほど前でしたか、素晴らしい計画を思いつき、さっそく彼に相談して、ムリヤリ承諾させてしまいました。考えて見れば私たちの「新生活」では、いつでも彼が加害者で、私ばかり被害者側にまわっているのです。不公平なはなしです。もちろん彼は、私を苛めることに興味をもち、私は苛められることに喜びを感じているには違いありません

が、SとMとは表裏一体といいます。その逆の場合だってあっていいはずです。私だけ苛められてる法もあるまい、彼にも少しは不自由をさせてやらなければ——というのがこの思いつきの発端なのです。計画というのは私の生理期間中だけはお互いの立場を逆にするというアイディアなのです。毎月の生理の始まった日から完全に終る日まで、彼の方が私の命令に絶対に服従すること。つまりその間だけは私が女王様、彼は忠実な私の奴隷になるのです。はじめのうちなかなかウンといわなかったけれど、月のうち精々一週間足らずの辛抱、あとの三週間は今までにもまして、大手を振って何でもできるというのだから、彼としてもイヤと言えた義理じゃありません。とうとう承諾させて、念のため作っておいた誓約書にも署名捺印させることに成功しました。もしこの誓約に違反したら、その後の三週間、彼の要求をボイコットすることもできるし、家事いっさいのストで報復することも出来るのです。

さてその第一回の女王様週間がきました。私は心を鬼にして、思い切って苛酷な条件を彼に宣告しました。まず週間中は一さいの自由な食事を禁じます。食べものは私が与える

私の生理入りのパンだけ、飲みものは原則として私のお小水だけと決めます。したがって私は週間中パッドの代りにやわらかいフランスパンを使います。ジットリと生理を吸い込んだパンに、栄養補給のためのバターやジャムをはさみこんだものが唯一の彼の主食なのです。もちろん、ビタミン錠や整腸剤には十二分に気を配ります。飲みもの用としての私のお小水はそのために買った大型ポットに保存しておいて、ジュースやウイスキーを加えて与えるのです。これには彼も驚いたようです。最初は本当におこったような顔をしましたが、私の毅然たる決意を見て、とうとう屈服してしまいました。はじめの中、気の毒なくらいに努力してコワゴワ口にしていたようですが、馴れっこわいもの、この頃では唯々諾々として、むしろおいしそうにさえして食べています。

「愛する君のものだと思えば、キタナイなどとは思わないけどね」

ですって。うれしいみたい、かわいそうみたいな妙な気持です。

次に私はこの週間中、彼に下着の着用を許さないことにしました。その代り私が苦心して作ったオムツカバーをさせて出勤させるの

です。裏ゴムの丈夫な布地でできていて、ものところは二重のチューブ止めにし、バンドには小さな錠前をつけました。これで彼は勝手にトイレに行くことはできないのです。どうしてもガマンできないときはカバーの中へしてもいいけれど、漏れる心配はないかわり、歩くとたびたびゴボ音がして堪ったものじゃないでしょう。自然に外での飲みものを極度に警戒することになるのです。

家へ帰ると、すぐ裸にさせてお掃除や、家事いっさい私の命令のままにお手伝をさせます。オムツカバーはお風呂の時間までとってやりません。楽しいはずのお夕食も、私の分は彼に手伝わせて作ったおいしいお料理ですが、彼には、私の体臭入りの特別料理と、特製ジュースだけなのです。彼の悲しそうな様子、じっとガマンしているかわい顔を見ると、幾度決心が挫けかけたか分かりませんが、とうとう勇気を出して押し切ってきました。実はこの期間苦しませれば苦しませるほど、期間明けの時の彼のファイトに拍車をかけることになり、私としてもほのかな期待感でいっそう楽しみがますますです。

私の女王様週間も、これで三回経験しました。人を苛めて、膝下にひざまずかせること

もなかなか楽しいものですね。大きな図体の彼だけど、その間だけはまるで小犬のように可愛いのです。裸にして縛っておくこともできます。ムチやお灸で、悲鳴をあげさせたり、足の裏をペロペロなめさせたりすることもできるのです。でも私のパンに赤いものが混らなくなったら、さあ大へん、とたんに主客が逆転するのです。たちまち私は飢えた猛獣の前の獲物のように、メチャメチャにされてしまいます。その瞬間から私は女王様の座から惨めな長期刑の女囚人に転落してしまうのです。少くとも二、三日くらいは毎夜のよう

ついに最近のことです。これだけはこんな生活を始めから始めてのいやな経験をしました。土曜の午後だったのですが、少し早目に帰ってきた彼は、すぐ私をはだかにすると、いつものように、ていねいに縛り始めたのです。亀甲縛りの後手に縛り上げると次は猿轡です。口の中いっぱい私のパンティをギューギュー詰め込んでから、長いなめし皮で三巻きもしてすぐ厳重な縛り方なのです。おまけに今日に限って眼隠しをかけ、耳の穴まで何かにいねいに詰め込むのです。途中からちょっと不安になって抵抗して見ましたが、

です。一体何を企んでるのかしら。こんな不安な時間がどの位過ぎたのか、ふと玄関のブザーが鳴ったような気がするのです。いつもならゲーム中は留守のフリをして絶対出ないことにしているのに、今日に限って彼はイソと玄関に出て行った気配です。まもなく主人が誰かを伴ってはいってきたような気配がします。これらはどこまでも「気配」であって、五感を通じてのものではないだけに、余計第六感のようなものが、敏感にはたらい

を覚悟しなければなりません。朝出勤する時から、はだかで柱に縛りつけられたまま、一日中トイレを禁じられてしまったこともあります。両足を開いて天井から吊され、花瓶や燭台の代わりをさせられたこともありました。でも、私は楽しいのです。こんどは、どんなことされるんだろうという期待、痛くても苦しくても、その責めの一つ一つににじみ出ている彼のむき出しの愛情、それこそ文字通り「骨まで」愛されているという実感をひしひしと皮膚に感じて、ほのぼのとした幸福感に浸ってしまうのです。

これでは私の五感、余すところ鼻からの嗅覚だけ、それも私自身の体臭がヤケに強くにおってくるばかりで役に立たぬとすれば、私はもう完全に外界から遮断されてしまった形なのです。そのあと、乱暴に身体を押しまげられながら、とうとう例の「帆かけ船」の形に縛り上げられてしまいました。そのまま部屋の隅っこにおしやられ、上からシーツのようなものがかけられました。一体どうする気なのだろう。いつものように責めが始まる様子もない。どうもいつもとは様子がちがうの

の身体はそのまま抱え上げられて、テーブルらしいものの上に置かれたようです。どうも側にいるのは主人だけではなさそうです。きつと誰かがいるのです。とぎすまされた私の第六感がそう教えるのです。やがて上を蔽っていたシーツがパツととり去られました。とんでもない惨めな姿が誰か知らない他人の前にあらわにさらされてしまったのです。後手の肘が左右にはっているため、この縛り方をされると、それこそ不思議なほど身動き一つできません。全く一つの置物か荷物のようなものになってしまいます。女の一番恥かしい姿をまともにむき出しにし、ズロースなんか

かぶせられた頭のうしろに、足先だけ二本ニョキッと押ッ立てているブザマな私の姿。もう目もくらむような羞かしさなのです。おまけに口も眼も耳も鼻も、全部封じられて抵抗どころか、身じろぎ一つできない、このときの屈辱感はまさに想像を絶するものになりました。テーブルの横では思いなしか彼と「誰か」がクスクス笑いながら、何か話しあっている様子なのです。一体誰なんだろう、男なのか？ 女なのか？ ひょっとしたら彼には私に隠した女でもあったのではないだろうか。そして二人で私をなぶりものにして楽しんでいるのではないだろうか。私の疑心暗鬼は閉じこめられたくらやみの中で際限もなくひろがっていくのです。

やがて、指先が私のからだのあちこちをつつきはじめました。冷たくて細い指先です。それが私の一番感じの強い所を次から次へとつつきまわります。せめて掌でさわってくれれば男女の判別くらいはできるかも知れないのに……。突然右ももの裏側あたりに針でさされたような鋭い痛みを感じました。針かお灸か分かりません。伸び切っている皮膚には痛さと熱さの区別はつきません。とにかくその痛覚は普通とはちがった鋭さで神経につき

ささってくるのです。つづいて左もにも同じ痛さが……。電気にふれたようなショックが瞬間に全身を駆け抜けます。その後は所きらわぬむごい責めが柔らかな所ばかりねらって次々繰り返えされました。私が示し得る反応は、そのたびピクッと飛び上るような筋肉の痙攣と、地の底からもれるようなかすかなうめき声くらいのもので、抵抗の手段など全くないのです。いつもの責めなら、たとえそれがどんなに激しくても愛する夫の手でということ、苦痛もおのずから甘い楽しみに通うものがあつたのですが、今日の場合は身を削られるようなくやしき腹立たしさが先に立つて、それだけに痛さ苦しさも一入激しいのです。時々顔のズロースをまくり上げて、ソツと鼻の孔に指先をふれるのは、私がイキをしてるかどうかを、たしかめて見たのでしょうか。言語に絶する残酷な地獄の責めが数時間も続いたあと——ほんとはその何分の一くらいの時間だったのかも知れませんが——、どうやら客を送り出したような気配がして、私のからだはテーブルの上からおろされました。手早く彼によって縄がとかれ、口も眼も耳も自由になりました。全身は綿のように疲れ切ってしまったてにわかに口もきけません。しば

らくは恨みをこめた眼で彼をジッとにらみつけてるだけです。

「どうだった今日の演出？ すばらしかっただろう？」

意外にも彼の表情はすごく明るいのです。まるで、私から感謝されるのを、待つように……。いったいどうなってるんだらう？ それに「演出」ってどういう意味なのだらう？ 私は狐につままれたような戸惑いを感じて、にわかに言葉も出てきません。

「今、誰か来てたでしょう？ 誰なの、その人？」

せいっぱいのはげしさをこめてやっとこれだけ言うと、彼ったらとたんに大きな口を開けて、さもうれしそうに笑い出すのです。

「ほんとにそう思ったのかい。だったら大成功だ。実は、これは僕の苦心の作並びに演出なのさ。あまり千変一律じゃ君も倦きるだらうと思って、でも本気でそう思ったとは愉快だな」

そう言ってまた大笑いするのです。あとでウンととちめて、必ず泥を吐かしてやろうと意気こんでいただけに、出鼻を挫かれたようでもうどうにも形がつかないのです。しかたなくつられて笑ってしまいましたが、ほんとう

に彼のいう通り、彼の一人二役の「演出」だったのだろうか？ そんなこと言ってうまく私をだまして、実は、本当に誰かを連れ込んだんじゃないのだろうか？ 私には彼の言葉通りだと確認する材料は何もないのです。私の心から信じている彼のこと、まさかとは思いますが、これも絶対にないと断言する根拠もありません。男の友だち（この中には筆者も被疑者に加わっているのかもしれない）を引き入れてというほどの度胸も悪趣味もないと思われれば……。またしても暗いかげが私の胸に蔽いかぶさってくるのをどうすることもできないのです。

彼は私が疑っていることを知ると、一生懸命に弁解これつとめます。シナリオ作りにどれくらい細心の注意をしたか、一人二役がバレないために演出にどんなに苦心したか、新しい企画でキット君がすごく満足してくれるだろうと期待していたとか、クドクドと説明してくれるのです。考えて見れば本当にそうだったような気がします。私の疑惑が他愛もないものであったような気がします。でも……。ヤッパリ私の胸のうちは完全にスッキリというところまではいけない何かが残ってしまうのです。

それから二、三日は彼の求めを大半ボイコットしてやりました。しかしそんな不自然？な生活は、所詮永続きするものではありません。しらぬ間に形だけはまたもとの楽しい二人にかえってしまいました。でも——こんどの女王様週間には、私も何か「演出」を考えてウンとこらしめてやらねばとひそかに心にきめています。それまではこのモヤモヤは完全には消えないだろうと思うのです。

3

長い奥さんの「告白」は漸く終わった。興味津々の奥さんの話にすっかりひき入れられて、時間のたつのも、すっかり忘れていた。

もっとも私を完全な同志と思いきんだ安心感もあっただろうし、私自身きわめて聞き出し上手であったことも事実だっただろう。何しろ相手は教養ある良家の令夫人のことだ。

滅多なことではこんなこと口にしてもらえるものではない。適当に相槌を打ち、適当に感心もし、シンからそのしあわせを羨み、讃歎する演出を忘れてはならないのである。それにしてもこれだけアケスケに、いっさいをぶちまけて話をする気にさせたものは、彼女が最後に話した事件に対するわだかまりみたい

なものが、まだ彼女の心の底に根強く、クスぶっていたからではないかと思われるのだ。彼にもひょっとして私たちの秘密を打ち明けられる誰か（それは男か女か分らない）があるかも知れないならば、私にだって何んでも話のできるひとくらいあっても」という謀叛気が、とっさにひらめいたのかも知れない。そしてその「ひとり」に私が選ばれたというしだいなのだろう。だとすると私も思わぬ幸運を拾いあてたものだ。

私は、S君夫婦の赤裸々の生活を知った今も、それを少しもキタナらしいとも不道德とも思っていない。「異常」といえば異常かも知れない。しかしどこまでも二人だけの城の中でのこと。誰にも迷惑を及ぼす性質のものではない。こんな生活を楽しんでいる二人だけれど、社会生活の上では「異常」の片鱗さえない、至極明朗で善良な常識人なのだ。

こんな秘密の遊びが、二人の愛情をますますこまやかなものにし、楽しいものにすることに役立っているとすれば、むしろ大いに祝福されていいものではないだろうか。それともこんなことをいう私自身がすでに「異常」なのであろうか。それは賢明な読者の自由な判断におまかせすることにしよう。

幻想に遊ぶ



美川芙美子さんへ

膨満の誘惑

橋本一美

「御多忙中にもかかわらず、ようこそ御出席下さいました。本日は当クラブ一周年記念と致しまして、今までにない催し物を御覧に入れたく存じます。最後までごゆるりとお楽しみ下さい」

T氏は少々おどけた様子で深々と一礼をして去った。

ここは、元Q国諜報最高責任者であるT氏別邸の大広間である。集まっている二十名の男達は一様にクラブのユニホームとも云うべき黒のガウンをまとい、かつらをつけ、仮面をつけて、思い思いに高級なワインを飲んだり、傍らにはべらせた裸女をからかったりし

ている。

これらの男達は、Q国の政策を左右せしめている政界、財界、軍人の中で、最高の地位にある者ばかりである。このクラブは、T氏の発案で、月に一度本日出席の会員で行なわれているのだが、出席者の地位や氏名を知っているのはT氏のみである。出席者は一人ずつ別室でユニホームに着替え、変装しているため、お互いのプライバシーは守られる仕組みになっている。

再びT氏が登場。

T氏のうしろには、白い布でおおった寝台らしき物が運ばれた。

「さて皆様、いつもいつもムチ打ちや縛りでもありますまい。もちろん、これは欠くべからざる魅力ではありますが、本日は今までになかったプレーを試してみたく存じます」

と云いながら、T氏は寝台の布を取った。

寝台には両腕と云うより肩のつけ根のあたりをベルトが食い込む程に締め上げられ、両足は別々に足首を固定された全裸の美女。女の全裸などめずらしく思わぬ会員達もT氏のムードに吞まれてか、息をのんでいる。

「さて、最初は、まず大量高圧浣腸から参ります」

T氏は寝台の側の一つのボタンを押した。

すると女の足を固定した台が徐々に上り出した。今一つのボタンを押すと、あろう事か今上りつつある足を固定した台が二つに別れはじめたのだ。

寝台と見たのは実は流腸台だったのである。ニンマリと皆を見廻したT氏は、台の横からゴム管を引き出した。

「このゴム管は特別製で、二重になっております。これを装備しまして空気を入れますと外側のゴムが、膨張する仕組になっております」

説明しながらT氏は台に近寄った。

グツタリしたような女の口から、弱いうめき声がした。

T氏は再び台を操作して、元のように戻した。

「では始めましょう。この女には先程から少々調教してありますので、三リットルから行ないます」

台の下部でかすかなモーターの音がする。

「ウウウ……クク、苦しい……」

女はかなり疲れているらしく、うめき声もなんとなく弱々しい。

数分後三リットルの液体を飲み込んだ腹部は半円に近くなり、白い豊かな乳房が痛々し

く震えている。

「お、お、お許しを……」

額から汗をふいてこの苦しさには耐えている女が……。

「上本町終点。この電車はこれまで。お降りの際は忘れ物のなきよう」

(チェ、もう着いたのか。今いい処だったのに)

いい気持で、うつらうつらしながら楽しい空想にふけていた私は、あわててホームへ飛び降りた。

○

私は、女性の身体の中で最も美しい部分は乳房と同様に、腹部だと思っている。それもほっそりしたそれではなく、大きければ大きい程魅力を感じる。

病気を除いて女性の腹部が最も大きい時は何んと云っても妊娠した時であろう。この時こそ、女性が最も女性らしき姿の時でもあるのだと思う。外観上だけでは男性女性の区別をつけがたいような今日、妊娠という生理状態は女性にのみ可能だからである。

少し押しただけでも乳液を噴き出しそうな大きな乳房。その素晴らしい半円の下から急カーブを描いて、乳房の十数倍、いやそれ以

上の大きさのまん丸い小山。そしてそれに対応するかのようには、変形S字を描くポツテリしたヒップ。

人間の身体で、これ以上の美があるだろうか。私は、それが美しければ美しい程反作用的に加虐の気持が働くのであるが、しかし幼い生命をすこやかに成長させる意味からも、やはり、美を鑑賞するだけにとどめるべきかと、自戒している。

次に挙げられるのが高圧流腸。イルリの水面の降下にしたがい、徐々にふくらむ腹部。ゴム球の握圧毎に気持の良い軽い抵抗を感じさせるエネマ。容量の大きさを調整出来る楽しみ。私はこうした事を空想するだけで、楽しい夢心地に酔ってしまう。

次が脂肪のポツテリのった肥満体腹。

仙台の美川美美子さんの様な、妊婦に勝るとも劣らぬ巨大なお腹。彼女の様な肥満体腹は、妊婦とは違い、若い生命がある訳ではない。ましてご本人が熱烈な被虐願望者なのだから、当事者同志の了解で得心のいくまでプレーを楽しめる大きな利点がある。

ここで、巨大なる美の所有者、美川美美子さんに登場して戴き、楽しい腹部プレーをおこないたいと思います。

最初はまず彼女の美を、横から縦から心ゆくまで鑑賞しましょう。

顔や手足は、それ程も肥えた感じを与えない彼女ではあるが、自身の両手にもあまりある大きな乳房。まるで妊婦を思わせる様な、それでいて弾力のある、丸く大きくつき出た素晴らしい腹部。

彼女に催促されて未練を残しながら鑑賞を打ち切った私は、彼女を後手に縛り目かくしをして壁に立たせます。反対側の壁に立った私の手にはおもちゃの吸盤のついた弓矢がある。彼女のヘソをねらってヒューッ。矢はピチャと音がしてヘソの左上に吸いついた。ピチャ、今度は右下。音がするたびに彼女は身体を動かし、矢をつけたお腹が大きくゆらいで波をうつ。

十本の矢をうけたお腹はまるで巨大な針ネズミのよう。スポッスポッと音をたてて取った十コの吸盤痕のうす赤い小円は、真白い肌にきれいな模様を残す。

今度は仰向けに寝ていただきました。横に立った私の手には消毒した大きな木綿針が十数本。針の耳には短い糸がつけてある。

今回もヘソをねらって降下。糸の作用で針の降下時は常に先端は下をむいている。ピク

ッと彼女のお腹に力が入る。第二弾降下。第三弾、第四弾、いつおちてくるかわからぬ針先に対してピクピクと敏感に巨腹が動く。時々趣きを変えて乳房をめがけて降下。思いがけぬ痛みに悲鳴をあげる彼女。

次に、足首がヒップにくる様に膝を折った彼女に手をかして再び仰向ける。そうしておいて、ローソクに火をつけ、蠟をお腹にたらしうまくローソクをたてる。

ヘソの周りに五本のローソクをたて終り電気を消すと、ボンヤリと白い肌がローソクの明りに浮かぶさまは私を幻想の世界へ誘う事でしょう。ローソクが完全に消え終る。熱さと戦った彼女の額にふき出た汗を、蒸しタオルで、やさしくふいてあげましょう。

白い蠟を全体にかぶった巨大なお腹はまるで生きたデコレーションケーキ。さあ、蠟を取ってあげるよ。でも、やさしくしたのではお気に入らないでしょう。ここに五〇センチの竹ザシがあるから、これでピシリピシリとたたきおとしてあげましょう。

竹ザシでたたかれる痛さとポロリ、ポロリと蠟のおちる心地良さとで夢心地の彼女。さあ、きれいに蠟が落ちました。先程まで白かったお腹は、ローソクの熱さと竹ザシでたた

かれたあとが重なり真っ赤になっている。美しいお腹。きっと口づけしたくなっちゃうだろう。

次はこの巨腹が、どれほど細くなるか実験してみましょう。立ってもらった彼女に出来るだけ、お腹をへこませてもらい、細引で力一杯ぐるぐる巻きにする。大きな乳房には、細引で作ったロープブラジャーを、これも力一杯、締めつける。素晴らしい乳房は、より大きく前に飛び出し、ぐるぐる巻きのお腹はまるで巨大なハムのように。

その細引をつけた状態で四つんばいになっていただきます。

腰を曲げると腹筋が動いて腹部が痛くてたまらない。腕を畳につけようとする乳房が引っぱられて苦しい。彼女は、きっと悲鳴をあげるでしょう。でも私は知らん顔。彼女が私の命令通りに出来るまで、先程の竹ザシでヒップを、ピシリピシリ。はい、よろしい。やっと四つんばいが出来ましたね。

では寝ころんでいただきます。坐って下さい。立って下さい。え？　そうですか。ヒップをたたけない姿勢の時は、丸く前に飛び出た乳房をピシリとやって欲しいって？　ああ、いいですとも。こうですか。

このあたりでウエストを細くするのはやめましょう。せっかくの魅力ある膨満なウエストを失っては大変だから。

今度は逆に、ウエストを大きくしてあげましょう。彼女は仕事から飲める方なので、御希望通りビールがいいでしょう。ここに半ダース用意しました。

でも、ただ飲んだだけでは胃がふくれるばかり。それよりも効果的にウエストをふくらませるために横になっていただきましょう。エネマ方式がいいでしょう。

一本、二本、三本。なるほどお強いんですね。四本、五本。大きくふくれたウエストは、静かに波打ち始め、体全体がピンク色になってきた。さあ、あと一本ですよ。グーと一息にあけましょう。

彼女の腹部はみごとな円形を描き、針でちよつとつづけば、パーンと破裂しそうですよ。では仕上げをしましょう。でもこの風船は特製で、なかなか強靱ですから少々のことでは破裂する心配はありません。ために押えてみましょう。そら、ぐいっと凹んだでしょう。どこか破れましたか？ 破れないでしょう。大丈夫、遠慮せずにやりましょう。では、今度は立っていただきましょう。

彼女を立たせた私はテーブルの脚を利用して、彼女の足を夫々縛りつけます。

痛い？ これぐらいで、彼女がそんなに痛がるのはおかしいと思うんですがねえ。

ああ、そうか。このテーブルの脚の角がいけなかったんですね。こんなにふくらはぎに喰い込んじゃってるもの。これじゃ痛いのも無理はない。もう少し足の幅を縮めて。テーブルの脚を後挟みにするから角が当たるんですよ。そうそう、それならいいでしょう？ なに？ 頼りないって。困った人だ。まあ任せておきなさい。

次に一本の棒に両腕を一直線に縛り、丁度大の字型に彼女を固定します。

そこで、私が棒の一端を持ってぐいぐい押すとどういう事になりますか。足が固定されているため、お腹がねじれてくるでしょう。普通は九十度位の角度ならどうにかねじれる彼女も、今日はだめでしょうネ。どうです？ やってみましょうか。そらッ！ やはりむりなようですね。

今度は逆から押しましょう。ぬれタオルなら、しぼれば水はしぼり出せますが、今の彼女は横向きにもなれないでしょうね。「クク、苦しい、カンペンしてちょうだい。

他の事は何んでもするから、もう勘弁してちょうだい」

彼女はきつとそういうでしょうが、私は耳もかきません。だって、私の力が入る毎に、巨大なお腹の中心で、素敵なおへソが笑ったり、泣いたりしているのが、楽しくてしかたがないのですから。

「アアアア、もうだめ。お腹が、お腹がパンクするう」

切迫した彼女の声に、あわてて束縛をときます。彼女は太急ぎでトイレへとびこむことでしょう。

一刻後、彼女はフンワリと柔らかい布団の上に心地良さそうに横たわっている。その横で、私はやさしく、いじめたお腹をいたわってあげましょう。

全て満ち足りた彼女は、間もなく軽い寝息をたて始めますが、私の手は休む事なく、愛しい彼女の巨腹をいつまでもいつまでもやさしく揉んでいることでしょう。

○

芙美子様、いかがでしょう。お気に召して戴けたでしょうか。もし幸運にして、この愚文が貴女の目にとまる機会がありましたら、貴女のおたよりをお待ち致しております。



体験告白

我が家の僚友

フンドシ

剣持圭雄

わたしがフンドシを始めてしめたのは、小学校へ入って間もない頃であった。その頃、小学校では水泳の時に男の生徒はみな赤フンドシをしめることになっていた。そのことを家に話すと、女中が「さぞ可愛らしいでしょうね。しめ方は、わたしが教えて上げましょう」と、早速赤い木綿の布を買って来て手をとって教えてくれた。彼女は千葉の漁村から来ていたので、漁師たちがしめているから知っていたのだそうだ。

始めてしめた時からフンドシのくい込む感じがとても気持ちがいいと思った。そんなわけであちまちのうちにしめ方はすっかり上手になってしまった。始めての水泳の時間に体

操の先生からフンドシのしめ方を教わるのだが、まつ先にしめてしまったわたしは、裸でまごまごしている友人に得意になって教えてやったり手伝ってやったりした。

フンドシは半巾の木綿地で長さは五尺位だったと思う。それでもまだ小さい一年生には太すぎるくらいで、ちっちゃな相撲さんのようだった。

体操の先生はまだ学校を出たばかりで若かった。たくましく陽焼けした体にフンドシがとてもよく似合った。生徒と同じ半巾の物だったが、筋肉がモリモリ盛上った体にキツとしめたところはいかにも細く見え、前袋ははちきれんばかりに盛上り、横ミツは堅くひき

しまった胸に快いくびれを見せ、後姿はタテミツが小気味よく尻に深くくいこみ姿を没して一線をなしているだけだった。それで、尻の半分位までの長さのシャツを着た後姿は、一見、何もつけていないように見えた。

先生のフンドシは水色だった。それは乾いていると明るいスカイブルーとなり、水に濡れると深い青色に変わった。そのいかすスタイルは、男生徒にも女生徒にも人気のまとなっていた。全校生に水泳を教えていたから、フンドシもそのたびに濡れるはずである。しかし授業の始めのときはいつでもフンドシは乾いた明るいスカイブルー色をしていた。恐らく

何本も用意していて、そのたび毎に取換えていたのだろう。

「ユルフンは心のたるみだ」というのが、その先生の口ぐせで、フンドシが泳いでいてとけると溺れる恐れがあることから、ゆるいとその場でしめなおさせられた。それで生徒は皆フンドシをきつくしめていたし、わたしもそのおかげで、きつくしめるのが好きになった。或時は友達同士できつくしめる競争をしたりした。

何となくフンドシが、好きになったわたしは、何とかしてフンドシをしめる機会を多くしたいと思い始め、水泳があるときは、家を出る時からズボンの下にしめて行った。そのうちに水泳があってもなくても、いつもフンドシをしめて行くようになった。フンドシ姿の絵や写真が気になって仕方なくなり、白い六尺一本に白いサラシを胸高に巻いて祭のみこしをかつぐ若い衆達にあこがれて、そのまねをしたりした。

しかし反面、何だか知らないがフンドシをしめるのが恥ずかしかった。フンドシをしめる時は、いつも胸がどきどきした。

臨海学校に行つて始めて親のもとをはなれたわたしは、フンドシを何本も持って行って

このときとばかり一日中しめていた。友人にもフンドシ党が何人か居て、やはり朝から晩までしめているのもいた。その時、どっちへ向けてしめるかが問題となって、議論したことがあった。上向きと下向きと二つにわかれた。わたしは上向きを主張したのであるが、その理由は恥ずかしくて言えなかった。

十日間の海浜生活をフンドシで通し、フンドシの魅力を満喫したわたしは、夏が過ぎてもフンドシをしめるようになった。しかし何となく恥ずかしいので、家の者には内緒でしめていた。けれどもいつしか母に見つかってしまった。母は別に叱りもせず「フンドシが好きなら、かくれてしめたりせず堂々としめなさい。ふだんしめるのなら白い方がいいでしょう」と言ったので、それから公認で白い六尺をしめるようになった。しかし白よりも、初めてしめた赤い方が何となく好きで、時々赤フンドシをしめていた。

中学校に入ると水泳の時のフンドシは白いのがきまりになった。巾は小学校と同じ半巾だったが半巾では都合の悪いことがボチボチ現われ始めた。しかし、巾の広いのをしめると上級生に叱られもした。小学校の時からフンドシは解けないようにきつくしめる習慣が

ついていたわたしではあるが、水泳の準備体操をするとき、膝に手をあてて膝の屈伸運動をすると、横からのぞけ勝ちになる。それがいやさから益々きつくしめるようになった。下腹をへこましておいてしめると、きつくしめることを発見した。きつくしめると、当然だが、思いがけない程の圧迫感が強まり爽快感が増すことも知った。

例の如くフンドシをしめていたのだが、ある日、いつもより痛みに近い別の感覚が始めた。位置が適当でないままにきつくしめていたので、体の動きにつれてよじれたようになったのであった。触れると痛いのは別の感覚が全身にしみ渡った。それが機会となつてしばしばその感覚を再現した。始めのうちは痛さに全身がしびれるようであった。しかし、それを我慢してしめていると、快い感覚が全身にみなぎるようになった。

始めのうちは痛さからゆるくしめていたフンドシも、次第にもと通りきつくしめるようになった。そして、逆立ちをするとフンドシが少しゆるむのに気が付いたわたしは、倒立したままでフンドシをしめることを考えた。倒立して輪にして吊り下げたロープに足首をひっかけて、逆に吊り下った状態でフンドシ

をしめてみた。タテミツの部分をつなぐようにより合わせることで、新たな緊迫感を得ることも覚えた。更に脇ミツにロープを付けて吊り下がり、全体重がフンドシにかかるようにすると、フンドシはキリキリと体に喰いこみ、緊迫度は急激に増し、胸はくびれるだけくびれ、はてはフンドシの布地が、ミシミシときしんだ。気が遠くなるばかりの夢心地で、しばし瞑目して、ロープに身を託していたこともあった。

女性のフンドシ姿にも魅力を感じるようになったのも、その年頃からであった。女性のフンドシ姿にはビキニやツンパなどとは比べものにならない魅力がある。

女性のフンドシは今ではごく一部の海女でしか見られないと思うが、わたしには対馬の海女のそれよりも、へくら島の海女の細いフンドシの方が魅力がある。細くて、固く強そうなナワというのが、何とも言えないのである。ウェストへの喰いこみもさることながら、タテミツが尻の丸味を一層強め、その強烈な効果は他のいかなるコスチュームも到底及ぶところではない。

ことフンドシについては、わたしなりにいろいろ研究した。わたしには強く締めこんだ

タテミツなくしては、魅力の大半はなくなってしまう。

その形や材質など様々だが、わたしにとっては細身の木綿地の六尺の右に出るものはない。緊迫感は最高であり、フンドシをしめているんだという実感が一番あるように思う。フンドシを手にしていざしめようとするときは、いつも感動し臍下丹田に力がみなぎるのである。その状態は子供の時以来ずっと今日まで続いている。

結婚した時、妻はわたしがフンドシを愛用しているのを見て驚いたらしい。わたしはフンドシの魅力を説き妻にもしめさせた。始めのうちは恥ずかしいとか痛いとかへんな気持ちだとかいっていたが、いつしかそれも慣れてしまったらしくこの頃では彼女もすっかりフンドシ・ファンになり、わたしに負けず劣らずきつくしめているし、彼女なりにニュースタイルを、いろいろあみ出している。

彼女は、革のスーツと高いハイヒールを好み、革製のフンドシをしめ素足に高いハイヒールの長いブーツをよくはいている。ネットのタイツをはくこともある。ハイヒールはできるだけ高いのを好み、誰よりも高いのをはいて得意がっている。最近ではハイヒールの

極致とも言えるバレエのトゥシューズをはいて、トードダンスの練習をやっている。イヤリングをつける穴を耳にあけることがはやり始めると、彼女もあけた。

この頃、貞操帯のブームが起り始めていた。彼女にしめさせた。布や革とはまた違った、金属特有の冷たさ固さが無情に肌に喰いこみ、金属の光沢は妖しくも魅惑的に輝き独特のムードを盛り上げてなかなか捨て難い。

クサリと言っても太さにいろいろある。網のような布に近いものもあり、種々のデザインのものができる。クサリに花などの飾りをつける则可愛らしくもあり、クサリのきびしさをたくみにカバーして、優しさと冷酷さがミックスした、クサリならではの味が出ることも知った。

海水浴に行く時は二人とも水着の下にフンドシをしめて行き、人のいない所を見つけてはフンドシ一本の姿になって遊ぶのが楽しみの一つである。

彼女は始めは人前にたとえ水着の下であってもフンドシをしめて行くのをいやがり、厚手の前後ともダブルになった水着を着て、その上にビーチマートやケープをまとっていた

が、そのうちに大胆になってきて、生地や色の薄いものを着るようになり、見られるのをひそかに期待するかのようになり、シングルの水着を着るようになり、はてはフンドシだけの裸体の上にコートをまとっただけの姿で、浜辺も歩くようになった。風で裾が舞い上がっても彼女は平然としており、一緒に歩くわたしの方がひやひやさせられることがたびたびある。ちょっと葉がききすぎたというところである。

家の庭でフンドシ一本きりになった二人は相撲をとる。まわしと違って細いフンドシでは、互にミツをとりあってもみええば相当に痛い。それでも彼女は息をはずませ髪をふり

「伝言板」○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則として取り扱いは致しておりません故御諒承下さい。

○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。

○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

乱し懸命にむしゃぶりついてくる。そんな時は、タテミツをつかんで思う存分ふりまわしてやる。やがて力つきた彼女は、相撲用の砂に身を横たえる。赤く上気した頬にかく目を閉じ、大きく腹に波を打たせているところは、私達夫婦の平和な証拠だ。細いロープのフンドシをキリキリしめ上げさせてやることもある。ロープのフンドシを解いたあとは、肉体に赤く痛ましく残るあとが、また女性こそその魅力を現わしてくれる。

相撲のほか、夏の彼女の好む遊びに沈めつつがある。互に相手を、水中に沈めるのだが、彼女はなかなか水泳がうまいので、わたしも手こずる。彼女は水を呑み、苦しみもだえながらも、よく頑張る。

昨年だったが、人気のないのを幸い彼女に乞われるままに、大波が打寄せる鋭い凸凹のある岩頭に、頭を低く逆さに近い恰好で、彼女の体をしばらくつけたことがあった。仰向けにそりかえった体に、フンドシの緊張度は最高になりたえずうちよせる波は息つくひまもなく彼女の全身を襲い容赦なく鼻や口に海水が流れこむ中に彼女は身をもだえて愉悦に酔っていた。本当に溺れたら大変なので、適当のところをやめてしまったのだが、内心で、

人工呼吸を勉強して置こうと思ったことだった。着想では、彼女のフンドシにロープをつけてモーターボートで水中をひっぱりまわしてみるのがまた一興だと思っている。こんな時フンドシはとて都合がよいし、またフンドシをしめていてこそその陶醉境だとわたしは思う。フンドシは古来のものだけに、和服の下着として最も具合がよい。和服の場合、パンツでは不安定でどうもかっこうがつかない。フンドシをキリキリとした素肌に糊のきいた浴衣を着て尻はしよりをして歩く気分は、何ともいえない。寒い時でも着物に股引きをはくなどは、ヤボの骨頂である。第一、足に股引きが巻きついて裾さばきが悪く、歩きにくいも甚だしい。少々寒くてもフンドシ一本でパツパツと歩くところに、心いきもあるとうとうものだ。しかし洋服の場合でもズボンの下にしましても別段不都合はないと思う。フンドシのぐっと締まっている感じは、いかにも安心感がある。巾がせまく布地が薄いものならば、今どきの細いズボンの下にしましても決してスタイルを悪くすることはない。

ともかくもフンドシは男にとっても女にとっても、この上ない素晴らしい下着であり、魅惑的なコスチュームではあるまいか。



女性乗馬考

ロ ッ タ 物 語

佐 野 寿

九月下旬の頃でしょうか、もう森の木の葉が黄色くなり始め白樺の葉もだんだんと散る頃になりました。ロッタは、今年十八才になります。早熟気味な彼女の肢体は発達し切り、殊に腰部と胸部がめつちりとふくらみ、赤みがかった金髪は長々と背中迄達し、好んでポニーテールのように編んでいます。

彼女は近頃めつきり女らしく美しくなった自分の顔を、鏡で見てもうっとりする程でした。小気味よく下肢をしめつける乗馬ズボンと、新しい細目の長靴をはく時の気持は、訳もなく少なからず彼女の心をしびれさせる

様でした。

頭のとっぺんから足の爪先迄、完全馬装をしたロッタは昼食もそこそこに乗馬学校へ急ぎます。二三人の馬丁がふり向く様に彼女に見入って居ます。古びた厩舎でしたがよく清掃され、ロッタは自分の愛馬の所迄急ぎ、人夢を与えながら、こわめのブラシで馬をこすってマッサージをし、血行を良くしてやりま

乗る前の、何んとも云えない一種の緊張感と心地良いスリルに、ロッタは酔う様にしてスピットコックに手綱轡を手なれた仕方です。ふさふさした毛皮の内ばりをした新しい橙茶色の鞍を馬背に乗せ、やおら高鳴る鼓動をおさえつつ、黒光りする馬を小屋から引き出し、ふみ台に馬を近づけます。

馬上の女となったロッタ。乗り手、馬共に大きく、ヴォリューム重量感にあふれています。さからい難い気品が、周囲を圧倒する如く、彼女は軽く左右から馬腹を拍車で打つように遠乗りの出発を命じます。騎馬は車道を

渡って、いちようの並木路に沿って馬蹄高らかに進みます。

時々、新品の鞍の皮と長靴が、互いに摩擦し合う時に出すキュッキュッと云う音が、いやが上にもロッタの興奮を助長します。常足から駆け足に移って数分後に、その路を直角に曲ると、森や田畠農園の方へ向かうのでした。ロッタは馬のテンポを少し落とし、鍔をやや短くしてギャロップと野外騎乗の準備をしました。

赤レンガの工芸大学の裏手の、人もまばらな木の茂った道を、ロッタはヒズメの音高らかに、深い森を目ざしてテンポを上げつつ進みます。左手には細い溪流が清水をたたえ小鳥がさえずっています。キュッキュッと長靴が又音をたてます。スピットコックは非常に神経質でかんのするどい鋭敏な馬で、やや臆病で水を見るのをこわがりましたが、ロッタの熱心で、愛情をこめた調教と乗り込みにより、次第にロッタに上手に乗られる様になりました。特に彼女は、手綱と、ろく、はみの部分に気をつけて、馬の神経を高ぶらせない様に御す為、この馬には彼女以外の誰も乗ることを厳禁しました。下手に他人に乗られ、間違った『乗られぐせ』がついたら万事休す

からでしょう。

ここカナダの秋の自然は筆舌につくしがた、すべてが美しいのです。たまにリスが馬道を横切って針葉樹の幹に登るのが見られ、ロッタはいかにも優しい少女らしくそれを見てほほえむのでした。其の白く輝くロッタの横顔は、美しい支配の情感を、かもし出す女神の如く気高く、重厚に馬に跨っています。「すばらしいわ」と低くつぶやきながら、森を過ぎた所に咲く色とりどりの秋の花と植物を見下ろし、又馬背のリズミカルな動きに、ロッタの豊満限らない全身は、支配感、恍惚感、調和感によって、もえ上るばかりです。

まさに地上に最高の楽園を実現したような幸福感に、ロッタは眼をうるませたりしばし閉じたりします。天女になった彼女には馬を意のままに動かせる支配感は何にも比類すべくありません。左手にはゆるい岡の斜面があり、白い花が一面に咲き乱れ、そのバックに針葉樹の林がみえ、空気はこの上なく清く

あまく感じられる程です。一見、いかめしい程の馬装ですが、ロッタは、薄着を殊更好む為か、上半身はブラジャーに極く薄い白シャツ、下着は上品な薄紫色のブルーマー一枚だけでした。

其の夏はロッタはフロリダの南海岸でピキニのまま馬を乗りまわし、多くの人々の眼を魅了しつくしたのですが、そのあまりに大胆な姿態の為、ある種の(クウェーカー教等)キリスト教の青少年団体のひんしゅくを買いました。しかし、ロッタは特に気にしませんでした。それと云いますのは、彼女は自由な、特にセックスに対して何等偏見のない家庭に伸々と育った事と、フロリダの従姉も乗馬が好きだったので、殆んど毎年、夏には人影の





少ない熱砂の海浜で、二人揃って水着姿で乗馬を楽しむのを常としていたからでした。特にロッタ姉妹はしぶきの立つ波打ちに時々馬を乗り入れ、気持よい海水が泡立つように彼女等の肢体をヒタヒタ濡らすのが殊に好きでした。勿論、海浜での乗馬は手綱と答のみで鞍は使わず、裸馬を御す妙味が彼女等にとりこにしてしまう程でした。この毎年の習慣が海浜での乗馬を忘れ難いものにしてしまったのです。当然その場所は、いわゆる海水浴場から離れ岩でさえぎられて、他からあまり見えない所での乗馬でしたが、たまにはどうしても行きずりの男達に見られてしまうのでした。しかし、これもロッタ姉妹は黙殺する

ことで、さして気にかかりませんでした。その快適な乗馬は二人を魅了し、一時間の貸馬時間がついに二時間半にも三時間以上にもなっていました。流石ガメツイ貸馬業の主人も、この乙女等にはぞっこんまいていましたので、あえてとがめることすら出来ませんでした。

馬の各動作毎に、それに打跨る豊満な乙女の柔軟な肢体を豊かにパイブレイトし、フロリダの日光がいやが上にもその金髪を一層金色に輝かせ、時々打ち寄せる波の音が、のどかにこの極楽の様な雰囲気をもり立ててやまないのです。

時折、すぐ沖を水上スキーをつけたモーター

ボートが通過し、大きな波がしばらくするとぱしゃんと岸にぶつかって白泡となっていくだけです。勿論ロッタも以前、水上スキーをした事はありませんが、今の彼女には海浜の水着での乗馬の方が、はるかに魅力であることは、申す迄ありません。

ん。

海水は、この上なく澄んでいます。たまに海藻が乗られる馬の四脚にまつわりつきます。海浜にはひとでや白い貝類が打ち上げられています。特にロッタ姉妹が好きだったのは、海岸に沿って全速力でギャロップした後、汗とほこりでまみれた馬を海に乗り入れる時のあのすばらしさです。さわやかで冷たい水中でも、じんわり馬背からのぬくもりが伝波して、それが乙女等の眠っている一種のニンフォマニヤの性格をよびさますようなのです。

ロッタのボーイフレンドのトミーは、去年は彼が自慢したいモーターボートや水上ソリに、ロッタがさほど興味を示さなかったので不満でしたが、彼女の好みを素早く見抜いた彼は、等身大よりやや小型の合成ゴム製の馬をニューヨークの玩具店で購入し、その下端を細工して巾広の水上ソリに固定し、モーターボートでひっぱろうと思いました。

そのゴムの馬に試乗してくれる様にロッタにひざまずいて頼んだので、七月四日の独立祭の休日に、フロリダ海岸近くのトミーの別荘で、彼女がちょっと試乗したところ、その柔軟さと云い色つやと云いまったく本物そっ

かさどる様になっていて、作動する時は非常に静かですので、例えばちょっと防音（壁）装置のあるホテルの一室で使ったら、となりのおどろくべき事にはバッテリーにより体温同等に熱せられたニクロム線が入っていますので、本物の馬の如く温か味が感じられます。

これを使用しますと、特に冬の冷え症に利くのみならず健康な女子の血行をより良好にする事が出来ます。馬のたてがみの蔭の所に極く小さなスイッチが四コあり、自由に自分の好きなテンポの遅速を選べ、後部の四ツのスイッチと共に合計十六種類の微妙に異なる馬のモーションの変化を味わうことができるのです。勿論拍車や答のひんばんに使われそうな部位は更に丈夫な人工皮革になっていて簡単には傷つきません。

外見もどっしりと重々しく血が通う様に見える、ちゃんとしたオモチャの感じはいささかもいたしません。それは一般人が驚歎するのみならず、米国の天才心理学者であるC博士をもいたく感嘆せしめ、いかにしてかような迄に精巧な機械がつくられ得たかと考えこませたとさえ云われて居ります。

さて、トミーのかようにすばらしいゴム馬

のプレゼントは、ロッタをも充分喜ばせ、試乗結果も、上々でした。翌朝、二人は朝食をすませるや、早速にそのゴム馬を、モーターボートのある岸迄持参し、丈夫な縄で口部とボート後部をしっかりと結びます。

困難だったのは出発時の馬の水上での安定性ですが、流石ロッタは生まれつきの運動感覚を生かしスタートダッシュも首尾よく行きました。一旦高速で走ってしまえば、馬にきちんと跨っている限り、かえって安定したのです。左右にかなり高い水しぶきをともなう波をかきわけつつ、水上馬はロッタを乗せて走り出すではありませんか。技術屋と自負するトミーのスキー部の設計も、大成功でした。まばらに浮かぶヨットをどんどん追い抜く毎に、ヨットの操じゅう者が、はじめて見る美人をのせた水上馬に、痴呆のように口をあけて眺めたとしても何の不思議もありません。

ゴム馬上のロッタは、桃色のリボンで赤味がかったきらきらする金髪を止め、水色の水



玉模様の水着から無限に豊かな肉体美を誇示し恍惚として跨りながら、ボートの後を滑走します。もしも他人が見てる所で、トミーの運転の下手際で、人工馬が女の乗り手とともに横倒しにでもなったら、とうてい想像も出ないほどの懲戒を、トミーはロッタから受けるでしょう。しかし幸い今の時点ではそんなことは起こりませんでした。



カモメが白く水面をはうように舞い降り、沖を水上翼船が走りますが、この水上馬の方がはるかに軽快です。女体にはこの馬の乗り心地は、最上のクッションの如く、いやそれ以上に快適です。ロッタは前後の各スイッチを、馬が最も大きい振幅でゆれる様にセッティングしたので、水上での乗馬の快いスリルは

ピークに達しました。

けれども速度が二十ノットをこえるとスキ一部がやや浮き上がり、ロッタのがっしりした65キロの体重にもかかわらず、突風によって起こされる側面からの横波の為バランスがくずれそうになりますので、翌日は馬の脚部に四コの小鉛をつけた。昨日よりは安定性が増しましたので、ロッタは安心して酔いしれることが出来ました。午前中はかようにいとも楽しげに過ぎましたが、午後からちょっと天気が傾きはじめ、ハリケーンの兆候がありましたけれど、人工馬の乗り味をしめたロッタは、臆病なトミーをけしかけるようにして更に水上馬の滑走を命じたのです。

海面は午前中は殆ど鏡の様でしたが、午後二時には波頭が白く目立ち始め時々風が吹きつけます。水着姿のロッタは長々と髪をなびかせ、安全の為に馬のゆれをミニマムにするスイッチに切替えます。沖

のブイにつけられた赤い旗が、警告を示す如くパタパタひらめきます。太陽は灰色の雲に出たり入ったりしていました。

肉体美を誇示しつつゴム馬に跨ってるロッタの足もとへ、突風の為白い大きな波頭がうねりを伴って押しよせました。流石の名女騎手も平衡を失いかけて、跨ったまま左方へぐいと傾きましたので、驚いたトミーは急ブレーキをかけました。これが却って失敗でした。どうとばかりバランスを失った女騎馬は、水しぶきあげて水中に放り出されました。そこへ又かなり大きな波浪がおおいかぶさりました。海水を二度程飲まされましたが幸い怪我もなく、ロッタはすぐトミーのポートへ引き上げられました。

ロッタは不気嫌にだまりつづけ、其夜のトミーに対する厳しい折かんは目をおおいたくなる程でした。乗馬客での痛烈な乱打、長靴によるけり込み、人間馬責め等は未だなま易しい方で、女性特有の陰にこもったせい惨なサディズムの為、一晩中可哀相にもトミーは青くなり震えがとまりませんでした。翌日にかけて丸一日半も、抵抗力を失ったトミーは荒縄でぐいぐいしばられ、水を与えられるだけで断食を強要させられ、ロッタのはいたブ

ルーマで猿ぐつわをかまされた上に目かくしをされて、工作室に放置されました。そして、かんなくずとほこりにまみれながら、ゴム馬用のスキーの設計を更に安定化するように工夫し直さなければなりませんでした。彼の前に、ロッタに乗り廻され海水をたっぷり含んだゴム馬が、死んだ様に横たわっているのが何んとも形容し難く不気味でした。トミーは泣き出したい気持ちで横になっていました。

玩具のゴム馬の方は真水で洗い日光で乾かせばかなり早く復元しましたが、トミーの方は一週間も体の節々がぎすぎす痛み、答の跡が仲々消えませんでした。折檻は翌日の夕刻に許され、慈悲深くロッタは縄を解いてくれたのでしたが、トミーのやせぎすな皮膚には紫色に荒縄の条こんが生々しく残っていました。それでもロッタは高慢な女王の如く、いじ悪く微笑さえうかべ、トミーに足の裏をくまなくなめさせ、その奉仕後に、やっと放免してくれたのでした。

あの忘れ難いフロリダでの水上馬術からもう二カ月以上も経ち、ロッタはその記憶にうっとりしたりしながら今は本当の自分の黒い愛馬スピットコックに乗って、かん木と野生の花の咲く野原を通過し、坂を上り又杉の林に



入って行こうとしています。ロッタは芦の生えた沼沢地のそばを通りかかった時、手綱をうんと短くしてギャロップに入り、黒い土を掘り返す程、馬蹄が地面をけたてて、まっしぐらにダッシュし、馬はあえぐ様に懸命に走りつづけます。松の梢が時々彼女のヘルメットにがさがさ音を立てぶつかります。薄いシ

ルクのネッカチーフが金髪とともに後方に尾を曳き、馬蹄にえぐられた土砂が飛散します。ロッタの巨木の幹程に太くたくましい太腿と、柔軟ではあるが重量感に満ちた臀部は馬をぐいぐいと虐め、もうぐっしりとたて髪の下は汗で光り、馬の鬃の両側は、唾液で白くなっています。

彼女は十月中旬に開かれる婦人馬術大会の耐久騎乗に出場することにきめています。そこでは三十キロの原野の自然の障害物を無数に越えるのみならず、多くの浅い沼地にも馬ごと全速力で乗り入ると云う種目で、騎手も馬も特にタフでなくてはなりません。段々スピットコックを乗り慣らし訓練を積むにつれて、ロッタには自信が日毎に増大して行くのです。銀光りの拍車が活発に馬腹に入られる毎に馬のギャロップはテンポを増し、騎手のモーションも早くなって、薄暗いばかりに密生した林と原野をつき進んで行きます。馬の両眼は大きく開かれ、血走ってるかのように、又苦痛でうめくが如く見えます。

前方にたき火の光が見え、それをめざしてアマゾン呼吸も荒々しく、馬を虐めるよう



に走りつづけます。バシャバシャと浅いクリークを泥水を飛ばしながら走り馬の下脚部と腹部は黒々と濡れます。更に一蹴入れて走らせた後、ロッタはやや手綱を長くし、馬を少しゆるやかに走らせ次第に常歩から停止を命じました。鞍から降りてやりますと、馬はたてがみを二三回ふるわせ首を下方にやり草を喰い始めます。ロッタは馬を白樺の幹につなぎ、自分は答用の枝をさがしに行きます。

すぐ近くに溪流がさらさら音をたて、夕方になり空気がめっきり冷たく息をはくとかすかに白い蒸気が立ち込める程でした。一メートル以上もある細枝の筈を折ってきた彼女は鎧に手をかけ、右足で土をけて又馬上に跨

りスピットコックを進ませ、今度はその溪流を渡らせようとしてますが、音を立てて流れる巾の狭い流れにも馬はおじけづき、すぐ馬首を回して逃げ腰になります。始めの内はやさしくうながすように、ロッタは拍車を入れませんが、馬は後足でできるようにして強情に流れをさけようとするのです。

「何がこわいの、馬鹿」とロッタは叱咤し、拍車をドスツと音が出る程入れ、すかさず白樺の小枝でたてがみや腹部をしゃにむに打ちすえ、手綱をつめます。「ヒヒーン」と馬はうめき、左回転で小川をさけて又逃げます。拍車が連続的に無慈悲に入れられ、馬腹はその為毛が逆立つようになり、そこにも葉のつ

いた小枝がビシビシ容赦なく打ち下され、殊の外きびしく懲戒がつづけられます。愛馬と云えど、この臆病なくせをどうしても直さなくては来たるべき耐久レースには絶望的でしょう。

ロッタのかん高いすき通る罵声があたりを

こだまさせ、再度彼女は下馬して無理に手綱を引いて馬を渡らせようと鼻づらに荒々しく白樺の枝をたたきつけます。耐久レースでは特に馬の体力以上に乗り手の意思の強さがあるのを云います。ロッタは、再び乱暴に跨ると重い体重を利用し、馬の抵抗が減る迄数分待ってから雷撃のごとき拍車の嵐を加え、スピットコックの強情な意思を粉碎してしまいました。馬はついに女騎手に服従し、浅瀬を二三步でひよいととびこえましたので、ロッタはこのチャンスを利用して、もう三四回溪流を往復させる事に成功しました。

「やっと勝ったわ、馬鹿な馬」と彼女は誇らしく一人言を云いポケットから出した桃色のハンカチで額や首の汗をぬぐうと、さわやかな風が彼女の髪をなびかせるのでした。

この凄じいばかりの、美しい女騎手の烈しい気魄に押し切られた馬は、もう再び強情をばって、手綱捌きにさからうことはいけません。ロッタに跨られたが最後、その命じられるがままに従わなければならぬものだというのを、骨身にしみて思い知ったことでしょう。彼女は、拍車を蹴り込まれた脇腹をピクピクさせている馬の首筋を、軽く叩いてやるのでした。

続・洋子の思い出



思い出

島崎慎一

前回に記したように、洋子が私に求めたのは浣腸プレイであり、私が彼女に期待したのはフェチズムであった。二人の嗜好は、異ってはいたけれど、どちらもS・Mは嫌いだった。

私が浣腸プレイを好まない理由は、排泄の汚なさにあった。おむつカバーを使用すれば別だが、日本式トイレを使用すると、強い圧力の作用のための結果が、あたりに四散して汚らしくてならない。

洋子もおむつカバーの感覚に浣腸プレイのムードを楽しむ気持はあるらしく嫌がりはしなかった。だからおむつカバーを使

用した。しかもこのカバーは、彼女が御茶の水の主婦の友デパートで、大人用を見つけて来たものであった。

浣腸プレイも、排泄の事後処理を別とすれば、私のフェチズムを満足させてくれるものであった。だから私達のプレイは浣腸プレイを主にし、その前後にペッティングを、という具合になるのが普通であった。

プレイは、大体私の方から誘った。彼女の部屋のドアを四つたたくのが合図だった。

コッココッココッコ。私は声を秘めて言う。「洋子……。もう寝た？」

無言のまま部屋のカギを内側から開くのが

彼女の『待っていたのよ』という合図であった。洋子はネグリジェの裾をまくり上げて、ふとんの上にうつぶせになっている。このポーズが私の一番好きなことを、ちゃんと計算しているのだった。私はむき出しのそれは嫌いだ。絶対にパンティをつけていなくてはならない。正確に云えば洋子のヒップそのものを愛するのではなくて、どっぶりとした重量感にふくらんだパンティをこそ愛するのだ。た。パンティ・フェチズムである……。

パンティは薄いものでなくてはならない。厚手のメリヤスはムードが無い。そればかりではなく、私の唾液や、洋子の汗を吸いこってしまうので、まるでタオルで顔をふくような案配になってしまい、さっぱり情感がわいて来ないのである。

それは又、ゴムのしっかりしたものである必要がある。パンティがキュッと太ももに喰い込むようにヒップを包んでいる姿こそ、私のパンティフェチの魂をゆさぶるのである。

パンティの色だが、純白は平凡でつまらない。薄い黒やブルーが好きだ、特に薄いクリム色が好きだ、フリルの付いているものもたまにはいいが、何の飾りもついていない、それでいて、安っぽい感じのしないデザイン

のものが、私には好ましいのだ。洋子は上野のアメ横へ行って、外国製のものを買ってきてくれた。

私は洋子のパンティにはおずりしながら泣くことがあった。この涙は決してうれし涙ではない。自分のしていることの異常さに良心がとがめられて泣けてくるのだ。こんなおそろしい行為をくり返しているうちに、本当に異常性欲者になってしまふのだろうか？ この底無しの暗黒の奈落に思い切り自分をめり込ませてしまいたいという想念がわいて来るかと思うと、これではいけないと自分を叱る声も耳に聞こえるような気もする……。

指を差し込む隙さえも無いほどに、ぴたりと洋子のヒップを包むパンティは、私に対して或る種の冷たい拒絶感をもって抵抗しているかのようであった。私はその拒絶感の故に、一層パンティが包むものに高貴な近よりがたい神聖さを感じるのだった。パンティのゴムがきつく洋子の太ももをしめつけていればいるほど私は洋子のそれにひざまずき、ひれ伏したい感動にふるえるのだった。この感動と後悔とがいきりまじって、流れ出す涙となるのだった。私の涙は洋子のパンティをしつとりと濡らしている。彼女の汗もパンティに

しみこんで、信じがたいほどの甘美な魅力が洋子のパンティからにじみ出てくるのだった。

「洋子、こんどは、あお向けになってくれなにか……」と私は注文する。

私の目の前には、洋子のより上った太ももと若々しくはりきった肉体が、パンティを透して、静かに息づいている。スタンドのほのかな光線は斜め横から、洋子のパンティをクローズアップしてくれる……。私は、むき出しのお尻は絶対に好まない。パンティという一つの媒介物があるからこそ、高貴な美しさを感じるのである。拒絶される切なさ、その切なさをうれしいと思う奇妙な心理状態こそフェチズムのぎりぎりの感覚ではないだろうか。

洋子は「ねえ慎ちゃん……かんちょうして頂だい。お願い……」と遠慮がちに云う。

彼女がふとんの上で横になり、目をつぶり静かに浣腸を待つ姿を、私は美しいと思う。浣腸器の嘴管が迫るとき、ぴくっと体をふるわす洋子を愛しいと思う。しかし浣腸プレイの本当の陶醉は洋子のみが知っていた。すでにこの世にいない彼女の為に、私が彼女の感

覚を想像してここに書くことは許されないと思う。私に書けるのは、私だけが感じる、パンティ・フェチの耽溺についてだけである。

浣腸プレイの後、私は必ず或る行為を洋子に望む。

「洋子……。君のパンティで、ぼくの顔を包んで欲しい……」

洋子がサジスチンであったなら、むしろこの行為にサジスティックな陶醉を期待して、私に襲いかかってきたかもしれない。

しかし洋子はSではなかった。ノーマルな洋子としてみれば、これほど恥かしい行為はないであろう。私もMではないから洋子のパンティで顔をふさがれたとき、その苦しさに悦びを求めているのではない。

私は、目をつぶり、洋子の美しい両球を想い、豊かな太股を想い、この高貴な宝をつい今しがたまで包んでいたパンティを、内側から思う存分味わうことのできる快感にしばらくのだった。この感覚をフェチズムであると断言したら、或いは、異論があるかも知れない。しかし、少なくとも私にとって、ピタリと身についたパンティに高貴さを感じ、その高貴なる物を通して得られる感覚こそが、私のフェチ感覚なのである。



一 (プロローグ)

私の名前は鈴木正男です。

これから私の語る話は、実際におきたことなのです。この話の主人公は、瀬川英敏という男です。私は彼とほんの三カ月間、I市のF大学で同じ学科の生徒として共に勉強したことがあり、自分では、彼の数少ない親友の一人であると信じています。現在でも彼は生きています。

しかし、彼の昔の友人は、誰一人として彼に会うことはできません。なぜか。それは、私がこれから話すことによって明らかになるはずだ。

フェチ小説

この胸のときめき

文及カット 日本 武士

二

私の名前は瀬川英敏である。これからの話は、私がI市のF大学に転校してきたところから始めたいが、そもそも、何んで転校したのかということから話しておこう。

私には、後でわかると思うが、ある種の趣味がある。しかし、両親は二人ともまともであり、まともに働いている。そのわりには、まともでないくらいお金をかせいでいるんだが、私は物心がつく前から、まともな両親のわりには、きびしすぎるほどのしつけを受けた。これが私の趣味の原因かもしれない。だから私は、高校を卒業するまで、首には常に

見えないロープをつけられ、両親の思うままにあやつられていたのである。このころに、私はお金を貯めることを覚え、又、自分の趣味に気づきだしたのである。

幸か不幸か、私の生まれたE市に大学がないため、父はロープを切らざるを得なくなつた。今まで首にロープをつけられて、精神的に不自由な生活をしてきた者が、急に自由な世界に飛び出すとこのようになる、ということとを、私は身をもって立証した。

だから、大学での初めのころは、勉強などそっちのけで社会学の研究に精を出した。そのわりには、簡単に二年生に進級することができた。

二年生になると、だんだん心身ともにおちついてきて、自分のことから自分以外の外のことには目が移っていくもので、私の場合それは大学であったが、これらが、つまらないものであったり、ちょっと氣にくわれないことがあったりすると、すぐ頭にきて反抗的態度を取るものである。私も例にもれず、よせばいいのに中学、高校時代にもった反抗心が急に現われ、革命の志士となり、マイクとあじピラを持ってキャンパス内を駆けめぐり、ものはついでとばかりにストライキまでやったのがいけなかった。これが父に知れて、こづかいをへらされるし、ステレオはもっていかれし、さんざんであった。この『仕置』に対して、ストライキをした方がいいようであった。当の学校は、父の五階建ての図書館の寄附が大きくものを言っているせいか、一週間の停学という処分におちついた。

停学になったと言っても、かげ口をたたく人や、批難の声をあびせる人はいなかったせいもあって、別に何んとも感じなかった。

第一日目 金曜日

他の学生が猛烈な睡魔と戦いながら、学校へ行かなければならないのに、私はこれから一週間は休暇である。

映画を見に行く。大学なんて糞食らえだ。

映画を見ているうちにだんだんと私の心の奥

から、重く、熱く感じられるものが身体中に拡がっていき、それが、私の心臓の鼓動を大きく、早くした。早々に映画館を出て、町の中を、さまよった。

あった。見つけた。

重く、熱く感じていたものが、身体の中で爆発した。「K」という名前である。これ以前に目星をつけておいた、E駅ステーションビル内の店とあわせて二店になった。

第二日目 土曜日

決行は月曜日にしよう。店の者が何んと言って応答するかを想像し、いろいろセリフを考えた。

第三日目 日曜日

たまりきれず、二店の様子を見に行った。これらの前をできるだけ我慢して——顔を覚えられるとまずいので——二度、往復してから、うきうきしながらアパートへもどった。帰り道、歩きながら何度もセリフを作り変え、部屋にいた時には、七種類もの演技ができるようになった。帰ってから、グリーティングカードを買い忘れたことに気づいて、又、でかけた。このついでに、もう一度二店の前を通った。

第四日目 月曜日

できるだけ早く——九時に——起き、シャワーを浴びながらセリフを何度も繰返した。十時半にアパートを出た。最初に行くのは、

E駅ステーションビル内の店である。

ステーションビル内の中央の広い通路の二番目の入口を右に折れると最初は時計店であり、次はアクセサリー店で、この次が目ざす店である。目的の店の向かい側が、カメラ店であるのが、ちょっといやな感じであった。やはりすぐには入り辛く、二度ほど前を通りすぎ、客のいないのを確認してから、心で数を数えて呼吸を整えた。エリートコースを、ばく進する中流、いや、上流サラリーマンに見えればいいのだが……

十数えてから店へ入った。

足を一歩踏み出すごとに、心臓が耳の中でわめきだした。すばらしい香りが、私の鼻をくすぐり、足もとをくるわせた。幸いなことに店員は、私に背を向けていたので、大きく一つ深呼吸をし、冷静さを呼びもどそうと努めながら、できるだけおちついた声を装って私は云った。

「あ、あの……」

うまく云えない。どうも、練習どおりにはいかないものである。

「何んでじょうか」

女店員は振り向きながら答えた。私が男であることがわかって、別に驚いた様子もないので、反対に私の方が驚いた。五まで数えてから、一息に言った。

「ある人にプレゼントをするのですが、そこ

「ものをくれませんか」

「ネグリジェですね」

ネグリジェ。この言葉。この響き。ネ・グ・リ・ジェ。ああ、私の心の奥のときめきをそっと包んでくれるこのソフトな生き物。

彼女は、私の顔をちょっと見ただけで、すぐネグリジェのある方へ行った。

「サイズはいかほどですか」

ここが、私の演技の見せどころである。自分に何度も「おちつけ！」と言いきかせながら、「ああ、背の高さは……」私は自分の目の辺に手をやり、これくらいだということを彼女に示しながら云った。

「一六五センチメートルぐらいなんですが」

本当は、一七四センチメートルにしたかったのだが、そのような女性はいないし、又、あやしまれるおそれもあるので、ぎりぎりの一六五センチメートルにおさえた。「色は何色がよろしいですか。いろいろございますけれど」

彼女の視線が私に向いた。

「えーと、赤、赤にします」

「赤ですね」

彼女はそう言って、赤いネグリジェの入った箱を取り出した。

「プレゼントですか」

包装紙を、抽出しから取り出しながら云った。

「え、ええ、プレゼントです」

訳もなく見破られたのかと思って、一瞬ドキッとなった。

「リボンをおつけしましょうか」

「え、ええ、そうしてください」

私は、ほっとして「あっ、それから、これを上にはってください」と言って、用意してきたカードを彼女に渡した。

完璧である。躍る心が足を急がせた。お金を払い、何げない感じを出すように努めながら店をあとにした。次は「K」である。

「K」はその付近とくらべると、一段と光って見えた。一度前を通りすぎ、客がいないかどうかを見ながら、五十メートルほど先まで歩き、もう一枚のカードがポケットに入っていることを確かめて、店へもどった。

この店は、奥ゆきが六メートルぐらいで、中央を奥まで走っている高いショーケースが店を二つに区分していた。右側には、Yシャツ、ネクタイなど男性用品が陳列しており、左側には女性用品、主に下着類が陳列してあった。

今度は、三つ数えただけで呼吸が整った。

「あの一、すみません……」

「はい？」

店員は、ふり向きながら言った。この顔は美人の顔ではなかったが、一般的な顔として世間一般に見られる顔であった。十分、顔を

観察する余裕ができた。

「実は、一六五センチメートルぐらいの女の人にプレゼントするんですが、スリップとパンティをください」

もう一度、誤りがなかったかどうか、このセリフを頭の中でくり返した。

「一六五センチメートルですか。スリップとパンティですね」

ちょっとこまったような顔をして彼女は云った。そして、店と奥とを区切っている、紺色のビロードのカーテンに向かって、突然、口を開いた。

「あの、奥さん。一六五センチメートルぐらいの女の人のサイズはいくらぐらいですか」心臓が口から飛び出しそうになり、あわてて口を閉じ、何か云おうとして、再び口を開いた時に、カーテンの間からスマートな、四十代の婦人が出てきた。この年代の女性には珍しく、髪を茶色にそめていなかった。

「いらっしゃいます。一六五センチメートルですか」

私がうなずくと、店員にサイズを言った。

それから、再び私に、

「色は？」

「ク、クリーム色がいいんですけど」

「クリーム色ですか、ちょっと……その色は……うちでは、あつかってないので……」すまなそうに言うてから、「どうしても、ク

リム色でなければならぬですか。クリーム色ですと、上に着るものもクリーム系統になりますけど」

急テンポに練り上げた計画が狂いだした。

「おちつけ！」さかんに心が叫びつづける。

何か云おうとして言葉をさがしていると、彼女が云いだした。

「これなどはいかがですか」

壁に飾ってあるアブノーマルな——いかしっている——ピンクの花模様のスリップを指さした。

「これですと、そろいのパンティもございませうが……」

頭で考えるより早く、口の方が、かってに動きたした。

「サイズは、大丈夫ですか」

「ええ、大丈夫です」

「じゃ、それをください」

女主人と店員は、パンティをガラスケースから取り出し、スリップと一緒に箱に入れて包装にとりかかった。

「あッ、リボンをかけてください」ポケットからカードを出し、店員に渡し、「それからこのカードを上にはってください」

二人は一生懸命、包装をしている。壁には一杯に、目もくらむような、すてきな香りの下着が飾ってあった。

ちくしょう。なぜ、父はこの商売をしな

ったんだろう。それらにさわりたい気持ちを懸命にこらえながら、私の心は、しばしの間、夢の園をかけまわる。

もし私に、時間を自由に止めることのできる力があつたなら、世界中の下着を盗んでやるのだが。

もし私に、姿を消せる薬があつたなら、この下着、パンティ、スリップ、ブラジャー、ネグリジェが全部、私のものになるのだが。

「はい、どうぞ」

白い地に小さな赤い水玉模様の包装紙の上をピンクのリボンが規則的に走っていた。お金を払い、高なる心をおさえてアパートへ足を向けた。

ドアに鍵をかけ、窓に注意を払いながら、ベッドの上においた二つの箱のリボンを、ふるえる手で解いていく。

赤いネグリジェ。七部袖——私が大きすぎるのかもしれない——で、袖と衿に同色のフリルがついている。

スリップ。その中で花々が歌を歌って私をまねいている。

パンティ。レースのフリルがついていて、可愛くて、食べてしまいたいくらいである。

手でさわると、手がナイロンの生き物の中に吸いこまれていく。顔に近づけると、すてきな香りが、私を有頂点にする。以前、通信販売で手に入れた、ペラペラですごく値段の

高いアブノーマルなものとは、くらべものにならなかつた。本物だ。実際に女性が身につけるものだ。

長い長い夜であつた。

○

興奮のうちに、残りの三日も過ぎてしまいホカホカした気持ちで、学校に足を向けた。

学校で私を待っていたものは、バリケードストライキ準備委員会であつた。前の幹部が全員そろっていた。彼らはすでに、私を委員長にすることを決めていた。ホカホカした私は、二つ返事でこれを承知してしまつた。今度は、ヘルメットとゲバ棒を持ち、椅子にすわって、仲間のすることを見ていた。ただ、すわって見ているだけであつた。

これがいけなかつた。すぐに機動隊が導入され、すわっていた私だけが、つかまつてしまつた。学長の必死の説得で連行されずにはすんだが、その時のきまざさといったら、例の店のときよりもひどかつた。

父も、今度は、こづかいをへらすだけではすまらず、転校を命じられた。学校としては大切な金づるを逃したくなく、私を懸命に引きとめようとしたが、まともなわりには頑固な父には、勝てなかつたようで、説得役にされた教授が、失敗したために首になるとかどうとかという、うわさまで飛んだくらいであつた。

—(未完)—



(一)

エッホッエッホッ……

月のない川つぶちを飛ばす町駕籠が一丁、
その背後から手拭で頬冠り、裾を端折った男
が突走って行く。

墨を流したような上げ潮を右に見る此の辺
は小網町の河岸、時刻は五ツ半（午後九時）
にもなろうか。

「駕籠丁さん、済まねえがもうちっと急いで
くんねえ。近頃は何かと物騒だからな」
伴の男が、呼吸を弾ませて走りながら声を
掛ける。

と言うのも、このところ江戸市中では、奇
怪な出来事が相次いでいた。

半年ばかり前、弓町小町と呼ばれた評判の
箱入娘が、鎧の渡のやや上流、牧野佐渡守屋
敷裏の乱杭で無残な水死体となって発見され

たのが始まりで、それから続いて四人——い
ずれも噂の高い小町娘ばかりが、場所こそ違
え、同じ水死体となってあがった。美女と言
っても、それが茶酌女や芸者ではなく、すべ
て分限の秘蔵娘であり処女であったことは、
それだけで巷間の話題を賑わすには充分だっ
たが、何よりも人々を啞然とさせ、慄然とさ
せたのは、五人の娘の水死体に共通した酸鼻
なありさまだった。何という惨さ、痛ましさ

——可憐な美女の五人が五人とも、一様に、その女性の中心部、処女の最も羞しい部分をぎゅぐゅと縫い合わされていたのだ。これには、流石の江戸ッ子も舌を巻いて言葉が無かった。

町方でも無論、調査探索を開始したが、皆目手掛りが掴めず、多少とも眉目よい娘を持つ親達を、不安と恐怖に顫え上らせていたのであった。

折も折、通りかかったのが、恰も最初の娘が浮かんだあたり、対岸に牧野屋敷の裏堀が黒々と続く川つぶちだったから、駕籠丁だっ

ていい気持はしない。「ヘイッ」と叫ぶと、鉄砲玉のように駆け出した。

やがて、駕籠の着いたのは小網町三丁目の外れ、安藤対馬守の中屋敷に続く一角で、表札に「室井元碩」と記した立派な門の前であった。築地堀の彼方に広い庭があり、奥深い処に、かなりの建坪とおぼしい住居が聳えている。

如何にも格式ある荘重な門前に、どう見ても堅気とは思われない男に先導された暗夜の町駕籠——これは奇妙な取り合わせだが、男は物馴れた歩調でスタスタと門に近寄ると、

ちよつと周囲を見廻してから、忍びやかに叩いた。脇扉があくと、其処へ首だけ突っ込んで二言三言、戻って来て駕籠丁に駄賃を払ってから、

「さ、お嬢さん、着きましたぜ」

駕籠の中へ声を掛けた。

(二)

室井元碩——その邸の格式が示す通り、さる大身の在府中の典医を勤める長崎帰りのオランダ医者で、外科医術にかけては殊に高名であることを知る人は知っている。しかし齡は少壮く、浅黒く引き締った端正な面貌にはそれなりの風格を具えているとはいえ、どう多く見ても三十五を越えているとは思えなかった。

その元碩の視線を浴びて、身も世もあらぬ風情で差し俯向いた娘——これが最前の駕籠の主、小舟町和泉屋の一人娘千佳である。まだ十六か七の、富裕な町家の娘らしい花やかな身なり、羞らに伏せた横顔の可憐な美しさは、食べてしまいたいという表現がぴったりの初々しさである。

「よろしい。事情はよく判った。御心配には及ばぬ」

元碩にやさしくそう言われると、千佳はますます恥しげに身を縮めた。

「こうしたことは、町の中条などにかかっているは兎角あとに面倒が起る。儂が内々に済ませて進ぜよう」

中条あるいは中条流とは、子墮し専門の医者——といっても無論公然の職業ではなく、謂わば潜りの墮胎医である。

「それにしても、先生——」

部屋の間で神妙にかしまっていた例の男仁造が口を挟んだ。

「非道え野郎があつたもんですね。こんな可愛らしいお嬢さんを——」

「仁造——」元碩は、男に無駄口を叩かせず「御苦労だった」と言う、手文庫から若干の金を包んで、畳の上を滑らせた。

「取って置くがよい」

「こいつあ、どうも——」

ニヤリと、卑しい笑いを片頬に浮かべるとその場で遠慮もなく包を抜け額が二枚（金にして二歩）——どうやら仁造の仕事の報酬には過ぎた金額だが、それを無造作に懐中に捻じ込んで、「それでは、あつしはこれで」立ち上りながら、千佳の後姿をチラリと見やり、何とはなしに元碩と顔を見合わせて「エ

へへ……」と笑った意味あり気な表情——それを無論、千佳は知るよしもない。

千佳にとっては、仁造は救いの神にも思えた。何の不自由も知らずに育った千佳が、ふとしたことから船宿の手代春吉と人目を忍ぶ仲となり、愛し可愛の逢瀬を重ねるうち、気がついた時には取り返しのない身体になつていた。と同時に、春吉の姿が千佳の前から忽然と消えた。やがて千佳は、自分が欺されていたことを悲しく悟ったが、かと言って今更両親に打ち明けることも出来ないまま途方に暮れているうち、腹の方は情容赦なく膨らんで来る。この上は死ぬほかはないと覚悟を決めた折も折、以前店に出入りしていた仁造がひょっこり現れて、何処でどうさとしたものか、千佳の耳に口を寄せ、「あっしに任せておきなせえ。悪いようにはしない」と、囁いたものだ。今は薬も掴みたい気持の千佳は、仁造の言葉に従って、連れて来られたのが元碩の邸——。

こんな立派な医者をして仁造風情が知っているのか、そんなことを不思議に思うほどの余裕は千佳にはなかった。

「では、こちらへ——」
先に立った元碩のあとに踵いて這入ったの

が、現在で言う手術室。

殺風景な板敷の部屋で、周囲の壁には様々の器具を並べた棚が幾段も重なり、床の中央には無気味な白木の台が据えてあった。それは、ちょうど人間がひとり寝そべれるほどの長方形で、厚い桧の一枚板の四隅に鉄の環が埋め込まれている。まさに巨大な姐とも言うべきものだった。

この異常な部屋に一步踏み入れた時から、千佳の両脚は萎え、竦んだ。

「さ、お脱ぎなさい」

千佳の心情など全く意に介さぬような元碩の冷たい声が命じた。

「身に着けた物を、残らず取るのじゃ」

「ハ、ハイ」

流石に千佳は躊躇う。

「なにをぐずぐずしておる。平常の身体になりたくないのか」

「イ、イエ……」

「なら、言う通りにすることじゃ。儂は医者じゃ、何も恥しがることはない」

「ハ、ハイ」

千佳は、心を決めた。どんなことがあろうと、腹の子は始末しなければならぬ。このまま生き恥を曝すことを考えたら、元碩一人

の前で、それも僅かの間、裸になることぐらい我慢出来ないことはない。

「で、では、お願い……いたします」

消え入るような声音でそう言うと、もう何の躊躇もなく千佳は帯を解き始めた。

(三)

一糸も纏わぬ千佳の白い肉体が、静かに台上に仰臥して眼を閉じた。それは恰も、大俎の上で料理されるのを待つ美しい人魚の姿であった。

「では、少々苦痛を伴うから、施術間だけ手足を縛っておくが、よいか」

「——」

千佳は黒い睫毛を顫わせながら、微かに肯いた。総てを元碩の掌中に任ねた、いじらしさ——。

「よい覚悟じゃ。直ぐにも楽になる」

そう言うと元碩は、先ず千佳の両脚を左右に開かせ、両下端にある環にそれぞれの足首をガッチリと固定した。さらに、上方に引き伸ばされた両手首にも、冷たい輪が食い込んだ。

手足の関節が軋み、挽ぎたての果実のような乳房が顫えた。満月のような艶やかな腹の

中央に小さな弱^か弱^けを置く可憐な臍と、さらに豊かな太腿と、余すところなく曝した最も恥しい姿。——もはや凡ての動きを封じられた雪白の犠牲者^{いけにえ}を瞬きもしないで見下す元碩の瞳の中に、次第に妖しい光りが宿り始めた。めらめらと燃え上る青白い炎のようなその光りは、見る見るうちに、元碩の相貌を一変させた。

「春之助、春之助」

隣の部屋に向かって元碩が呼ぶと、

「はい」

と応えて、出て来たのは若い男だった。
(呀ッ)と心に叫んで、千佳は思わず眼をひらいた。

元碩ひとりと信じていたのに、こんな姿を曝す相手がまだ居たのかと、半ば恨みをこめて新しい登場者に目を遣った瞬間、今度は現実^{まこと}に声に出して叫んだ。

「春さんッ」

姿こそ変わっているが、そのきりりとした色白の若者は紛れもなく春吉だった。眠る間も忘れたことのない愛しい情人^{いと}であり、腹の子の親であり、しかも突如、姿を消して千佳に死ぬ思いをさせた憎い男でもある。

にも拘らず、その姿を目前にした千佳は、

恨みや怒りよりも、嵐のような懐しさに身内^{みうち}をカッと熱くし自分の恥かしい姿態も忘れてもう一度、「春さんッ」と呼んだ。自分の声に誘われるように、両眼からどっと熱い涙が溢れた。

だが、元碩に春太郎と呼ばれた若者は、仮面のような無表情を崩さず、冷たい視線をチラッと千佳に向けただけだった。

(ど、どうしたの。あたしが、このあたしが判らないの)

千佳はもどかしさに、不自由な身をくねらせた。

(どうしたんだろう。たしかに春さんに違いないのに……。そう言えば先生はいま、春太郎って呼んでいたけど……。いいえ、やっぱり春さん、春吉さんだわ。間違えようたって間違える筈がない。多分、あたしにまだ気がつかないんだ。よく見てくれればいいのに……。早く見て。お腹^{なか}の中の子は、あなたの子よ。あなたが止せ^よと言ってくれば……。本当は、このまま産みたいの。あなたの子が産みたいの。止めて——産ませて——。そうして、どんな境遇でもいい、二人で世帯を持ちたい。……まだ気がつかない。あんな冷たい貌^{かたち}して……。あなたに抱かれたこの身体^{からだ}を忘れ

たの……。」「千佳、俺だ、春吉だ。無分別は止せ。産むんだ。これは俺の子だ」って、何故言ってくれないの。お願い……。何故……。何故……。でも……。どうして……。どうして……。春さん……。こんな処に……。居る……。の……。か……。……しら……。)

千佳は、次第に深い昏睡に陥って行った。元碩が、オランダ渡りの麻醉薬を嗅がせたのだ。

(四)

ふっと、意識を取り戻した時、千佳を襲ったのは胸震いするような悪寒と、次には下半身の重い疼痛だった。

気がつく、いまだに一糸も纏わぬあられない四肢をひろげて大俎の上に固定されたままだった。

「眼が醒めたようだな」

頭の上で、元碩の声がした。

「だいぶ出血したので、寒かろう。が、安心しなさい、身体^{からだ}は元通りになった。ほれ、腹の中が軽くなったろう」

「あ、ありがとうございます」

「礼を言うには及ばぬ。僕は医者だ」

「は、はい。では、もう、あの……。此処から

降りてもよろしうございますか」

今更のように恥かしさが全身に蘇り、何よりも先ずこのおぞましい姿から解放されたい千佳だった。

「いやいや。腹の中のは堕りたが、まだ其方は、真実に清浄な身体になったわけではない」

「え」

「其方の身体の中には、まだ悪い血が残っている。それが二度と悪戯をしないようにするのも医者者の義務だ」

「……」

「つまり、再びこういうことの起こらないよう、その根源を断つのだ。そうすれば、其方は清らかな天女に生まれ替ることが出来る」

「そ、それでは、まだ何か……」

「そうじゃ。謂わばこれからが真実の医術、人助けの仁術じゃ」

元碩は、棚の一つへ歩み寄り、丸い筒からピカピカ光るものを抜き出した。

「これを御覧」

千佳の眼の前に元碩が差し出したのは、長さ三寸ほどもある太い針だった。

「これが、魂まで腐らせる悪い病気を癒す、唯一の道具なのだよ」

鍼を打つんだわ、と千佳は思った。

妊娠のために出来た悪血を追いつくためにきつと鍼療治が必要なのだと、千佳は自分なりに解釈した。

「断っておくが、今度は、さき程のように麻酔はかけない」

「痛いでしょうか」

「痛い」

と、元碩は事もなげに言った。

「死ぬほど——いや、死んだ方がいっそましだと思ふほど痛いかも知れん。また、それでは効果が無い」

「こわい」

「そうだろう。ともかく縫うということは、儂にとつても大仕事だ」

「縫う？」

「さよう。其方の劣情心の根源を、これで断つのだ」

「えっ」

千佳は殆んど気を失いかけた。

「それでは、あ、あなたは……」

「そうじゃ。儂はこの針で、其方のような若い娘を今までに五人も救つて来た」

「ギェッ。た、助けてッ」

千佳は、気狂いのように不自由な四肢を悶

えて、声の限り絶叫した。

「これ、どうしたのだ。そのように怖がることはない。儂は其方を救うのだ」

「いやッ。助けてッ。お願いです。——だ、だ、誰か——」

「儂は医者だ。人助けこそすれ、何も危害を加えたりはせぬ」

「ああッ、そんなことは、堪忍してッ。後生です。お願い。も、もう悪いことは致しません。助けてッ」

「そう口では言う。だが、人間の生身はそれほど単純なものではない。だから、手術が必要なのだ」

「いやです、いやです。いや、いやッ。許してッ。助けてッ」

血を吐くばかりに叫ぶ千佳を、氷のような視線で、突き刺しながら、元碩は「春太郎」と、最前の若者を呼んだ。

「この娘を、暫時、黙らせてくれないか」

春太郎は、素早く手拭を丸めると、叫喚き狂う千佳の口の中へ押し込み、その上から、もう一本の手拭で堅く唇を締め上げた。

「ムムムム……」

首を烈しく左右に振り、僅かに動かし得る腰を波うたせて、千佳は呻き続けた。

「どれほど叫んでも、この部屋から外へ洩れる気遣いはないが、こんな無体なことをしたのは、儂の話を聞いてほしいからだ。それ、そのように美しい顔を痙攣らせる——。怕がらずに、よく考えて御覧。此処へ来る前、其方は死ぬほど苦しんだ。他に何の不自由もない身の上で、何故それほど苦しまねばならなかったか。つまりは、其方の中に果喰う劣情の故だ。そんな劣情心さえ起こさなかったら其方は、何時までも幸せな箱入娘で居られたし、やがては相応の聲も迎えられた筈だ。にも拘らず、不図した一時の間違いから、あれほど自分を苦しめた劣情心を、其方は憎いとは思わないか。思うに違いない。では、その劣情心を起こさせたのは何か。これこそ女という生き物の悲しい性のなせる業だ。女の性——解るだろう。それさえ無かったら、何事も起こらなかつたのだ。其方はたった今、最初の苦しみからは逃れ得た。このまま帰ればすべては無事に納まる筈と思うだろうが、そうは行かない。いったんは納まっても、この身体の中に女の性が果喰っている以上、其方はまたぞろ劣情心を起こし今度と同じ苦しみに遭うことになる。それが儂にはよく判る。だから儂は、其方のために、再び苦しみを味

わうことのないように、してやろうというのだ。納得がいったかね」

「ムム……ムム……」

千佳の動きは、すでに絶望的に弱まっていた。それを見ると、元碩はゾツとするような笑いを唇に湛えた。

「そうか、理解ってくれたか。……では、始めよう。最前も言ったように麻酔は使わぬ。一針一針の苦痛を、其方の中にある魔性に思ひ知らせてやるのだ」

遂に恐怖のあまり、千佳は氣を失った。

(五)

猿轡の奥から声にならない悲鳴をあげて、千佳が現実に戻ったのは、全身を突き抜ける苦痛のためだった。

「ふふふ。いくら正氣を失おうとしても、この針がそうはさせぬ。目の前の現実から逃れて、一時的とも楽をしようなどと思つてはならぬ。一針ごとの苦痛に、其方は償いをしなければならぬのだ」

ひろげ得る限りひろげさせられた練絹のように肌理細かい千佳の太腿は、夥しい脂汗と針によって引出された血に染まって、凄惨な有様を呈している。

「ウツ、ウツ」

くぐもった呻きとともに、眩しいような丸い腹が力いっぱい反り返る。千佳の肉体を、太い針が再び貫いたのだ。

その苦痛が失神を呼び、ふうっと意識が宙に彷徨いかけると、またもや次の激痛が襲い容赦なく現実に取り戻される。

このようにして、千佳は、激痛を挟んで失神と覚醒の間を否応なく往き還りし、その地獄の繰り返しのたびに、白くふくよかな裸身が、烈しい痙攣を断続した。すでに五体は、洗ったような脂汗に光り、下腹部から腿にかけては無残な血の色に染まっている。この酸鼻な作業は、殊更ゆっくりと根気よく続けられ、それに伴って、千佳の動きは次第に緩慢になり、針の運びが終りに近づく頃には、失神したまま、遂に覚醒しなくなった。今や意識のない肉体だけが、ヒクヒクと小刻みな痙攣を繰り返すのみ——。

過去、五人の美女の生き血を吸った白木の手術台が、眼前また六人目の犠牲者の血に塗れて行く光景を、瞬きもしないで凝視する春太郎——否、愛しい春吉の憑かれたような視線も、今は知る由もない千佳だった。

冷酷な面持ちで最後の一針を元碩の血塗ら

れた手が引き抜くと同時に、千佳の肉体は完全に緘とじられた。

「見ておくのだ、春太郎。これが女の業ごうというものだ。僕は女が憎い。殊更、美しい女が憎い。このような虫も殺さぬ姿をしていながら、少しばかり眉目みめよい男を見ると忽ち劣情を起す。そうした女心のいたずらが僕は許せぬのだ。人間、一皮剥けば美しさも醜さもありはしない。が、その僅かな皮一枚のために、女は業ごうを冒すのだ。皮一枚——たった一枚の皮のためだ」

元碩は、まだ生々なまなましい千佳の血に濡れたままの両手を、顎の下から顔の方へ、さらに頭に向かって力をこめて持ち上げた。と同時に今まで其処にあった端正な顔は、薄い一枚の皮となってクルリと剥がれ、その下から全く別の顔が現われた。それは見るも恐ろしく歪み、赤黒く爛ただれた無慙な形相だった。その醜悪とおどましさ——何時も見慣れている筈の春太郎さえ、それを眼前にする度に思わず背筋が寒くなった。

「この顔にしてからが、二世を約束した娘を火の中から救おうとして受けたものだ。それが、それがどうだ。生命いのちを取り止めた娘は、命の恩人であり、許婚者いいなずけでもある僕に一言の

礼でも言うことか、無残に変わった姿を一目見るなり悲鳴を上げて逃げ去ったまま、再び僕の前に現われなかった。それからの僕は女から蔑まれ、嘲笑され、恐れられ、罵られるためにだけ生きた。女という女は、僕と同じ空気を吸うことさえ忌わしげに、遠くから唾を吐いた。僕は、何度も死のうと思った。長崎までも彷徨さまようい、もしあのオランダ医者のアダムズ先生に遭あわなんだら、疾とつくに死んでいかに違いない。——僕は女が憎い」

その時、千佳がふと意識を取り戻した。視界が判然はつきりとして来るとともに、千佳の視野をいっぱい満たしたのは世にも恐ろしい悪鬼の形相だった。

「見たか娘。フッフ。恐ろしいか。これが僕の真実ほんとうの顔なのじゃ。真正銘の室井元碩の顔だ。よく憶おぼえておくがいい。これも、春太郎と同じ人間の顔だ」

赤黒く歪んで顔の原型を全く失った皮膚の表面にギョロリと剥き出された両ふたつの白眼に吸い込まれるように、美しい瞳をはち切れるほど睜はいたまま、千佳は悪夢の中へ陥ち込んで行った。

深い深い闇の底へ——。

(六)

千佳が我に返った時、眼の前に近々と二つの顔があった。

「どうやら、お目覚めらしいて」

顔の一つが、そういった。それは、元碩でも春太郎でもなく、目鼻と口以外は髭に覆われた荒々しい男の顔だった。もう一人の男は髭がない代りに眉もなく、のっぺらぼうのようにてかてかした顔の中心に崩れた鼻の穴だけが黒々と両ふたつあいていた。

「呀ッ」

恐怖の叫びをあげる千佳の唇を、男の大きな掌が塞いだ。

「何だ、野暮な声を出して。そう大仰に憚はたくことはねえ。俺おれたちはな、お前さんを助けただぜ」

「あの……此処は何処でしょう。そして、あなた方は……」

千佳は、二つの顔を怕こわ々見返しながら訊いた。

「此処は北新堀の非人小屋、俺おれたちは非人のダボ八とザコ十よ。今も言ったように、お前さんを助けてやったんだぜ」

恩着せがましく語尾に力を入れると、ダボ

八は髭もじゃの顔をニヤリと崩した。

千佳は、すでに緊縛も猿轡もされておらず自由な四肢に元のままの衣服まで着けていることに今更気がついた。

寝かされているのは地べたに直接敷いた藁の上で、見廻すと、天井も周囲も総て藁で囲った小屋だった。

「礼の一言も言って貰いてえもんだな」

どっちの男の手か、着物の上から自分の身体をまさぐるのを栗立つ思いで感じながら、

千佳は咽喉から押し出すように辛うじて、

「あ、ありがとうございます……ごさいます」と、言った。

「で、でも……どうして、わたしは……」

「どうしても、こうしてもねえ。俺ッちが酒井様の堀割の処を通りかかると、お前さんが橋の袂に気を失っていたのよ。それでお連れ申したというわけだが、身投げでもしようとしたのかね」と、ザコ十。

「いいえ……わたしは……」

千佳の頭の中に、次第に記憶が蘇った。

あのおぞましい大俎の上に、死ぬほど羞しい姿勢で固定されてからの悪夢のような一齣一齣が、改めて全身の血を凍らせた。

「ま、何はともあれ、無事でよかった。直ぐ

親許へ送り届けてやりてえところだが、その前に、命の恩人の俺ッちの酒の相手でもしてもらおうか」

と、ダボ八は安酒の悪臭を伴った火のような息を吐きながら、髭面を千佳の頬に押しつけて来る。

「なあにたいしたこっちゃねえ。この可愛いお手々で、ちょっと酌をしてくれりゃあ、それでいいのさ」

ザコ十も、千佳の柔らかい手を掴んで、その気味の悪いでかてかの顔で頬擦りする。

「ああッ。そ、それは……」

「まさか否とは言うめえな」

二人の非人は、獲物を弄ぶ獣のように舌甜めずりした。

胸の悪くなる臭気の立ちこめた狭い小屋の中で、その臭気の根源ともいうべき襦袢に包まれた男二人に挟まれた千佳は、またもや新しい奈落の底に陥ち込んだ自分を、絶望のうちに意識しないわけには行かなかった。

「さあ、ねえさん。ウンと言ったらどうだ」

ザコ十の穴だけの鼻が、腐ったような息をヒュウヒュウ吐き出しながら近づいた時、千佳は思わず顔をそむけた。

「何でえ、何でえ。命の恩人の面が見られね

えってのか」

髪の毛を驚掴みにして無理矢理、顔を捻じ曲げると、わざと悪臭を吹きかけながら、

「そんなに俺ッちが汚ねえかよ。え。——兄貴、お嬢さんは俺ッちが汚ねえとよ」

ザコ十が言うのと、

「お前の面は、誰が見ても気味わるいやな。なあ、ねえさん。これなら何うだ」

今度は、ダボ八が髭面の中から吸着こうとするのを、千佳は必死で逃れた。

「ヘッヘッヘッ。兄貴だって、あんまりほめた面じゃねえからなあ」

ザコ十に冷かされると、ダボ八は赤鬼のような形相になった。

「畜生ッ。こんな恩知らずは構うこたあねえひん剝いちまえ。俺ッちが愉しんだあと、捨て値に売っても、半年や一年、左団扇で暮せるってもんだ」

無論、それが初手からの目論見だったと見え、ダボ八の言葉より早く、ザコ十は千佳の帯に手をかけると、手荒く解きにかかった。

「あッ、ああッ。だ誰か……」

叫びかける千佳の頬へ、ダボ八の平手拍ちが二つ、三つ。

「面倒だ。何か詰め込んでけ」

「はい来た」

ザコ十はいったん千佳から手を離すと、ニヤリとして、自分の股間へ手を突ッ込んだ。

「さあ、またとないチン味をたっぷり馳走してやるぜ」

ザコ十がずるずると引き出したのは、これ以上汚しようにないほど汚れて、おそろしい悪臭を発散する布きれだった。それを丸めると、喘ぐ千佳の小さな口に容赦なく捻じ込んだ。

「あうッ……ムムム……」

臭苦しさよりも、その言語に絶する不快さに、身悶えて呻く千佳。

「よし。早えとこ、ひん剥くんのだ」

男二人の力で、千佳は忽ち腰の物一つにされて転がった。

「てへッ。こいつあ堪らねえ。見てくれ、このうまさうな乳っこ……」

と、ザコ十が頓狂な声をあげると、ダボ八も血走った眼をギラギラ光らせて、

「箱入娘の玉の肌なんぞ、地獄へ堕ちても金輪際拝めねえと思っていたが、何だか夢を見ているようだぜ」

と雪白の上半身をあられもなく露出し、両の乳房を必死に隠そうと身を縮める千佳の姿

を、食い入るように凝視していたが、

「ところで、暴れられると厄介だ。ひっ括っちまえ」

と、ザコ十に命じた。ザコ十は、自分の縄帯を解き、帯ひろどけになると、それで千佳の両腕を背中に括し上げた。

「ムムム……」

腕の付け根がみしみしという痛さに思わず呻き声を洩らす千佳を、そのまま亀の子を引っくり返すように仰向けにしたダボ八。

「さあて、ぼちぼちと御本尊様を拝ましてもらおうか」

千佳の足許に胡坐を搔いて、ポンポンと拍手を打つ真似をしてから、アッという間もなく最後の物を剥ぎ取った。

真紅の腰の物の下から現われた丸く形のいい腹と、それに続く、ふくよかな太腿。そして——二人の男にとっては、まさに呼吸の詰まりそうな光景だった。

「おい。お前は何だって震えてるんだ」

「だって兄貴、あんまり勿体ねえようなもんで、眼が潰れるんじゃないかと……」

「下らねえことを吐かしてねえで、そっちの脚を持つんだ。一、二、三で御開帳ねがおうじゃねえか」

「あいよ」

やがて、千佳の左右の足首を二人が片方ずつ掴むと、その過程を愉しむように、そろりそろりと引きあげにかかった。

今はどうする術もない千佳は、猿轡の奥から声にならない叫びをあげながら、次第にひかれて行った。

——と、その時、ザコ十がけたたましい声で叫んだ。

「あ、兄貴。こ、こりゃ何だ」

ダボ八も、同じ場所を覗き込むや、

「うへッ」

と喚いて、千佳の脚をほうり出した。

其処には二人が期待したものは無かった。

その代り、見るも無残な生々しさで、肉体を緘じ合わせた縫い目が、その全貌を露呈していた。

「うわあッ」

殆ど腰を抜かささんばかりに愕いた二人の男は、滑稽なほど周章であわためき、小屋を飛び出して行った。

× × ×

六人目の犠牲者が墨田川に浮かんだのは、その翌日であった。

(終)



奇クを愛読するようになって久しい。奇クが毎月継続的に発刊されているように、私の購読も続いている。私と奇クとの邂逅は全く偶然なことから起こった。

散歩の道すがら、ふと立ち寄った古本屋で三十数冊のバックナンバーを取揃えた奇クがまるで貴重品でも扱うように硝子戸棚に飾られていた。売りにきた人がしたのか、或はこの店主がやったのかはわからないが、一冊一冊きれいにカバーをつけて、すべて新本のように大切に保存されていた。

かなり高価だったので代金の持合せがなく配達して貰うよう頼んで帰ったことを覚えていたが、それ以来、私の奇クに対する愛読が始まった。奇クの持つ妖しい魅力が飽き症の私の心を、このように強烈に捉えて放さないものであるから、不思議といえは不思議だ。

私は小学校四年のとき、将棋や

碁を覚え、百人一首に熱中した。

碁では目とか石の活き死にを会得するのはかなり難解だったが、将棋では定石らしいものも習い、石田流の奇襲戦法で大人共を驚かし手ほどきして呉れた父もすぐ齒が立たなくさせてしまった。百人一首では上の句を読むか読まないうちに取札を取ってしまうので次第に相手がいなくなり読み役をさせられることが多くなった。

しかし中学の入試に熱中するようになってから、そんな勝負事もばったりと忘れてしまった。中学へ入ってから先ず熱中したのは昆虫採集だった。虫という虫を部屋いっぱい並べ将来は有名な昆虫学者になりたいと真剣に考えたりしたことがあったが、移り気な私はいつとはなしに植物採集にこり

だしていた。牧野博士のようになりたいと植物標本の山に埋もれながら熱にうかされていた。

思春期に入って、百人一首の歌の意味がわかりかけてきて和歌と俳句にこりだした。アララギやホトトギスの会誌をむさぼり読んだのもその頃である。忽ち数十、数百の短歌や俳句が出来上り、短冊に書いたりした。兼好法師や西行法師の生活が慕しくなり鴨長明のように方丈の家に世を捨てて住んでみたいと願ったりした。

我ながら自分の飽き症にはあきれ果てるのだが、専門学校に入学した頃は考古学にこり出した。弥生式土器や古瓦、壺、坏、それに墓碑や板碑の類まで、発掘したり拓本にとったりした。南向きの丘の斜面、水の便のよきところ、地勢を按じただけで古代の窯の跡を知る位までになった。流石にその頃になると考古学者になりたいとは思わなかったが、蒐集の便利のために写真術をマスターし運転免許をとった。

それらの道楽を卒業した頃、私は奇クを知った。そして現在に至るまで、飽き症で移り気の私の心を捉えて放さないのが、奇クである。妻帯と共に私が集めだしたものにポルノグラフィがある。これは妻が大変よろこぶので夫婦円満のためにも、優秀品の蒐集に努力している。

それともう一つ、これは妻に余り言えないことだが、妻帯直前のひととき、女体遍歴に熱中したこともあったが、それらの記録はおびただしい写真やテープにとどめたまま、今では実際には行っていない。

もし戦争という魔物が私の青春を中断していなかったなら、早熟な私は、もっともっと自分の好きな道を数多く探求していたかもしれない。戦争という横道は、私の意図に反して占領した現地語の習得に凝るようになりしむけた。中国語や馬來語の読み書き、アラビヤ文字の習得やダイヤ族の土語の研究までやったが、今ではそれらは青春の夢としか思えない。

昭和元禄の平和な御代を私は奇クの妖しい魅力と共に楽しく過ごしてゆきたいと願っている。そして私の現在最も蒐集に全力を尽しているものの名を挙げておこう。それは金(かね)である。

奇クの妖しい魅力

川端美美男



(第六十回)

辻村 隆

人間今日は幸せでも、明日のことは分らない。かつてカメラ・ハントで発表した「燃ゆる想い」にあげるを、水野弘氏の夫人香代さんが、思いがけぬ奇禍に遭われた。岐阜よりの彼の電話によると彼の自宅近くの知人が新車を購入して、嬉しさの余り、夜、彼の家を車で訪問して、一度試乗してみないかと奨めたそうである。生憎と水野氏は手の離せない仕事があった、愛想のつもりで、奥さんによかったら乗せてもらったらよかったのが間違いであった。小一時間もしぬうちに香代夫人は全身泥まみれになり、這うようにして戻ってきていうには、馴れぬ車のこととて、運転を誤って道路わきの小川に転落し、辛うじて這い上ってきたが、車は無惨に破壊して、たし、運転した彼も、かなり傷を負ったと息もたえだえにいて、

その夜は外傷の手当をして休んだそうである。それが三日後突然精神錯乱を起こして、脳が混濁してしまった。事故の時、頭を打ったのがその時は夢中で分らず、あとになって症状が現われたのであった。驚愕した水野氏は早速医師へ担ぎ込んだが、何分にも田舎で、設備もなく、急拠名古屋の大病院へ、入院させたということであった。愛妻家の彼、涙声で語るその悲劇になぐさめようもなく、他人事ではないと、車にのる私、自戒しきりであった。

五月頃、岐阜の彼の家を訪問し今一度の激しい夫婦プレイに耽溺の一夜を過ごすつもりであったのに、何もかも御破算になってしまった。願わくば、水野香代夫人の一日も恢復の早からんことを祈るや切である。

× × ×

この楽我記稿も締切の、三月末日ぎりぎりになって、待望久しき金原奈加子から連絡があつて、彼女の妊娠九カ月の妊婦フォトを撮る機会に恵まれ、しかも妊婦にして始めての逆さ吊りに成功した。伊藤晴雨氏が自分の奥さんに試みられた妊婦逆吊りは、一昔前私の血肉を沸き躍らせたものであったが、今その悲願が遂に達成してこれの実現をみたのは、一に金原奈加子の献身的な協力の賜ものに外ならない。私と箕田氏が、電話連絡のたびに、彼女の妊婦フォトや逆吊りのことに触れていたのも編集部の杉原氏等が、もう撮ったものと感違いして、五月号の編集部だよりには、私の妊婦逆吊りフォトが、出来たように書かれてあつて、その手際よい早計さに、編集部あて、早速文句をいったら、まるで言葉を裏書きするようにそれから一週間後、実際にフォトをものしたので、何か嘘から出たマコトの感もあつて苦笑したが、幸い嘘にならずに済んだのでホッとしている。

工中絶まで考えたのに、結局母性本能に目ざめて、産む腹をきめたことは、私にとっても誠に僥倖であった。十八才の少女めいた彼女が間もなくベビーママになろうとしている。過去一年間、かなりの起伏のあつた彼女だっただけに、今、この最後の集大成ともいうべきフォトをものにして、うたた感慨無量であつた。箕田氏よりの要請もあつて、分譲用はかなり多く撮ったから、この生々しい記録は妊婦愛好者の方々にも、とっくり味わってもらえるものと確信を抱いている。

木戸悦子さんが、最近どうやら乳呑児の手を離れるようになって再びプレイに協力したい旨の便りが編集部に届き、彼女の麗姿を今一度カメラに入れたい要望にかられている。彼女とは妊娠九カ月の「胎児の喘ぐとき」一回こっきりだけに、爛熟した人妻の、思い切った肢態を思う存分に撮ってみたいものである。

× × ×

先日、ひょっこりとよみうりテレビのプロデューサーのT氏より電話があつて、ノーベル書房という書店が、伊藤晴雨に関する豪華限定本を発行するので、資料その

僕のイメージ画集

『妖夢・雲古の塔』

室井亜砂路



他で協力してほしいと要請があった。11PMで、伊藤晴雨の巻物や絵巻などを開陳したのだから、多少は買い被っておられるらしいが、私が伊藤老と交際のあったのは、ほんの晩年数年であって、既

に老はかなり衰弱しておられ、あの天衣無縫、狷介な独特の境地は既に影をひそめておられた。イレブンで披露した巻物が、伊藤老の昭和三十五年一月の作で、七十七才の時のものであって、巻尾には

この巻物をもって、自分の画歴の最後としたいという、曰くつきであった。翌三十六年の一月二十七日、七十八才の高令で天寿を完うされたのであるが、私としては、老骨の氏に何か無理をいったよう

で、その頃非常に申し訳ない気持ちにかられた事を憶えている。

東映で映画化予定の、伊藤老の伝記も、今の処検討中であるらしい。エログロ路線を突走る映画企業として、真面目な夫婦愛でつらぬこうとする氏の伝記映画は、或いは時宜に適せぬのか、延期する様な公算が大で、私としても非常に残念に思っている。

ノーベル書房の、伊藤晴雨氏の生涯のすべてを網羅した本の発行されるのを、今から愉しみに行っている。きくところによると、伊藤氏の遺族の方々からも、陽の眼をみぬ貴重な文献や画集、写真の提供もあって、世の好事家の垂涎のものになりそうな気配である。

× × ×

案外思いもかけぬところに、私のファンがいるものである。いつも行きつけの理髪店に、インターン中の女の子がいて、オカッパの可愛い娘である。いつも私の顔をあたってくれるのであるが、先日、主人が食事に奥へ消えた時、顔を剃りながら低い声で、

「おじさん、辻村さんでしょう。」

私11PMですぐ分ったわ。前から言おう言おうとして、そのチャンスなかったんだけど、おじさん私

をどこかへ遊びにつれていってくれない。何でもするわ」

と、ドキッとする様なことを、カミソリをあてながら顔をよせて言う。何でもするわとは、一体何を指して言っているのだろう。そうしたタレントめいた私に憧れているのかも知れないが、ホンの映画のCMをかねて出た一回こっきりの私に、乙女の夢多い願望を持たれたとて、そうそう叶えられるものでもない。しかし、小当りに当ってみて、あわよくばハントにと、又ぞろいつもの猥らな虫が蠢動しはじめる。

「ハダカにして縛るよ」

と、眼をつぶりながら言っただけ、

「いいわよ、ゴーカーンしないのなら」

と洒々と言われたのには恐れ入った。このM子どうやら私という人間に興味を抱いてそうなので、或いはハントに登場するかも知れない。いずれそうなれば委細くわしくはその時に、という段取りである。

私を中心にした、同好者の集いをU氏がしきりに提唱して、彼の知人にも呼び掛け、差支えなかつ

たら、私の同好の仲間にも、そうした集いに参加しないかと奨めてくれる。SMに慢性化した私にとっては、種々のそうした内容を盛った話も、殆んど日常茶飯事の会話のようにして喋べっているが、話や資料はききたし、みだし。されど自己の身の保全のため、自分の素性は多人数の人々に知られたくないという人が案外多い。私という人間を頂点にして、A B C D E F……の各人とは、個人的にながりはあっても、A対B、B対C、A対Cという人々の横のつながりは殆どない状態である。それだけにU氏が仮に提唱しても、U氏を中心とした一連のグループが集まるだけで、私の多人数の同好者の同時参加は恐らく難かしからうと話しておいた。それぞれに地位や公職のある人達である。そうした人達によって、私を盛り立ててくれるのは嬉しいが、やはりこれは無理な様である。

東映京都のハレンチ路線第六弾「徳川いれずみ師『責め地獄』」

企画の矢尾氏より電話をいただいて、彼と会い、シナリオを一読して、かなり私の仕事の場もあるのだとお引受けした。その日ス

チール撮影があつて、この映画で一番緊縛の多い東映のニューフェース、由美てる子さんの刺青のポーズをとる。ガイコツの彫りものが、酒をのんだ時、白粉彫りの観音様が浮かび上るという趣向である。ピチピチした可愛い人で、オッパイが凄く大きい。つい後手縛りのスチールは、恰度行き合させた私、早速かり出されて、縛りの第一弾——。くわしくは来月号で、あらずじと一緒に東映スタールのカメラ・ハントを発表の予定で、春と共に身辺又してもあわただしくなつて来た。カントクさんは勿論、石井輝男氏である。緊縛残酷美の集大成ともいうべきものであろうか。クランクインは三月二十六日、クランクアップ四月二十二日の予定で、封切日は今の処未定である。PRで、東西の緊縛師が技を競うという企画もあつて私も相当かり出されそうである。

五月号の「楽我記」欄で、風流極道軒氏に梨花のフォトを送った処、文字通り梨のつぶて。一寸癢に触つてその事に触れていたが、本日（三月二十六日）彼の奥さんより鄭重なお詫びの手紙と共にポラロイドで撮った緊縛フォト一枚

入れて送ってこられる。（以下原文の尽）

「前略、梨花さんの写真、主人とても喜んでおりました。次の日から盲腸炎で入院し、腹膜炎を併発致しまして、一ヶ月も過ぎました。御返事をと命じられ乍ら、看病にてつい遅れまして、誠に申訳御座いません。今月には退院致しまして、五月になれば恢復する筈で御座います。その折には、又どうぞ——御見物においで下さいませ。主人にいわれまして、写真を送ります。ポラロイドで撮りました。何分にも年令が〇〇才にも近く全く笑止——。芸術観賞には程遠く、唯着物を着ていない縛られた裸の私の写真ということではお礼旁々、御健勝をお祈り致します。」

三月二十四日 風流極道軒妻「私は奥さん自身、みずからの緊縛開股フォトを同封されたお気持ちを察して、泌々いい夫婦だと思つた。美女の梨花のフォトを送った私に、主人の心をおもんばかってジェラシーどころか、自分のフォトを入れられた心意気に、まったく嬉しくなつてしまった。是非一度お目にかかつてプレイに夜もすがら耽溺したいものである。」

夫婦プレイの最初

私達の記録

山口 登

奇クの皆様お元気でしょうか。私もゆり子も相変わらずプレイに熱中した毎日を送っております。ずいぶんと迷った上で43年11、12月号に載ったものを送ったわけですが、現在では心からすっきりした気持で、この写真を送ることが出来ます。そして皆さんの仲間入りが出来れば、本当に幸いだと思えるようになりました。

田畑の仕事をしながら、いろいろとSMについて語り合うときの



ゆり子は本当に楽しそうで、仕事もはかどります。



私は無学で文章も下手で、思うことを表現出来ないのが残念ですが、私達にはこのプレイが、何よりも楽しいことになっています。

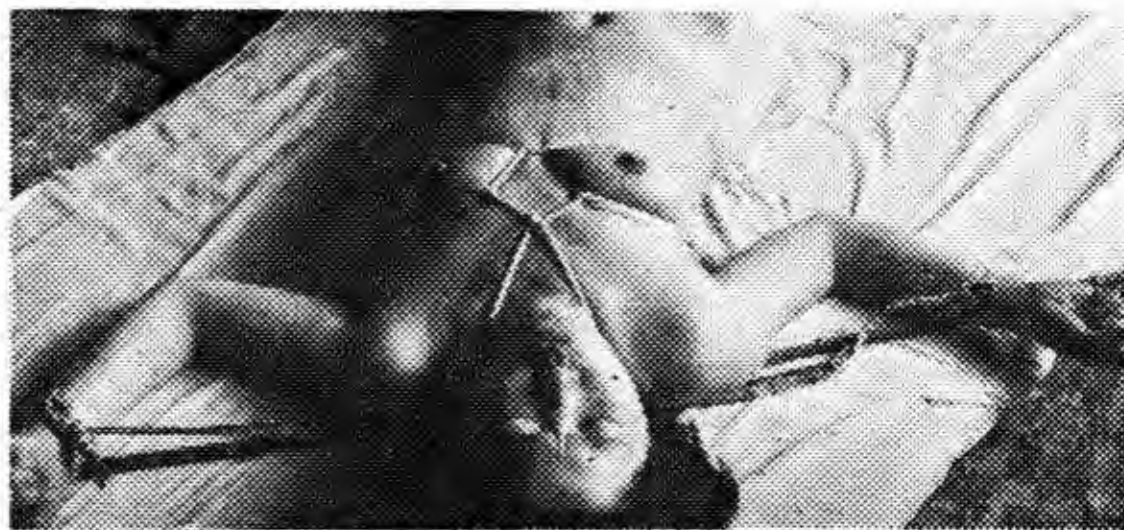
私は三十才、ゆり子は二十六才の中古者、結婚三年目です。以前から顔みしりではありましたが、結婚まではSMについて話し合ったことなどは一度もありませんし私自身も、SもMも知らず、関心もありませんでした。

結婚二カ月目に、彼女が「うちには、とても好きなヒトがいたのよ」といい出したので、「誰だ」と訊いても、含み笑うだけでいおうとしません。私も意地になって「拷問するぞ」というと「少々のことでは白状しないから」などと逃げるのです。

よし、それでは……というわけで、映画で観たマネごとで手足を縛ってやり、ハダカにして責めてやりました。それが、電灯の下で彼女の全裸を見た最初でした。

「云え、云え」と責め立てているうちに、私自身、今まで感じたことのない昂奮を覚えたのでした。

ゆり子は、洗濯バサミや、私の掌で責められながら悶えていました。私は彼女の美しさを改めて見せつけられた思いでした。そのう



ち、全身をブルブル慄わせていたゆり子が急にぐったりとなりました。私はそれが失神と知らずに驚きました。が、やっと気付いた彼女が「貴方にいじめて欲しくて嘘を」といったのが始まりなのです。

S M の 効 用 葛西 六郎



某氏の論説の中に、夫婦プレイは馴れ合いである、という意味の文章があったが確かにその傾向はある。又心の中にうしろめたい気持のあったことも確かである。

私の場合も最初の中は恐る恐る縄を掛けたし、一寸痛がると慌ててゆるめたりで心理的に見ればどちらがSなのかMなのか、正に主

客転倒の有様であった。SMのだいたいを満喫するどころの騒ぎではなく、全く以ってその不甲斐なさを歎いたものである。

ところが或る日のこと、子供の折檻のスタイルよろしく四ツ這いになり高く持上げた妻のお尻に縄の鞭をあてていたが、正に巨大の形容そのままの臀部には、ヘッピ

リ腰の縄鞭などまるで蠅のとまった位にししか感じないらしく、ウンともスーとも応答なし。「痛くないかい」という誠な情けない我が問いに「その位じゃ感じないわよ」という御託宣。

さればと、いくらか力をこめて打ったが「未だ未だ」という。「これではどうだ」「だめだめ、くすぐったい位い」：これではどっちが責めてるのか判らない。まるで催促みたいだし、馬鹿にされているのではとさえ思える。

「よーし」遂にアタマにきた私は二本だった縄を二つに折って四本にすると、につくき白い巨大な脂肪の塊りに向かって、力の限り振り下ろしたのである。さすがに手応えがあつて悲鳴が上がった。

続いて第二撃。ピシリという音は、何んとも云えぬ快音である。私は、我を忘れたかのように続けて鞭を振った。その度に起こる悲鳴と快音は、私の心を更に昂ぶらせ、むしろ、爽快感をさえ抱かせた。

日頃かよわき男性として「たまには私を打って見なさいよ」などとなめられていた私は江戸の仇は鞭打ちでとばかり打ちまくった。私はまるで男の中の男、筋骨隆々たる偉丈夫になったような気持ちだった。海の荒れくれ男かプロレスの悪役の如き心境と相成った。

こうなればもはや「痛い。やめて」なぞという言葉など耳に入らない。哀願は却って私の心をかき立てる。私は勇者であり思うさま暴れ狂うのであった。うつぶせになつてぐったりとなつた裸身に軟膏をつけ乍ら私は、勝者の快感と誇りを味わつたのである。

女性上位時代、何んたる日頃の腰抜けぶりであろうか。女房のお尻に押しつぶされて、氣息えんえんとしている情ない亭主族たる私は、SM夫婦プレイによって、男の男たる所以を再認識し、以って男性上位の復権を計ることも可能と感じたのだった。

又、夫婦プレイは馴れ合いの上で成立つものではないが、単なるお芝居のみではないと思つたこともつけ加えておく。

書店にて

山形佐武郎

小生、先日日本屋へ行ってみた。現在、本誌は予約購入をしているので探す必要も無いわけだが、習慣とは、全く恐ろしいもの。本屋に着くなり「奇ク」を探し出すありさま。だが残念なことにその店において探し出す事は出来なかった。しかし、こうなってみると人間とは不思議なもの、何が何で

も「奇ク」の顔が見たくなってくる。あげくのはて、およそ三時間ほどの時間をかけて、約15軒ほどの書店へ足を運んだ、そのうちで「奇ク」を見かけたのは、わずかに3軒にすぎなかった。書店より自から購入している方には、たぶんおわかりになっているただけだと思うが、町中の、それ

も比較的大きな店には、なかなか見つけだすことは出来ないものである。いかに少数の店にしか売られていないか、わかっていただけたであろう。それにしても最後に入った店では、小生も少々驚かされた。何と「奇ク」が、山積みになされていたからである。およそ20冊以上はあったであろうか。小生それを眺めているうちに、何となく、いやいな気分になって来た。別に、「奇ク」の存在についてではない、その店の感じがである。何も山積みすることはないであろう。隅の方に、ほんの申訳程度に、何か恥じらうが如く置かれてある貴誌を発見すると、何となく親しみいとおしさを感ずる。しかしながら、こう大ぴらに置かれてあると却っていやな気分になるものである。

小生、氏の意見について、全面的に賛成したい。商魂逞ましいことは、まことに結構なことであるが、もう少し何とかならないものであろうか。こう山積みされていたのでは、否応無しに目についてしまう。目についたとなれば当然それに手が出るであろう。少々飛躍して考えてみれば、そこから悪書追放運動にひっかかりはしないだろうか……。こう考えを進めて行けば憂うつになって来る。

本屋は、貴誌のようなアブノーマル（失礼）な雑誌が売れると見込んで、大量に仕入れたのであるが、正に逞ましいきは商魂なり、とでも言おうか。「売れると思っただから、置いたまでサ」こう本屋のおやじさんは、言うことである。しかしこれで良いのか。こんな小さなことから、我々の愛する「奇ク」がダメになっていくのではないだろうか。心配のし過ぎであるといってしまうばそれまでのこと。しかし、小生、気が弱いだけに、そのことが頭について離れられなくなり、気になる一日であった。（勿論、誰が買って行くかも気になったのだが……）

終り



以前、8月号になるが、「笹舟は帆を降ろせ」と、鶴藤氏が言っておられたが



御忠告に

感謝しつつ

鮎川 幸子

浣腸に関する文章が、最近やっ
と多くなる様になりました。私は
大変嬉しい事と思っております。
でも告白や体験記の中には、フイ
クションが多いと思います。そ
れはそれでよいと思い、私は興味
深く読まして頂いて居りますわ。
プロレスは一時、八百長などと申
して大騒ぎをしました。今は子
供までが、それを承知して、テレ
ビを見て話題にして、今日のプ
ームを造りました。一時新聞記事に
なりましたが、今はわりきってス
ポーツ紙のみが大きく取り上げて
ます。

今日奇くに、話題になってます
浣腸についても、浣腸文学として
打ち建てたいと思ってます。色々
なマニヤの方々が書かれています
が、大分訂正を必要とする部分が
ある様ですが、それはそれでよい
と思っております。でも幸子は、私の
体験に於いて発表したもので芳江
さんのお話は断じて、フィクショ
ンではありません。唯々私は、恥
しいので、一字句を訂正を致しま
す。それは子供の時、急性盲腸炎
(アッペ)を患い、(その時ママ
は、余り急性なので前の人の手術
が終り、手術室の消毒に時間がか
かるのにそれも助かり、お浣腸も
しないで手術をしたのよと申して
おりました。又、ママは数年後、
お隣のお兄さんが盲腸で入院した

時、手術の前に大きな浣腸をした
のよと話して呉れました)
以来ゆ着となり苦しい日々を送
りその再手術の為に入院したので
す。あの文章では、わかりやすく
する為? 私自身の恥かしい身の
上故、盲腸と致しました。お許し
下さい。盲腸の時、下剤や浣腸を
避ける事はマニヤの人々なら医学
書にも書いてある様に大部分の人
が知っておられると私は思っ
て居ります。通例腸の手術(盲腸でな
く)をする時は、午後から食止め
となり、下剤を飲まされ、剃毛を
して、やがて洗けん浣腸となりま
す。これは、ベッドでするか、又
処置室へ連れて行かれます。私は
十五分位がまんできました。もっ
と出来たかも知れません。何故な
らそれは、強力な下剤の為お腹の
中がすでに空になってるからで
す。洗けん浣腸をされても、水様
液で洗けん液だけしか出ません。
そうして、翌朝もう一回洗けん浣
腸をされてから手術となります。
洗けん浣腸は一回でなく二回でし
た。ですから今迄の人々の文章の
中には、充分と訂正するところが
あると思ひ、私は遂にペンを取り
ました。正しい意味での浣腸の状
況を描写したかったのです。でも

編集部だより

○嘗て本誌上に手記を寄せられモ
デルとして登場したこともある長
井葉津子さんから久しぶりに通信
を貰った。始めて告白を書いたお
雛祭りが再びめぐってきたことを
懐しがっていたが、今では洋裁学
校も卒業して勤めに出ている由。
その後の近況を書いて貰うよう依
頼したので、いづれ素晴らしい手
記が寄せられてくることと思う。
○ファンに要望されながら延々に
なっていた「花と蛇」の特集号が
完成した。二年半に亘って本誌に
連載した本文を一挙に登載、加え
て四馬孝画の「花と蛇画集」を口
絵として巻頭を飾った。
○快調を続けているカメラ・ハン
トの今月号は左近麻里子嬢が、そ
の麗姿を誌上に現わした。来月号
では金原奈加子さんの妊婦緊縛が
登場する由なので大いに期待して
頂きたい。カメラ・ハントとは別
に東映映画の緊縛の指導レポート
を寄せて貰うことになっているの
で、その都度掲載してゆきたい。
○S M画の投稿が増加しているが
鉛筆や色鉛筆を用いたものは製版

ナミオの
イメージ「ブランコ」 春川ナミオ



春

今迄の人々の記事もフィクションであれば、色々とペンを飾る事もありましょう。ある有名な作家が浣腸に関する文章で、イルリガートルをイリガートルとか、馬穴一杯の洗けん液とか、三〇〇CCの注射器でお浣腸をしたとか。でもでもですわ、余りにも、？ である事ははっきりしてますわ。

最近医学関係の方々から御忠告や御意見を戴いてますが、愈々浣腸がそこまで来た事が大変嬉しく存じます。それでこそ、私達の目的が達せられます。私達は私達の知らない浣腸の注意や浣腸の諸外国の歴史や文献史実とか、色々と御報告して戴きたいのです。それが、ひいては奇クの発展につながると思ひますの。

縛り、切腹、等々フィクションの記事が多い時、私は浣腸文学とは、フィクションであっても良いと思ひます。所詮ノンフィクションは限られています。けれど歴史や医学は正確であるべきだと思ひます。これは私の気持であり、多くのマニヤの人々の意見でもあると思ひます。

生意気な私の文章を、どうぞお許し下さいませ。私は幸子の文章がフィクションであると云われるのがどうしても悲しいのです。もっともっと勉強して、幸子は幸子なりの立派な文章を書きたいと思ひて居りましたので、一筆したたけました。

できないので必ず墨汁か黒インキで書いてほしい。鉛筆でなぞった薄墨でばかしたりしないほしい。それから懸賞応募作品は必ず原稿用紙をご利用の上、楷書で清書してお送り願ひたい。折角の力作もノートの切れ端に鉛筆の走り書きでは泣き出すというもの。

○東映で映画化を予定されていた「伊藤晴雨物語」はクランクインが延々になつてゐる。目下東映ではハレンチ路線が好調で次々と新作が制作されてゐるので、それが一段落してからようだ。

○読者からのカメラルポが次々と寄せられてゐるが誌上に発表できる物が少ないのは残念だ。カメラと文章がしっかりしてゐなくては駄目だ。ルポライターの志望者は人物でも風景でもよいから写真の作品で腕前を見せてほしい。モデルを紹介して貰ひたいばかりにルポの文章も書けないのに採用してくれと懇願するのには困る。

○先月号のこの欄で書いた使用済の月経帯とモデル使用済の下着の件。下着の方は折り返し送金された方に全部お譲りしたので御諒承願ひたい。月経帯の方は、まだ若干残つてゐるので、返信料同封の上、編集部宛と照会願ひたい。

＜短歌＞

『ベ
ッ
ド』

関 輝 穂

首さえも羞恥に赤く染めあげて
必死に耐える姿はあわれ

やわらかなベッドの上も忽ちに
責め場と変わる夜の拷問

じりじりと縄を引かれるたびご
とに女の顔は刻々変る

もがけども手足をひろげ別々に
ベッドの脚に縛られてゆく

大の字にベッドの上に縛られて
身動きできず晒されており

大の字の生まれたままの素裸に
男の視線深く刺さる

きりきりと縄捌かれて柔肌は深
くくびれて赤く色そむ

責めぬかれ縄解かれても動かず
に涙のしずく敷布を濡らす

びしびしと縄締め上げて両の手
を背に高々と首縄で吊る

プレイ・フォト
の 楽 し み

大磯 S 夫

夫婦プレイの素晴らしい一刻を
カメラにパチリ……までは出来た
が、現像、引伸し等が出来ずに、
せっかくの思い出を映画によって
得られない残念さ。奇クでも、時
たま見られることがあったよう
ですが、つい先だってまで私がそ
ろ一人でした。プレイの感激が高
まる程、なんとかこの妻の素晴らし
い姿を留めておきたいと、カメラ
を持出しはするものの、現像出来

ずに何本のフィルムを駄目にし
たことか。

そこでこの度、現像、引伸し
器具一式を揃え、全部自分でや
ってみました。こわごわのテス
トでしたが、初めてにしてはワ
リとうまく出来た時の嬉しさ。
奇クの読者で、このような残念
さを味わっている人は、私にや
らせて貰えないかな、などと調
子にのったものでした。

ここに送りました写真は、私
のプレイの時のものを、初めて
自分で現像し、焼付けたもので
す。勿論、技術的には、まだま
だ、写真としてつたないもので
すが、私としては本当に嬉しかった
記念です。

この時のプレイ自体
も、ただ形だけの縛り
で、プレイとはいえな
いものだったのですが
これは、妻が妊娠中（
八カ月）のため、余り
強い責めは遠慮したか
らです。誌上のカメラ
ハントでは、相当の緊
縛もされているように
拝見しますが、自分の
妻となれば、やはり心
配が先に立ち、不必要



な遠慮をしてしまいます。他人な
らいいという訳ではありませんが
結局は、私の気弱さが過度のプレ
ーキになっていたのでしょう。だ
が、私はこれでいいと思います。
何も、気にかかるのを押してまで
妊娠中に強いプレイをしなくとも
雰囲気だけで十分だと思うので、
無理する必要はありません。
私もまだ二十八才です。全国の
夫婦プレイをなさっている方々に
いろんなことをお教え戴いて、本
当に楽しめるプレイをし、アルバ
ムを作りたいと思っています。
この写真は掲載された場合のこ
とを考えて、見よう見まねでカッ
チングしました、どうぞよろしく。



Sコレクション「めす犬」

豪 城 二

私の好みの姿態

ラ・マンチャの男

五月号の奇クサロン、佐藤敬三さんの女性美の好みは共感を持って読みました。

氏のいわれるように人は好きずきで女性の体つきのおののけについて

て美しいと感じるタイプはいろいろでしょう。私の場合は奇クに登場された女性を例にとれば、梨花悠紀子さんや左近麻里子、中河恵子さん、それに安井夫人、新田夫

人ゆう子さん、長田実夫人等の方々になります。以上の皆さんは誌上で拝見するところ美術的プロポーションからいっても申し分ないと考えますが如何でしょう。

人は同じ背丈、肉付きでもプロポーションの違いで変わります。プロポーションがその人の背丈につり合っている時は最も美しい状態であると思います。

私の好みの女人責めは多分に絵画的な姿態になります。形のよい鼻を仰向けて白いのどをのけぞらせ、日本女性の持つ宝である黒髪もみだれ、おくれ毛が頬をつたってなまめかしくほつれる。苦しげにひそめる眉、せつなげな口もと、しなやかな身体に乳房が息づく。女人責めとしては、きわめてクラシックなスタイルですが日本の女性には一番優美で哀しくびつたりの感じがします。

最近の奇クからこの雰囲気を探めると、四十三年六月号のカメラハント一五〇頁の佐々木真弓さんのフォート。九月号二四六頁の新田夫人ゆう子さんの美しい姿態。そして五月号（四四年）のカメラハントの素晴らしさ。一四六頁の写真もいいが、一五一頁のフォートは最高の雰囲気と思わず見とれて

しまう。辻村さんに心からお礼をいわせて戴きたい。

それにつけても宝塚二三夫氏の亡くなられたことは惜しい。氏の抒情的な責めは、何かウイウイしいところがあがり、ナイーブな魅力があった。

奇クとの付き合いも二十七年頃から数えてかなりになるが、いつも外野から眺める門外漢で誌友諸氏の作品を楽しく見せて戴いて満足している。

近頃は表紙もスッキリして清雅になり、洗練されてきた感じが深い。節度を保つのはむずかしいでしょうが、このままのスタイルを続けてほしい。俗悪な風潮になじまないでもらいたい。

——以下の皆さんに通信——

麒麟児久さん、楽しいイメージの、奇クモデル諸嬢の作品を読ませて下さい。夫妻プレイの新田、長田、安井、小竹の皆さん、ご夫妻の楽しみを誌上でまたお裾分け願えませんか、お願いいたします。

終りに拙文にお名前を出した皆さんに不躰をお詫びします。誌友のよしみでお許し下さい。辻村さん、お嬢さんのほほえましい恋愛が一日も早く実ることをお祈りします。

退 院 の 弁 風流極道軒

小生、二月中旬より三月いっばい盲腸炎に腹膜炎を併発し、不測の入院を余儀なくされておりました。その間、奇ク五月号を妻が病院に持参、奇クサロン二三五頁を読み、早速辻村先生に、執筆禁止の医師の命を無視して走り書き申しあげましたところ、折り返しご丁寧なご親書をいただき、感激いたしました。さて、ここで小生あて辻村先生からお送り戴きました貴重な梨花嬢のフォート七枚の一端を読者の皆さまにご披露するのが義務でございます。(辻村先生のお許しは得ておりませぬが、多分笑ってお許し下さると思いますので……)

七枚中AとEの五枚は、二十年間の奇クの生み出した数百人のモデル嬢のなかのナンバー・ワン悠紀子嬢の未婚時代のもの。伊吹真佐子嬢が、責め役(介添役)で出演されております。すべてが逸品中の逸品ですが、就中D……浴衣をまとった伊吹嬢が、全裸でうなだれている梨花嬢に、縄をかけつつあるフォートは、背景の大鏡とマッチして、楽しい夢を十二分に

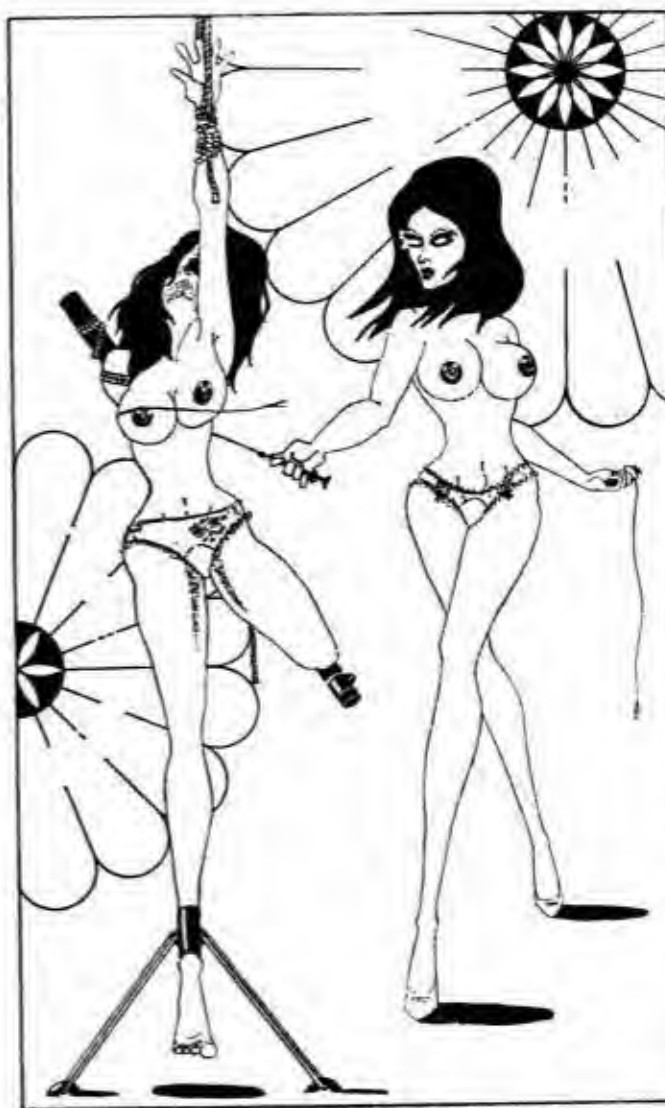
描かせてくれます。また、B……緊縛をとかれたあと、ぐったりとなっている梨花嬢に、これまた全裸の伊吹嬢が戯れかかっているポーズ。A……二人の横臥したフォート等々。いずれも、周囲で興奮しながら見守っているであろう男性たちの姿を想像して、恍惚とした思いに、小生をいまま誘いこんでくれます。

残りの二枚、つまりFとG……これこそ小生、垂涎のフォートでございます。一子の母となり、幸福な結婚生活をおくる梨花嬢が女として最も美しい二十六才の人の妻の裸身を、惜し気もなく階段の手すりにさらけ出して、責めをまうちうけているポーズ。このフォートを撮られるために、前夜丹念に磨いたであろう匂うような肌のつやが、小生をこの世の悦楽境へと連れ込んでしまうのです。梨花嬢はたしかに成長し、より一段と輝きを増した！数年前の初々しさは消え、円熟した女体のふくよかな麗わしさを、全身にあふれさせている！

辻村先生、願わくば、奇ク全読

『華々しきショー開幕』

日本武士



者のために梨花嬢を口説きおとされて、分譲写真に梨花嬢の最近のフォートを、お加え頂くわけにはまいりませんでしょうか。小生、一人でたのしむには、あまりにも美しい梨花嬢の最近の裸身でございます。そして更に欲をいえば安井夫人、安井喜久子夫人との連縛をお願いできれば、これにまさる喜びはないでしょう。二人の美しい人妻が、全裸で拷問をいままさに受けるために、うなだれて正座させられているポーズは、天下のSをうならせるものになりました。

<映画>

「ハレンチ」評

麻曾比須人

先日、東映の「異常性愛記録、ハレンチ」を見たが、M的傾向を期待していた私には、全く期待はずれであった。M、S、露出、ホモの傾向をもつ主人公の性癖が、正常な性愛は勿論、異常性愛にある程度理解を持つ私にも、いささか理解出来かねる点が多かった。愛する女性を、着衣のまま、風

四月号を手にして

星野 薫

先日、奇ク四月号を求めるために行きつけの書店へ出かけた。以前に一度、発売日から一週間程おくれで行ったらずでなくなっていた経験があるので三日おくれでいるのでもしかしたらと、不安と期待の中で棚を漁ると、幸運にも一冊だけ残っている。

買い求める前にいつものくせでパラパラとページをめくったが、その瞬間、私は思わず息をのんでしまった。懸賞入選作品発表として私の書いた「色彩画の記憶」が載っている。しかも、トップに出ているのである。初めはちょっと信じられなかった。

投稿したのが去年のことであつてみれば、おそらく没になったのだらうと思ひこんでいたのに……

自分で書いたのに、ちょっと前のことなので忘れかけていることもあつて、改めて読みなおしたがちょっととれくさい。しかし、悪い気持ちはいない。

ひと通り眼を走らせてから、さて今月号はと、いつものわくわくするような期待を持ってまず楽しみにしているカメラハントから。

前号の「牝貌のたわむれ」は、志摩桜子の大胆な写真と辻村さんの巧みな文ですっかり満足させられた私だったが、今月号は、モデルがプロということを意識しすぎてか、あまりにも演技らしさが目立って、新鮮さが感じられない。彼女が素人であつたら、申し分なかったが――

カメラハントが少々期待はずれだったのに比べて、連載小説「花と蛇」はよかった。マンネリ化とか何かといわれているけれど、読みはじめるとついつい魅せられてしまう。終結のないまま、永遠に続くのではないかと思われるような内容の豊富さ（といっても、責め方にしても同じものが、すでに何度も使用されてただほんのちょっと形を変えただけのものなのだが）に、またこの手かと思いつつも引きこまれてしまう。

個々の好みで、無理な注文かも知れないが、やはり「カメラハント」は前号のようなものを「花と蛇」はますますヒロイン達の活躍をと願いつつ、これからの奇クに今まで以上の楽しさを期待する。

うほどに。

ちなみに、私事になりますが、小生の「お長受縛譜」（三月号）のヒロインお長は、安井喜久子夫人を念頭においてかきましたるもの。また五月号の「お静受縛譜」のお静は、梨花悠紀子嬢か八千草薫をキャストとして筆を運びましたもの。どうかそれを念頭においてお読み下さいませ。勿論、次郎長と銭形平次は、読者ご自身だと思つて下さい。

（「受縛譜三部作」として、入院前に天保水滸伝に材をとりました「お弓受縛譜」をなかばかきあげております。病氣本復しだい完了させるはずです。幸運にも万一掲載されることになりましたならばヒロインのお弓は、これまた梨花悠紀子嬢その人だと思つてお読み頂きとう存じます――勝手なことをかきました。お許し下さい）

とまれ、奇クを愛読すること二十年。創刊号を東京は調布の在で拝見してから今日まで、全く月日のたつのは、早いものでございませう。その間の編集部皆さまのご苦心に深い感謝の気持ちを現わしますとともに、辻村隆、箕田京二両先生に厚く厚くお礼申しあげ、退院の弁とさせて頂きます。

呂の中へしずめるところや、強姦のように犯す場面は、S的傾向としてわかるが、その主人公が、女性の前にひざまずいて、ゆるしを乞う場面や、さらにホモの面で、ゲイボーイに虐待される点は、どうもただけでない。ハイヒールで酒を飲ませ、靴でふみつけ、鞭でなぐる場面は勿論結構だが、肋骨の見える、やせたゲイボーイが相手では、興味が半減してしまう。やはり美人の相手から虐待され、足舐めや顔面に騎乗されるような場面、さらに神酒拝受を連想させるような、うがい水を飲まされといった場面を見せてもらいたかった。

また、這っているなめくじを大写しに見せたのは、何を意味するのだらうか。当然、相手の女性の足に這わすとか、さらに下着の中におし込む――というような想像を、観者に与えるのだが、その伏線が、いつまでたっても生かされなかったのは、何となく物足りない感じを抱かせた。結論的にいって、SにもMにも徹し切れない中途半端な作品で、M的傾向にある私としては以前見た「痴人の愛」（小沢、安田のコンビ）の方がずっと満足させられる作品だった。

一 筆 啓 上 保 田 徹

辻村隆様へ……「カメラ・ハント」のことなのですが……

ハントするまでの前説、そして旅館に行ってから縛り上げ、責めることを、只、説明的に書いてあるのが、なんとなく物足りない感じなのです。いろいろの制約があって大変なこととは思いますが、やはりプレーをするのは、そこにストーリーがあったほうが、お互いよいのではないかと。文を読んで、縛る状況を想像してみても、最近ではなんとなく、しらじらしい物足りなさを感じるのです。

写真の件ですが……

以前のものは、ただモデルが金のために縛られた如くで、人形のように表情がなかった。そのうち大塚啓子さんあたりが、やっと苦しみの表情を表わすようになり、最近になって関谷夫人の鞭打ちの表情が、満足に近くなってきた。そうして、ローズ・秋山夫人は、さすが舞台上でSMショーを演ずるだけあって、仲々いい線に近くなってきた。

丁にいったセリフではないが、本当のマゾ女の陶酔苦の表情こそ望ましいのです。

だが、安井喜久子夫人の写真を見るにおよんで、満足出来るようになった。やはりプロのモデルではなく、自分が責めを望むマゾ女性を使って、これからも、どしどしとよい写真を撮って下さるようお願いしますと思うのです。

団鬼六様へ……

奇ク入手と同時に、まず最初に「花と蛇」を読んでおります。小生もプレイの中に、先生のストーリーを時々使用させていただいております。

ただ思うに……

同時責めは、仲々むつかしいプレイであるということ。浣腸器ではなく、浣腸を施した後にか別の固形物がいいように思うことなどです。

私はソーセージなどを使用してみました。相手も本当の同時責めだといっております。

今後、ますます、変化にとんだ責め方を書いて下さるよう、楽しみにしております。



「荒馬を制御する女」

五 屋 和 十

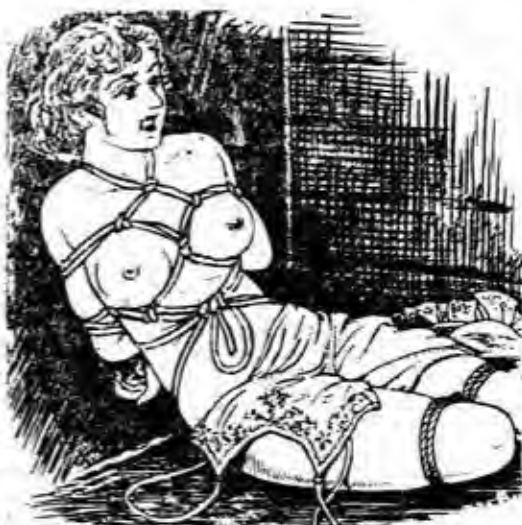
みにしております。

徳川女刑罰史殿へ……

以前の「日本拷問刑罰史」より責め方は多かった。重複もあったが、やはりカラーだけに素晴らしかった。

第一話での、海老責めの鞭打ちはよかったし、第二話のドジョウ責めは傑作。局部責めは少し残酷過ぎ。ローソク責めぐらいの方が

良かったようだ。第三話の刺青場面は、マニアには最高だっただろうと思うし、肌を刺すと血がにじみ出す辺りは秀逸。外人女の拷問場面は、やたら騒々しく落着きのないことおびただしい。印象に残るのは水車責めと、台上に縛りつけられた女の姿だけだった。ただ女の肌に残るロープや鞭打ちの跡は素晴らしく、臉に残る。



緊縛マニアの一刻

雪責めプレイ

の幻想

早木 夢二

「いっぺん雪責めをしてみたいわね」

と、慶子が、いったことがあった。海老責め、石抱きなど、お手盛り拷問プレイが一通り済んだ頃のことである。

私も、映画や芝居で見た「雪責め」シーンを思い浮かべて、ゾクゾクしたことだった。

全裸で菱縄がけされた慶子を、降りつもった雪の上に坐らせる。

雪は、慶子を脛の辺りまで埋めこむだろう。冷たいクッションはジワジワと罪人に泌みこむ。

「白状しろッ」と、私は彼女の雪にまみれた背中に答を浴せる。

思っただけでも、身内がふるえだす状況である。

今年の東京は雪が多かった。私たちが、宿命的な緊縛生活に入っ

た昭和二十六年もそうだった。雪で帰れないのを口実に、いつもの所で、いつものように二人は、縄を巻きつけた肌を燃やしたものだ。

今年も三月に大雪が降った。その雪を硝子越しにみながら、

「まだ実現はしてないね」

あの時の言葉を思い出して、私は意味あり気に慶子の顔をのぞき込んでやった。

「仕度しろよ」

とニヤリ。

「ハイ……でも」

なんていいながら、彼女はモジモジ。いつものように、さっと脱ぎ出すとはしない。

あの時にはあいつが、現実を雪の前にして、いざとなると気負いはどっかへケシ飛んだのだろ

う。無理はない。

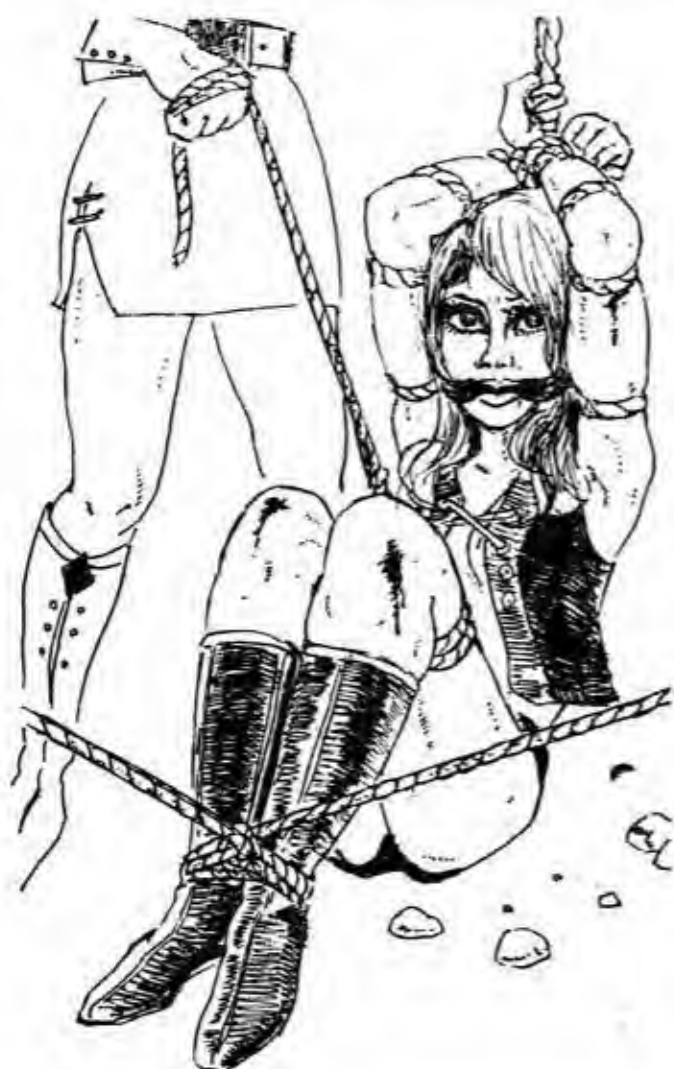
よしよし、それでいいのだ。私たちの拷問は、あくまで「ゴッコ」であって苛責ではないのだ。だれが可愛い慶子を雪に埋めるものか。雪責めは二人の心の中だけでいいのだ。現実に冷たい雪に坐らなくても、常日頃の拷問プレイの中で充分に見せてくれている。縛りや責めへの傾斜の深さに、私は雪責め以上に、切ない彼女の心や体のゆらめきを、痛いほど感じることが出来るのだから。

「その代りに……」

彼女はスルリと脱いだ。きっちり肌に喰い込んだ菱縄がけを終ると、硝子戸の傍に引立てた。

「どんな拷問でも……」

うなだれる彼女の背後に、降りしきる雪が見える。ふと私は、本当に雪責めをしているような気がして答をふり降ろした。慶子の菱形にくびれた柔肌が、ぐっと大きくゆらいで私の眼前にくねりをみせて迫った。



イメージ画「ついに就縛」

志羽 利也



「花と蛇」への

要望と提案

西野 正一

本誌五月号の「読者通信」で、神戸市の小杉千恵嬢が提案しておられますが、犬や蛇とのからみも実現して欲しいものです。殊にヘビとのからみを是非実現して下さいよう、団先生にお願いします。

タイトルが「花と蛇」なのに、一向に本物の蛇が登場しないのは淋しすぎます。仄聞するところによると、そろそろ二名の美しいニューフェイスが登場するそうですが、責め手の側にもニューフェイ

スをお願いします。

そのイメージとしては、既に第一線を引退して、関西の岩崎親分の配下の美女に花電車芸を仕込んでいる花電車の大御所。この大御所が、岩崎親分と上京して森田組に立ち寄り、静子夫人に一目惚れして、自分の芸の後継者として厳しい修業をさせる。静子夫人も捕われの身であることを忘れて、秘密の最高肉体芸術の修業に打ち込み、二人の間に教える者と教えられる者のきずなが芽生える。静子夫人は数カ月の特訓の結果、すべての芸を呑み込む。花電車の大御所は、最後に、三尺余りの大型ヘビを呑み込む芸を伝授して関西へ去って行く。というのは如何でしょう。

女調教師登場というわけです。最近、この種のショウの記事が、雑誌その他に続々と登場しつつある現状ですから、その先駆者としてのK・K誌としては、黙って傍観しておる手はないと思います。例えば、別冊小説現代陽春特別号のユーモアラウンジ（一八七頁）にも（以下原文のまま）「戦後、日本で爆発的に流行したストリップも、今や、大きな転換期にさしかかっている。特にお座敷シ

ョーについては格別である。ここでは、劇場用と違って、相対にシヨッキングなものを提供しなければならぬ。さりとて、シロクロは出来ず、女のヌードではやれることにかぎがある。

そこで全ストに加えて、ドライアイスの蒸気を使ったり、シロシロまがいの演技をしたり、なかなか演出に工夫がいる。その中で白眉はヘビを使うストリップだろう。

ご存知の向きもあるが、これは青大将などの無害な大型ヘビを女性の神秘な部分にアタマから突っこんでみせる演技が見せ場である。ヘビの頭と、男性性器の形が似ているというわけなのか、これがなかなかのショウになる。美しい女の股間で、ヘビののたうつ姿はエログロの極致といえなくはない。

ところが、いかに強いヘビとはいえ、女の肉体にアタマを入れると、一種の窒息状態になってしまう。これを一回のショウの間に、いくども繰り返すのだから、ヘビの健康にいいわけがない。ヘビが長生きしなくなるのである。ヘビ・ストリップの主役が死んでは仕方がないから、すぐに代役

を捜すことになる。あたらしい青大将をみつければ、これを飼育する。しかしそう簡単にお座敷で使えるようにはならない。というのは、人間の男性ならいざ知らず、ヘビは女性の穴にもぐりたいとは考えないからだ。

やむをえずに、ヘビに酒を飲ます。ヘビをフラフラにさせたところで、ブスリと穴へ突っ込んでしまふのだ。なん度もこれをやっていくうちにヘビもバカになってしまい、易々と女性のいうなりになるのだ。（以下略）

小説現代ですら、この程度のケレン味をもって来たとなると、K誌では今一步の努力を団先生にお願いする必要はなからうか。蛇の窒息ならぬ窒息場面も切望してやまない。

五月号カメラハントに出てきた奴隷マークも森田組の美女全員に入りたい。そうすれば美女全員の剃毛が実現することになる。図柄としては、森田組の代紋とナンバーがよい。

勿論ナンバー1は静子夫人にである。そして、その番号順に森田組スター名鑑を作成して、各種サイズや得意芸等を記載しておくのが便利でしょう。

〔優秀緊縛写真特選集〕

〔光沢印画紙極鮮明焼付〕

緊縛女体撮影風景

大手札四枚一組 略号(むら) 五〇〇円

足挙げ開股責め

大手札三枚一組 略号(あけ) 四〇〇円

猪吊り三態

梨花悠紀子 略号(いの) 四〇〇円

責め衣縛り

大手札三枚一組 略号(せめ) 四〇〇円

強烈エビ責め

大手札三枚一組 略号(ねむ) 四〇〇円

後手首の高縛り

玉田美佐子 略号(ねへ) 四〇〇円

椅子またぎの責め

大手札三枚一組 略号(ぬと) 四〇〇円

全裸脚挙げ縛り

大手札三枚一組 略号(てい) 四〇〇円

全裸アゲラ縛り

大手札三枚一組 略号(てへ) 四〇〇円

全裸屈伸縛り

長野 良子 略号(てほ) 四〇〇円

強烈エビ責め

大手札三枚一組 略号(ま) 四〇〇円

吊り打ち

大手札三枚一組 略号(やり) 四〇〇円

股間縛り法悦境

大手札三枚一組 略号(ぬこ) 四〇〇円

踊り子緊縛

大手札三枚一組 略号(りこ) 四〇〇円

月経帯のまま縛り

遠藤百合子 略号(ゆす) 四〇〇円

縄目に悶える夫人

大手札三枚一組 略号(ほく) 四〇〇円

髪を引き回される夫人

関谷富佐子 略号(ほむ) 四〇〇円

膨満正面縛り

大手札三枚一組 略号(へな) 四〇〇円

マニヤ全裸緊縛フォト

栗本ミチ子 略号(いな) 四〇〇円

強烈エビ縛り

大手札三枚一組 略号(もい) 四〇〇円

乳房責めの苦悶

関谷富佐子 略号(もろ) 三〇〇円

全裸ムチ打ち

大手札四枚一組 略号(もた) 五〇〇円

強打に泣く裸身

関谷富佐子 略号(むち) 五〇〇円

裸身の晒し

大手札三枚一組 略号(わあ) 四〇〇円

全裸股間縛

関谷富佐子 略号(せら) 五〇〇円

双胸の強調縛り

長野 良子 略号(そう) 四〇〇円

動感海老責地獄

大手札三枚一組 略号(とう) 四〇〇円

色縛の開股縛り

長野 良子 略号(いふ) 四〇〇円

鼻責めのアップ

大手札三枚一組 略号(はす) 四〇〇円

乳房しばり

大手札三枚一組 略号(うは) 四〇〇円

鼻責めと緊縛

大手札五枚一組 略号(うい) 六〇〇円

木馬責三態

大手札三枚一組 略号(もく) 四〇〇円

椅子責めの果て

大手札二枚一組 略号(いす) 四〇〇円

檻に入れられた女

山原 清子 略号(もの) 三〇〇円

浴室の全裸刺青

山原 清子 略号(よな) 六〇〇円

鼻いじめ三態

山原 清子 略号(はね) 四〇〇円

鼻責め万華鏡

山原 鈴木 略号(はた) 二〇〇円

碧玉裸身緊縛

大手札三枚一組 略号(のん) 四〇〇円

くすぐり責め地獄

大手札三枚一組 略号(きす) 四〇〇円

灼熱の蠟涙責め

大手札四枚一組 略号(きせ) 五〇〇円

豊満な乳房を責める

大手札五枚一組 略号(きそ) 七〇〇円

女奴隷を飼育する

大手札五枚一組 略号(きて) 七〇〇円

凌辱されるマゾ女

大手札五枚一組 略号(きと) 七〇〇円

鼻責め悦楽

大手札二枚一組 略号(きな) 三〇〇円

全裸強烈羞恥縛り

大手札三枚一組 略号(なの) 四〇〇円

猿ぐつわにあえぐ裸女

東浦ひかる 略号(なむ) 四〇〇円

全裸の緊縛姿開陳

遠藤百合子 略号(ゆり) 五〇〇円

M資料分譲品一覽

○新人S女性出現○

- 逞ましき股に挟まる
 大手札四枚一組 略号(あとお) 一〇〇〇円
 素足の脂がべっとり
 大手札五枚一組 略号(あて) 一〇〇〇円
 縛った男をムチで料理
 大手札十枚一組 略号(あさ) 二〇〇〇円
 女王様の人間便器になる
 大手札十枚一組 略号(あす) 二〇〇〇円
 蟻涙の雨を全身に浴びる
 大手札四枚一組 略号(あせ) 一〇〇〇円
 尻の下につぶされた男
 大手札二枚一組 略号(あた) 六〇〇円
 エビ責めに弄ぶ女
 大手札六枚一組 略号(あそ) 一四〇〇円
 神酒を与える女神
 大手札六枚一組 略号(あち) 一四〇〇円
 咽喉輪を股責極楽
 大手札四枚一組 略号(あつ) 一〇〇〇円
 素足の足舐と嗅香
 大手札五枚一組 略号(あこ) 一〇〇〇円
 M男性を尻に敷く
 略号(あこ) 一〇〇〇円

- 人間椅子の御褒美
 大手札五枚一組 略号(みお) 一〇〇〇円
 飼犬に餌を与える
 大手札四枚一組 略号(みた) 一〇〇〇円
 浣腸器で男を弄ぶ女
 大手札三枚一組 略号(みつ) 八〇〇円
 股で絞められる首
 大手札三枚一組 略号(みね) 八〇〇円
 芳香を嗅がす尻
 大手札二枚一組 略号(みな) 六〇〇円
 人間馬の調教プレイ
 大手札三枚一組 略号(まの) 八〇〇円
 足舐めの奉仕と強制
 大手札三枚一組 略号(まわ) 八〇〇円
 股責めにあう男の顔
 大手札三枚一組 略号(また) 八〇〇円
 女に縛られて弄られる
 大手札三枚一組 略号(まひ) 八〇〇円
 踏みにじられる顔面
 大手札三枚一組 略号(まな) 八〇〇円
 肩車に奉仕する青年
 大手札三枚一組 略号(まは) 八〇〇円
 男を縛って玩具にする
 大手札三枚一組 略号(まて) 八〇〇円
 首を太股で絞めあげる
 大手札三枚一組 略号(まや) 八〇〇円
 灰皿にされた男
 大手札四枚一組 略号(そほ) 一〇〇〇円
 裸女の長靴に悶ゆ
 大手札四枚一組 略号(そに) 一〇〇〇円
 美女に飼われる犬の生態
 大手札三枚一組 略号(そろ) 八〇〇円
 美女の手で縛られる過程
 大手札四枚一組 略号(そと) 一〇〇〇円
 女御主人に使役される男
 大手札四枚一組 略号(そち) 一〇〇〇円
 美女のおいしい足を戴く
 大手札四枚一組 略号(そぬ) 一〇〇〇円
 むしゃぶりつく素足の味
 大手札三枚一組 略号(そは) 八〇〇円
 凌辱と美女のなぶり者
 大手札五枚一組 略号(そり) 一〇〇〇円
 素足を舐める構図
 大手札四枚一組 略号(そへ) 一〇〇〇円

- 人間犬の芸仕込み
 大手札十枚一組 略号(あえ) 二〇〇〇円
 女の尻に顔がつぶれる
 大手札三枚一組 略号(あく) 八〇〇円
 足指に挟んだ菓子
 大手札二枚一組 略号(あの) 六〇〇円
 男を縛って弄ぶ女
 大手札十枚一組 略号(あに) 二〇〇〇円
 尻責めと股責め
 大手札十枚一組 略号(あぬ) 二〇〇〇円
 大男の訓練風景
 大手札十枚一組 略号(みら) 二〇〇〇円
 男を刺し殺す美女
 大手札十枚一組 略号(みむ) 二〇〇〇円
 男を尻の下に敷く
 大手札十枚一組 略号(みう) 二〇〇〇円
 女の足下にうめく顔
 大手札六枚一組 略号(みれ) 一四〇〇円
 汚物を戴く男
 大手札六枚一組 略号(みわ) 一四〇〇円
 男を馬にする美女
 大手札五枚一組 略号(みか) 一〇〇〇円

☆浣腸関連資料の部☆

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(かみ)

強制空気浣腸

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(かく)

百CCのポンプ浣腸

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(かな)

浣腸責の極致

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(かむ)

女体浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号(れち)

強制女体浣腸三態

大手札三枚一組 四〇〇円
絹川 文代 略号(きか)

イルリガートル浣腸

大手札十二枚一組 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号(いるり)

太い浣腸器で浣腸

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(かふ)

自分で浣腸をする女

大手札三枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆか)

浣腸器と女

大手札三枚一組 四〇〇円
絹川 文代 略号(ほの)

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(るい)

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 六〇〇円
大塚 啓子 略号(るは)

女体浣腸プレイ

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ほは)

迸ばしる浣腸液

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ほい)

浣腸後の排便

大手札五枚一組 六〇〇円
大塚 啓子 略号(へき)

便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 六〇〇円
大塚 啓子 略号(へか)

浣腸される清子

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号(かる)

浣腸に興ずる女

大手札八枚一組 一三〇〇円
山原 清子 略号(かへ)

浣腸に悶える女

大手札七枚一組 一二〇〇円
山原 清子 略号(かに)

イルリガートルの浣腸

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚 啓子 略号(けか)

いちじく浣腸の実施

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚 啓子 略号(けき)

百CCのポンプ浣腸

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚 啓子 略号(けく)

オマルに排便の姿態

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚 啓子 略号(けし)

浣腸後オシメ着用

大手札四枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(けこ)

浣腸と便意の苦悶

大手札三枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(のけ)

高圧空気浣腸

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(むい)

浣腸場面大写真

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(むは)

施される浣腸

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(むろ)

浣腸をする女

大手札三枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆか)

自ら施す浣腸

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ちぬ)

浣腸器を弄ぶ女

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ちり)

浣腸を施される女

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ちら)

浣腸後介添排便

大手札六枚一組 一〇〇〇円
山原・東浦 略号(かね)

グリセリン溶液注腸

大手札六枚一組 一〇〇〇円
山原・東浦 略号(かて)

シリンドーにて浣腸

大手札六枚一組 一〇〇〇円
山原・東浦 略号(かた)

イルリガートル嘴管挿入

大手札六枚一組 一〇〇〇円
山原・東浦 略号(かち)

アーヌス浣腸補助

大手札四枚一組 七〇〇円
山原・東浦 略号(かの)

浣腸に興ずる清子

大手札四枚一組 五〇〇円
山原・東浦 略号(うも)

浣腸される浣腸マニア

大手札四枚一組 五〇〇円
山原 清子 略号(うわ)

浣腸悦楽独りプレイ

大手札五枚一組 六〇〇円
美木乃々子 略号(ぬる)

施される浣腸の美味

大手札五枚一組 六〇〇円
美木乃々子 略号(ぬか)

挿入された嘴管

大手札四枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(るて)

襲いくる浣腸器

大手札二枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(るち)

女体浣腸独り遊び

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ると)



○ 奇ク編集部の皆様、今日は。毎日大変なことだと思ひます。毎月のしく読ませていただいております。四月号で奇クサロンのはじめに書いておられた藤田千代子さんの「浣腸こそわがいのち」という文章は大変興味を持って読ませていただきました。編集部の方に住所やTELが知らせてあるそうですが、是非私に教えて下さい。他から問合せがあってもそちらへは絶対に知らせないで私にだけこっそり教えて下さい。余り競争相手

がふえると困りますので是非私にだけ教えて下さい。それから宮城みち子様、貴女の通信を拝見し、この文章を書く気になりました。貴女と同じ世代にある者として私も勇気を出してお呼びかけをします。私も浣腸に興味を持っておりません。二年ほど浣腸はしたことはなかったのですが、今は毎日グリカンを一〇〇CC位平均して行っております。残念なことに、まだ一度も他人には浣腸されたことはないのですが、されてみたいという気持は強いのです。私も貴女のように空想では、いろいろプレイを考えておりますが、実際は恥かしいながら、そういう経験は一度もありません。現在の町には人多すぎますね。山の中や海岸の入江など、プレイの出来る場所を探して一緒にプレイをしてみたいですね。アパートで一人住いの二十才の青年です。お便りをお待ちしています。

(名古屋市・キューピー生)

○ 小杉千恵さん。「花と蛇」に寄せられた貴女の要望に全く同感です。蛇とのからみについて、奇クサロンに投稿をしましたから、御意見をお寄せ下さい。小杉さんは

オナニーショーをご覧になったことがないのではなからうかと思いますが、最近大胆になってきた関西ストリップで見る事ができます。一番上手なのは、花園ミュージックや伊丹ミュージックによく出演しているモンロー・ドミノ嬢だと思ひます。最近、少し太ってきたようですが、その大胆な演技は定評があります。何百という男の前で、その演技をするモンロー・ドミノ嬢の悦虐の気持は貴女をゾクゾクとさせないではおかないと思ひます。貴女の宮城みち子嬢への呼びかけによると、貴女とみち子嬢を一つにつなぎ、耽美の世界を放浪する器具を作ってお持ちとのことですが、それは互いの形のことだと思ひます。高橋鉄先生著の「高橋鉄コレクション」の中に、今大流行の太極で使われたという張り形や互いの形の写真がでておりますから、一度ご覧下さい。

(大阪・西野正一)

○ 私は生来、マゾヒズムの男性で女装マニアです。年令三十三才、身長五尺二寸五分、体重十五貫の小男です。女装して縛られたり、いじめてほしいと思ひています。もし貴社で男性モデルが必要でし

たら私は志願したいと思ひています。猿ぐつわ責め、木馬責めなど刺戟の強いものを受けてもかまいません。どうかよろしくおねがいいたします。

(三重県・小松一夫)

○ 拝啓、弥生の花薫る今日此頃、皆様お変わりなくお過ごしのことと存じます。四月号では女王様のお呼びかけの言葉を賜り、謹んで感謝いたしております。私は、女王様のお言葉を晴れて賜る日をどんなにか待ち望んだことでしょうか。私の心中をお察し願えれば幸いに存じ上げます。こい願わくば、東区の女王様に囚人として、一生お捧げいたし、更に如何なる刑罰をも、甘んじてお受けいたします。どうか女王様のお気に召されますように、私を料理していただければ、幸いに存じ上げます。このように誓う私ではございますが、舌のかわかぬ間に自分の思ひとは反対の行動をいたす、おろかな者故、どうぞよろしく飼育して下さい。これは実にくだらない私の提案ではございますが、江戸時代の御代官になって下されば、幸いに存じ上げます。私は当時のキリシ

タンとして女王様に拷問にかけられたり、恥かしい責めをお受けいたす捕囚または奴隷の役をいたしたいと、かように存じ上げます。また戦前、戦中の思想犯として刑罰をお受けいたしたいと存じております。私の好きな責めは、猿ぐつわ責めや、浣腸責め、ローソク責め、つねり責め等で、ガンジガラメ縛りや、胴じめ縛りにしていただきたいのでございます。当然のことですが、女王様のお身体の匂いがかがせていただくことと存じます。女王様の有難き責めに対して、私の意志とは反対に足をバタツカせて、逃れようとしたことと存じ上げますが、女王様のお好みの刑罰を加えて下さることを切に望んでおります。なお学習面では女王様を私の師と仰いで西洋文学や日本文学、詩、音楽などの勉強を通じて、肉体及び精神的にも、女王様に喜ばれるように努力いたしたいと、かように存じ上げております。そうしたことが、女王様にお仕える奴隷としての勤めと存じ上げます。失礼な私の言葉をお許し願えれば、幸いに存じ上げます。私の生活は下宿へ帰って詩集を読んだりして、孤独な自分を慰めております。

○(大阪市・中野完)

わたくしは女のくせにミニのドレスでゴーゴーを踊る人のすそのあたりが、とても気になります。下着に特に関心があるからです。ミニスカートにブーツのスタイルが大好きです。ミニの服にはパルティストッキングをはきますが、肌に直接では気が悪いし、いろいろなパンティを集めてみました。が奇クを読んで知ったフンドシが一番、気に入っています。とても気分がよいものです。バタフライ式のものをつくって鏡にうつしてみ、われながら可愛らしいと、うぬぼれています。ぜひ一度、やってみることをおすすめします。この頃ではフンドシだけの素足にブーツだけはいて外出することもあります。そんなときは心がウキウキしてきます。吹く風が冷たくても寒さなど感じません。スカートの中をのぞかせるのは恥かしいのですが、全然見むきもされないのも淋しく複雑な気持です。もし街でミニの素足に長いブーツをはいた髪の長い女性をみかけたら、わたしだと思って皆さん、よく見てやって下さい。

(東京都・ミスミニブーツ)

○

守山実氏へ。三月号掲載の読者通信、興味深く拝読させて頂きました。今まで医師の方からの発言がなかっただけに、同好の者として非常に嬉しく思いました。職業柄、エネマに関しては専門家ですので、私たちには及びもつかないほど豊富な経験もお有りでしょう。ぜひ作品を発表して下さい。小生も、エネマに関する資料を集めはじめてから十年になります。エネマ器具では、医師である

氏には及びもつかないと思います。が、その他の資料(画、写真、文献)等については、多少自信があるほど集めました。特に写真は千枚近く持っています。よろしければ、資料の交換をさせていただきます。藤田千代子さんへ。四月号掲載作品「浣腸こそ、わがいのち」面白く読ませて戴きました。素直な文章の中に秘められていた貴女の心理が、私の胸を強く打ちました。お菓子工場に勤務とのこと、小生の知人でやはり

木戸悦子妊婦写真

本誌十月号のSMカメラハント「胎児の喘ぐとき」へ妊娠九カ月の妊婦を縛るVでその便々たる太鼓腹をカメラの前に晒した木戸悦子夫人のフォトを特に同好者の方に左記の通り分譲します。

九カ月妊婦全裸立像正面 四〇〇円

木戸悦子 略号「のま」

羞らう妊婦の裸身前向立像 四〇〇円

木戸悦子 略号「のめ」

九カ月の妊婦腹を晒す 四〇〇円

木戸悦子 略号「のや」

九カ月の妊婦腹を縛る 四〇〇円

木戸悦子 略号「のこ」

便々たる太鼓腹に縄掛け 四〇〇円

木戸悦子 略号「のし」

膨満腹も露わな両手挙げ縛り 四〇〇円

木戸悦子 略号「のろ」

竹棒責めに喘ぐ九カ月妊婦 四〇〇円

木戸悦子 略号「のは」

十文字縛りの妊婦腹 四〇〇円

木戸悦子 略号「のに」

柱縛りに苦しむ九カ月の妊婦 四〇〇円

木戸悦子 略号「のほ」

開股責めと椅子縛りの妊婦 四〇〇円

木戸悦子 略号「のへ」

お菓子工場で、働いている女の子の話によりますと、定期的に検便があることですが、貴女の方ではどうですか。宮城みち子さんへ。四月号には藤田さん、宮城さんとエネマに関心を抱く二人の女性の方が投稿されていて、久しぶりに充実感を味わいました。小生は、かつて奇巧に二篇ほど小品を発表させていただいた三十三才の公務員です。小生は、もっぱらエネマに関する資料集めを趣味としていて自分自身ではエネマされることを好みません。よろしければ文通したいと思うのですが。

(伊里賀透)

藤原笑子様、お便り拝見いたしました。私は、貴女と同じように始めて投書した二十五才の男性です。大阪に貴女のような同志があられることを嬉しく思いました。私は、女性の苦しむ姿、煩悶の中の悦楽とでもいうのでしょうか、この姿が一番神秘的で美しいというのを奇巧によって知りましました。お互いにプライベートなことには立ち入らずプレーとして楽しいひとときを過ごしたいと思ひます。

(神戸市・野村秀雄)

永らくご無沙汰いたしました。相変わらず御誌をたのしみに愛読させていただいております。私に大変な変化が起きました。昨年の十二月頃から、体の調子がおかしく、月のものが予定を過ぎてもありませんでした。今まで遅れることが時々ありましたので、私は気にしませんでした。一月になっても様子が変わらず、お店のママさんから「あなた最近、また肥ったんじゃないの。何となく変よ。もしや妊娠してるんでは……」と言われ、私も改めてびっくりしました。そう言われると、何となく顔や手足がむくんでいるような気がしました。私は、まさかと思ひながらも産婦人科の先生に診てもらいました。やはり、まちがいないく妊娠四カ月とのことでした。私は今、三十六才です。お産は大変と聞きますし、色々迷いました。けれども、子供を産みたいと言う気持ちが強くなり生む決心をしました。そのうちに私は、急に大きくなってゆくお腹が少し異常なようです。体もだるく立っていることが辛くなり、また先生に診てもらいに行きました。その結果、羊水過多症とのこと、もう少し様子をみてから無理なときは人

安井・中河・金原緊縛写真

大手札印画紙極鮮明焼付フォト

開股羞恥責めの姿態

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 八しうV 五〇〇円

髪吊りで強烈ムチ打ち

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 八したV 五〇〇円

片足首引きつけ縛り

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 八しちV 五〇〇円

尻立て鞭打ち艶姿

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 八しつV 五〇〇円

柔肌に炸裂するムチ

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 八してV 五〇〇円

エビ縛りの鞭打ち

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 八しとV 五〇〇円

貞操帯着用鞭打ち

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 八しやV 五〇〇円

痛打にもかく美女体

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 八しゆV 五〇〇円

あぐら縛りの羞恥責め

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 八しよV 五〇〇円

片脚挙げで晒す裸身

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 八とはV 四〇〇円

強烈エビ縛りで苦悶

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 八とにV 四〇〇円

膝頭縛り開股竹棒責め

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 八とほV 四〇〇円

竹棒開股足首縛り

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 八とへV 四〇〇円

股間縛りの裸身表情

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 八とちV 四〇〇円

菱縄縛り猿ぐつわの表情

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 八とりV 四〇〇円

乱痴戯騒ぎの結末

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 八とぬV 四〇〇円

菱縄縛りで床に喘ぐ

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 八とるV 四〇〇円

浣腸責めの甘い恐怖

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 八とかV 四〇〇円

浣腸液の注入直後

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 八とまV 四〇〇円

強制浣腸の各姿態

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 八とみV 四〇〇円

浣腸責め的美態開陳

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 八とめV 四〇〇円

浣腸を待つポーズ

中河 恵子 大手札三枚一組 略号 八ともV 四〇〇円

工中絶した方が安全だと言われました。元来、大きい太鼓腹の上、妊娠五カ月、しかも羊水過多症です、それはそれはすごいもので、まるで九カ月ぐらいのお腹になりました。くぼんでいたお臍が今では完全な出臍になり、下腹が特に出っぱり、お腹一面に妊娠線が無数にでき、すぐグロテスクになってしまいました。もともと大きすぎる乳房は、脇の下あたりから一面に乳線が、青く浮いており、絶えず水みたいなお乳が乳首から出て薄い皮が時々むけてきます。私は今、サラシを巻いて、重く下へ落ちそうなお腹をもち上げようとしています。私はマタニティドレスを作っていませんので毛糸のスーツかワンピースを着ています。スカートだけ直してもらいましたが、きゅうくつで、お腹のあたりの色糸はのびきり、スカートの前は上につり上って、そのスタイルたるや、恥かしいほどグロテスクになってしまいました。でも、このはりさけるようにまで大きくなったお腹のときに、若い方とプレーしたくて毎日あせっております。この異常妊娠のチャンスなんて私にはもう一生ないと思いますので、あこがれの若い人と

思い切ったプレーをしたくてたまりません。ああ、私のこの体をほんとうに愛してあげてくれる若い人はいないでしょうか。私は、この身重の体をもてあまして毎日なやんでおります。どうか、この妊婦である私をいじめて下さい。

(仙台・美川美子)

宮城みち子様。小生は東京に住む二十六才のS男性です。特に流腸に興味を持っており、自分なりに色々つくったりしております。何度か流腸プレイもいたしました。が、女性が遠方なものでプレイが思うにまかせません。それで今回貴女のお名前を拝見いたしお手紙を差し上げた次第です。もし、よろしければ、貴女のご都合の良い日にお逢いいたしましょう。そして小生の作品を見せて差し上げましょう。そして、貴女の空想とやらをお話し下さい。小生もプレイネマ、シリンドラー、スポイトなどで、貴女を責めて差し上げましょう。

(東京都・高橋生)

フクニチスポーツの一月二十七日版を読んできましたら、はからずも左記のような、新聞記事に接

可憐表情の全裸縛り 大手札四枚一組 略号 八ゆめ 五〇〇円 金原奈加子	立縛り正面裸晒し 大手札四枚一組 略号 八ゆえ 五〇〇円 金原奈加子	両手吊り全裸晒し 大手札四枚一組 略号 八ゆひ 五〇〇円 金原奈加子	雁字搦目後手縛り 大手札四枚一組 略号 八ゆあ 五〇〇円 金原奈加子	股間縛り柔肌責め 大手札四枚一組 略号 八ゆも 五〇〇円 金原奈加子	猿ぐつわ開股責め 大手札四枚一組 略号 八ゆに 五〇〇円 金原奈加子	豊満な臀部強烈責め 大手札四枚一組 略号 八ゆほ 五〇〇円 金原奈加子	強制全裸開股責め 大手札四枚一組 略号 八ゆみ 五〇〇円 金原奈加子	股間縛りで悶える 大手札四枚一組 略号 八ゆろ 五〇〇円 金原奈加子	全裸縛りに羞らう 大手札三枚一組 略号 八ゆへ 四〇〇円 金原奈加子	私の妊娠腹を見てね 大手札四枚一組 略号 八ゆわ 五〇〇円 中河恵子	縛られた妊婦横臥す 大手札四枚一組 略号 八ゆよ 五〇〇円 中河恵子
被虐に燃える全裸妊婦 大手札四枚一組 略号 八ゆぬ 五〇〇円 中河恵子	尚も見せたい妊婦腹 大手札四枚一組 略号 八ゆる 五〇〇円 中河恵子	股間縛り首縄正面 大手札三枚一組 略号 八よれ 四〇〇円 長井葉津子	両手吊り正面晒し 大手札三枚一組 略号 八よそ 四〇〇円 長井葉津子	全裸高小手の麗身 大手札三枚一組 略号 八よの 四〇〇円 長井葉津子	全裸股間縛りの媚態 大手札三枚一組 略号 八よや 四〇〇円 長井葉津子	強烈な変型エビ縛り 大手札三枚一組 略号 八よい 四〇〇円 長井葉津子	正座猿ぐつわの仕置 大手札三枚一組 略号 八よふ 四〇〇円 長井葉津子	凄絶海老責め地獄 大手札三枚一組 略号 八よえ 四〇〇円 長井葉津子	女体二つ折り縛り 大手札三枚一組 略号 八よぬ 四〇〇円 長井葉津子	あぐら縛り全裸晒し 大手札三枚一組 略号 八よあ 四〇〇円 長井葉津子	イルリの流腸責め 大手札三枚一組 略号 八よた 四〇〇円 長井葉津子

しましたので、その切り抜きを同封いたします。『緊縛指導』、辻村隆『ということで氏の名がでており、氏が「徳川女刑罰史」や「元禄女系図」のような映画作成時には欠かせない人だということ、これからも氏の名前が登場することだろうということですが、氏が奇譚クラブにSMカメラハントを、ずっと連載されていることや、こういう本のあることなどには触れておりませんが、何はともあれ、我々市井のファンとして氏の名前の公然と出ることにより、また氏の活躍の場が広がり、人々が知ることにより、奇クの存在価値と共に、我々の顔も大手をふって明るく広くなった気がしますから、不思議なものです。辻村隆氏の大きな活躍をお祈りいたします。

(波多野泰山)

○ 小生は大阪に住む二十二才の独身男性です。門真市の藤原笑子様お元気ですか。貴女の毎日の過ごし方と小生の過ごし方は、ほとんど同じです。映画、喫茶店は言うにおよばず、道を歩いていてもアベックを見かけたりしますと、凄く何とっていいか空しいとか淋しいとか、たまらない気

持になります。小生は生まれつき気が弱いので、女の友達が一人もないせいもあるのですけれど……。いつも小生がこの奇クを買って最初に開くのは読者通信のページです。それは貴女のような方を探していたからなのです。小生は貴女様を満足させる自信はありません。どうぞ、連絡方法をお知らせ下さい。

(大阪・小山一郎)

○ 奇ク愛好家の皆様、如何お過ごしですか。小生は東区の女王様のような方が、どしどし通信して下されば、この上なく幸福かと思えます。関東近辺の女王様も、どうか、ご通信下さい。小生は、ふとしたことから女王様にお会いすることができ、その方とプレイをしました。大変なSの方で、尻敷が大好きで小生をたっぷり責めて下さいました。息をつく間もなく苦しめていただき、十分に奴隷としての夢を味わわせていただきました。一男性を、下僕、下男以下の奴隷として、飼育して下さる女王様の、お手紙をお待ちしております。

(横浜市・M茂男)

○ 宮城みち子様。貴女のお便り嬉しく拝見いたしました。ぼくは会

大手札映画紙焼付
「緊縛女体美のシリーズ」

両手吊りに悶える女体

大手札三枚一組 略号△もえV 四〇〇円

強烈なる甘いムチの洗礼

大手札三枚一組 略号△もゆV 四〇〇円

ムチに狂い哭く美貌の夫人

大手札三枚一組 略号△もよV 四〇〇円

半吊りでムチ打つ

大手札三枚一組 略号△もすV 四〇〇円

逆エビの味に感泣する

大手札三枚一組 略号△もせV 四〇〇円

ムチの一打に反りかえる

大手札三枚一組 略号△もれV 四〇〇円

関谷夫人の女体陳列

大手札三枚一組 略号△もるV 四〇〇円

尻立ての鞭撻ポーズ

大手札三枚一組 略号△もてV 四〇〇円

片足吊り挙げて喘ぐ

大手札三枚一組 略号△もなV 四〇〇円

私をムチ打って頂戴

大手札三枚一組 略号△もねV 四〇〇円

脂ぎった女体を縛る

大手札三枚一組 略号△もむV 四〇〇円

鞭は柔肌を炸裂する

大手札三枚一組 略号△もろV 四〇〇円

滑車吊りに甘い鞭

大手札三枚一組 略号△もきV 四〇〇円

両手万才吊りに鞭打ち

大手札三枚一組 略号△もこV 四〇〇円

狂う鞭に哀切表情の夫人

大手札三枚一組 略号△もみV 四〇〇円

浴後の剣玉子縛り

大手札三枚一組 略号△はゆV 四〇〇円

投げたす白い緊縛裸身

大手札四枚一組 略号△はよV 五〇〇円

待望の脚挙げ緊縛姿態

大手札四枚一組 略号△はてV 五〇〇円

二つ折り女体エビ責め

大手札三枚一組 略号△はおV 四〇〇円

柱の前に緊縛された全裸

大手札四枚一組 略号△はのV 五〇〇円

神妙なプレイ寸前の女身

大手札三枚一組 略号△はひV 四〇〇円

計監査をしている二十四才の独身者です。ぼくは緊縛や浣腸責めやSMプレイが好きで、本誌をずっと愛読し、二十八年頃からの古いのも集め、今では二百冊ほど持っています。ぼくの宝にしています。貴女は、信用できる男性に縛られたり浣腸で責められたいと願っておられますが、人を直ぐ理解するのは難しいと思います。そこで最初は、ぼくの宝を貴女にどんどん読んでもらい、SMプレイについて話し合いませんか。何回か会って貴女がぼくを信用したときに初めてプレイするのは如何ですか。そのときは、イチジクだけではなくイルリガートルなどで貴女の羞恥心をかりたて、貴女が空想していることをして、充分満足させてあげます。縛りや浣腸に関心がある貴女と、ぜひ末長くおつき合いたいと思います。

(東京・石原昭隆)

門真市の藤原笑子さん。あなたの通信を読んで、呼びかけてみたくなりました。きっと心が通じるような予感がいたします。私も、まだこの世界が十分わからず、いわば初心者です。どうでしょう。かお手紙の交換などをして心がわか

りあえば、プレイをしたり写真をとったりしませんか。ひとりぼっちのあなたの姿を思い浮かべ、私でよければ友達になっていただきたいのです。私は三十四才の公務員です。機密は、きちんと守ります。いいご返事を、お待ちしております。

(徳島市・山本一夫)

私に、奉仕を申し出てくれました。沢山の奴隷犬に、今日は少し、内容について書いてみることにするからね。先ず私が食事するときに、忠実な犬はテーブルの下に仰向いて寝るのよ。そして股を大きく開いて上にあげ、両手で各足首を握ったままの恰好でテーブルの脚にきつく縛り固定さすからね。私は自分の足底を犬の股間にのせ押しつけ揺り動かし、尾のついたアヌスも責めるの。またローソクの滴りを上から股間に集中落下。こんなのは序の口ですよ。犬の食事は一番、後よ。手は使わせないから直接、口をつけて召し上げるのよ。お茶の代りに、神水をあげるから、喜んでお受けするのよ。わかって。食事の後は一通りの縛りに入るの。方法は犬自身が想像しもっとも苦痛の多い恥かしい姿で責めるわよ。途中で「やめ

開股縛りに喜ぶする女

大手札四枚一組 略号△はわV 五〇〇円

全裸の女体立ち縛り

大手札三枚一組 略号△はふV 四〇〇円

黒縄は白肌を露に彩る

大手札三枚一組 略号△はほV 四〇〇円

悦虚に身もだえる美女

大手札四枚一組 略号△はあV 五〇〇円

菱縄は白肌をくびる

大手札三枚一組 略号△はうV 四〇〇円

柱に立縛りでさらす

大手札四枚一組 略号△はさV 五〇〇円

卓上の開股羞恥責め

大手札四枚一組 略号△はめV 五〇〇円

無防備の女体を開陳

大手札四枚一組 略号△はしV 五〇〇円

遠山静子夫人の立縛り

大手札四枚一組 略号△はもV 五〇〇円

若妻の魅力を発散する

大手札三枚一組 略号△はむV 四〇〇円

後手縛り全裸身の魅力

大手札三枚一組 略号△はめV 四〇〇円

悶える猿轡の裸身

大手札三枚一組 略号△はもV 四〇〇円

ムチ打ちの陶酔境

大手札三枚一組 略号△はさV 四〇〇円

両手吊りで痛める女身

大手札四枚一組 略号△はしV 五〇〇円

後手縛りの竹棒責め

大手札四枚一組 略号△はすV 五〇〇円

強烈開股強制縛り

大手札三枚一組 略号△はせV 四〇〇円

両手吊りであえぐ女体

大手札四枚一組 略号△はゆV 五〇〇円

竹棒強烈開股責め

大手札三枚一組 略号△はたV 四〇〇円

厳しき緊縛の正坐責め

大手札四枚一組 略号△はちV 五〇〇円

責めの魔手に屈伏する

大手札四枚一組 略号△はつV 五〇〇円

竹棒の胴絞め責め

大手札四枚一組 略号△はてV 五〇〇円

竹棒開股胴絞め縛り

大手札四枚一組 略号△はとV 五〇〇円

て生まれたままの姿にしてあげてよ。神戸の土肥、よく名乗りをあげたわね、いいわ。M茂男、芦屋のMも立派な心掛け。名犬になるでしょうね。南区の犬、その外の犬も皆、誓うわね。

(東区の女王より)

昨年十月号のSMカメラハント「胎児の喘ぐとき」と今年二月号羽鳥さんの「妊婦嗜好あれこれ」を読んで、世の中には妊婦マニアなどという、このような変わった嗜好もあるのかと思ひ、好奇心も手伝って、木戸悦子さんの妊婦フォトなるものを注文した。小生にもその気があったのでなければ、このようにドキンとショックを受けなかつただろうが……。その結果、妊婦という変形裸女の妖しい魅力にとりつかれてしまった。悦子さんのイビツにゆがんだ妊娠中の裸体には、神秘的な妖しい雰囲気がある。何とも妖しい美しさに魅せられてしまったのだ。不気味だけれども、奇妙に心をとりにこにしてしまう。分譲フォトのうち、切腹とか浣腸とか言っても、非法の写真でない以上、真似ごとには過ぎない。要するに、お芝居をしているだけだ。と思ひ、興ざめす

両手吊りに悶える女

大手札三枚組
大塚 啓子
後手裸身柱縛り

大手札四枚一組 二〇〇円
大塚啓子 略号△てか▽

綱目にあえぐ裸女

大手村四枚一組
大塚啓子
略号△てく▽

豊饒な裸身をくひる縄目

大手村四枚一組 一二〇〇円
大塚 啓子 略号△てこ▽

後手高 小手縛り一

大手林三枚一組
大塚 啓子 略号△てま▽

長襦袢の緊縛色模様

大手村三枚一組
東浦ひかる
略号△てみ▽

緋の腰巻 紫緋色模様の

大手木三枚一組
東浦ひかる
略号△てむ▽

猿ぐつわに呻く女

大手村三枚一組
東浦ひかる
略号△てめ▽

柱宙吊り強烈縛り

大手村三枚組
東浦ひかる
略号△ても▽

ホルワムを繰りあげる

大手木三枚一組
東浦ひかる
路号△てん▽

大正九年三月一日

大手木三枝一糸
東浦ひかる
略号△てる▽

真紅の腰巻着用姿態

大手札二枚一組
大塚啓子
略号△うお▽

繩に悶える緊縛色模様

大手札二枚一組 八〇〇円

東浦・大塚 附号ノニテ
真紅の腰巻着用縛り

大手札四枚一組
客子
各二〇〇円

華麗なる緊縛裸身

大手村三枚一組
一宮百合子
格号入る心V

みだらな開股縛り

大手村三枚一組
一宮百合子
格号一〇〇〇〇
るの〇〇〇
V

實めに疲れた諦観――

大手木三枚一組
一宮百合子
格号入るおV

真紅の腰巻姿で緊縛

一宮百合子

羞らいの真正面縛り

大手木三枚 一糸
一宮百合子
略号△るけV

若肌に喰い込む縄目

一宮百合子

高手小手後手縛り

一宮百合子
略号△るや▽

股間縛りの開股姿態一

大木三枝 一
中河 惠子
路号八
れよ
V

羞らいの股間縛り

中河 惠子 路号へれにV

る思いがしていたのだが、妊婦フォトだけは本物である。縛り写真なども、かつて一、二度、求めたものがあったから、今度も、もしやと想像していたのだが、これだけは本物の妊婦だった。本物の妊婦がどうして……と考えると、妊娠中の裸体を撮らせた、そしてその写真在不特定多数の人の目に晒してもよいと決意した事情が、いろいろ想像されてくる。とにかく本物の妊婦が、こうしてちゃんと写っているのである。ショック、と言っている。こんな写真を撮らせるなんて、随分、思い切ったことだと思ふ。ご主人は何とも言われないだろうか。常識にない妊婦全裸写真などというものを堂々と扱っているのは、奇ク以外には、ないだろうから、とても勇気があると思ふ。小生は、まだ結婚してないので妊娠した女のハダカなんてもちろん、見たことがなかった。それにしても本物の妊婦の写真、しかも妊娠九カ月というのだからスゴイと思う。ほんとうにトリックや真似ごとでない本物の妊婦が写っているのだから……。妊婦の裸体などというものを小生が見たのは、これが始めてだが、記事に

つられて偶然、興味を持ち、買つてよかったと思つてゐる。

(大原女)

四月号、大変面白く拝見いたしました。「花と蛇」は、これから一つのやま場となつてゆくようですが、これまた期待してよいでしょう。私は現在、二十才の学生ですが、異常心理とか性倒錯とかいうことに興味をもつていまして、そっちの方の研究中です。まあ、サディズムとかマゾとかは、世間に於ては異端的に扱われておりますが、実際は人間の根底に存在している一つの型(パターン)だと思われまふ。このことは、ボーヴォアールの「サドは有罪か」とか「サド裁判」とかを読まれば分ることですが、最近、読んだコリン・ウィルソンの「性の衝動」などに於ては、最も分りやすく論じられてゐます。こういう意味で、「奇譚クラブ」は、真に文献的価値があります。また貴誌に望みたいことは、同系の雑誌のように、読者同志の交際と親睦を深めるために回送ということも考えてはいただけでないでしょうか。

(仙台市・宮城一夫)

双胎臨月蛙腹鮮烈写真	大手札六枚一組 二〇〇〇円	略号 八れや	腰巻一つで縛られる刺青女	大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号 八やみ
増田みゆき	大手札六枚一組 二〇〇〇円	略号 八れや	女相撲迫力投業連続動作	大手札十二枚一組 五〇〇〇円	略号 八なる
双胎臨月腹強烈縛り	大手札六枚一組 二〇〇〇円	略号 八れゆ	大塚・東浦	恵子の妊孕美観賞	大手札四枚一組 二〇〇〇円
増田みゆき	大手札六枚一組 二〇〇〇円	略号 八れえ	恵子の妊孕美観賞	中河 恵子	孕み若妻の羞らい
臨月腹裸身の媚態	大手札六枚一組 二〇〇〇円	略号 八れえ	中河 恵子	大手札四枚一組 二〇〇〇円	略号 八ぬめ
黒縄縛りの媚態	大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号 八れぬ	中河 恵子	八の字の開股責め	大手札三枚一組 一〇〇〇円
立縛りにあうの裸女	大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号 八れぬ	愛知 葉子	足枷強制開股責め	大手札三枚一組 一〇〇〇円
開股された股間縛り	大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号 八れぬ	愛知 葉子	全裸強烈逆エビ責め	大手札三枚一組 一〇〇〇円
木村 洋子	大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号 八れぬ	愛知 葉子	両手吊り足枷責め	大手札三枚一組 一〇〇〇円
豆絞りの猿ぐつわ縛り	大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号 八れぬ	愛知 葉子	両腕逆手吊り責め	大手札三枚一組 一〇〇〇円
木村 洋子	大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号 八れぬ	愛知 葉子	豊満なる臀部責め	大手札三枚一組 一〇〇〇円
柱宙縛りに喘ぐ刺青女	大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号 八れぬ	愛知 葉子	大の字縛りと足挙げ責め	大手札三枚一組 一〇〇〇円
大手札三枚一組	大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号 八れぬ	愛知 葉子	お申込みは大阪阿倍野局私書箱	第14号箕田京二宛へ願います。
高小手に悶える全裸	大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号 八れぬ	愛知 葉子		
山原 清子	大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号 八れぬ	愛知 葉子		
緊縛に映える入墨の肌	大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号 八れぬ	愛知 葉子		
山原 清子	大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号 八れぬ	愛知 葉子		
脱がされた緊縛刺青女体	大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号 八れぬ	愛知 葉子		
山原 清子	大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号 八れぬ	愛知 葉子		
縄にのたうつ入墨裸身	大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号 八れぬ	愛知 葉子		
山原 清子	大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号 八れぬ	愛知 葉子		
大手札三枚一組	大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号 八れぬ	愛知 葉子		
山原 清子	大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号 八れぬ	愛知 葉子		

○（東京都・佐藤敏夫）

(東京・斎藤生)

つんで上手に現像焼付が出来るよ

東区の女王様。お呼びかけして

ら、私を御入用の節は、直ぐ編集

部の方へ御連絡下さい。

(春川ナミオ)

○
横浜市の寺岡美子様。四十五才の者ですが、サラリーマン生活より事業経営に乗り出して数年間事業発展のため只管、仕事に打ち込んで参りまして、現在でも尚、業務多忙にて、左程余暇ある身ではありませんが、今までは時折の休暇には釣りやカメラ等の趣味に打ち興じて寸暇を楽しんでいました。数カ月前より本誌を購読してSMのプレイの真の楽しさや、プレイを通じて改めてカメラの楽しさを味わってみたいと念願していただきますけれども、何とか理解ある女性を探していましたところ、本誌五月号に貴女様のご希望の記事を拝見し、この人だ、と思い、ここに敢えて筆をとりました。関東と関西は遠く離れていますが末永くご交際いただければ幸いです。

(尼崎市・堺俊三)

○
夫婦プレイを実行されている方に教えていただきたいのですが、最初はどういう事から行なったらいいのか、またどの程度の範囲内で行なうのか、お教え願いたいです。また、女性の立場から、こ

のあたりまではプレイの限界で、それ以上は不快感があるから止めた方がよい。など初歩からお教えねがいたいと思います。申し遅れましたが、私は三十二才、妻は二十八才です。私がSMに興味があるのは妻も早くから知っていたのですが妻に興味がないのと、子供が早くできたのとで、今日までプレイができなかったような次第です。私はK誌の旧刊(三十年のK誌も持っています)その他、類似雑誌を多少持っていますので、お手紙を下さった方に差し上げたいと思っています。皆様のご指導をおねがいいたします。

(豊岡・円山善久)

○
私はアブ・ラブを愛する二十四才の女性です。アブ・ラブと申しましても傷跡が残る鞭打ちのような刺戟は好みません。恥かしい精神的悦虐のムードを好みます。私は同好のマニヤの呼びかけを、お待ちしております。美しいと自評するのは変ですが、鏡に映する私の肢体は、むっちりとした盛りを誇っております。現在の私の友は三面鏡です。私はサド、マゾ両方を愛せる素質があるようですが、今のところ、まだ独りプレイのみで

相手のあるプレイは未経験です。鏡に映する全裸の私を眺めながら畳の上に大きなビニール風呂敷を拡げます。つぎに長い竹棒の両端に自分の両足を開股縛りにいたします。それから私の悦虐が始まるのです。トロロ汁を豊かな乳房や柔らかなお腹や、ぶりぶりしたお尻など、敏感な箇所に塗りつけます。その恰好で鏡に対処し、自虐のため恥かしいところにタツプリとトロロ汁をぬりこみぬりこみ、自らを慰めていきます。また最大の羞恥責めである浣腸を自分で施しておいて生々しいお尻を鏡に向けます。そして恥かしさで肌を紅潮させながら私は悦虐に酔いしれるのです。私は、誰にも迷惑のかけられないように、こっそりと同好のマニヤの方によって「花と蛇」のような耽美な倒錯の責めを頂けたら……と望んでおります。

(神戸・小杉千恵)

○
東区の女王様。私事、今では女王様の完全なる奴隷になったつもりで毎日を過ごしています。男性自身にリングをはめこんで、女王様の奴隷であるという事を認識しています。どうか女王様、この奴隷の忠実な態度をみて頂け

よう存じます。女王様の法律の八カ条は、おまもりいたします。女王様に伏しておねがいますが、私を通動奴隷として飼育していただきたいのです。通動奴隷を凌辱責めにするのも、女王様のお楽しみと存じます。男性自身にリングをはめ、メンスバンドでしめつけて外へ出し、奴隷が恥かしがる様子を楽しんだり、奴隷に金色の鼻輪をつけさせ、クサリでつないで飼育して、いただきたいと思ひます。女王様のような美しい方は住込み奴隷の二匹や三匹は、お飼いになられると存じますので、一匹ぐらゐは通動奴隷をお飼いになっても当然ではないでしょうか。また、奴隷けい約書は最低一年から最高五年までで、期限が切れたときは、女王様がご自由に延期または、解約なさればよいと思ひます。

(旭区の奴隷犬)

○
福岡の緒方則子様。あなたが四十二年七月号で呼びかけられたのは知っております。あなたは、ずっと以前、四十一年六月号で投稿された直方市の古川直子さんではないでしょうか。どうもMとしての型が似ているように思われるのです。ぼくは今まで投稿する勇氣

次号(七月号)は五月二十五日に発売いたします

がありませんでしたが、今回、思いきってお便りしました。ぼくは羞恥責めを好む二十三才の公務員です。必ずあなたを満足させることができると思います。お手紙下さい。

(広島市・伊藤和登)

○ 横浜の寺岡美子様。私も横浜に住んでいる本誌の愛読者です。

貴女のような同好の士が、同じ土地におられることを知って大変うれいします。私は四十五才になる平凡なサラリーマンで、小市民的生活に安んじていますが、心の中に何か物足りないものがあり、その気持が私を奇クの世界に向かわせたのです。貴女とプレイを楽しむことができたなら……思っただけで胸が高鳴ります。貴女を様々なポーズに縛り上げて観賞したいのです。貴女の身体は極度に屈曲したり、そり反ったり開かれたりして、陰微な隅々まで露呈されるのです。そして、いろいろの責めを受けるのです。貴女は剃毛が好きなのですが、私も大好きです。首から下は、すっかり剃り上げてあげましょう。貴女は自分から色

々のポーズをとって、仕事のしやすいう協力しなければなりません。剃り終った後はクリームを塗りマッサージをし、更に唇には口紅をさしたりして、貴女の身体を美しく仕上げます。その他、いろいろのプレイを考えています。

(横浜・杉元)

○ 城山ほずみ様。貴女の、私とプレイをして下さい、の呼びかけに私のプレイの方法を書いて見ました。現在ある女性と月一回ぐらいプレイを行ってあります。お互いに酔いが廻ってムードがでてきたところでプレイが開始されます。若干、彼女に抵抗させながら、着物をとり去ってゆき、裸にして腰紐にて後手に縛って、乳房の上下にもロープを廻して縛り上げます。そうして初めに逃げ出さないため刺青をすると言うストーリーなのです。私は、ただ責めるのはムードがなく、やはり芝居をした方が好きです。青と赤のサインペンにて、彼女の胸と太腿のつけ根に、蛇やサソリ等の動物や牡丹の花なりを書いて、刺青をする如

くヘアーピンの先にて肌をさすのです。近頃では彼女も本当に刺青をされるが如く体をくねらせながら呻き声を上げてムードを出してくれます。刺青責めが終ると休憩して、つぎに錠を破って客にほれて逃げようとした罪で、鴨居から両手を縛って吊るし、バンドで臀部への鞭打ちを行うのです。そうして体を舌で愛撫しながら天国と地獄責めにあうのです。最後は改心して、再び悪い気持の起きないようにローソクの滴で胸から下腹一面にかけて清められて、プレイが終るのです。その後は、今度は私が浮気をした罪にてテーブルの上に大の字に手足を縛られてローソク責めに合い、つぎに胸から腹部にかけて一面にお灸をすえられるのです。当方もある程度の地位もありますので、お互いに割きつた気持でプレイをしたいのです。苛められたかったら、お返事を。

(小田原市・保田徹)

○ 福岡の緒方則子様。貴女の通信を拝見しました。私は貴女のような女奴隷を求めているのです。貴女の望み通りミッチリ調教してあげましょう。調教にかかる前に貴女は先ず身体検査を受けねばなり

ません。素っ裸にした貴女を後手に縛り上げ、坐禪を組んで坐させます。そして後から突きこぼすのです。貴女は顔と両膝で身体を支え、尻を立てた形となり、坐禪をくんでいるので股は一ぱいに開かれ、何をされても身動き一つできないポーズで羞ずかしい奴隷の検査を受けるのです。私は貴女のふくよかに盛り上った唇をこじあけたり、めくったり、舌をつまんでもみほぐしたり、サイズや目方を計ったりします。そのたびに貴女は呻き声を上げ、羞恥に身体をほてらせながらも次第に反応していきます。「検査されているのに喜ぶ奴があるか。これは、どうしたんだ」そう言いながら、すでに固くそり反っている舌をつまんだり、はじいたりします。検査がすむ頃には、貴女は身も心も調教をうけるにふさわしくなっているのです。そういう貴女を引き起こし調教にかかるのですが、私の最も好きなのは「卵遊び」です。適当な間隔をおいて二つ並んだ丸椅子の上に貴女を両足を踏み開いた形で上らせ、しゃがんだポーズをとらせませす。女性にとっては何ともはずかしい姿勢ですが、おぞましい数々の検査をうけた後の貴女は

すでに羞恥心も失って、むしろ堂々と誇示するのです。このような調教をくりかえすことによって、貴女は飼育され調教される喜びを知るのです。

(横浜・串野秀雄)

寺岡美子さん、私は奇クを十一年以上、愛読しておりますが、最近SMプレイの相手になつてくれる人はいないものかと、欲望が特に強くなつてきました。現在、四十才の公務員で二児の父親です。妻をたまに縛ったり、奇クを観せたりして飼育を試みますが、SMの世界には妻は全く反応を示さずいつもSMのよき理解者が現われ

ないかと悩んでおります。女性の縛られた美しさにあこがれ、本誌や緊縛写真等を見ながら、SMプレイを空想しております。お互いのプレイバシーは守り、SMのよき理解者として、おつき合い願えば、ほんとうに幸せだと思います。

(東京都・太田一郎)

東区の女王様、私は二十一才の青年です。貴女様が、ご希望されたような尻尾を以前から作って持っております。それは四十年五月号の室井亜砂路氏の画からヒントを得たものです。作り方を申し上げますと、まず一番太くて長い指サックにビニール粘土を沢山つめ

込みます。それから、まわりにビニールのついた丈夫な針金を何重にもし、二十五センチの長さにし、その中心にさし込みます。そして指サックを五重にしてつけ根を紐でしっかり結び、その上にビニールテープを巻きます。ここが根の部分で、長さ九センチ弱、最大直径二・五センチもあります。次に、つけ根から三センチ弱のところを九十度ほど曲げ、その先は、お尻の恰好にそって彎曲させます。曲げたところに細い布の紐を沢山たばねて紐でむすびます。これででき上りです。私は、もともとSで、三十前後のバストもヒップも小さい痩せ気味の

気品のある女性を思いきり責めてみたいと思っております。しかし、こうにパートナーにめぐり会えず、仕方なく長い間自分に対して流腸責めや尻尾をつかったプレイをしております。そんなわけで、今ではM傾向も強くなり、五分五分といったところです。しかし相手手がMの場合はSに、Sの場合はMに徹底するつもりです。ですから先ほど申し上げましたプレイは、相手がSの女性の場合は、私が犬や馬になりたいのです。SMどちらでも結構ですから私のパートナーとなつてくださる方を捜しております。

(東京・下村正治)

本誌既刊号在庫一覧表

既刊雑誌在庫案内

○本誌既刊雑誌は左記一覽表の通り在庫しておりますが、40年に発行のものについては在庫の僅少な御注文願います。お早い目に○従来、雑誌の送料は当社にて負担しておりましたが、今後は三カ月上予約注文以外(既刊号は含まず)は一部につき送料二〇円のお負担をお願いします。多額一括し申し上げます。

昭和41年3月号	昭和41年2月号	昭和41年1月号	昭和40年12月号	昭和40年11月号	昭和40年9月号	昭和40年8月号	昭和40年7月号	昭和40年6月号	昭和40年5月号
(送共三三〇円)	(送共三三〇円)	(送共三三〇円)	(送共三三〇円)	(送共三三〇円)	(送共三三〇円)	(送共三三〇円)	(送共三三〇円)	(送共三三〇円)	(送共三三〇円)

☆編集後記☆

○毎月お寄せ戴く投稿に感謝しているが、春暖の訪れと共にその数もまたぐっと増してきて、嬉しい悲鳴をあげながら整理を急いでいる。長篇大作も少なからずあつて、つい先月に考えた、出来るだけ読切りに線も守りきれず、今月号もまた分割のものが出来た。『処女啼泣』『筑紫太郎』『この胸のときめき』『八日本武士』などがそれであるが、誌面との視み合せの関係上、乞う諒承。○以前から眠って貰っているものも、出来るだけ早く眼を醒して貰わねばならず、新たにお着きのものはなるべく新鮮なうちにと懸念するのだが、仲々思うにまかせない。送った翌月に採否結果を求められるのが人情、とは思

うが、翌月号に載らなかつたから、没とお考えにならないようにお願いして、今後共これと想うものはどうしお寄せ戴きたい。○先月のこの欄でも触れた通り、告白、体験ものを大歓迎だが、単なる思春期の回想を綴られた、軟派週刊誌向きのものには、困惑する。人間の成長につきものの、異性に対する疑問、未知のものへの初意識、憧憬の芽生えなど、恐らく万人の経験する事だけに、さもあらんとは誰しもが思うだろうし、偽らざる体験告白には違いないのだが、こと改って活字にするまでもないと思う。ここ二、三カ月間だけでも、この『異性開眼』に関する『幼き驚異』をめぐると回想されたものが数篇ある。書かれる気持ちもわかるし、投稿は感謝するが、特異なことをお願いしたい。

「懸賞原稿募集」

△体験、告白、手記△

読者の皆さまが自分で親しく体験されたことや、かくされた性癖や性向について語ってみたいと思われたこと、或はこれだけは、どうしても書き残しておきたいと考えられた事を大胆にお寄せ下さい。採用しました原稿には三千円以上の賞金を贈呈します。

△創作、小説、物語△

本誌の編集内容に適した特異な素材を駆使した力作をお待ちします。すべて自作の未

発表作品に限ります。これはと想う作品は必ず誌上に取上げて貰います。腕試しの意味で奮って御投稿願います。採用篇には賞金十万円迄贈呈。

△感想、論評、批判△

本誌に関連したものでしたら話題の内容は問いません。忌憚なき皆さまの御意見をお待ちします。採用篇には二千元以上の賞金を呈します。

△(映画、雑誌)通信△

映画、雑誌、演劇、新聞、単行本或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出

処は詳しく明記願います。採用篇には本誌三月分以上又は二千元以上の賞金贈呈。

○御送付下さいました原稿は原則として返却の求めに応じないことになっております。故

悪しからず御諒承願います。◎本文記事中に各種の「懸賞原稿募集」を致しております。故、御応募の方は項目を御明記の上御送稿下さい。

△読者通信原稿△

巻末の読者通信欄は読者の皆さま方のための公共の広場として開放してあります。御遠慮なくお寄せ下さい。

☆本誌御購読の榮☆

予約に限り
一月分(1冊)三五〇円(送20円)
三月分(3冊)一〇五〇円(送共)
半年分(6冊)二一〇〇円(送共)

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下さい。重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 三五〇円

六月号

〔第二十三巻第七号〕
〔通刊第二百五十四号〕

昭和四十四年五月二十日 印刷
昭和四十四年六月一日 発行

編集人 杉原虹児
発行人 吉田俊夫
印刷人 北村俊夫

大阪市住吉郵便局私書函第四十一号

発行所 暁出版株式会社

〒558 振替口座大阪四二七八三番
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)
(昭和四十二年四月二一日)
国鉄大塚特別取扱承認証第二二〇号

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビア写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に努める各条例に指定されないうち、本誌は充分に注意して編集いたしております。すなわち、本誌は成人として発行を企図しており、下す関係上、十八才未満の方には絶対販売し上げません。特にくれぐれもお願